

第180図 SK40・41・42・47・55実測図

上面に張り付いた状況で壺と甕の大形破片が集中して出土した。本址内で土器を伴った燃焼が行われたものと捉えた。

SK47 (IV区-Iグリッド) [第180・181図]

住居域内の東寄りに位置する。遺構上面は南北に走行するSD46によって削平された。径3.1mのほぼ円形を呈し、断面形は壁面に緩やかに立ち上がる播り鉢型である。中期土層中の検出であったため底面までの深さは28cmと浅いが50cm程度あったものと推定される。埋土下層には多量の炭化物が混入し、北側底面には炭層が約5cmの厚みで堆積していた。焼土は検出されなかったが、土坑内で火を使った可能性が高い。遺物は炭にとまなう土器片が上層から集中出土した。

SK55 (IV区-M・Hグリッド) [第180・181図]

住居域内ほぼ中央部に位置する。SM08の周溝と重複関係にあるが、周溝検出時には確認されなかった。北東-南西方向が長軸となり2.2×1.6mの卵球形を呈する。断面形状は壁面に緩やかに立ち上がる播り鉢型で底面の深さは20cmと浅い。埋土上層には炭化物ブロックを主体とした粘土とその下部に焼土塊が検出され、下層は炭化物粒子を含んだ粘土であった。南西と北東の壁際には30~40cmの小ピットがある。遺物は土器片のみで、被熱をうけた摩滅の著しい状況で上層から出土した。SM08とは検出面を異にする、周溝ブリッジに位置することからその関連が示唆される。

(4) 住居隣接廃棄土坑

埋土に明確な炭層が認められず、住居に隣接した土坑を本分類とした。本節では時期の確定できる遺物出土があった土坑のみを列挙した。本分類の土坑は土器を主とする廃棄土坑となる。埋土には人為的な埋め戻しが認められるものと自然堆積の2者があるが、後者は遺物を放置した状況か、自然の流れ込みかの判断は検証できなかった。

SK16 (IV区-Qグリッド) [第182図]

住居域西側の低地境に位置する。径1.2mの円形プランとなり、検出面からの深さは30cmで底面水平となる。断面は壁が傾斜して立ち上がる台形形状となり、埋土は砂質シルトの自然堆積層であり有孔鉢の底部が下部から出土した。

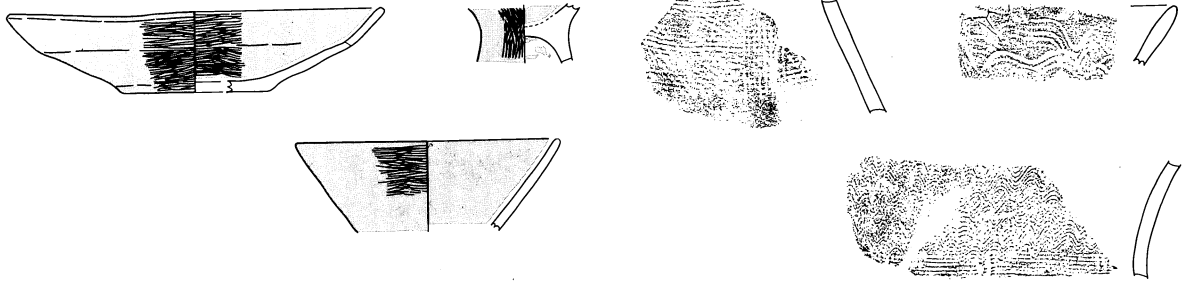
SK38 (IV区-Qグリッド) [第182図]

住居内中央部に位置し、周囲にはSB20・21・22がある。径1.2mの円形プランを呈し、検出面から34cmの深さをもつ。底面はほぼ水平で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。埋土は3層に分層され、1・2層には灰色粘土と砂のブロックが混入することから人為的な埋め戻し土とされる。遺物は2層中から厚さ5cmの板材が土器片と共に出土した。

SK45 (IV区-Eグリッド) [第182・183図]

住居域内北東端に位置する。本址周辺に後期の住居はなく溝以外の該期の遺構では東端にあたる。径1.0mと径90cmの円形プランをもつ2基の土坑が重複して検出された。検出面からの掘り込みはいずれも25cm程度であり、埋土も炭化粒の混入した黒褐色シルトであった。遺物は大型土坑から摩滅の著しい中期の壺(1)が出土したほか、両土坑底面から後期の土器片が散在して出土した。このことから両土坑構築

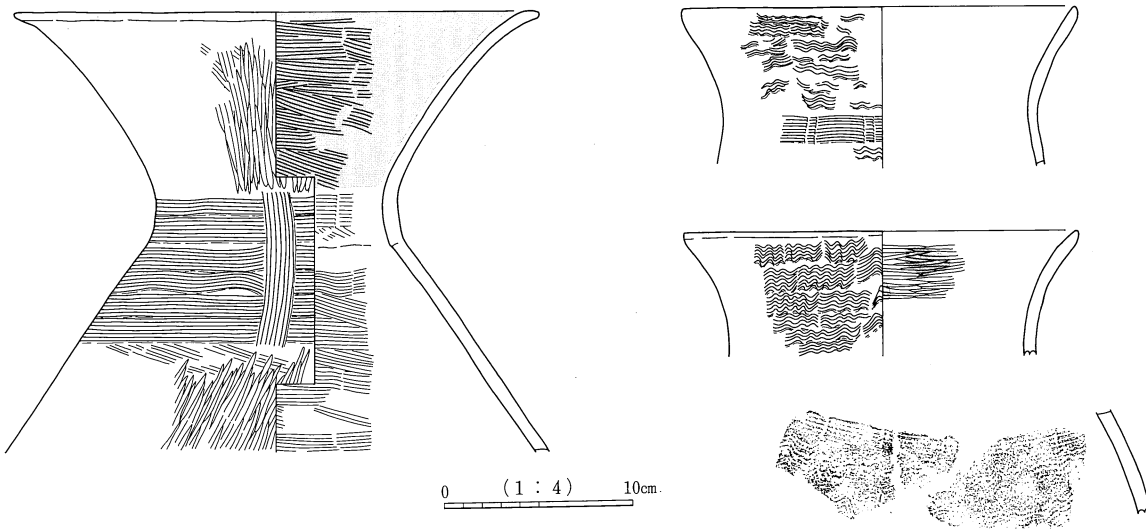
SK07



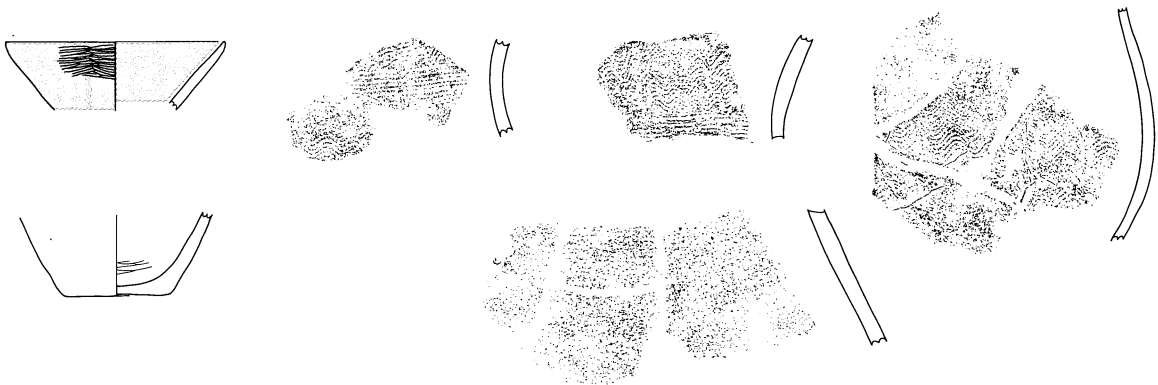
SK20



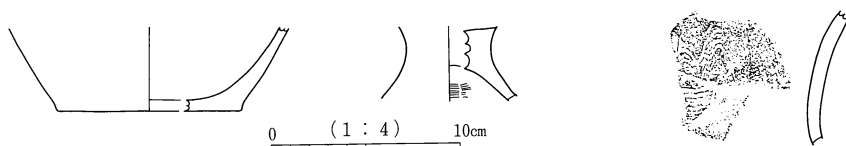
SK42



SK47



SK55



第181図 SK07・20・42・47・55出土土器実測図・拓影

の時間差はあまりなかったものと捉えられ、本址は土器片をともなって埋め戻された可能性が強い。3の壺頸部破片には、断面と裏面に赤色顔料が残存する。

SK51 (IV区-Iグリッド) [第182・183図 PL21・38]

住居域内ほぼ中央部に位置する。調査区域の境であったため排水溝敷設のトレンチによって南北の壁一部を欠く。径1.6m、検出面から20cmの深さをもつ断面掘り鉢型の円形土坑である。高杯2点と壺の胴下半1点が重なり合って出土した。埋土は細砂が含まれた単一の自然堆積であり、埋め戻しによって混入した状況はない。墓域関連の遺構と判断される。

SK54 (IV区-Iグリッド) [第182・184図]

住居域内中央部に位置し、SB11と隣接する。径1.1mの円形プランとなり、検出面から80cmの深さをもつ。底面はほぼ水平で、垂直に掘り込まれた壁であり、断面形状は方形に近い。埋土は2層に分層され、上層は粗砂を含む自然堆積層となり、下層はシルトブロックが混入した埋め戻し土層となる。出土遺物は土器片だけで主として1層下部と底面に集中した。多量の土器片が残されていたが、接合資料は少なく器形復元されるものはなかった。SB11と検出面、埋土を同一にすることから住居と関連する施設の可能性が強い。

SK109 (IV区-Rグリッド) [第182図]

住居域西側の低地境に位置する。本址北側にはSB106があり西側でSF102と隣接する。底面は調査中の出水による壁崩落のため未確認となったが、検出面からはほぼ垂直に掘り込まれており、60cm以上の深さがあったものと推測される。平面形状は径60cmの円形プランとなり、炭化粒の混入した埋土内から多量の土器片が散在して出土した。埋土は埋め戻し土で、出土土器片は摩滅が著しく図示できるものはない。

SK159 (VII区-Jグリッド) [第182・184図]

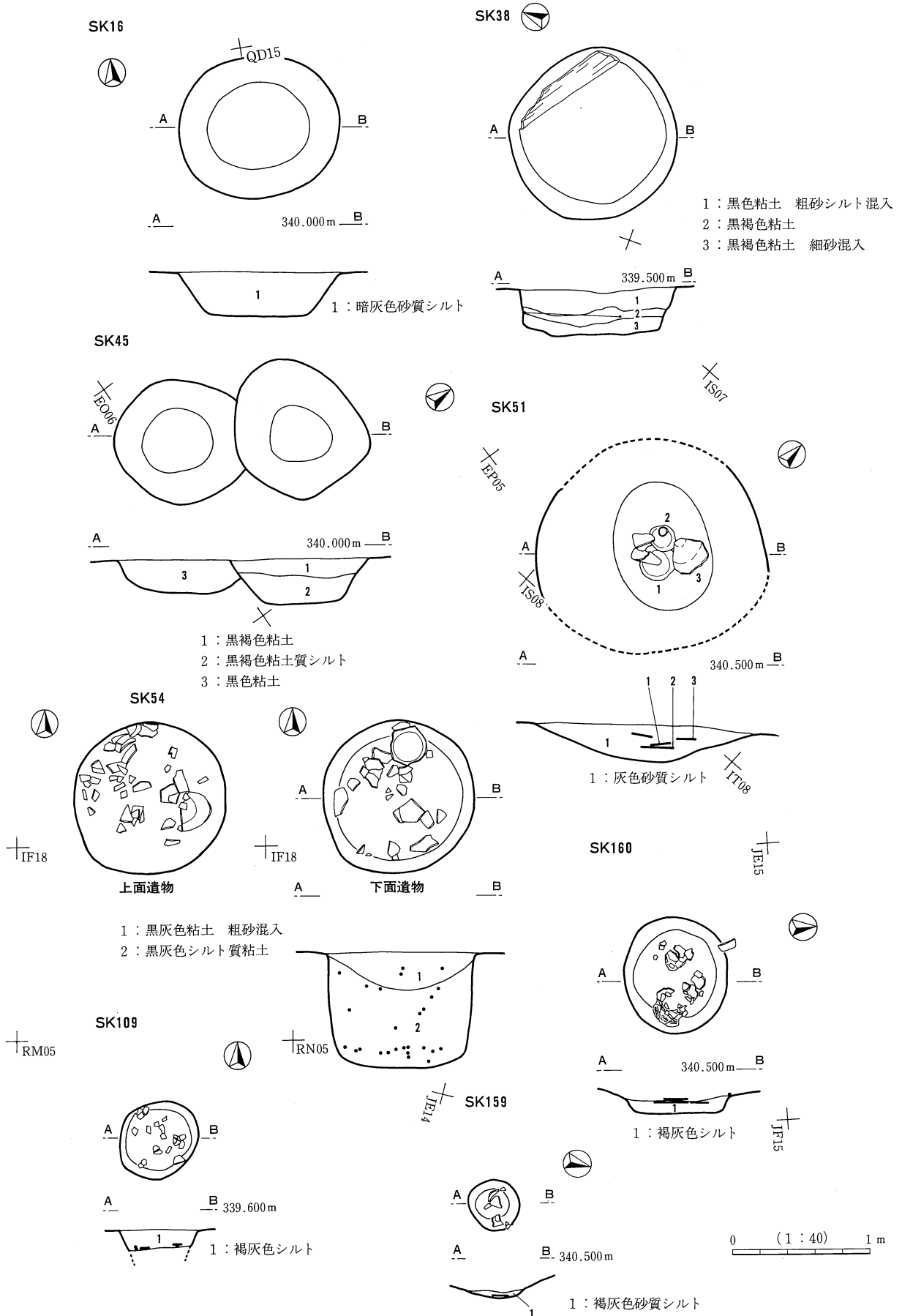
調査区南西端の低地内に位置する。径35cm、検出面からの深さ15cmの断面掘り鉢型の小土坑である。埋土は砂質シルトで自然堆積層となり、甕胴部下半が底面からまとまって出土した。周辺には土器廃棄と捉えられる遺物集中遺構が点在しており本址も同一の性格をもつと判断した。

SK160 (VII区-Jグリッド) [第182・184図]

調査区南西端の低地内に位置する。82×78cmのほぼ円形プランとなり、検出面からは18cm程度の深さであった。底面はほぼ水平で垂直に掘り込まれた壁となり、断面形状は長方形に近い。埋土は砂質シルトの自然堆積層となり、遺物は検出面から水平にまとまって出土した。SK159同様に低地への土器廃棄として捉えられる。

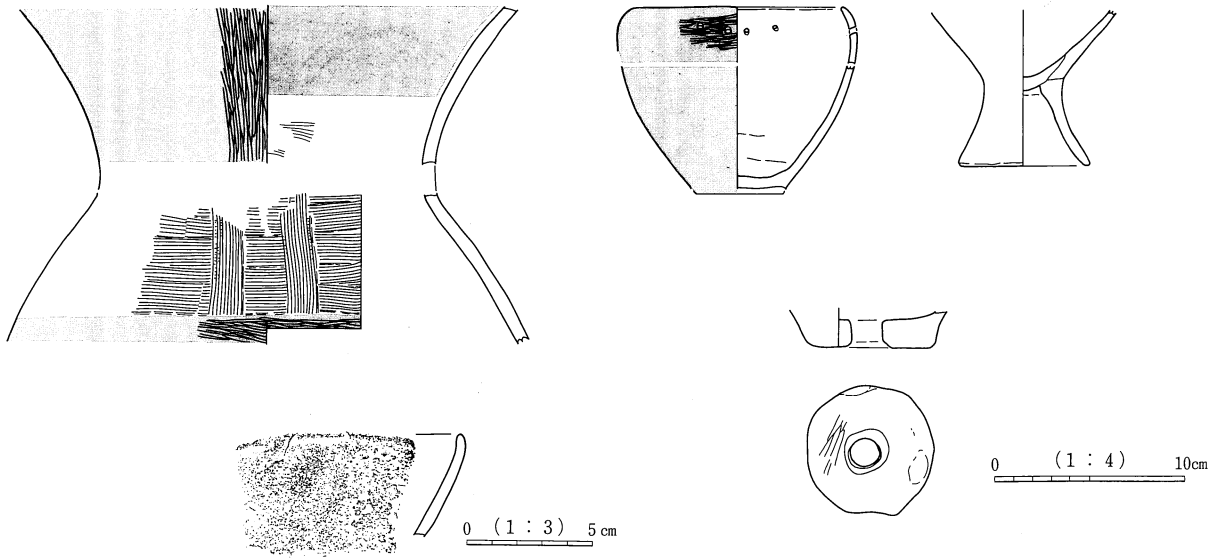
SX102 (VI区-Aグリッド) [第184・185・263図]

調査区南の低地境に位置する。後期溝址SD103を切り、SD105と一部重複するが新旧関係は微妙である。規模は長軸6.8m、短軸2.4mで不整形な楕円形状となる。検出面からの深さは30cmで上層は細砂が堆積し、上層下部からまとまって多量の土器片と小形の勾玉・ガラス小玉・管玉がそれぞれ1点出土した。本址は集落域から低地に至る縁辺に位置することから、遺物廃棄にかかわる祭祀行為の痕跡と捉えられ、55基検出された遺物集中遺構群(SQ)と関連する。

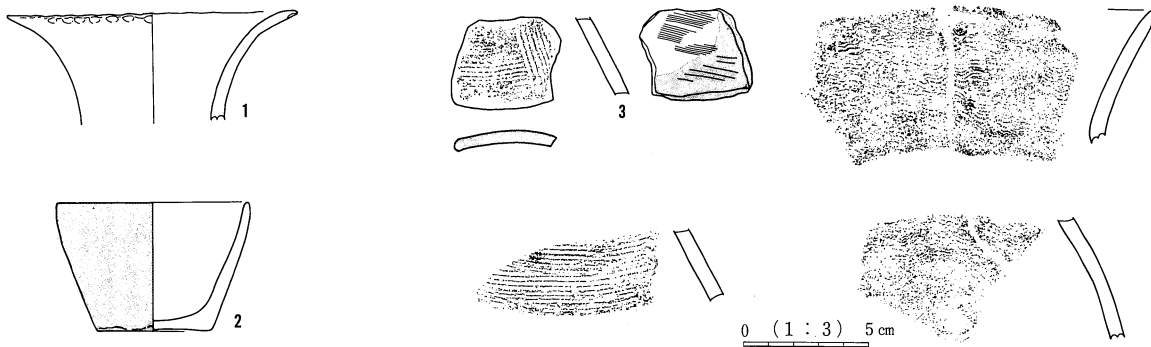


第182図 SK16・38・45・51・54・109・159・160実測図及び出土遺物分布図

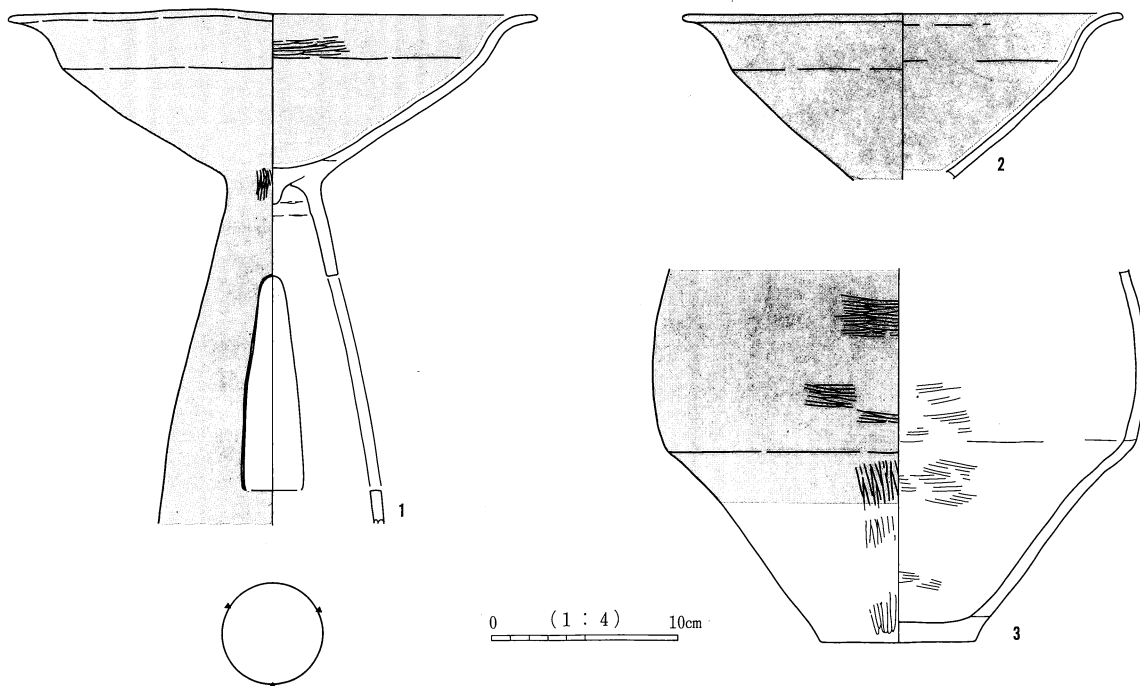
SK15



SK45

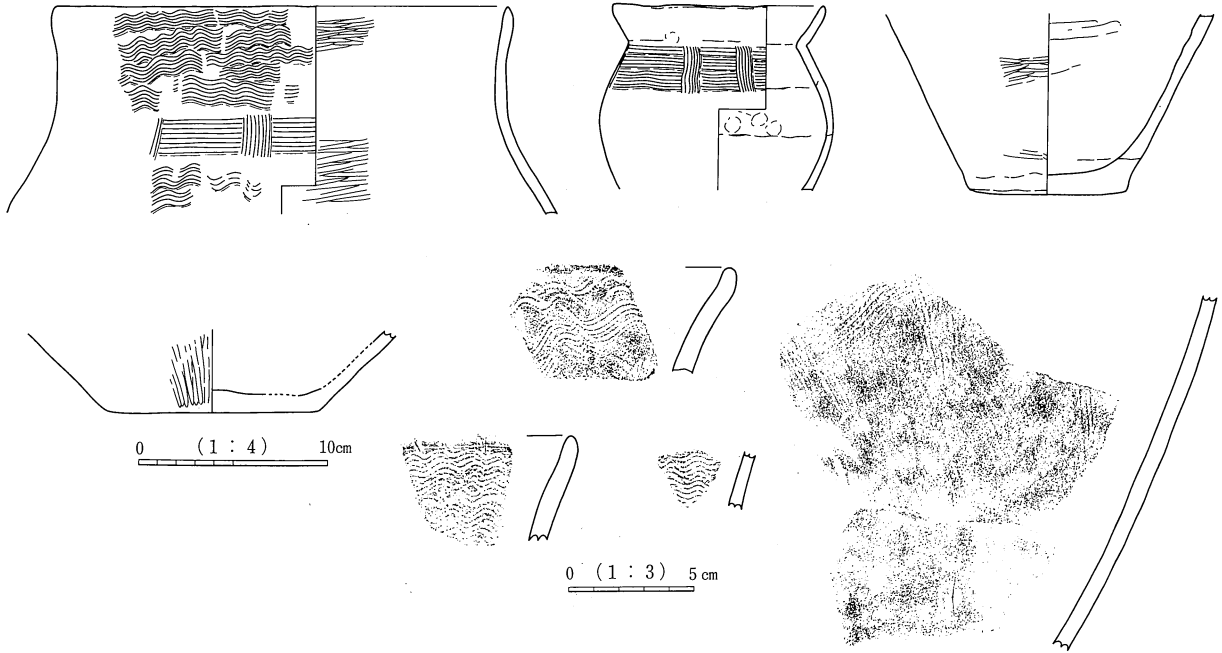


SK51

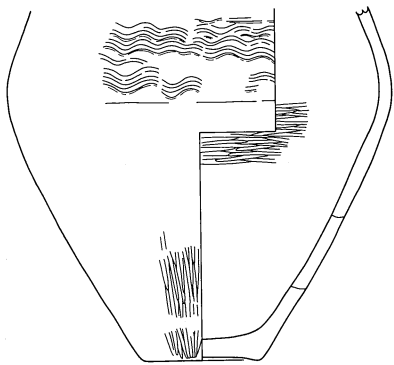


第183図 SK15・45・51出土土器実測図・拓影

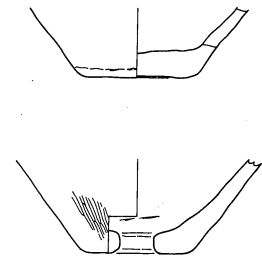
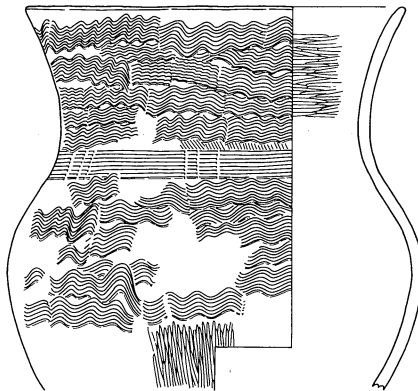
SK54



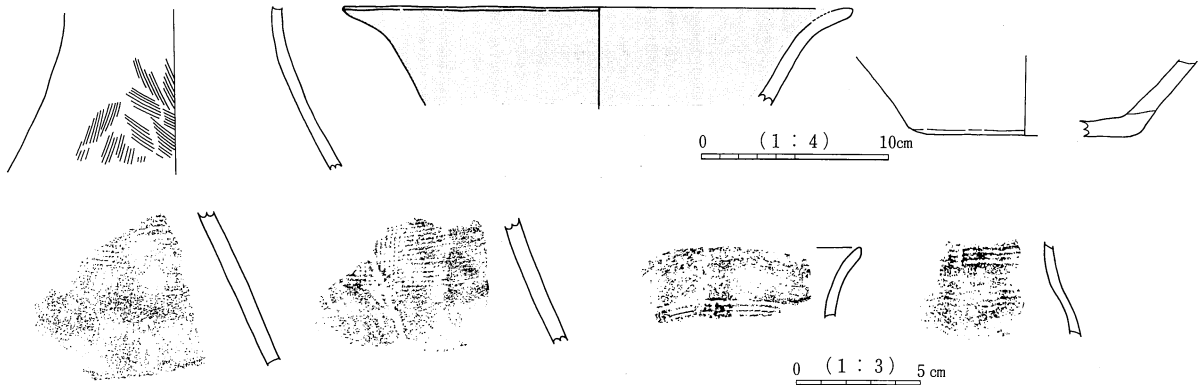
SK159



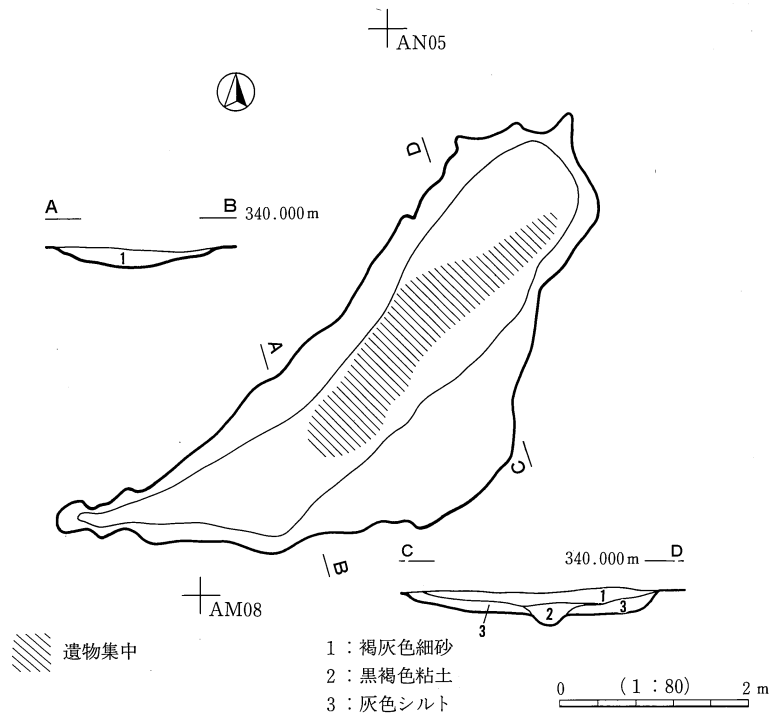
SK160



SX102



第184図 SK54・159・160 SX102出土土器実測図・拓影



第185図 SX102実測図

第6表 土坑一覧（縄文晩期を除く）

土坑番号	グリッド	規模 (cm)	形状	備考 (属性・遺物・埋土など)	時代・時期
SK01	IV区Mグリッド	記載		木棺墓	後期
SK03	VII区Jグリッド	記載		井戸	後期
SK04	VII区Jグリッド	記載		井戸	後期
SK05	VII区Jグリッド	230×155-42	隅丸長方形		後期
SK06	VII区Iグリッド	記載		井戸	後期
SK07	VII区Jグリッド	記載		炭堆積土坑	後期
SK08	VII区Jグリッド	記載		井戸	後期
SK09	VII区Jグリッド	記載		井戸	後期
SK10	VII区Eグリッド	記載		井戸	後期
SK11	IV区Qグリッド	340×300-40	隅丸長方形	杭	近世
SK13	VII区Eグリッド	記載		井戸	後期
SK14	VII区Jグリッド	記載		井戸	後期
SK16	IV区Qグリッド	記載		住居隣接土坑	後期
SK17	IV区Qグリッド	記載		炭堆積土坑	後期
SK18	VII区Eグリッド	記載		掘立柱柱穴	後期
SK19	VII区Iグリッド	記載		井戸	後期
SK20	VII区Dグリッド	記載		炭堆積土坑	後期
SK22	VII区Eグリッド	記載		掘立柱柱穴	後期
SK23	VII区Eグリッド	記載		掘立柱柱穴	後期
SK25	VII区Eグリッド	記載		掘立柱柱穴	後期
SK26	VII区Iグリッド	記載		掘立柱柱穴	後期
SK27	VII区Iグリッド	記載		掘立柱柱穴	後期

SK28	Ⅶ区Ⅰグリッド	記載		掘立柱柱穴	後期
SK29	Ⅶ区Ⅰグリッド	記載		掘立柱柱穴	後期
SK30	Ⅶ区Ⅰグリッド	記載		掘立柱柱穴	後期
SK31	Ⅶ区Ⅴグリッド	180×150-18	楕円形	黒灰色粘土	後期?
SK33	Ⅶ区Ⅰグリッド	記載		井戸	後期
SK35	Ⅶ区Ⅰグリッド	記載		井戸	後期
SK36	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		炭堆積土坑	後期
SK37	Ⅳ区Ⅴグリッド	径52 -21	円形	黒褐色シルト <SK17	後期
SK38	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		住居隣接土坑	後期
SK39	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		炭堆積土坑	後期
SK40	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		炭堆積土坑	後期
SK41	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		炭堆積土坑	後期
SK42	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		炭堆積土坑	後期
SK43	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		井戸	後期
SK44	Ⅳ区Ⅴグリッド	180×150-52	円形		近世
SK45	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		住居隣接土坑	後期
SK46	Ⅳ区Ⅴグリッド	径172 -50	円形	井戸か 褐灰色粘土(1)/灰色粘土(2) 木片・土器	後期
SK47	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		炭堆積土坑	後期
SK48	Ⅳ区Ⅴグリッド	径120 -18	円形	土器 黒褐色粘土	後期
SK49	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		土器棺墓	後期
SK50	Ⅳ区Ⅴグリッド	径60 -14	円形	刃器 黒褐色粘土	中期
SK51	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		住居隣接土坑	後期
SK52	Ⅳ区Ⅴグリッド	104×80-20	楕円形		中期?
SK54	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		住居隣接土坑	後期
SK55	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		炭堆積土坑	後期
SK56	Ⅳ区Ⅴグリッド	径160 -30	円形	井戸か	後期
SK57	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載			中期
SK58	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載			中期
SK59	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載		木棺墓	後期
SK60	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載			中期
SK61	Ⅳ区Ⅴグリッド	130×94-12	楕円形	黒灰色シルト	中期
SK62	Ⅳ区Ⅴグリッド	50×42-10	楕円形	暗灰色シルト・炭化物粒混入	中期
SK63	Ⅳ区Ⅴグリッド	94×90-14	円形	黒灰色砂・土器	中期
SK64	Ⅳ区Ⅴグリッド	221×170-24	楕円形	暗灰色砂質シルト(1)/灰色シルト 炭化物粒混入(2)	中期
SK65	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載			中期
SK66	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載			中期
SK68	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載			中期
SK69	Ⅳ区Ⅴグリッド	110×85-15	楕円形	黒褐色シルト 石器・土器	中期
SK70	Ⅳ区Ⅴグリッド	径320 -80	円形	<SB24・25	古墳前期?
SK81	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載			中期
SK82	Ⅳ区Ⅴグリッド	径78 -25	円形	黒灰色粘土粗砂混入	中期
SK83	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載			中期
SK84	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載			中期
SK85	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載			中期
SK86	Ⅳ区Ⅴグリッド	記載			中期
SK87	Ⅳ区Ⅴグリッド	180×120-30	長楕円形	黒灰色粘土(1)/黒灰色シルト質粘土(2)/黒灰色粘土(3) > SK88	中期

第3章 各時代の遺構・遺物

SK88	IV区Hグリッド	—×90—14	長方形	<SK88	中期か
SK89	IV区Nグリッド	記載			中期
SK101	IV区Nグリッド	径80 —30	円形	黒褐色粘土(1)/黒色粘土(2)/土器	後期
SK102	IV区Nグリッド	120×120—50	隅丸方形	暗褐色粘土(1)/黒灰色粘土・細砂混入(2)	後期
SK103	IV区Mグリッド	142×110—85	楕円形	井戸か	後期
SK104	IV区Nグリッド	132×116—42	隅丸長方形	井戸か	後期
SK105	VI区Aグリッド	70×70—16	隅丸方形	褐色砂質シルト	後期
SK107	IV区Rグリッド	70×48—17	楕円形	粗砂(1)/黒灰色シルト(2)	後期
SK108	IV区Vグリッド	径50 —	円形	粗砂(1)/灰色シルト(2)	後期
SK109	IV区Rグリッド	記載		住居隣接土坑	後期
SK110	IV区Rグリッド	記載		掘立柱建物	後期
SK111	IV区Rグリッド	記載		掘立柱建物	後期
SK112	I区Uグリッド	径180 —20	円形	黒褐色粘土・オリーブ 黒色シルトブロック 混入	弥生中期 ～平安
SK113	III区Aグリッド	160×125—16	隅丸長方形	黒灰色粘土(1)/灰色粘土(2)/土器	後期
SK131	VI区Eグリッド	28×23—14	円形	黒褐色粘土	中期
SK132	VI区Eグリッド	55×43—13	楕円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK133	VI区Eグリッド	142×32—10	長楕円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK134	VI区Eグリッド	40×35—12	円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK135	VI区Eグリッド	34×26—32	円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK136	VI区Eグリッド	36×30—8	円形	黒褐色粘土	中期
SK137	VI区Eグリッド	33×31—10	円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK138	VI区Eグリッド	35×34—9	円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK139	VI区Eグリッド	32×30—16	円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK140	VI区Eグリッド	43×25—8	楕円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK141	VI区Eグリッド	径14 —7	円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK142	VI区Eグリッド	110×82—14	隅丸長方形	黒褐色粘土(1)/オリーブ色シルト(2)	中期
SK143	VI区Eグリッド	径34 —6	円形	黒褐色粘土	中期
SK144	VI区Eグリッド	径28 —9	円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK145	VI区Eグリッド	38×32—11	円形	黒褐色粘土	中期
SK146	VI区Eグリッド	50×67—22	楕円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK147	IV区Eグリッド	36×32—11	楕円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入	中期
SK148	IV区Eグリッド	径40 —12	円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入 土器	中期
SK149	IV区Eグリッド	72×37—18	楕円形	黒褐色粘土・オリーブ色シルト混入 土器	中期
SK150	IV区Eグリッド	25×22—8	円形	黒褐色粘土	中期
SK151	IV区Eグリッド	28×24—16	円形	黒褐色シルト質粘土・オリーブ褐色粘土混入	中期
SK152	IV区Eグリッド	51×32—14	楕円形	黒褐色シルト質粘土	中期
SK153	IV区Dグリッド	21×— —14	不明	黒褐色シルト質粘土・褐色シルト混入	中期
SK154	VI区Eグリッド	25×19—19	楕円形	黒褐色粘土	中期
SK155	VI区Eグリッド	37×30—23	円形	黒褐色シルト質粘土・褐色シルト混入	中期
SK156	VI区Eグリッド	記載		石鏃	中期
SK157	VI区Eグリッド	径30 —8	円形	黒褐色シルト質粘土 柱穴か	中期
SK158	VI区Eグリッド	36×24—20	楕円形	黒褐色粘土柱穴か	中期
SK159	VII区Jグリッド	記載			後期
SK160	VII区Jグリッド	記載			後期

5 遺物集中遺構 (第7・8表 第186図)

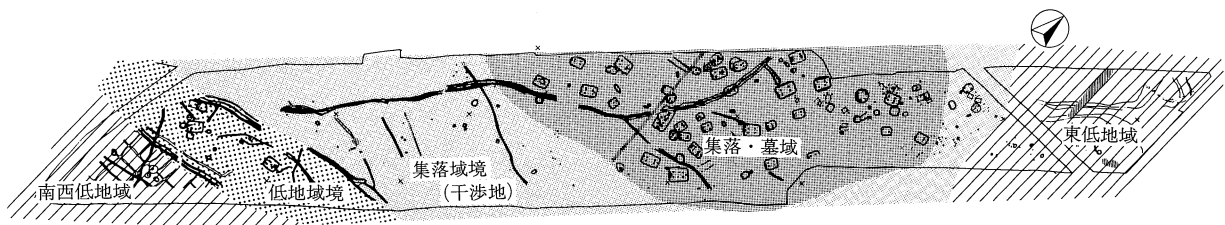
本遺跡の遺物集中遺構は出土・検出遺物の種別に土器、石器、炭化物、焼土があり、この4種の属性が相互に関連している遺構も認められた。出土地点では住居・墓域を形成した集落域(微高地)と低地域、その境界域に区分され低地域境に偏在する。前者は土坑など人為的な掘り込みをもつ遺構にともなう遺物痕跡とされ、後2者は自然地形に廃棄もしくは遺棄された遺物群と捉えられる。

遺物集中として確認された遺構は58基あり、弥生中期に帰属する遺構が3基でほかは全て弥生後期に属するが、時期幅がある。本節では弥生後期に該当する遺構のみを扱う。

遺物集中遺構を上記の遺物属性に区分すると以下に分類される。

第7表 遺物集中遺構分類一覧

・土器単体・散在……………SQ	01.04.05.08.09.10.11.12.13.27.28.30.31.33.36.41.42.43.45.48.50. 51.52.54.55
・炭化物……………SQ	16.18.20.21.22.26.34.37.38.39.SF103
・焼土……………SF	02.03.101.104
・土器・炭化物……………SQ	14.15.19.24.25.32.49.
・土器・炭化物・焼土…SQ	02.03.29.35.SF102
・炭化物・焼土……………SQ	23.SF01
・弥生中期……………SQ	44.46.53



第186図 遺物集中遺構立地分類模式図

(1) 低地域及び低地域境の遺構 [第187～196図]

ア. 調査区南西側低地域 (VII区E・I・Jグリッド)

SD34・105から南側を低地域ないし低地域境として区分した。この調査域では洪水性の砂層で被覆された水田(基本層序9層)と竪穴住居などが検出され、9層埋没後の8b～8c層に井戸と数条の溝が構築されている。遺物集中遺構の多くは検出状況から住居・井戸などの集落遺構群が埋没した直後であり7層ないし8a～8b層に帰属するものと判断した。7層上部には低地側に砂質シルトの堆積が認められ、微高地との境界を検出し数本の立ち木(W-1・2)の痕跡があった。

本調査域では38基の遺構が検出され、内訳は土器片をとまなわない炭化物・焼土のみの集中が14基(SQ10・18・20・21・22・23・26・34・37・38・39・SF01・03・101)、炭化物・焼土に土器をとまなつた集中が10基(SQ02・14・15・19・24・25・29・32・35・49)、土器単体もしくは土器片の散在が14基(SQ04・05・08～13・27・28・30・31・33・36)であった。分布は低地からやや離れた位置に帯状に点在し、規則性はない。SQ16

・19・20・21・22・24は下層にSB31・32があり竪穴住居埋没の過程で人為的な燃焼行為があったものと捉えられ、SD11周辺に点在するSQ04・05・34・35・36・39も溝埋土に関連する可能性が高い。低地内に位置するSQ02・14・23は、隣接して杭(W-4)と土坑が検出されていることから一時的に微高地となっていたと考えられる。出土土器は後期前半に帰属するものが少量(SQ02・09など)で、大半は後期中葉に位置づけられる。多様な器種が混在しているが、壺が比較的多くみうけられ甕は小破片が目につく。特殊遺物ではSQ09に顔面付土器もしくは土面の耳部と考えられる土製品がある。

該期では川田条里遺跡で大規模な水田が検出されており、本調査域は北東の集落域から水田域に至る干渉地となる。本遺構群はこの干渉地で土器を含めた多くの生活具の燃焼行為の痕跡と捉えられる。

イ. 調査区東低地域 (I区Uグリッド)

焼土集中としてSF104が後期溝址SD47に隣接してある。SF104検出層からは弥生中・後期を主体として平安前半期の遺物が出土し、時期・性格等曖昧であるが、本期に帰属させた。

(2) 低地と集落境界域の遺構 (IV区P・Q・R・U・V, VII区Eグリッド) [第188~191・195・196図]

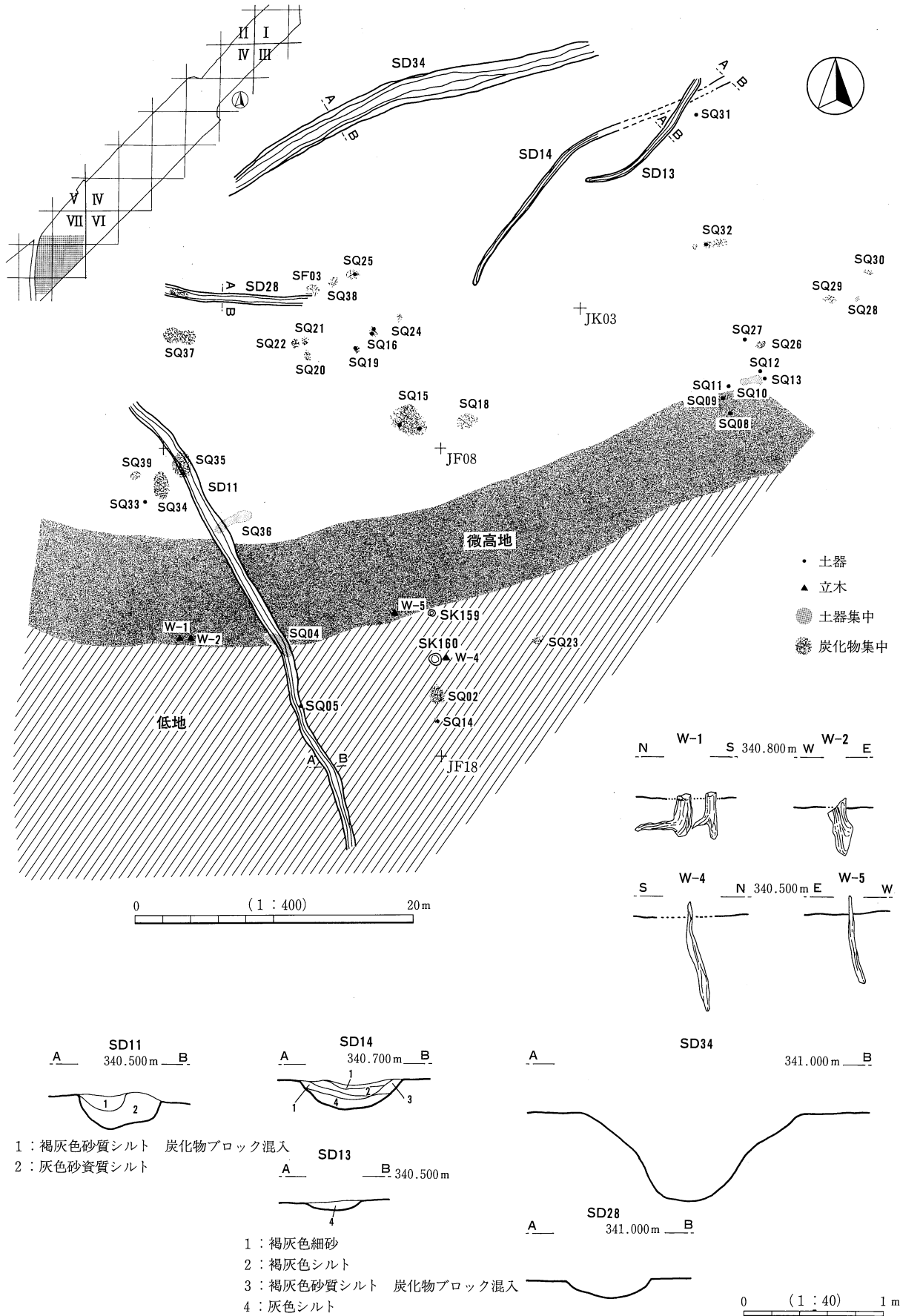
調査区中央の竪穴住居が密集する集落域(IV区L・M・Rグリッド)南から低地域に位置するSD34・35・103・105(VI区A, VII区Eグリッド)までを境界域の遺構として区分した。SQ01・03・48・49・50・51・52・55・SF102の9基が広範囲に点在し、土器廃棄もしくは調査条件により見逃した土坑底部の可能性がある。9基にはいずれも大形の土器片が複数出土したが、03・49・SF102には焼土や炭がともなっている。SQ01は、1.2mの範囲に土器片が多数集中したが、摩滅の著しい数個体の壺底部破片が主体であった。口縁・胴部の破片は数点で、底部複数個体の廃棄とされる。SQ03は広範囲に炭の広がりが認められた集中遺構であるが、北西側をSD01によって削平され、南側が未調査区となるため全容は不明である。土器は摩滅の少ない後期後半の壺、甕が出土し燃焼行為と土器の関連はない。SQ48・49は広範囲に土器片が散在した遺構である。両者とも壺を主体とし器形のわかる大形土器片が多い。SQ51・52・55は集落域に近い遺構である。摩滅の著しい土器片で、SQ52の甕とSQ51の高杯は後期中葉に位置づく。

SF102は長径4m近い平面楕円形状で、深さ10cmと浅い土坑であるが直径40cmの焼土塊を中心に炭化物層が堆積し、ミニチュアを含めた複数の土器片が出土した。土器片の中には表裏、欠損断面に炭の付着が認められたものや2次焼成を受けたものがみうけられ接合破片は極めて少ない。本址は土器を含めた燃焼廃棄行為の痕跡と捉えられる。

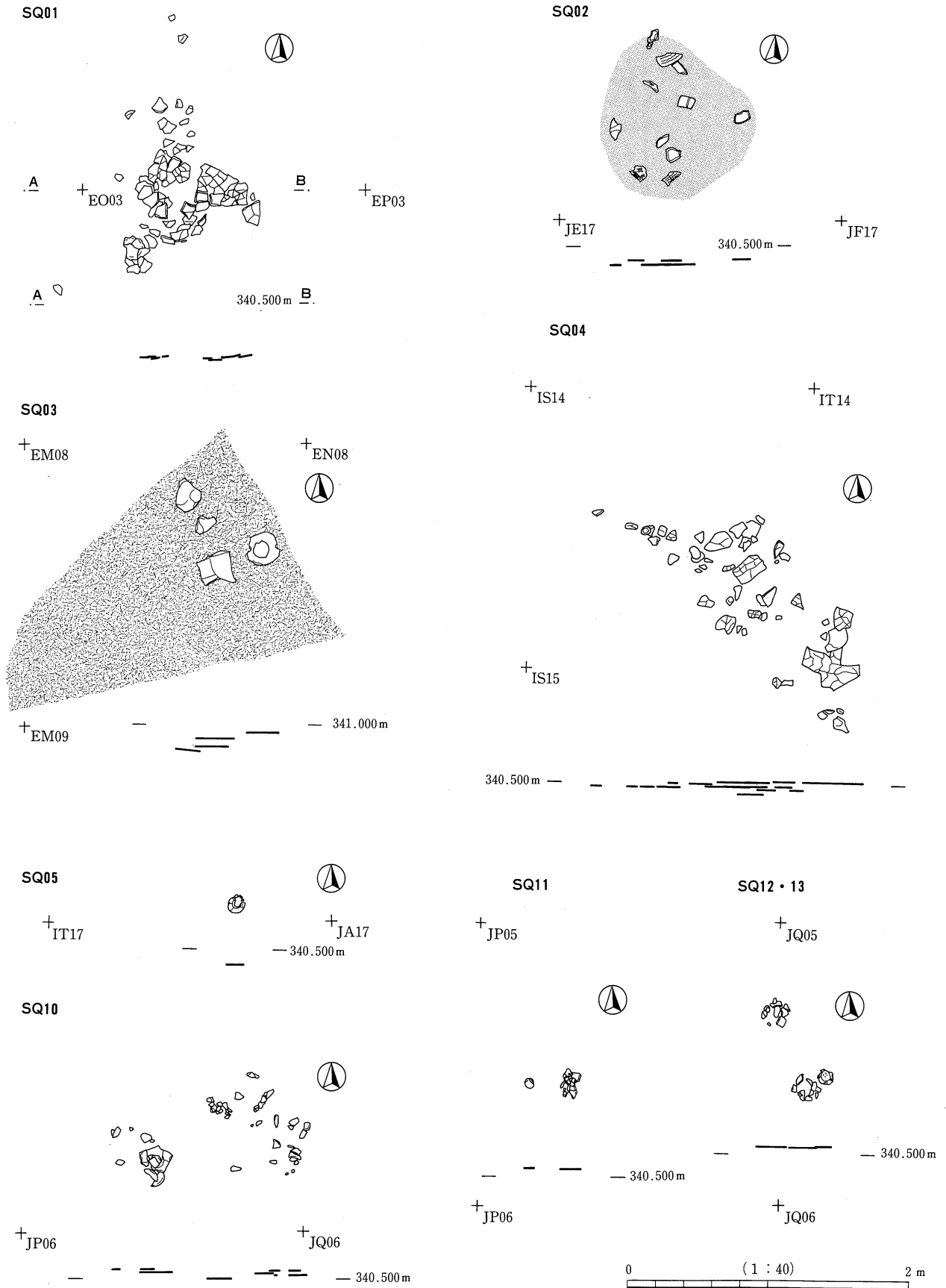
本域から出土した土器は集落を構成した住居群と同一の後期中葉から後半段階であり、集落から低地に至る干渉地の生活具の廃棄遺構とされる。

(3) 集落・墓域内の遺構 [第197・198・199図]

SQ41・42・43・45・54の5基があり、SD16北西(IV区H・L・Mグリッド)に検出された周溝墓群内に位置する。この5基はまとまりをもった土器片の集中であり、いずれも略完形個体に復元された。土器は後期後半から終末の段階に帰属し、SQ43出土の管玉も含め、調査条件により未検出となった周溝墓の周溝内遺物の可能性が高い。SQ54はSM03の周溝に隣接し、出土した大形壺は周溝内に埋設された土器棺と考えられる。

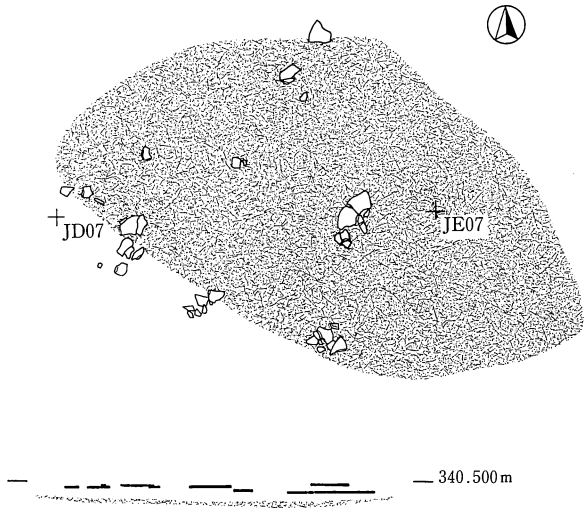


第187図 南西低地域7・8 a～b層遺構分布図及び断面図

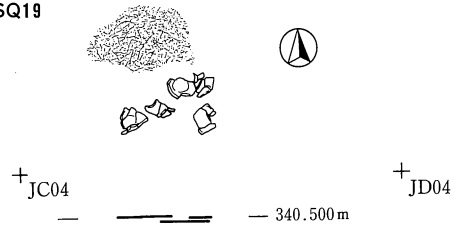


第188図 SQ01・02・03・04・05・10・11・12・13実測図

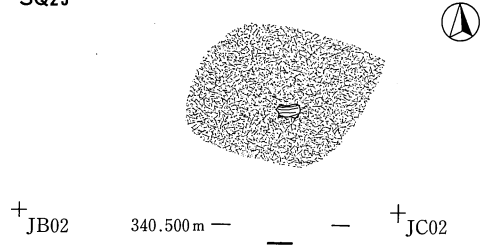
SQ15



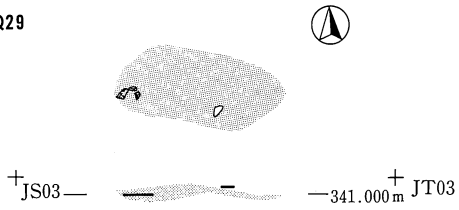
SQ19



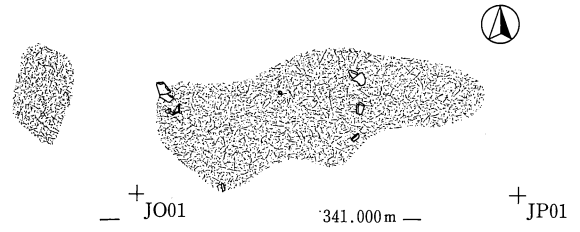
SQ25



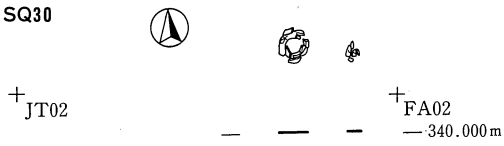
SQ29



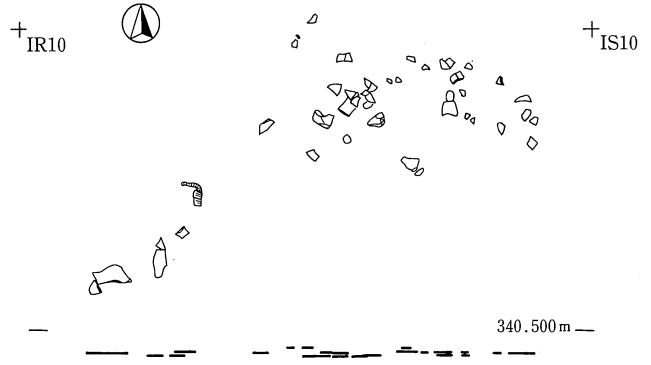
SQ32



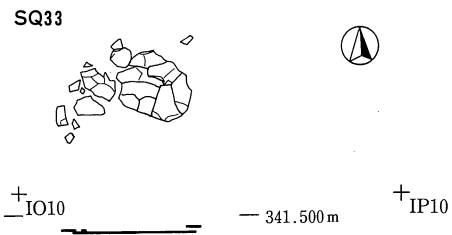
SQ30



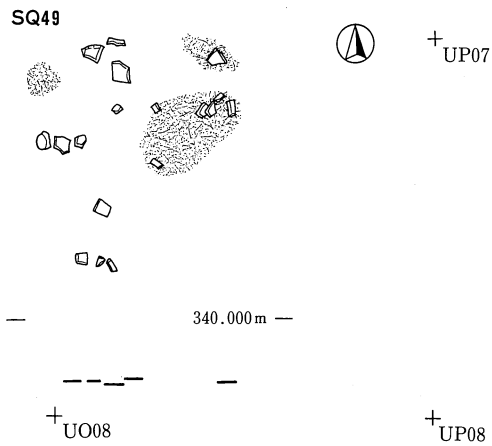
SQ36



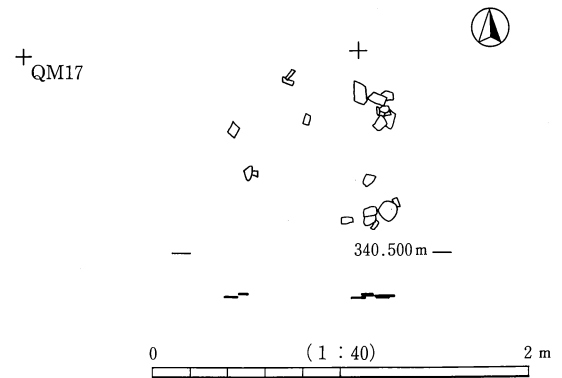
SQ33



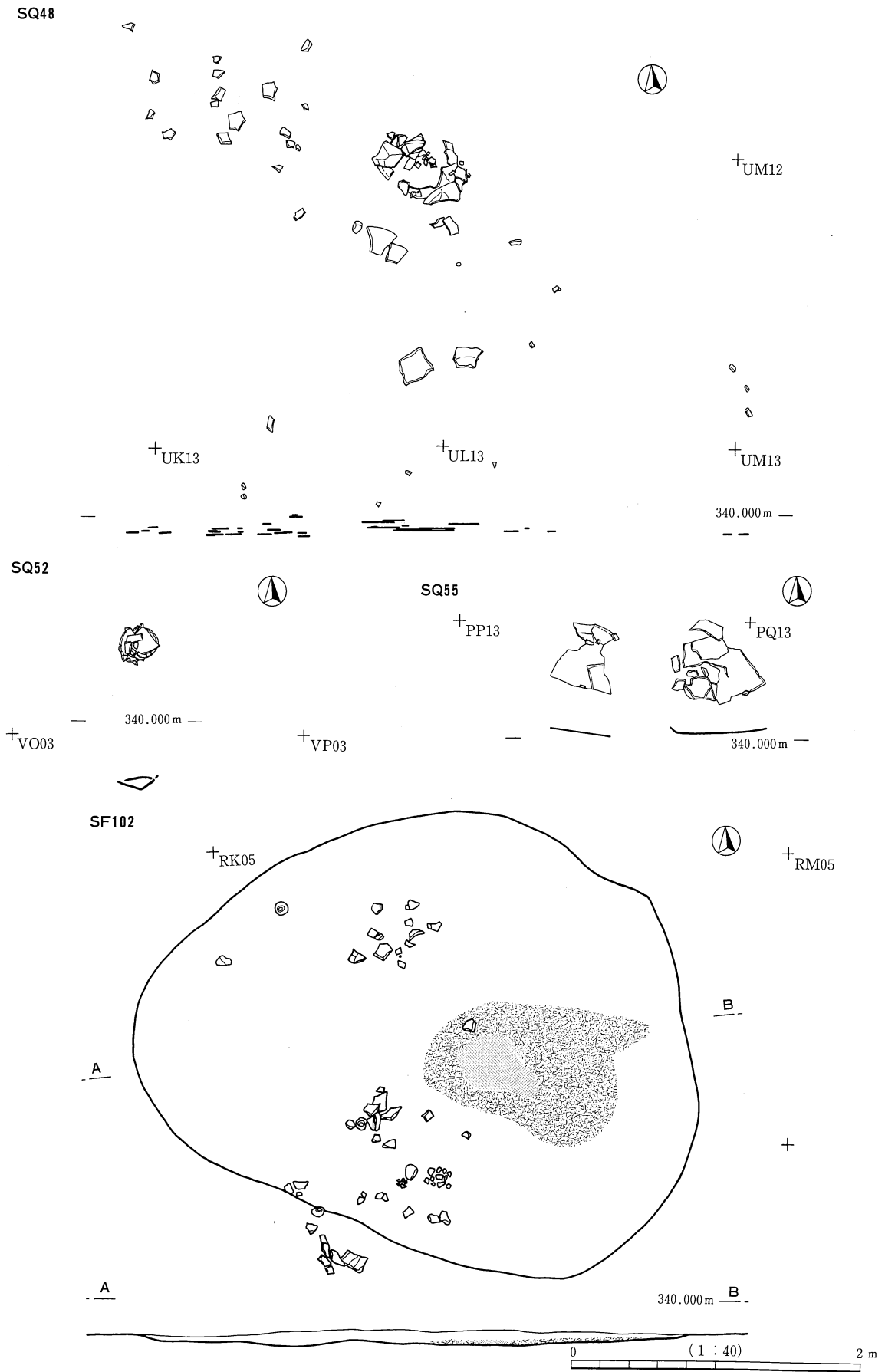
SQ49



SQ51

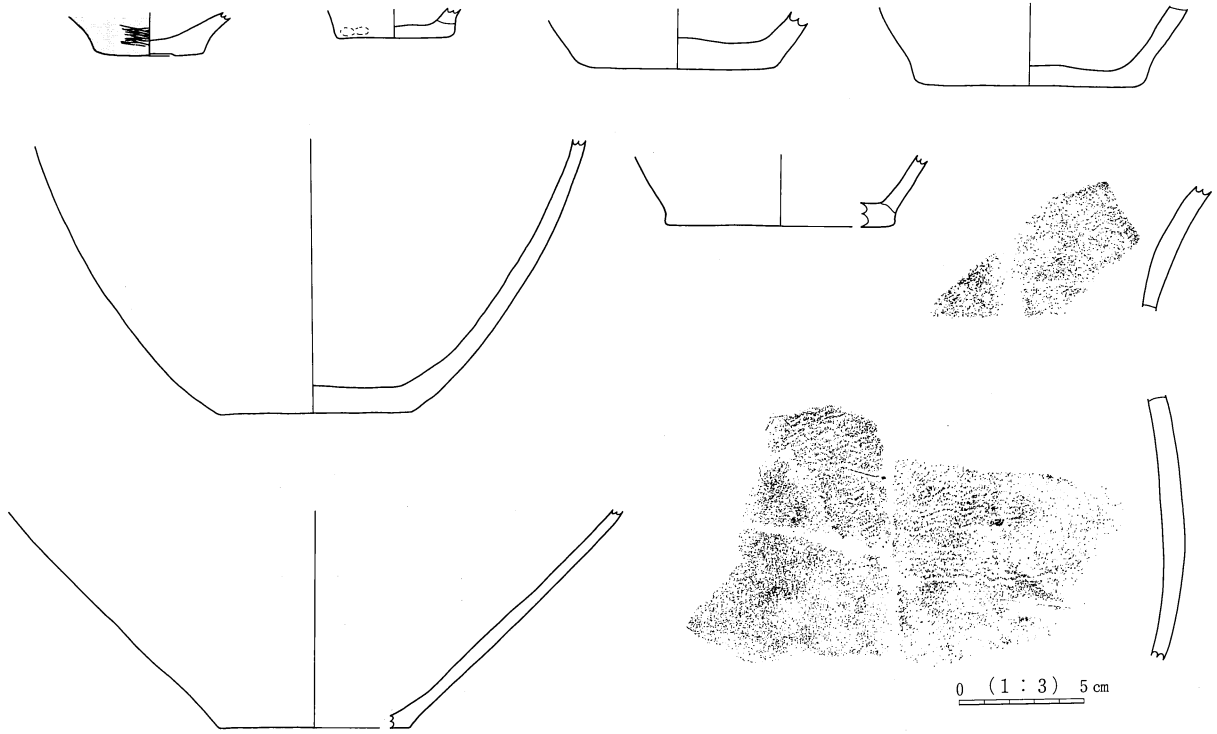


第189図 SQ15・19・25・29・30・32・33・36・49・51実測図

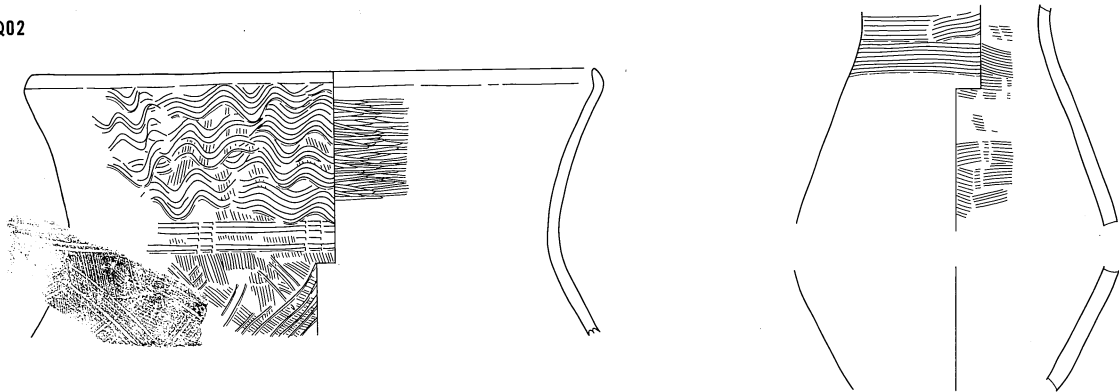


第190図 SQ48・52・55 SF102実測図

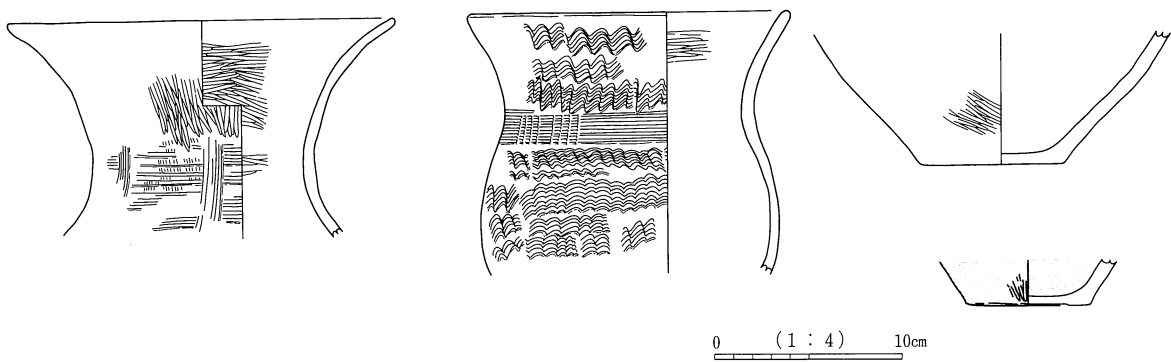
SQ01



SQ02

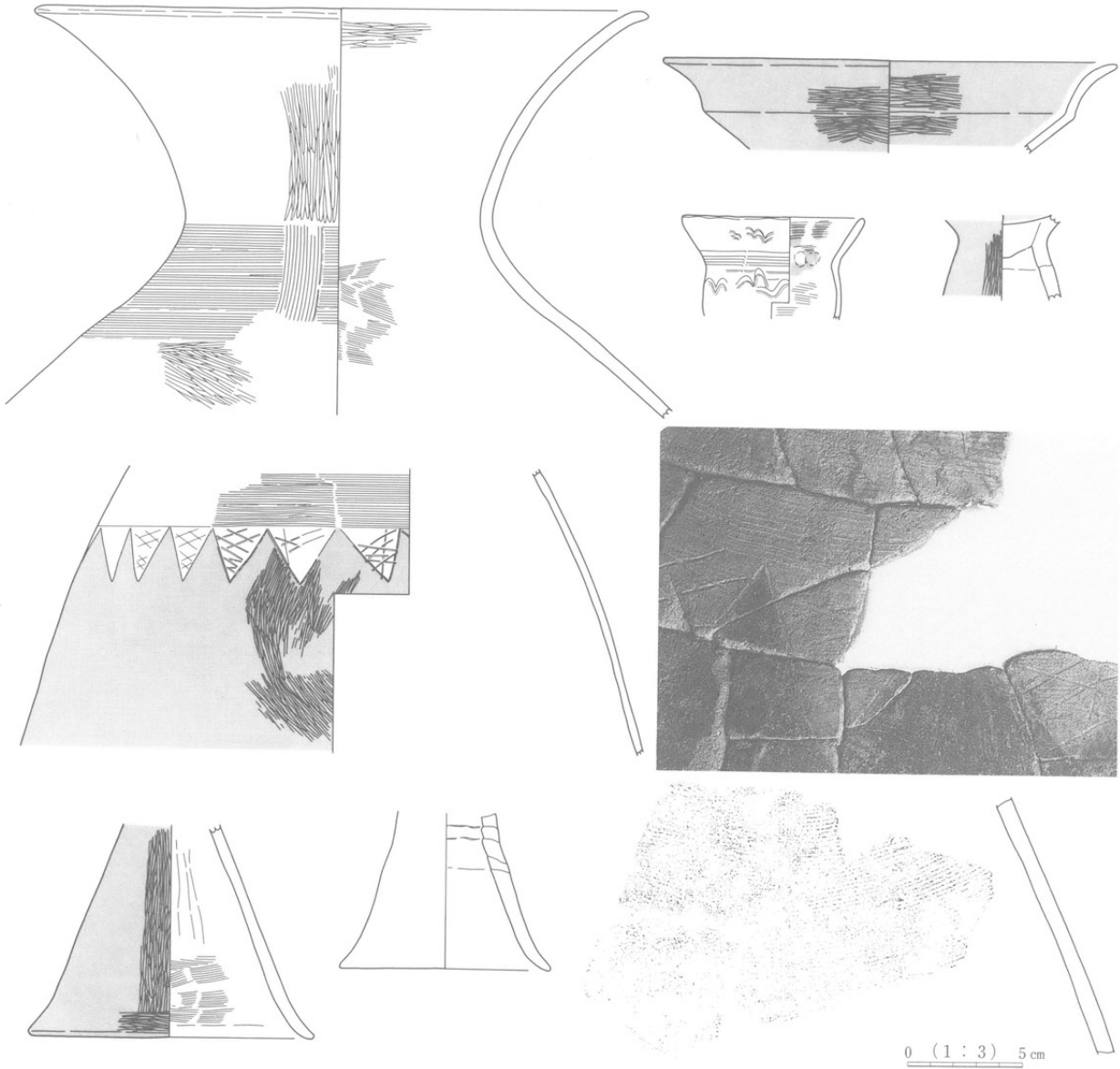


SQ03

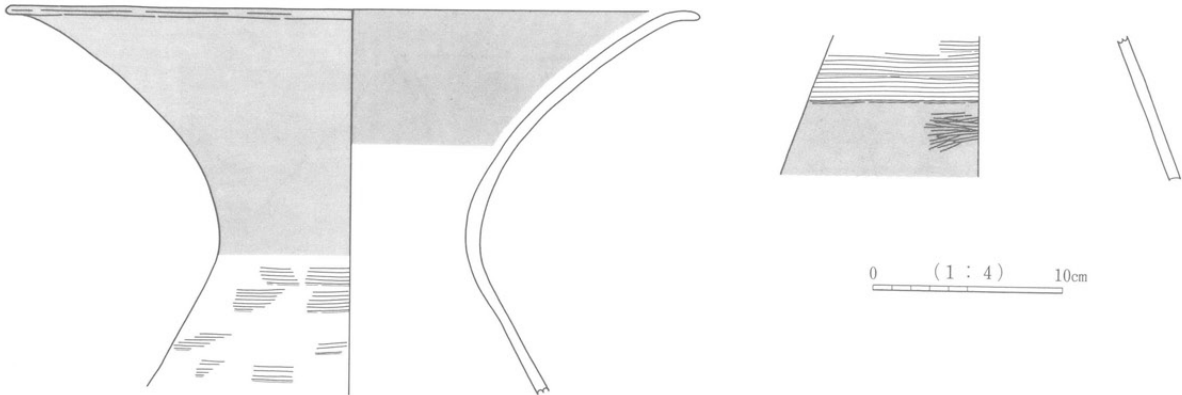


第191図 SQ01・02・03出土土器実測図・拓影

SQ04

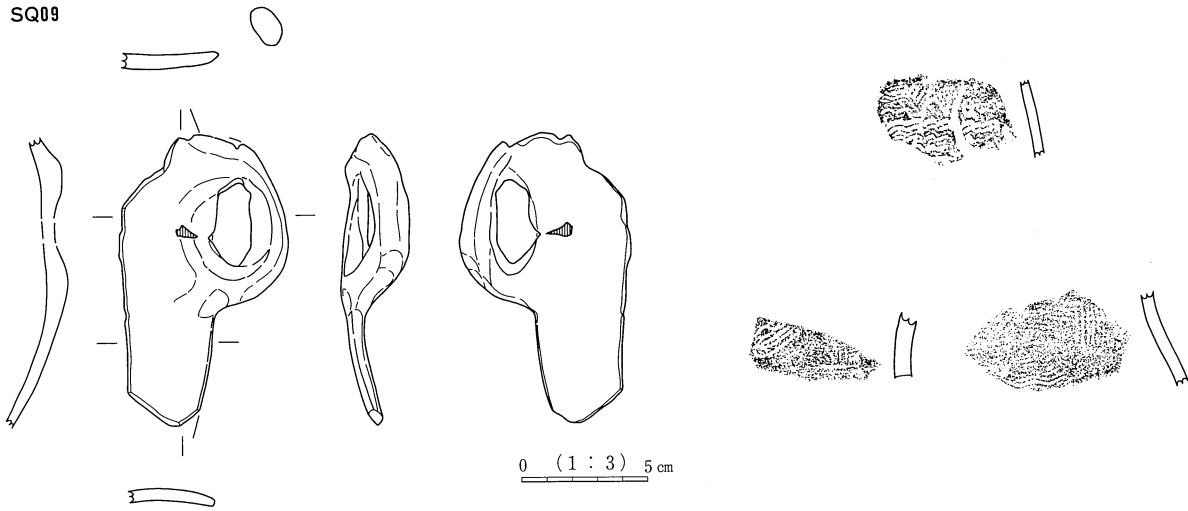


SQ05

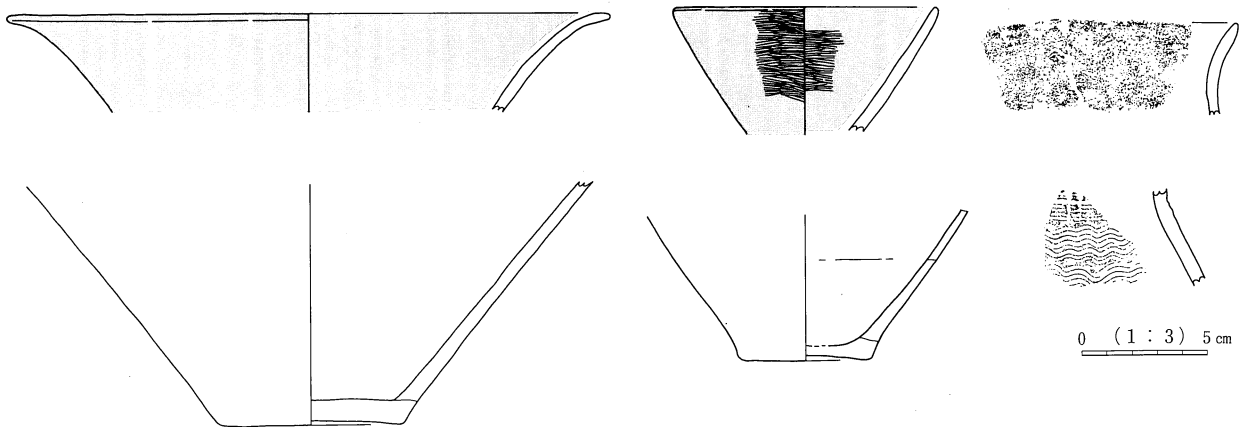


第192図 SQ04・05出土土器実測図・拓影・写真

SQ09



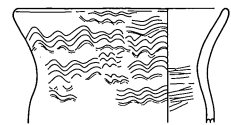
SQ10



SQ11



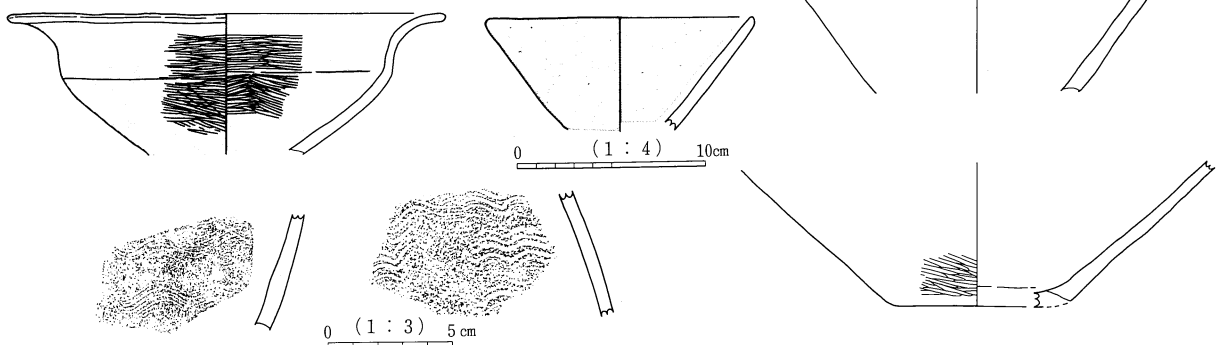
SQ12



SQ13

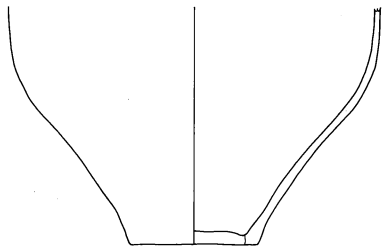


SQ15

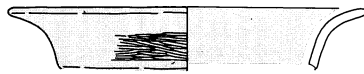


第193図 SQ09・10・11・12・15出土土器・土製品実測図・拓影

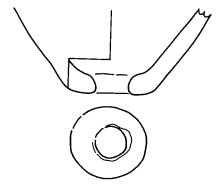
SQ19



SQ25



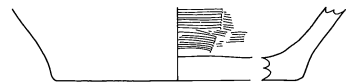
SQ29



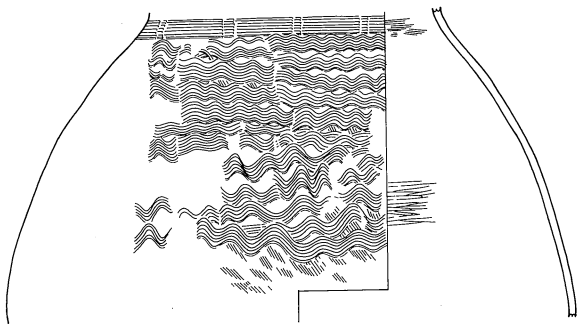
SQ30



SQ32



SQ33

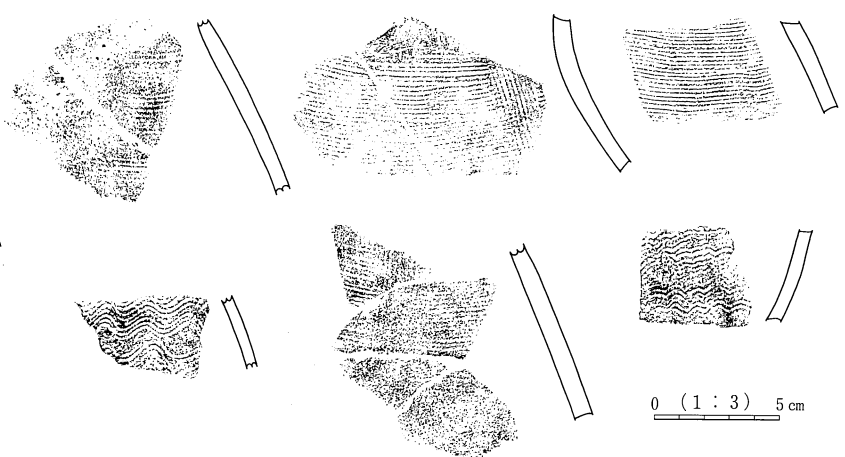


0 (1:4) 10cm

SQ35



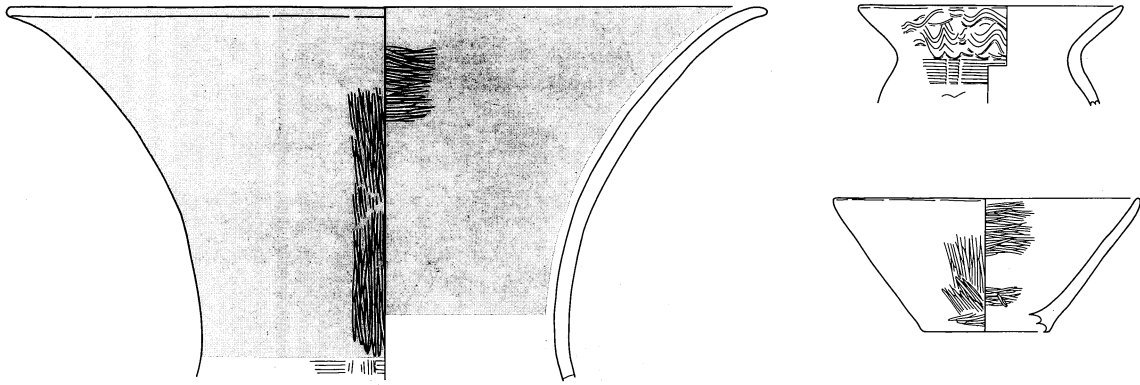
SQ36



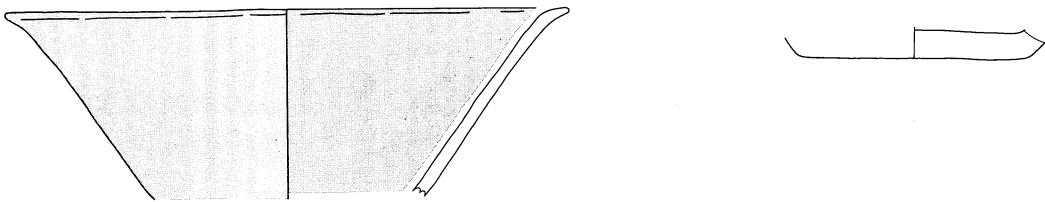
0 (1:3) 5 cm

第194図 SQ19・25・29・30・32・33・35・36出土土器実測図・拓影

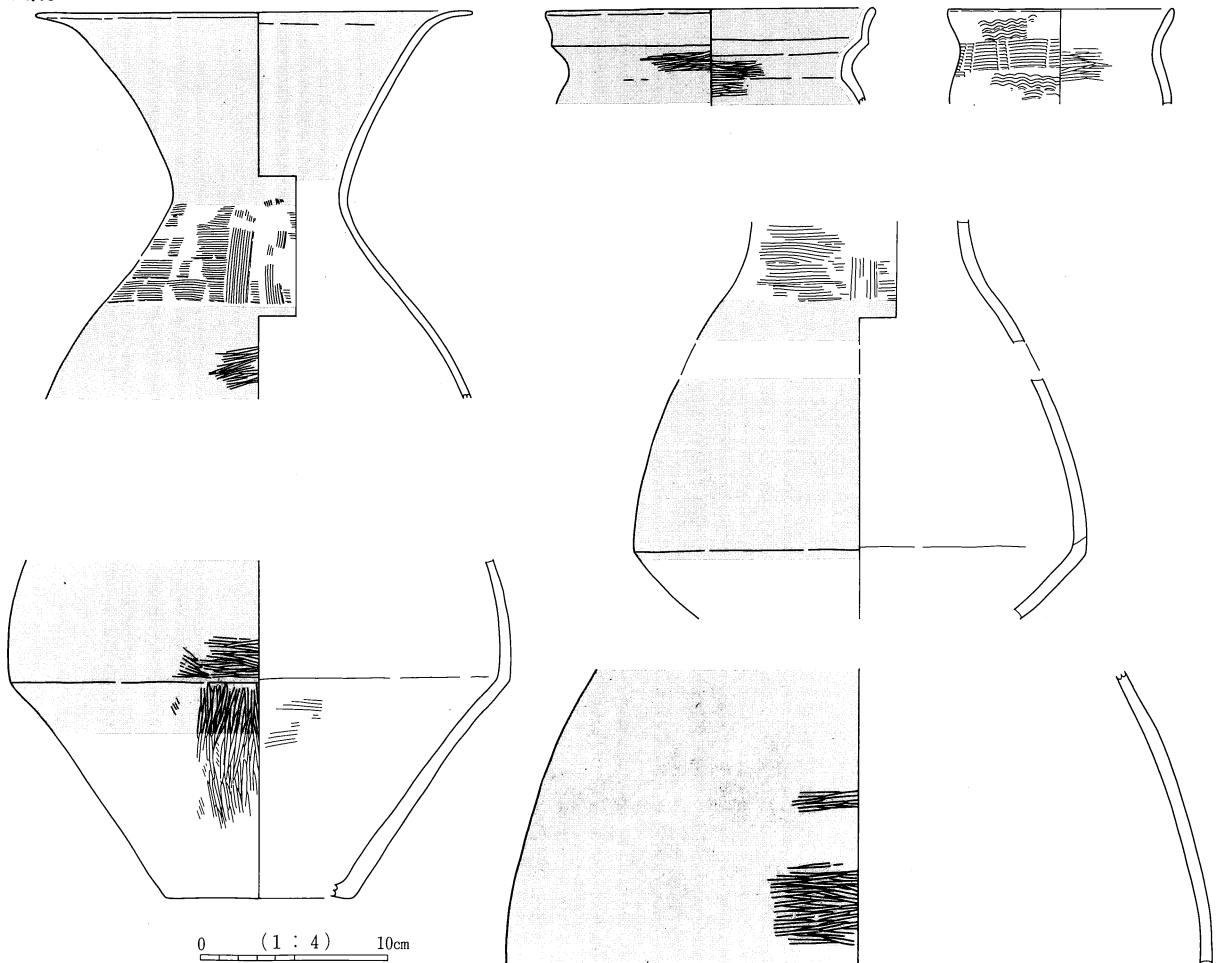
SQ36



SQ47

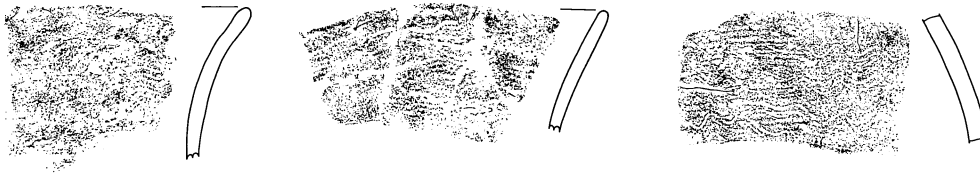


SQ48

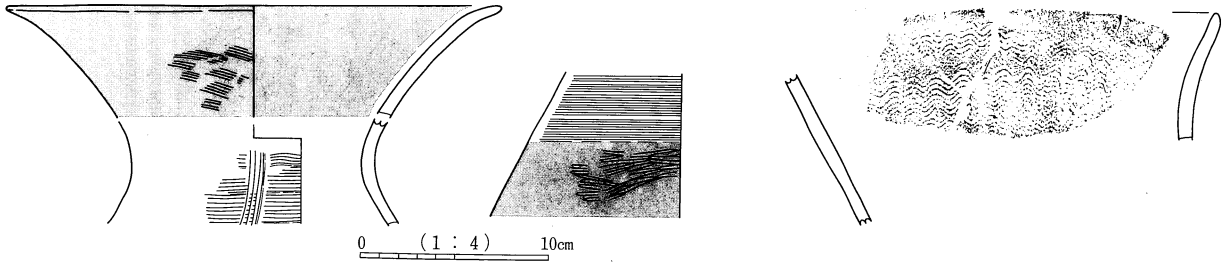


第195図 SQ36・47・48出土土器実測図

SQ48



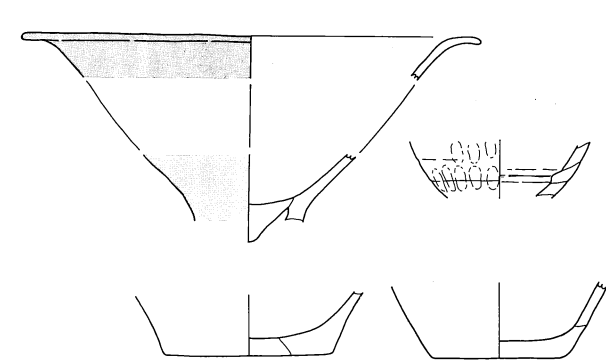
SQ49



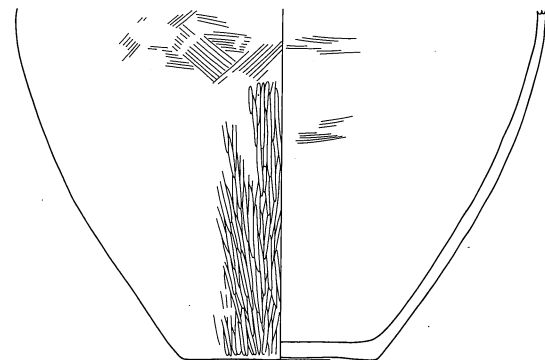
SQ50



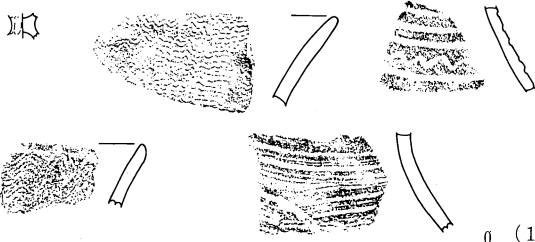
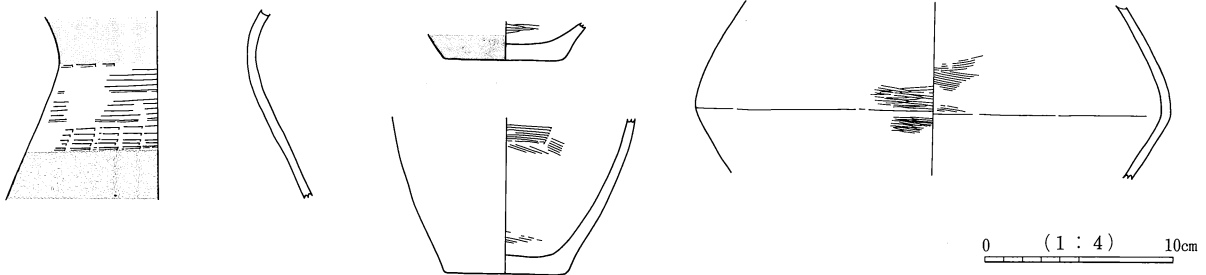
SQ51



SQ52



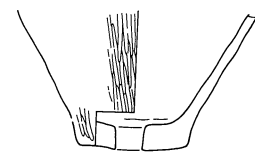
SF102



SF103

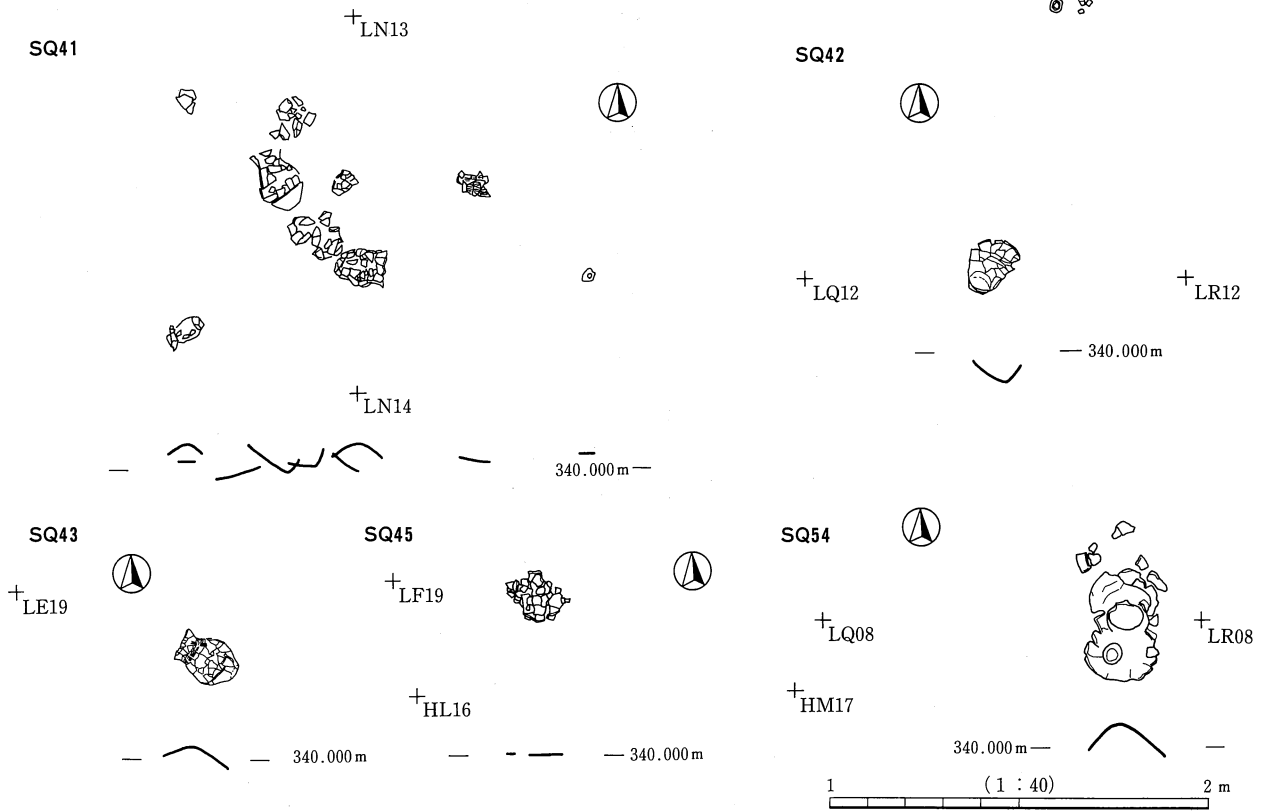


SF101

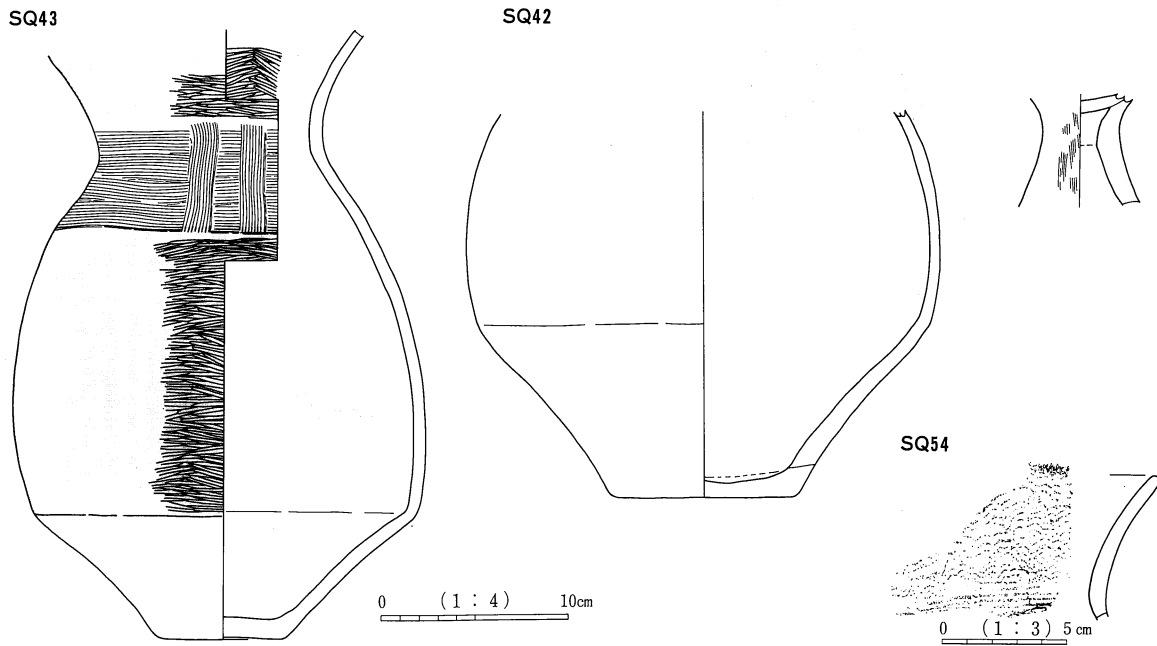


0 (1:3) 5cm

第196図 SQ48・49・50・51・52 SF101・102・103出土土器実測図・拓影

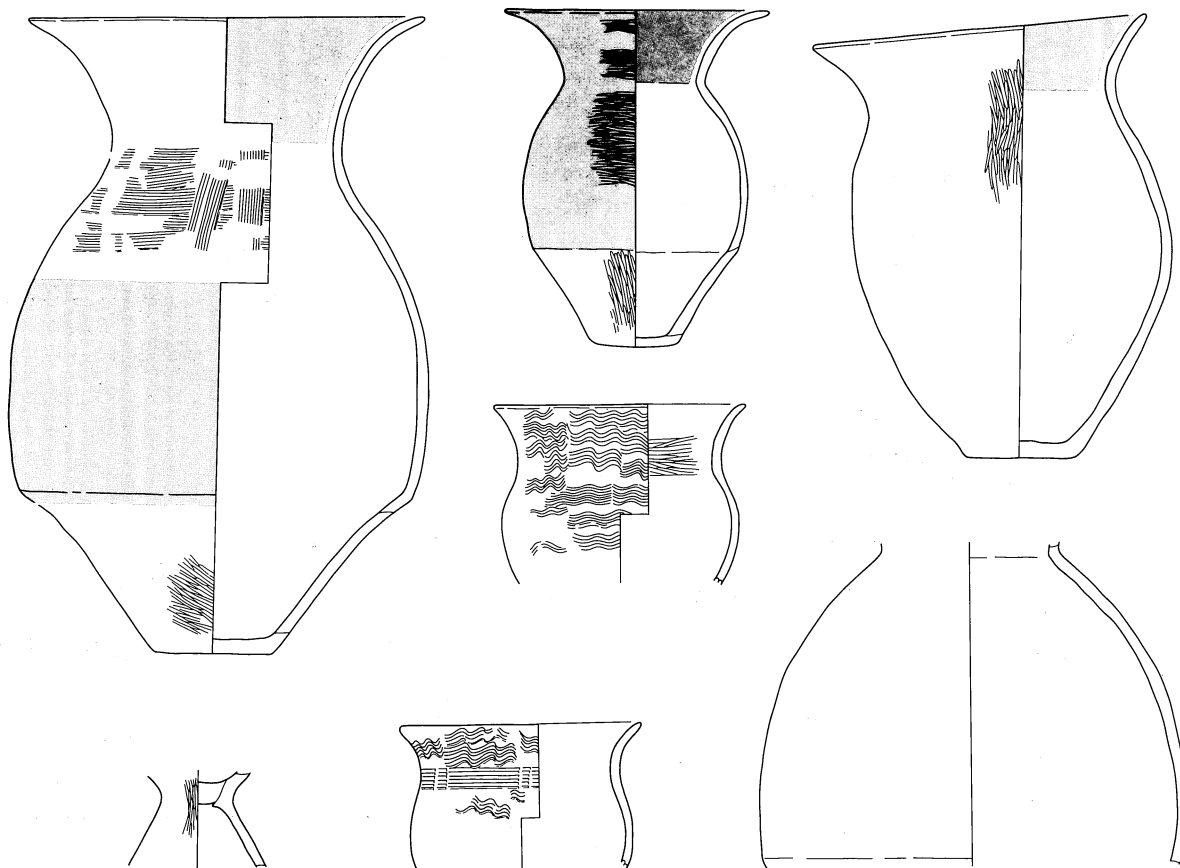


第197図 SQ41・42・43・45・54実測図

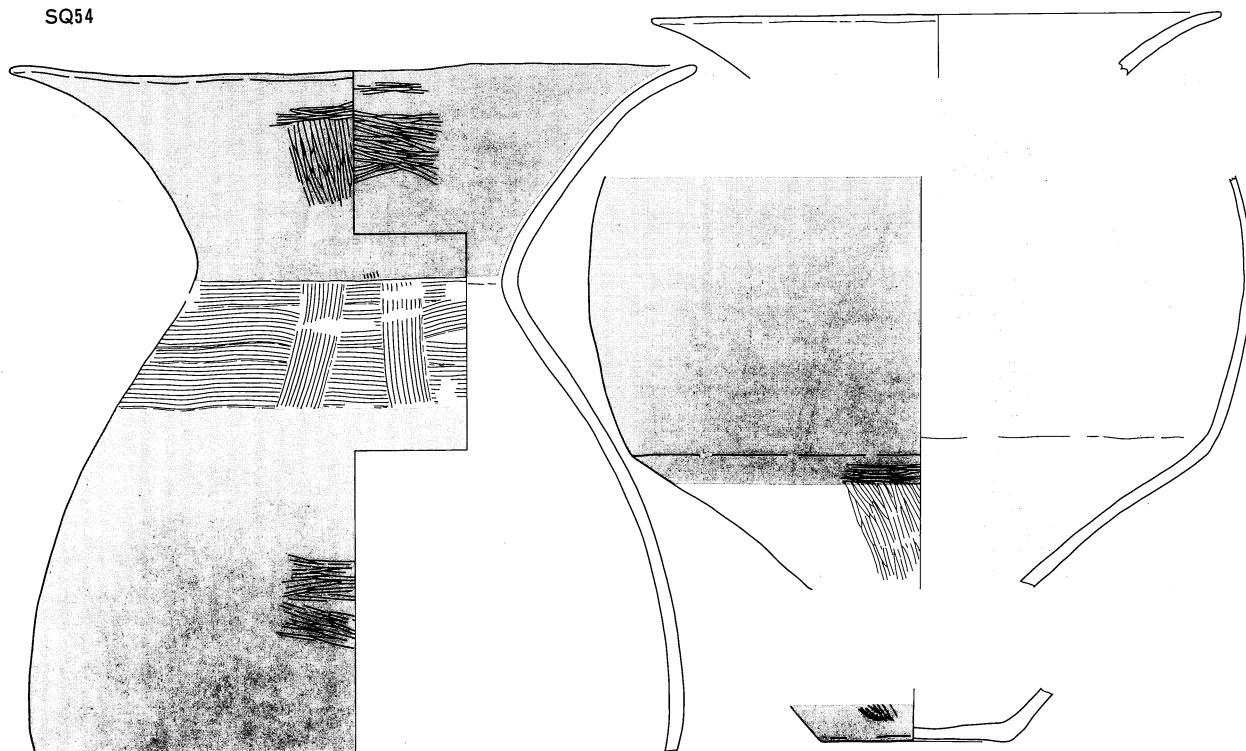


第198図 SQ42・43・54出土土器実測図・拓影

SQ41



SQ54



第199図 SQ41・54出土土器実測図

第8表 弥生時代中・後期遺物集中遺構一覧（中期の遺構はSQ44・46・53）

遺構番号	位置	規模(範囲) m	形状	遺物属性の状況と関連・隣接遺構	立地
SQ01	VII区-Eグリッド	1.9×1.2	楕円形	土器破片集中	集落域境
SQ02	VII区-Jグリッド	径1.0~1.2	円形	焼土・炭と土器破片の集中	SK05 低地域
SQ03	VII区-Eグリッド	1.0×0.7	不正三角形	焼土・炭と土器破片の集中	集落域境
SQ04	VII区-Eグリッド	2.1×0.9	楕円形	土器・木片	SD11 低地域
SQ05	VII区-Jグリッド	—	—	土器単体	SD11 低地域
SQ08	VII区-Jグリッド	1.25×0.46	楕円形	大形土器片の散在	低地域境
SQ09	VII区-Jグリッド	0.55×0.3	楕円形	土器散在	低地域境
SQ10	VII区-Jグリッド	1.4×1.0	楕円形	土器散在	低地域境
SQ11	VII区-Jグリッド	0.5×0.3	楕円形	土器散在	低地域境
SQ12・13	VII区-Jグリッド	0.8×0.4	楕円形	土器単体集合	低地域境
SQ14	VII区-Jグリッド	0.8×0.78	円形	炭と土器破片	低地域
SQ15	VII区-Jグリッド	2.1×1.5	不正方形	炭と土器破片 浅い掘り込み	低地域境
SQ16	VII区-Jグリッド	径0.2	円形	炭の集中	SB31・32 低地域境
SQ18	VII区-Jグリッド	1.7×1.2	楕円形	炭の集中	低地域境
SQ19	VII区-Jグリッド	0.8×0.7	楕円形	炭の集中/土器散在	SB31・32 低地域境
SQ20	VII区-Jグリッド	0.7×0.6	楕円形	炭の集中	SB31・32 低地域境
SQ21	VII区-Jグリッド	1.04×1.0	不正方形	炭の集中	SB31 低地域境
SQ22	VII区-Jグリッド	1.6×0.7	長楕円形	炭の集中	SB31・32 低地域境
SQ23	VII区-Jグリッド	0.5×0.3	瓢箪形	焼土・炭の集中	低地域
SQ24	VII区-Jグリッド	1.7×1.65	不正方形	炭と土器破片の集中	SB31・32 低地域境
SQ25	VII区-Jグリッド	0.8×0.7	円形	炭と土器破片の集中	SB31 低地域境
SQ26	VII区-Jグリッド	0.62×0.54	楕円形	炭の集中	低地域境
SQ27	VII区-Jグリッド	径0.4	円形	土器散在	低地域境
SQ28	VII区-Jグリッド	0.8×0.24	楕円形	土器散在	SB30 低地域境
SQ29	VII区-Jグリッド	0.6×0.4	不正方形	焼土・炭と土器破片の集中	SB30 低地域境
SQ30	VII区-Eグリッド	0.44×0.2	楕円形	土器散在	SB30 低地域境
SQ31	VII区-Eグリッド	0.22×0.14	楕円形	土器散在	SD13 低地域境
SQ32	VII区-Eグリッド	1.7×0.7 0.5×0.3	長楕円形	炭と土器破片の散在	低地域境
SQ33	VII区-Iグリッド	0.72×0.6	卵形	土器散在	低地域境
SQ34	VII区-Iグリッド	1.82×1.2	楕円形	炭の集中	SD11 低地域境
SQ35	VII区-Iグリッド	径1.6	円形	焼土・炭と土器破片の集中	SD11 低地域境
SQ36	VII区-Iグリッド	2.6×2.0	長楕円形	土器破片散在	SD11 低地域境
SQ37	VII区-Iグリッド	1.1×0.6	楕円形	炭の集中	低地域境
SQ38	VII区-Iグリッド	1.9×0.6	楕円形	炭の集中	SD28 低地域境
SQ39	VII区-Iグリッド	0.9×0.6	楕円形	炭の集中	低地域境
SQ41	IV区-Lグリッド	—	—	土器単体	集落域
SQ42	IV区-Lグリッド	—	—	土器2個体	集落域
SQ43	IV区-Hグリッド	—	—	土器単体・管玉	集落域
SQ44	IV区-Hグリッド	径0.4	円形	太形蛤刃石斧・弥生中期土器散在	集落域
SQ45	IV区-Hグリッド	—	—	土器単体 周溝墓溝内の可能性あり	集落域
SQ46	IV区-Lグリッド	0.5×0.4	円形	弥生中期土器散在	集落域
SQ47	IV区-Uグリッド	—	—	基本層序3層内 土器破片散在	3層混入

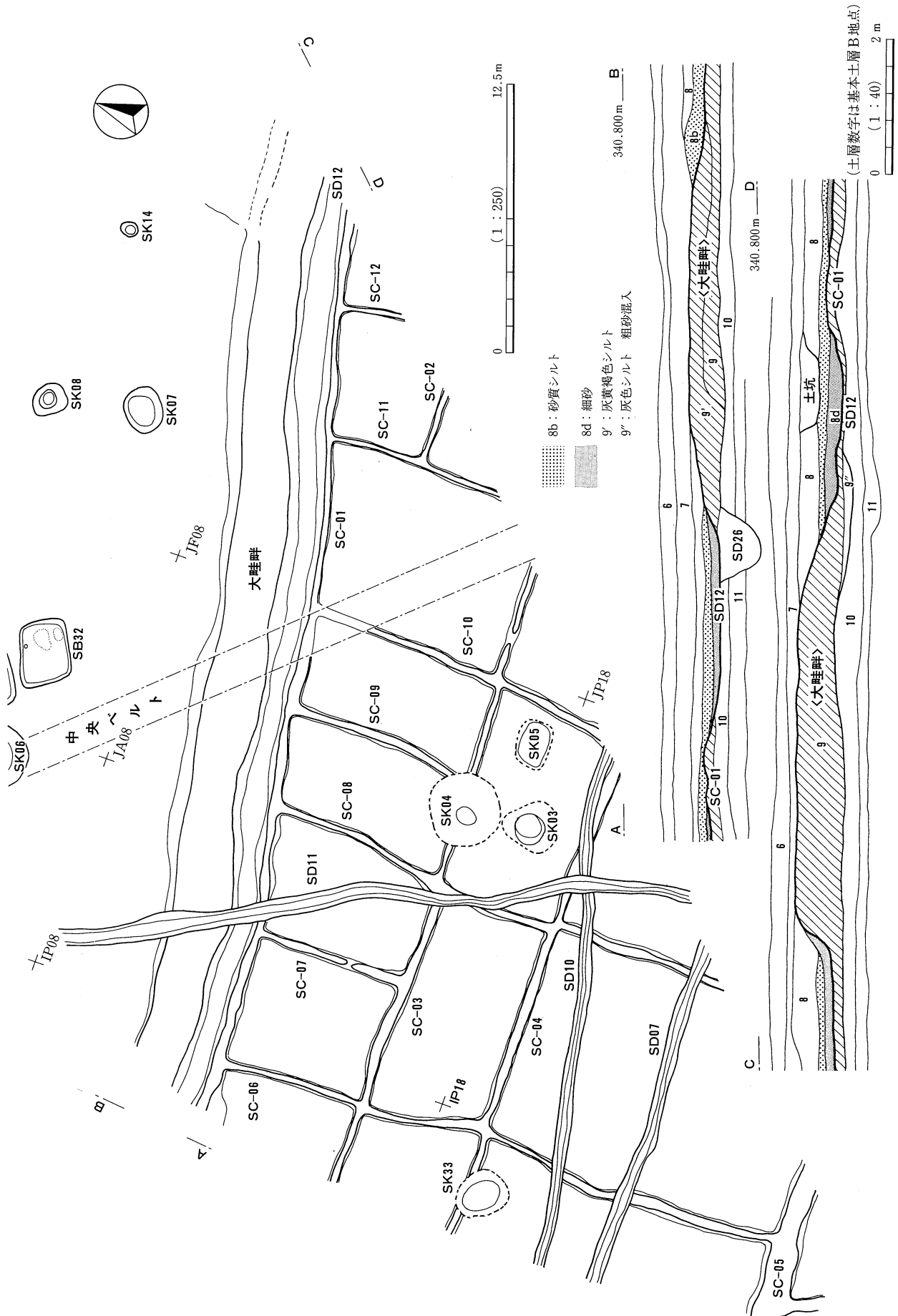
SQ48	IV区-Uグリッド	径0.9	円形	土器破片散在		集落域境
SQ49	IV区-Uグリッド	1.5×1.2	楕円形	炭と土器破片の集中		集落域境
SQ50	IV区-Uグリッド	径0.4	円形	土器破片散在		集落域境
SQ51	IV区-Qグリッド	1.2×1.0	楕円形	土器破片散在	浅い掘り込み	集落域境
SQ52	IV区-Vグリッド	-		土器単体		集落域境
SQ53	IV区-Lグリッド	0.4×0.3	円形	弥生中期土器散在		集落域
SQ54	IV区-Lグリッド	-		土器数個体の集中	周溝墓溝内の可能性あり	集落域
SQ55	IV区-Pグリッド	1.5×1.6	楕円形	土器単体		集落域境
SF01	VII区-Jグリッド	1.5×0.9	長楕円形	焼土と炭の集中	SK09	低地域境
SF02	VII区-Eグリッド	0.5×0.4	楕円形	焼土	①群ピット	低地域境
SF03	VII区-Jグリッド	0.3×0.2	楕円形	焼土	SD28	低地域境
SF101	IV区-Nグリッド	0.6×0.5	楕円形	焼土		集落域境
SF102	IV区-Rグリッド	3.85×3.26	楕円形	焼土と炭の集中/土器破片散在	浅い掘り込み SB106・SK09	集落域境
SF103	VII区-Eグリッド	1.71×1.44	ダルマ形	炭の集中		低地域境
SF104	I区-Uグリッド	0.74×0.48	不正楕円形	焼土	SD47	低地域

6 弥生後期水田址 (VII区-I・J・N・Oグリッド) [第200・201図 PL1・25]

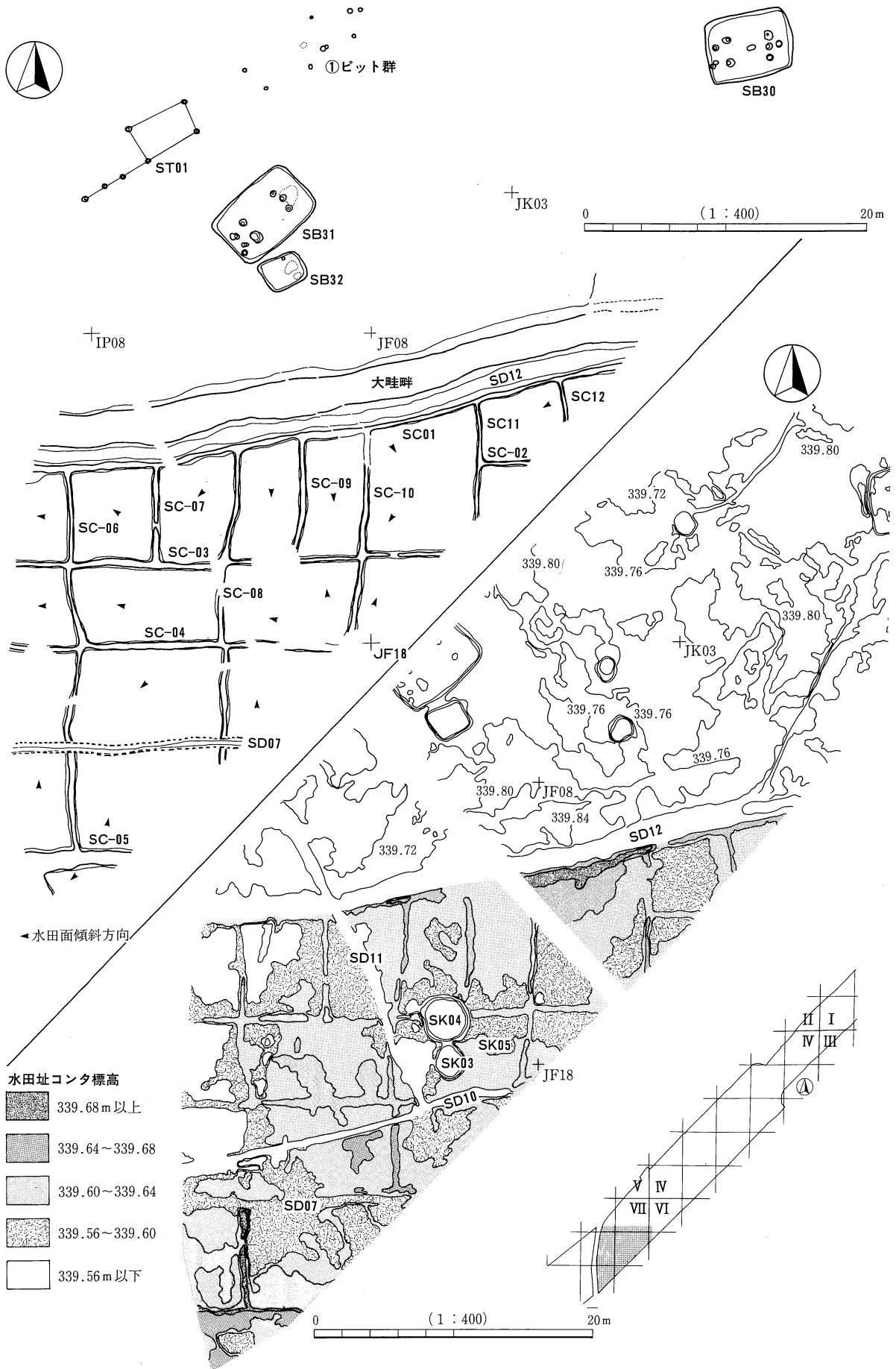
調査区南西の低地である川田条里遺跡との隣接域に位置し、約800㎡の範囲に検出された。水田は更に南西に広がりをもつと推定され、本址と川田条里遺跡との関連が注目される。水田面は厚さ5～8cmの細砂(8d層)に被覆され、畦畔は細砂の被覆のない状況で検出された。この細砂は一部の住居の埋土と共通し洪水砂と認識される。耕作土は灰色ないしは灰黄褐色シルト(9層)である。水田面被覆砂直上(8a～c層)には弥生後期の土器集中遺構、溝(SD7・9・10・11)、8基の井戸などがある。これらは水田遺構の一部を壊した状況にあり、本址の埋没直後は水田として利用されなかったことを示している。また耕作土直下には中期の溝(SD15・24・25・26・28)があり、中期に耕地としての土地利用がはじまっている。

集落域との境界は、東西に走行する溝址SD12とその北側(集落域)に設けられた幅約2mの堤(大畦畔)によって区分され、南西に分布するSB30・31・32の竪穴住居群、掘立柱建物址ST01と近接する。SD12は幅80～130cmあり、北側の大畦畔から20～30cm、南側畦畔から12cm前後の深さとなる。断面形は傾斜の緩いU字形で、埋土下部には水田被覆と同一の砂層が堆積していた。約21mにわたって東西に走行するが傾斜は微妙であり、流水方向は不明である。

水田を区画する畦畔は12条検出され、長方形を基調とする水田面が18区画確認された。畦畔の内訳は東西方向5条、南北方向7条であるが、東西方向に走行する上層の溝址SD07の位置に畦畔が想定され、このSD07を含めた東西畦畔はいずれも等高線に平行して付設されている。東西畦畔5条のうちSC01・03・04は長く連続し、SD07を含めほぼ6.5～7.5mのほぼ等間隔に位置する。SC05は調査区端に位置するため不明瞭であるが幅1.5mの大畦畔であり、東西方向に大区画をつくる畦畔の可能性が高い。南北畦畔は東西畦畔に直交して設けられ、SC06・08・10が長く連続し1条おきに東西畦畔を貫く区画を形づくる。水田面は北北東から南方向へ緩やかに傾斜しており、地形傾斜に添った東西区画を基本とした畦畔の敷設である。この水田区画は弥生時代から古墳時代前期までの特長であり、本址もこれに合致する。ほぼ同時期の集落と水田が隣接して確認できた遺跡では岐阜県今宿遺跡があるが、本遺跡も今宿遺跡例と同様に大畦畔と溝によって境界を設けている。



第200図 弥生後期水田址実測図



第201図 弥生後期水田址実測図及びコンタ図

7 溝址（第9表）

弥生後期から古墳前期に帰属する溝址は各調査区別に37条検出された。37条の内、調査区を隔てて存在する溝はその連続性を明確にできない遺構もあったが、31ないし32条となる。分布は、37条のうち12条が調査区南西側の低地寄りに集中し、集落域内は13条で2条（SD16・20）を除き断片的に走行するものが大半である。低地と集落域の境界に位置する溝址は8条でいずれも北西から南東方向に長く、ほぼ平行した位置関係にある。溝址の時期は検出土層、溝相互もしくは土坑・住居などとの重複関係を考慮すると、少なくとも4段階の地形変化に対応した状況が窺える。ことに低地域のVII区調査区（南西側低地）においては弥生後期から古墳前期に該当する4面の検出面が確認され、①低地水田、②水田埋没後の微低地、③弥生後期から古墳前期にわたる微高地化への2段階の変化といった地形変遷を辿る。東側低地では大規模な自然流路が検出され、この水路の利用が弥生後期に開始されたことが確認された。微高地上では周溝墓群と竪穴住居群にそれぞれ対応する流路があり、検出状況からSD16（02）が集落の溝を改変し墓域を区画する溝であったことが判明した。ただ37条ある溝址の時期細分は同一調査域での区分で、全域における相互の共存関係は微妙な点がある。これを考慮した上で溝址の前後関係を以下の表にまとめた。

第9表 溝址時期別一覧（←は時期幅、→は継続を示す）

時期	遺構状況	集落・墓域	低地境界域	南西側低地（生産域）	東側低地
弥生 中期	・低地－水田 ・微高地－集落		SD43 SD106	SD15・24・25・26 SD27・37・38・39	SD48 自然流路
			↓		↓
弥生 後期	・低地－水田 ・微高地－集落	SD03(17)・18・20	SD40・41 SD107・103・ 104・108	SD12	SD47 SD48 流路改変
	・低地－湿地／ 井戸 ・微高地－集落			SD07・10	
	・低地－湿地／ 遺物集中 ・微高地－集落			SD11・13・14・28・34	
弥生 終末 古墳前期	・低地－水田？ ・微高地－墓	SD16(02)	SD105	SD42	(SD109 ↓ ・110)
古墳前期	生産域？ (水田)	SD21・22・101・23 (102)・46・49	SD01	SD31・32	↓

本節では、弥生後期水田址にともなうSD12、周溝墓に関連したSD16（02）と基本土層6層からの掘り込みで周溝墓の一部を壊している古墳前期に帰属する溝址を除いて扱うが、VII区の南西側低地域の溝については第3節5の遺物集中遺構の項に図を一部掲載した。

(1) 南西低地域の溝址（VII区－I・Jグリッド）

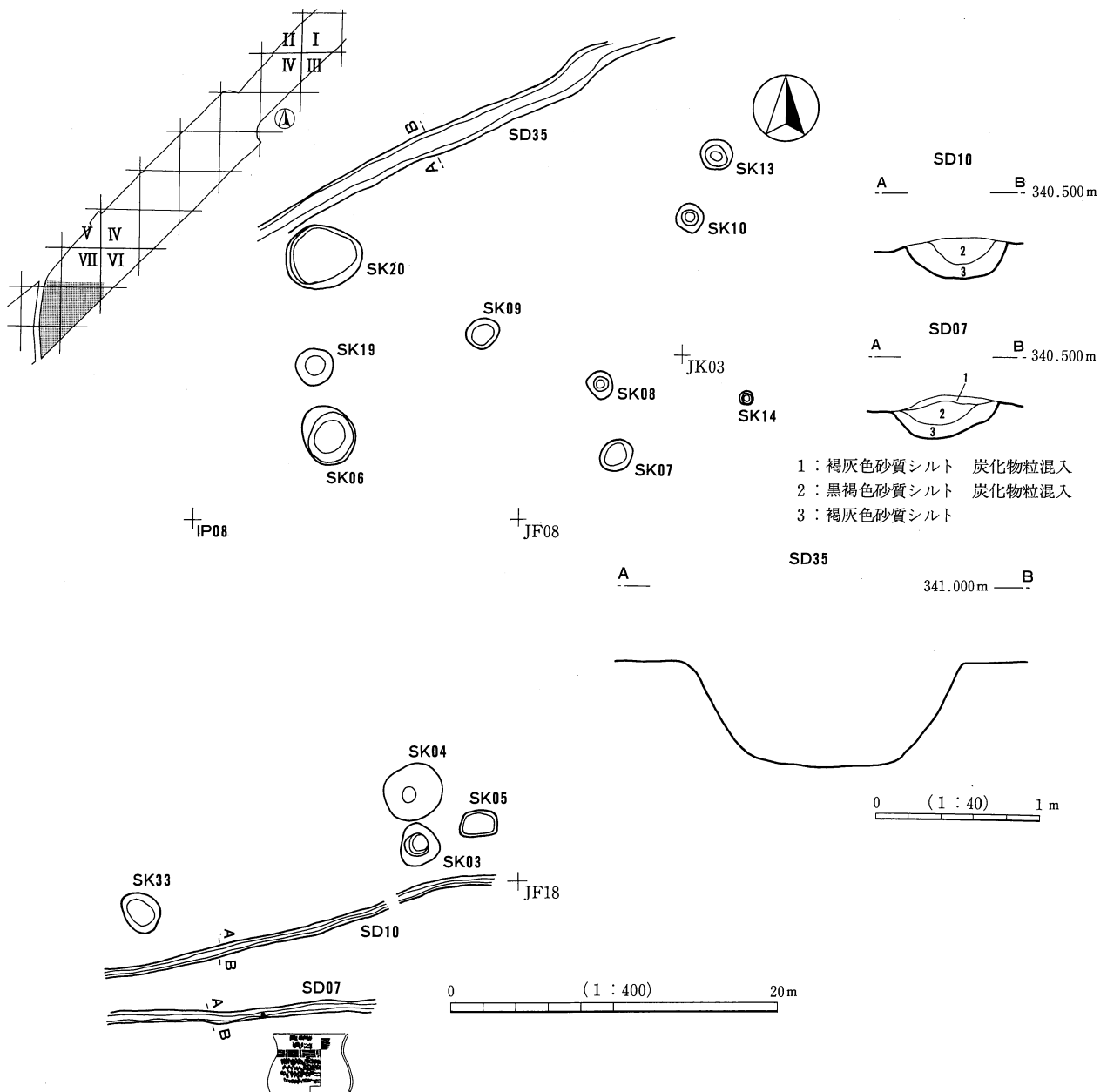
ア. 8層下部検出の溝址 [第187・202図PL25]

弥生後期水田埋没後の8層（8b～8c）内からは複数の井戸址とSD07・10・35が検出された。SD07・10の走行方向は弥生中期から後期水田地形を踏襲する東西方向で、等高線にほぼ平行する。SD35は微地形を区分する大規模な溝で南西から北東方向に走行し、ほぼ同位置に古墳時代後期までの溝が踏襲されてい

る状況が窺えた。

SD07は全長17.3mで幅30~90cm、深さ28cm、SD10は上層のSD11と重複し、全長24.5m、幅46~64cm、深さ23cmの規模である。埋土は両者とも炭化物粒を含んだ褐灰色から黒褐色砂質シルトで、双方から出土した甕の土器片が接合復元(1)された。

SD35は上層SD28・32・34と重複し調査区法断面から新旧関係を確認したが、同一方向に走行する4条の溝から出土した遺物の帰属遺構は曖昧となった。SD35は西南西から東北東方向へやや蛇行形状で29m検出された。幅は1.5~1.8m、深さ0.5~0.7mを有し、底面は平坦で逆台形の断面形を呈する。埋土は黒褐色粘土もしくはシルトで、上層に炭化物粒の混入が認められた。SD35埋没後に規模を同じくする溝がSD34→SD42→SD32→SD29と古墳時代後期まで続くことが確認され、本址の位置が地形利用上重要な意味をもつことが推測される。



第202図 VII区南西低地域8層下部溝址全体図・断面図

イ. 8層上部検出の溝址 [第187図PL1・25]

8層(8a~8b)上面からは多数の遺物が出土し、土器、焼土・炭化物層の集中遺構が37カ所で検出された。低地と微高地の区分が明確になった段階であり、本検出面からは微高地縁辺に平行する溝が4条、微高地から低地に至る溝が1条ある。SD11は北北西から南方向に緩やかな傾斜をもち微高地から低地に35mにわたって走行する。幅は45~130cm、深さ20~26cmの規模で、低地側がやや深くなりSD10と後期水田面を壊している。埋土は褐灰色砂質シルトで炭化物ブロックを混入する。SD28は東西方向に約10.5m走行しSK19の一部を壊している。SD28延長上にはSD13・14が位置しどちらかに連続する可能性がある。溝幅は80cm、検出面から15cmの深さの断面U字形を呈する。埋土は灰色シルトで、西端の溝底には炭化物の集中があり土器片が数点出土した。SD13・14は重複する位置関係にあるが、調査段階で重複部のSD14が未検出であったため両者の関係が不明となるがほぼ同時に同様の性格を有して機能していたと捉えられる。SD13は低地側(南方向)に膨らんだ弧を描いて北東から南西に11.6m走行し、検出面からの幅40cm、深さ5cmであった。SD14は微高地側(北方向)に膨らんだ弧を描いて北東から南西に22.8m走行することが確認され、検出面からの幅35cm、深さ4cmであったが、調査区法面では深さ20cmで埋土上部に細砂層が確認された。SD13・14・28は微高地を東西に区画するSD34・103の大溝から低地方向へ分岐した溝址と考えられる。

SD34は断面V字に近い台形を呈する大形の溝址で下層SD35とほぼ同一規模・形状である。本址はSD35の掘り直しと捉えられ、埋土が砂質であることから流水があったものと判断される。

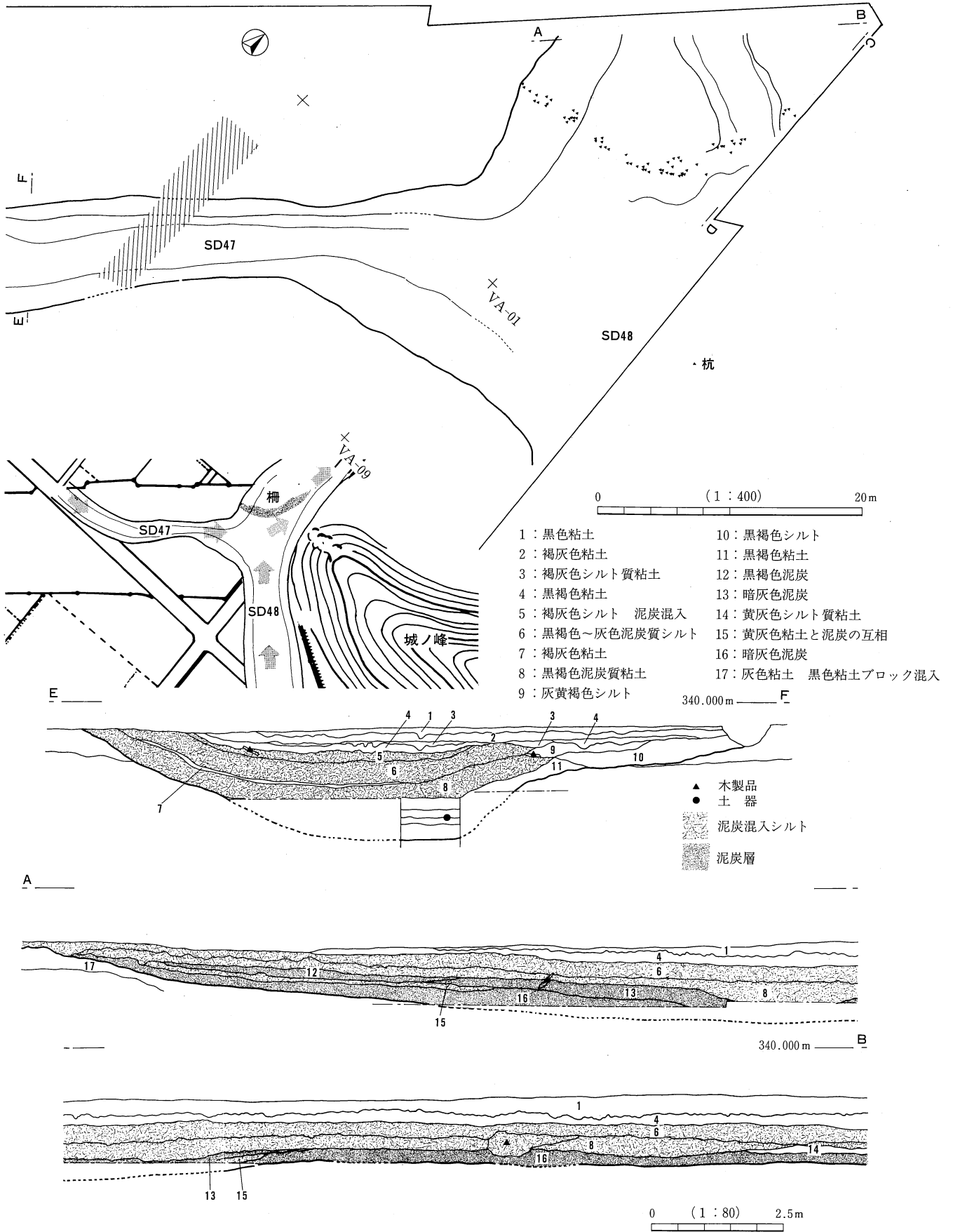
(2) 東側低地域の溝址 (I区P・U・Qグリッド) [第203・204図PL27・40・80~83・85・86・88・89]

調査区北東端の城ノ峰山裾の低地に位置する。SD48は大半が調査区外に含まれ、加えて本址を含む低地は泥炭質の軟弱地盤で、発掘中の出水や土砂崩落があり断片的な調査となった。このためSD47とSD48の合流部や最下部の状況、SD48の規模等を完全に把握することができなかった。

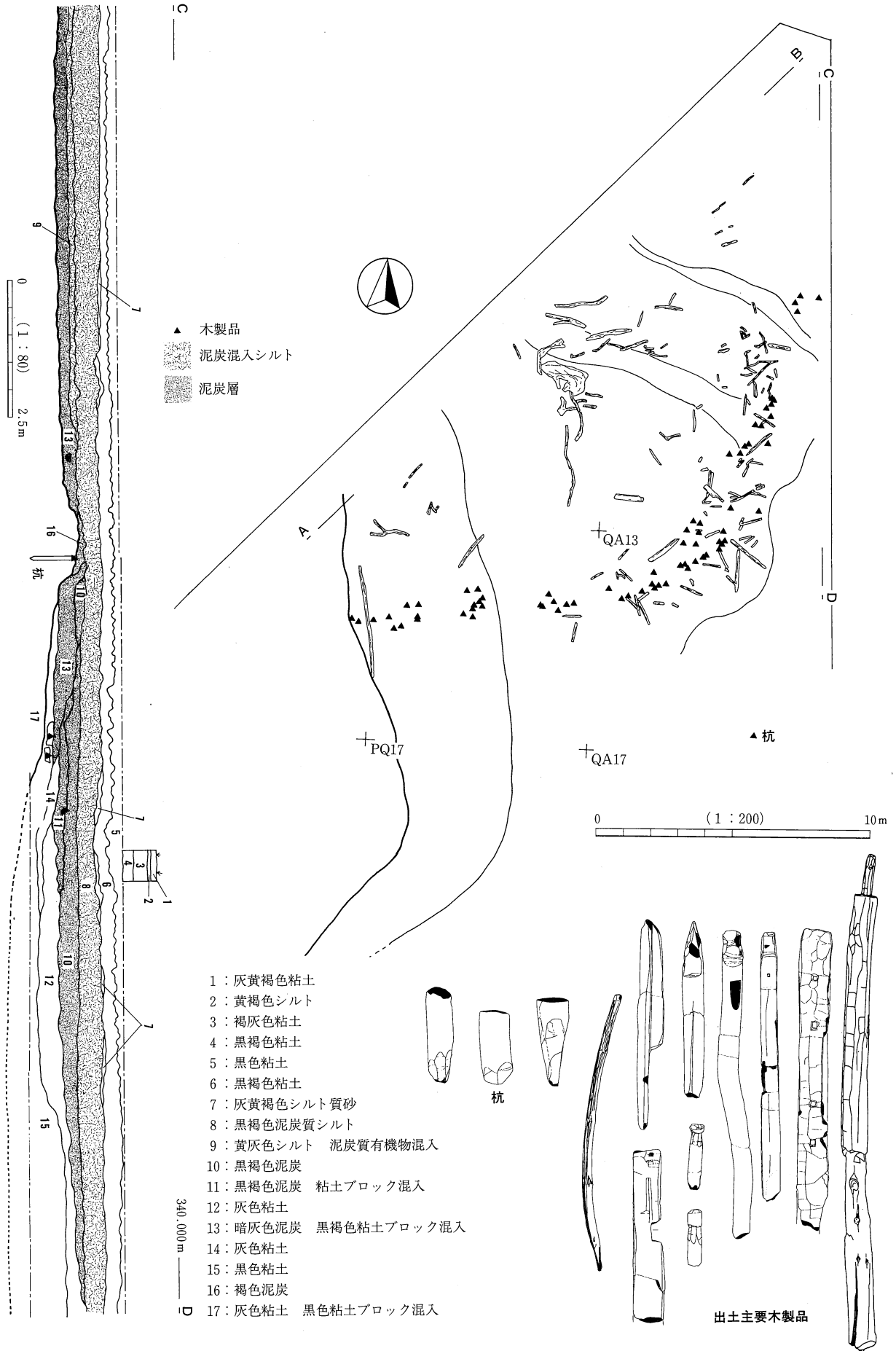
SD47は西側に生活用道路があり調査範囲が限定されたが、南西から北東に直線的に走行する状況で約20m検出され、トレンチ調査により更に北西に伸びることを確認した。このトレンチ調査により本址がII区Yグリッドでは西から東に走行し、II区Uグリッドで北東方向へ湾曲する流路となることが判明した。溝幅6.0~7.8m、深さ1.4mで、南西側の壁が緩やかな傾斜をとる逆台形状の断面となる。埋土は腐食植物を含む泥炭もしくは泥炭質の粘土・シルトで、流水と滞水が繰り返され最終的には滞水環境であったものと捉えられる。遺物は弥生後期の土器片数点が下部から出土し、木片が数点あったほかにはない。

SD48の全容は不明であるが、航空写真等により南東方向から城ノ峰を巻く形状で大規模な流路があることが確認されており、本址はこの自然流路に該当するものと判断される。流路中央部及び東岸は道路下のため未調査であり本址の規模・起源は不明であるが、南西側の掘り込みは本遺跡の縄文晩期から弥生後期面を形成した灰色シルトであることから、遡っても縄文後期から晩期頃に形状が確定したことが予想される。SD47はSD48と合流し北側には大規模な杭列による柵(しがらみ)が検出された。70本余り出土した杭には大形建築部材の転用材や丸木材が用いられ、西から北へ外湾形状で列をなしている。未調査区へと連続するため完全な規模は不明となるが、ほぼ本調査域で収まると考えられる。柵及び湾曲内部の北西には大形建築材等の木製品や自然木が横木材としてランダムに出土した。出土木材には建築部材のほかに折損した丸木弓があり、溝内からは弥生後期の土器小片が数点出土した。

柵(杭列)はSD48の流水方向に直面し、SD47の流水方向に平行する位置にある。流路内に設けられた柵にはSD47北側微高地の護岸としての役割と流水を東方向へ促す目的が考えられ、治水施設であったと捉えられる。この柵の時期は杭の素材、加工状況や出土木製品の特長から弥生後期となる。



第203図 SD47・48実測図及び流路模式図



第204図 SD47・48柵実測図及び出土遺物状況図

東側低地からはほかにSD109・110の2条の溝址が検出された。SD109は幅20～28cm、SD110は40～110cmで両者とも深さ5cm程で北西から南東方向へ約8m走行する。断面は椀型で遺物の出土はない。これらの溝は自然流路としての浅い窪みとして捉えられ、帰属時期は周囲の遺物より弥生時代から平安時代までのなかで考えられる。

(3) 集落と低地境界域の溝址

(IV区-L・M・N・P・Q・U、V区-Y、VI区-A、VII区-Eグリッド) [第205～209図PL1・26・27・40]

IV区竪穴住居群の南西からVI・VII区の溝址群までの約100mの干渉地には2基の井戸を含む数基の土坑と遺物集中遺構が散在する。集落内に位置する溝址は2条で、1条(SD20)は竪穴住居群内を東西に走行し、1条(SD17-SD03)は集落から低地へ長く連続する。低地寄りには北西から南東方向にほぼ平行して走行する溝が3条、主流路から分岐した小規模な溝址が3条検出された。本領域の溝址と前述したVII区低地域の溝址との時期対応関係については不明である。

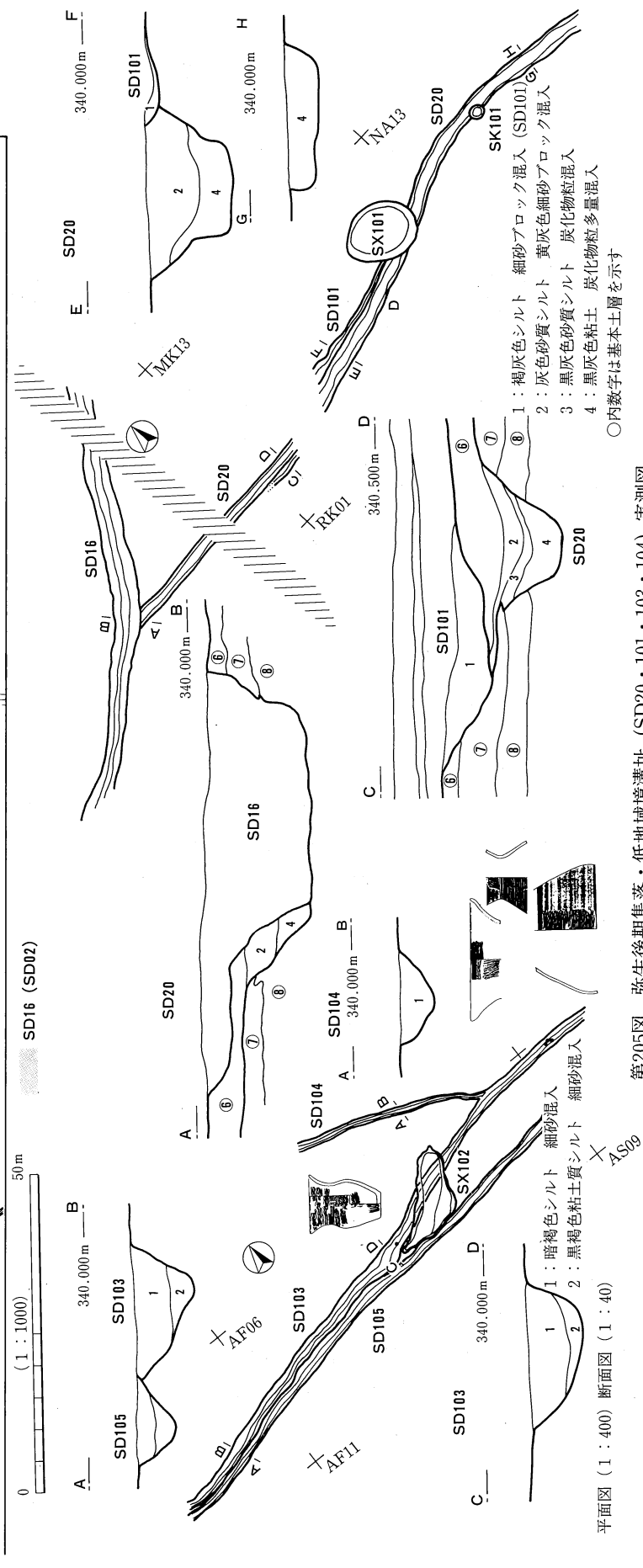
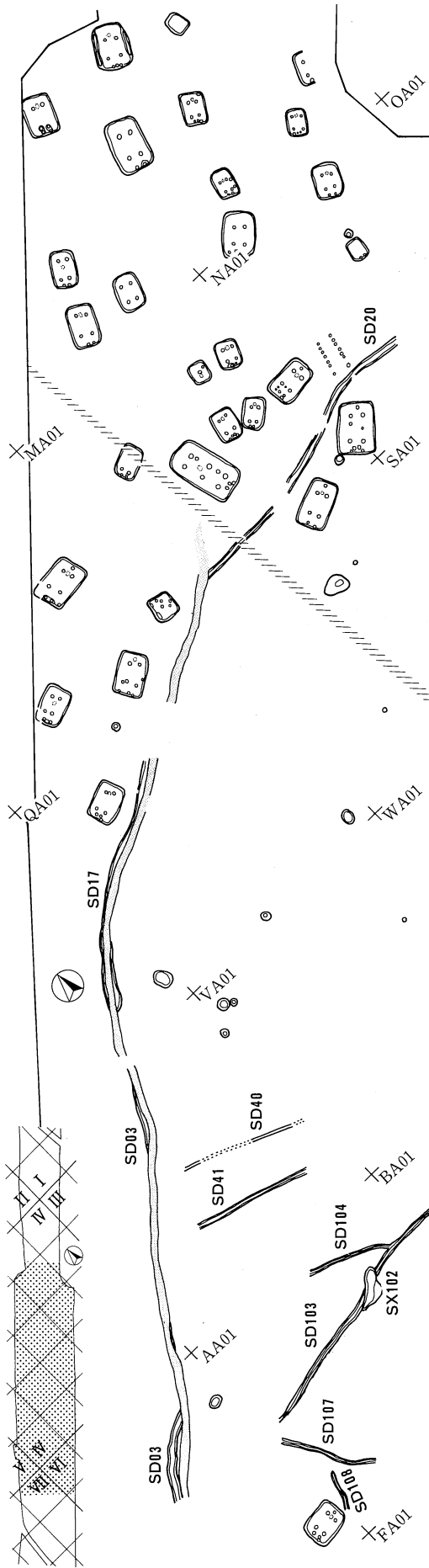
SD20は上層で検出された古墳前期の溝SD101がほぼ同じ流路をとるため壁の一部を欠き、また調査年次の異なる調査区に及んだため排水施設付設により一部途切れるが、深い掘り込みにより形状はほぼ把握された。東端はSD16に切られ西端は調査区外に至る全長約50mにわたって検出され、北側にやや脹らんで蛇行する。規模は幅95～106cm、検出面から最深50cmで断面は底面が平坦なV字に近い逆台形となる。埋土は上層(1～3層)が細砂を含むシルトで、下層(4層)が炭化物粒子を多量に含んだ粘土であり明確に区分された。この埋土の違いは、上層が流水による堆積層、下層が構築以来の継続利用を示す古段階の埋土と捉えられ、本址が長期間にわたって存続していたものと解釈される。傾斜は東端下部が未調査となったが、SD16との交差部である西から東方向へ緩く勾配をとる。溝内からは数点の弥生後期土器片が出土した。

SD03は調査区北西側に位置し、VII区E・V区Y・IV区Uグリッドで断続的に検出され、SD17はIV区P・Qグリッドで42mにわたって検出された。SD03はSD01とSD02、SD17はSD16によって大半を削平されたため規模・形状等の詳細は不明となったが、調査区を隔てた2条の溝は連続走行する同一の溝址であると捉えた。規模は幅1.2～1.6m、検出面から40cmの深さで、断面は壁が直立気味となる鍋底形状である。埋土は砂質の暗褐色シルトで、SD16(02)の下層埋土となる黒灰色粘土と明瞭に区分された。本址からは複数の土器片が出土したが、上層遺構との重複により帰属遺物は明確ではない。SD03及びSD17の勾配は断面より南西から北東方向に傾斜していると捉えられ、下層埋土が同一となるSD20に連続する可能性が高い。SD03・17・20が同一の溝とするとSB105・106を除いた竪穴住居群と低地を区画する大規模な溝として機能したと考えられる。

SD40・41は西北西から南東方向に走行傾斜し、両者は8m程隔てて位置する。SD40は幅20cmで、深さ5～8cmと浅く断続的に約20mにわたって検出された。北西端では上層溝址SD02(16)に分断され未検出の部分もあるが、SD03(17)と合流・分岐した可能性が高い。SD41は幅40～60cm、深さ8～10cmでSD40より明瞭に検出され、断面は壁傾斜の緩いU字形を呈する。埋土は両者とも暗褐色シルト質の自然堆積層である。

SD103は後期終末のSD105とSX102と重複し一部を欠き、西から東北東方向に緩く蛇行し40.8m走行傾斜する。規模は検出面で幅20～50cm、深さ30cmで、断面は壁傾斜の緩いU字形を呈する。埋土はシルト質粘土の自然堆積層であり、1層下部からは比較的多く土器片が採取された。またSX102との重複地点付近から東にかけて土器物集中がみられ、ほぼ完存する甕と大型壺が出土した。

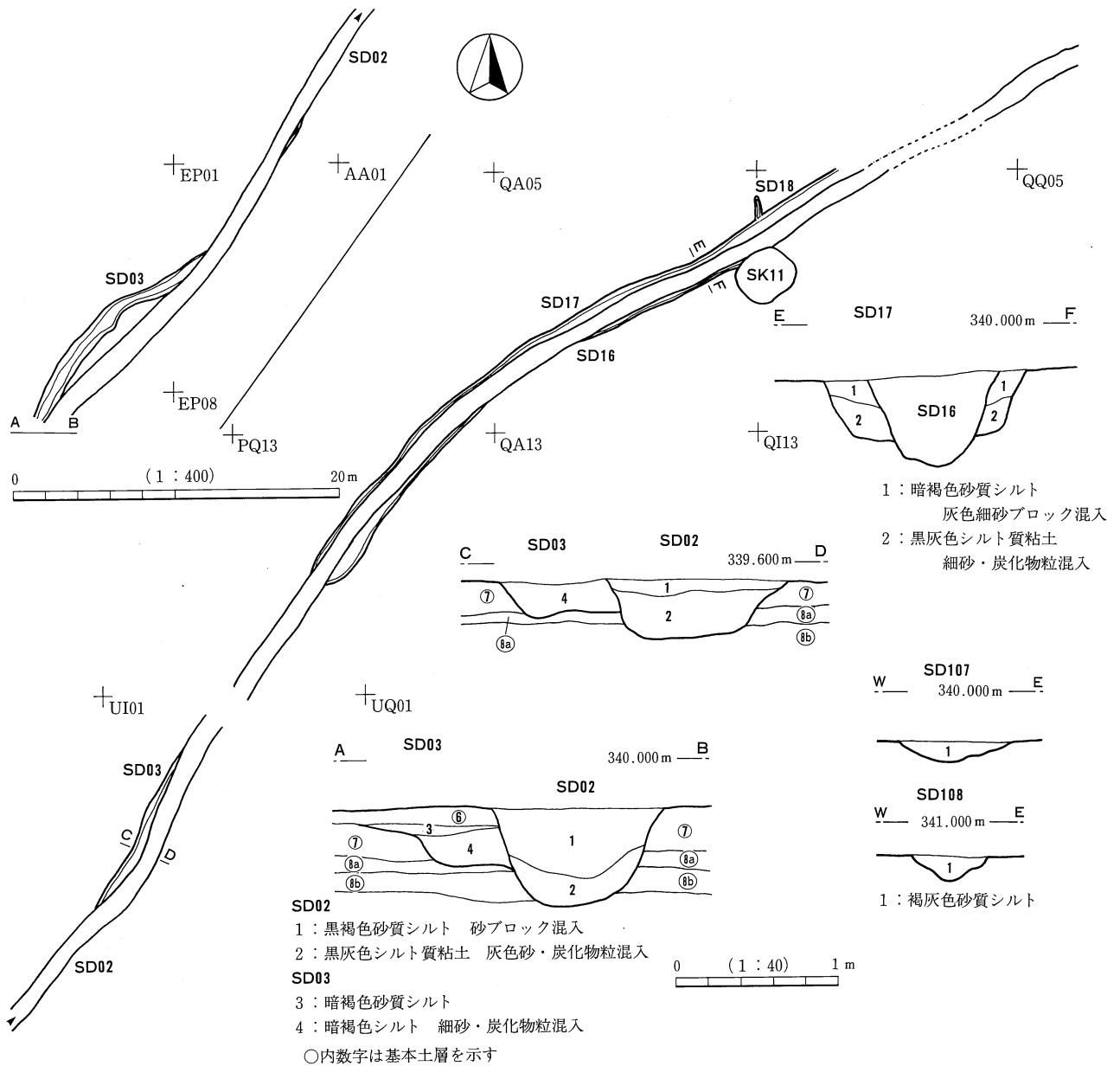
SD104はSD103東寄りに合流する溝址であり、西北西から南東方向に12.8m走行傾斜し、SD41から14



- 1 : 褐灰色シルト 細砂ブロック混入 (SD101)
 - 2 : 灰色砂質シルト 黄灰色細砂ブロック混入
 - 3 : 黒灰色砂質シルト 炭化物粒混入
 - 4 : 黒灰色粘土 炭化物粒多量混入
- 内数字は基本土層を示す

第205図 弥生後期集落・低地域境溝址 (SD20・101・103・104) 実測図

平面図 (1:400) 断面図 (1:40)



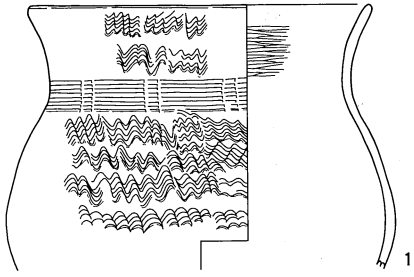
第206図 SD03・17実測図

m程南西に位置する。幅は8～15cm、深さ5cmと浅く、断面は緩いU字形で、埋土は暗褐色シルト質の自然堆積層となり、SD40・41と規模・形状・埋土とも共通する。溝内からは土器片が少量出土した。

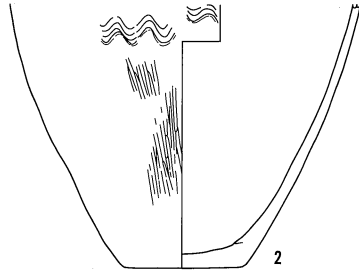
SD107・108は西端に位置し、低地に直交する方向に走行する小規模な溝址である。SD107は中期～後期の溝址SD106と交差し一部を切り、北西から南東方向に緩く蛇行し16.5m走行傾斜する。幅は40～50cm、深さ10～15cmで、埋土内から土器片が少量出土した。埋土は黒褐色砂質シルトで土器片が少量出土した。SD107は埋土や遺物出土の状況からSD103が分岐した溝と考えられる。

SD108は、北北東から南南西に走行傾斜し約5mにわたって検出された。幅は約30～40cm、深さ20cm、断面は緩いU字形である。埋土は灰色砂質シルトで、本址西側VII区8層上部のSD13・14と共通し、同一の性格をもつと考えられる。

SD07・10



1



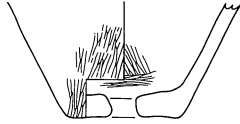
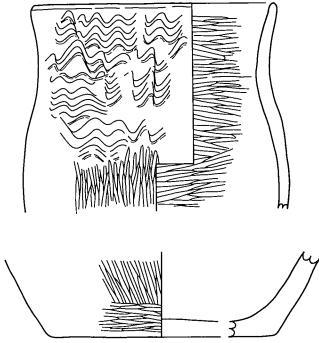
2

SD28



0 (1:3) 5cm

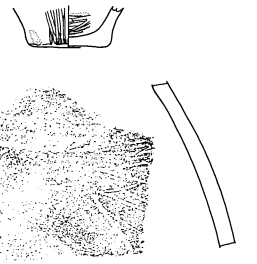
SD35



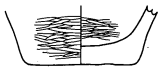
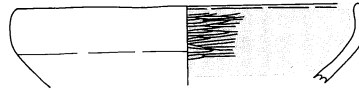
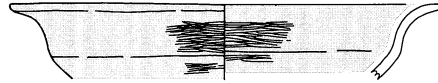
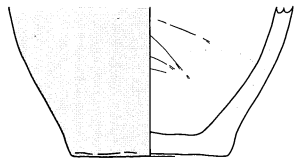
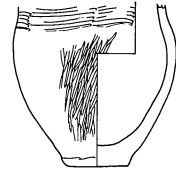
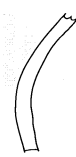
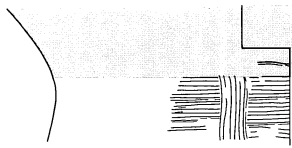
0 (1:4) 10cm



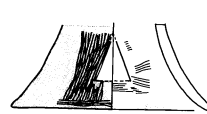
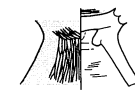
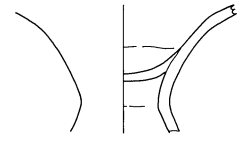
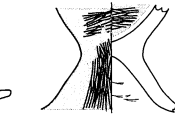
SD34



SD34・35 (SD32・42重複地点)



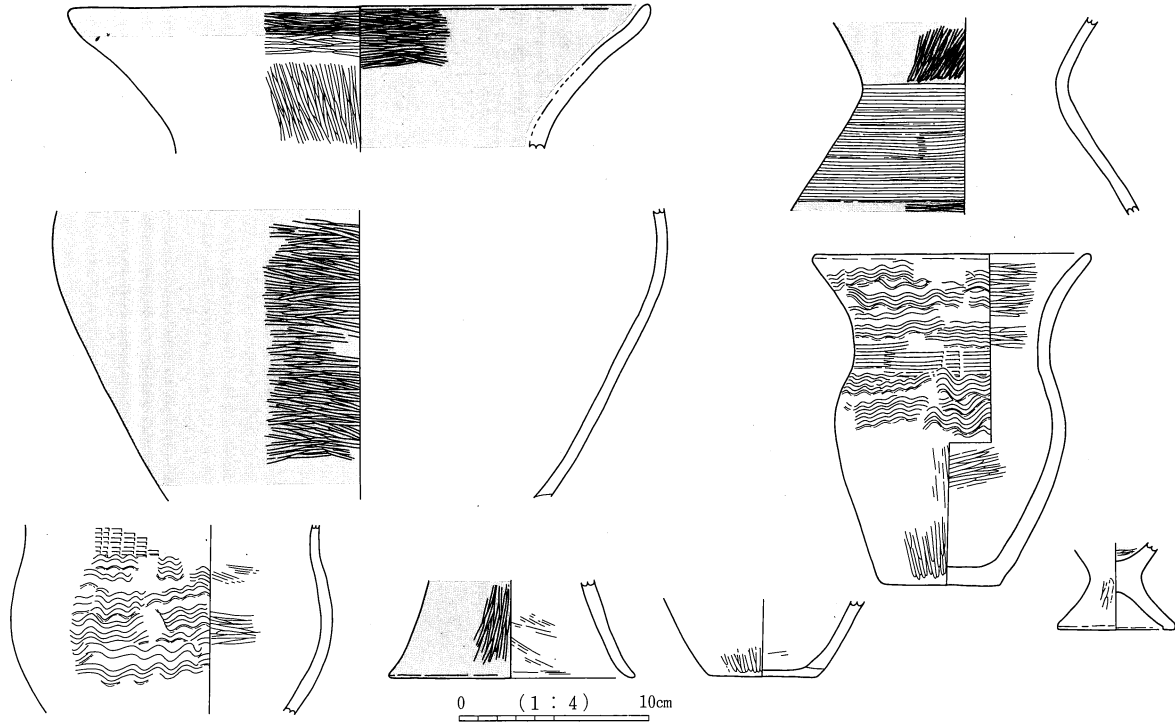
0 (1:4) 10cm



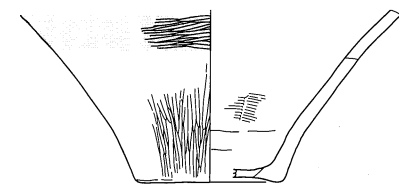
0 (1:3) 5cm

第207図 SD07・10・28・32・34・35出土土器実測図・拓影

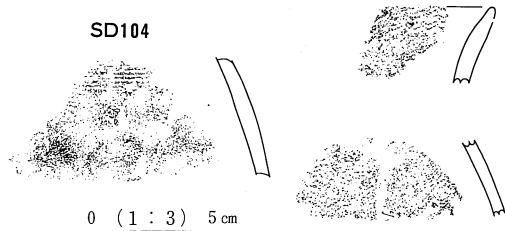
SD103



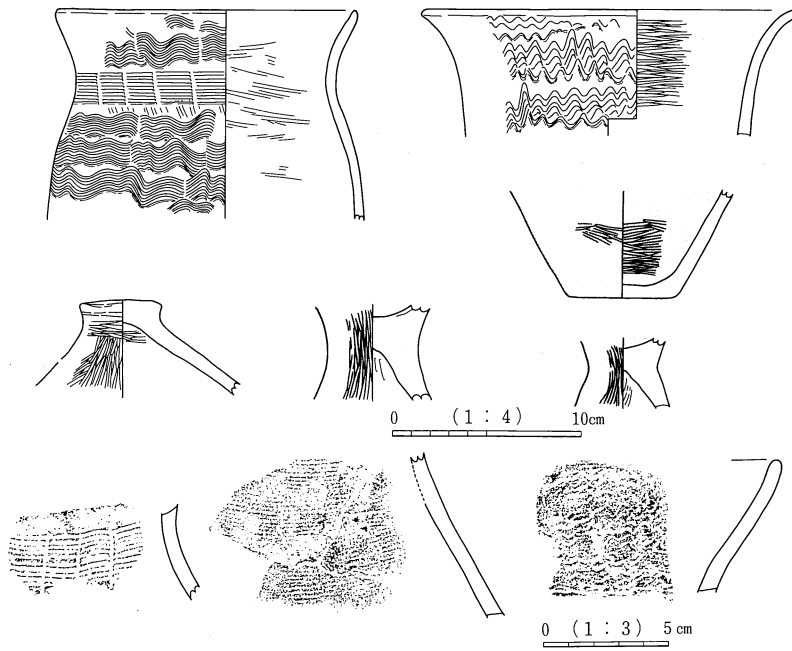
SD107



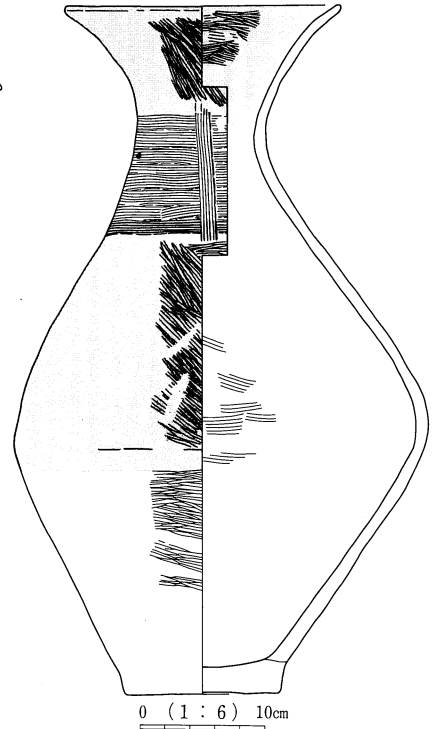
SD104



SD03

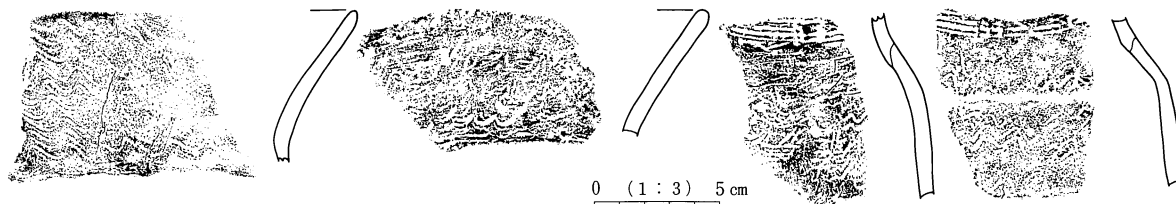


SD103

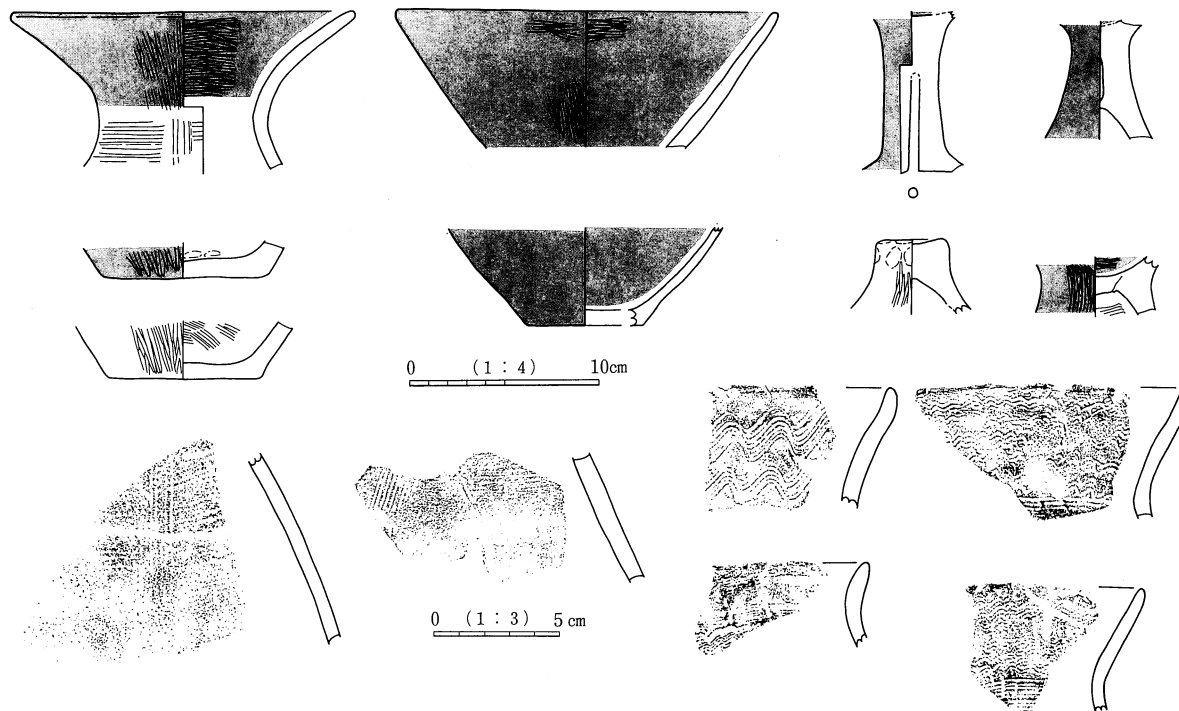


第208図 SD03・103・104・107出土土器実測図・拓影

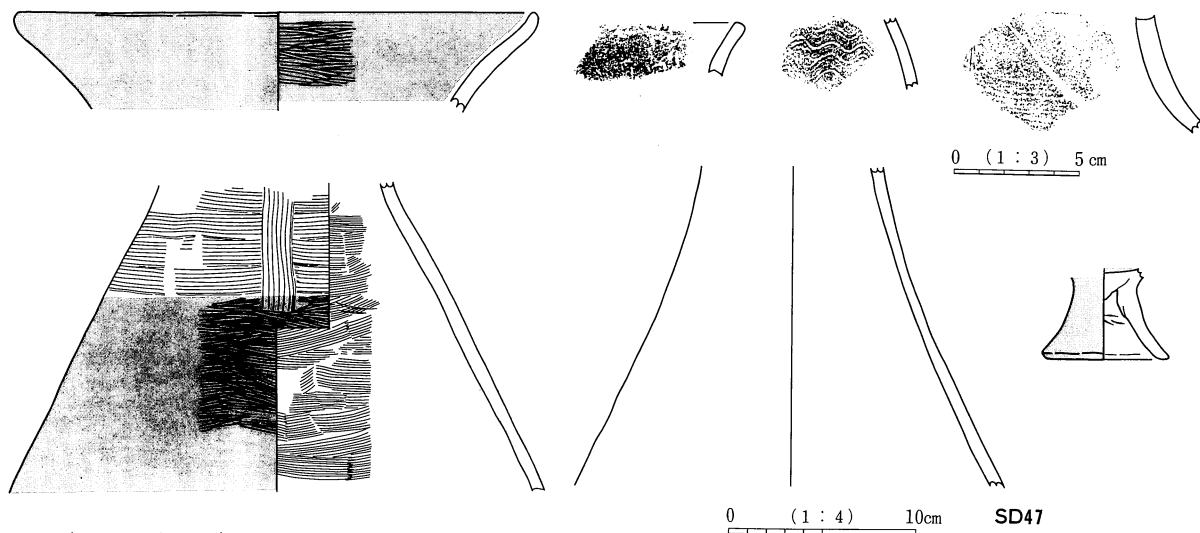
SD03



SD17



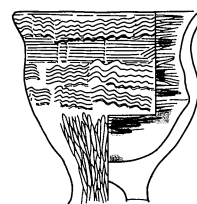
SD20



SD20 (SD101重複地点)



SD47



第209図 SD03・17・20・47出土土器実測図・拓影

第4節 弥生時代後期終末～古墳時代前期

1 周溝墓

調査区北西のIV区L・Mグリッド内では弥生後期竪穴住居群検出の上層（6層下部～7層）面から7基の周溝墓が確認され、同区E・Iグリッドでは6基の周溝墓が住居群と同一の7～8層検出面で確認された。周溝墓はいくつかの遺構と重複し、弥生後期の住居・土坑を壊した状態で検出され、集落に後続する遺構であることは、周溝内から多量に出土した土器群の型式からも追証され、弥生時代後期終末から古墳時代前期前半にかけて本遺跡の微高地が墓域としてのみ利用されたことが明確となった。

周溝墓は15基確認されたが、遺物集中遺構の検討（第3章第2節4）や分布からIV区西側には数基あったことが予想される。分布は、SD16に区画された北西側に周溝を共有する墓群領域があり9基が集中し、SD16の区画外にあたる南東には連なる小形の方形周溝墓2基と大形の周溝墓が4基点在する。周溝形状は円形を基調とした隅丸方形、方形の2種があり、陸橋（以下ブリッジ）の位置・方向は多様であった。主体部を残す遺構はなく構造は不明となったが、周溝内からはまとめて複数の完形土器が出土し、周溝内土壌と認識された。出土遺物は小形の壺・高杯を主とする多量の完形土器で特殊遺物はないが、土器は本時期の良好な一括資料となる。土器量はSD16区画内の周溝墓は多量で、区画外の周溝墓からは少量であり、構築時期差と埋葬者の性格の違いが考慮される。またSM14からは本遺跡内では数少ない古墳前期の土器が出土した。

(1) IV区L・Mグリッド内の周溝墓群 [第210図, PL22]

調査区中央部の北西寄りに位置し、溝址SD16に区画された状態で、北西域に隅丸方形の周溝墓が6基と同形状に復元される周溝の一部が3基検出された。周溝墓群は南北に走行する現用水路、古墳前期溝址SD49によって一部壊され、また後世の耕作によって遺構上面が削平されている。確認面は黒褐色シルト層（基本土層6・7層）で、周溝内埋土（黒褐色粘土）との土質差は微妙であり、下層住居との重複においても断面から周溝と判断した遺構があった。周溝を共有する複数の周溝墓の在り方と上部削平の状況から本調査地点が後期終末にまとまりをもった周溝墓群の領域であったものと推測され、木棺が検出されたSK59も本領域に関係する可能性がある。

SM01 [第211・217図, PL23・41・42]

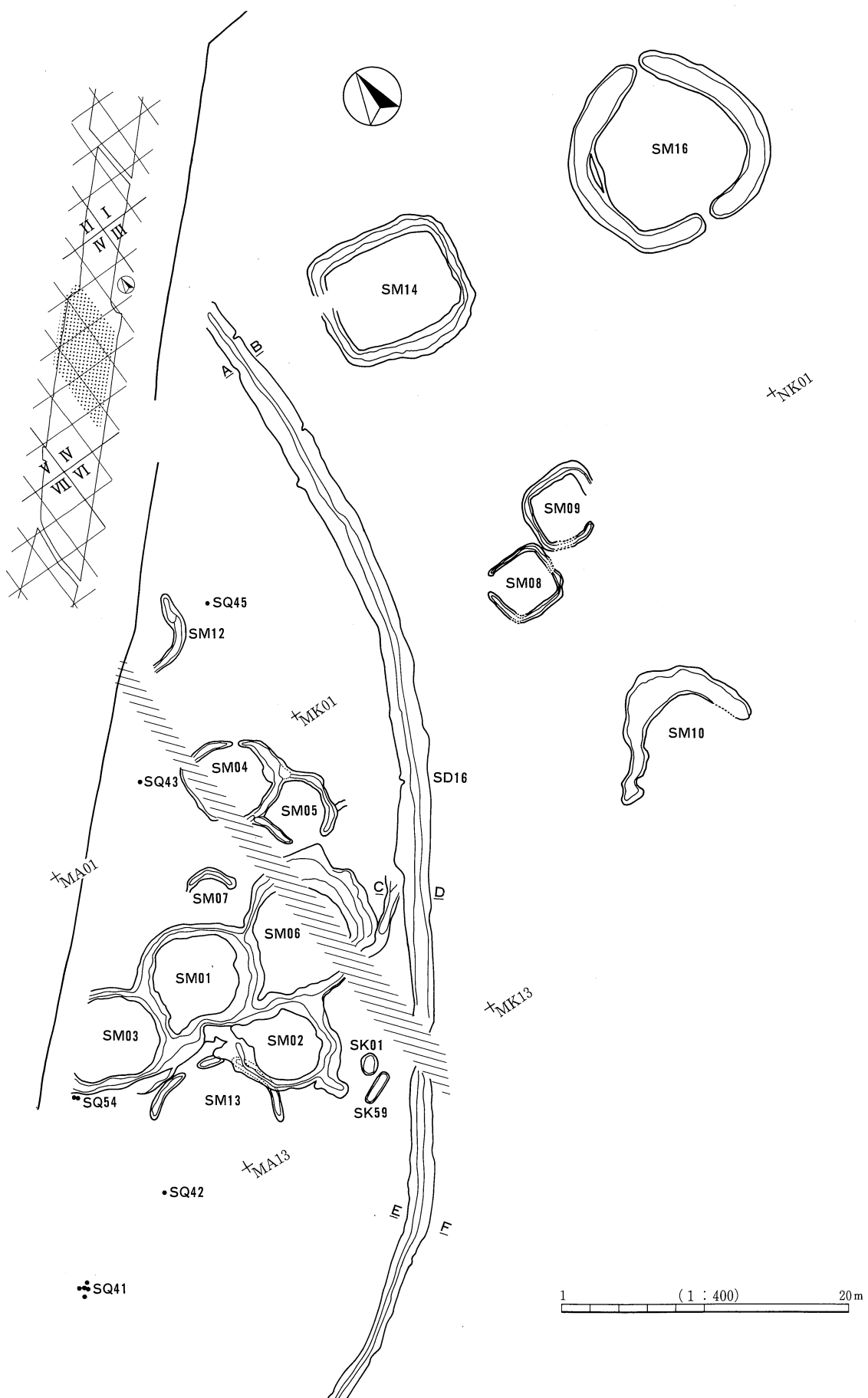
SM02・03・06と周溝を共有し、周溝内辺5.8×5.4mで南西隅に約1mの舌状突出部がある。周溝幅は0.6～1.2mである。周溝内には3カ所に土器集中があり、壺・鉢・甕が横位の状態で出土した。

SM02 [第212・217・218図, PL23・42]

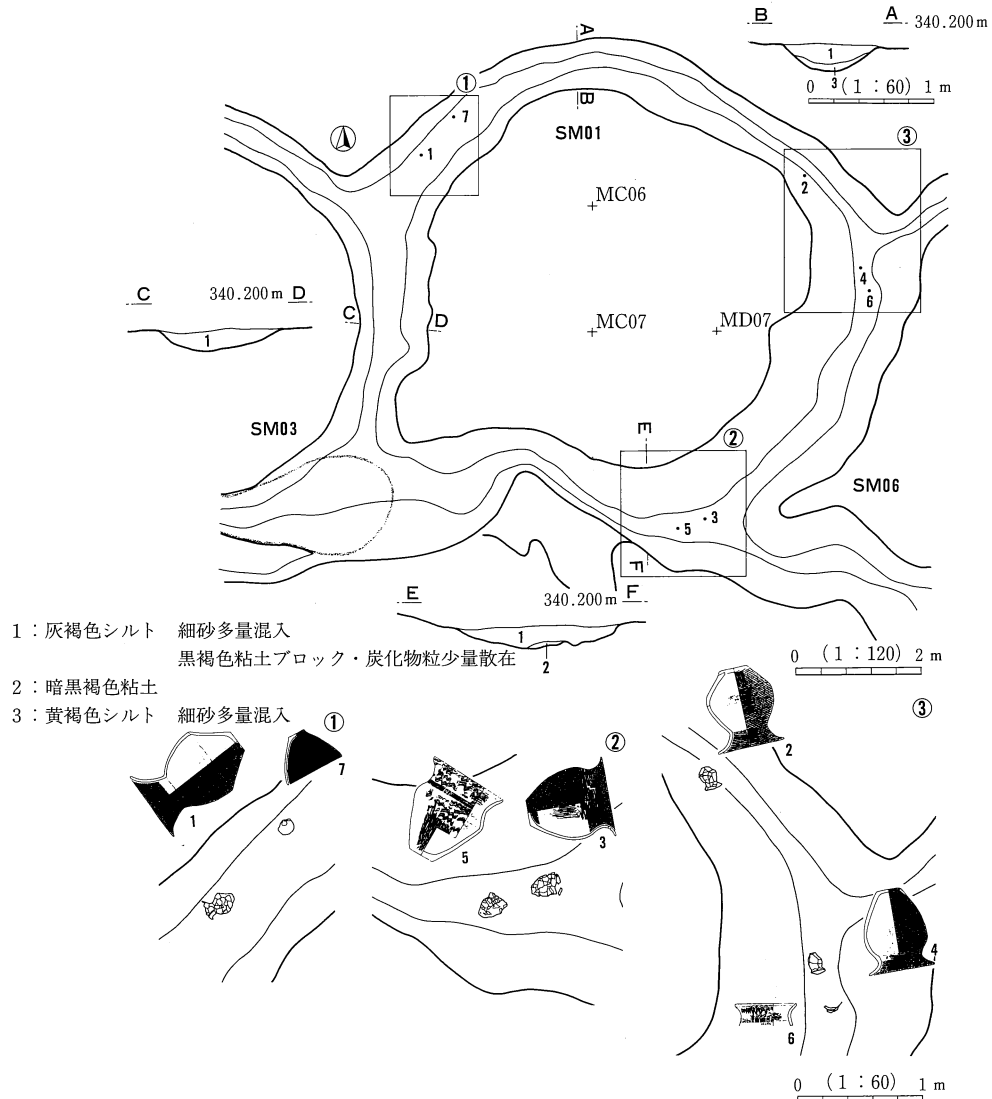
SM01・06・13と周溝を共有し、周溝内辺6.4×4.6mで、北西コーナーに約2mの突出部がある。周溝幅は0.5～1.2mでSM01・06側が広く、SM06側の周溝内に9個体の土器が出土した。本址出土土器は破砕が著しく、他の周溝墓内に見られた方向性を一致した横位の出土状況は見られなかった。

SM03 [第212・220図, PL23・43]

本址北西部が調査区外に至るため全容は不明であるが、周溝内辺5.6mの規模を有する隅丸方形と推定



第210図 周溝墓分布図



第211図 SM01実測図及び出土遺物状況図

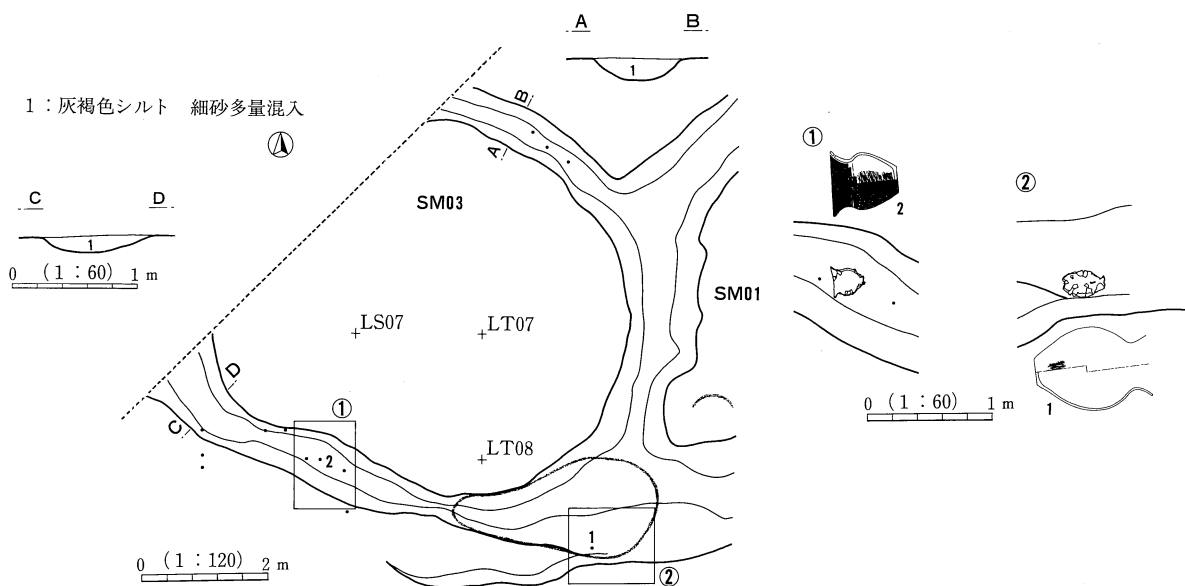
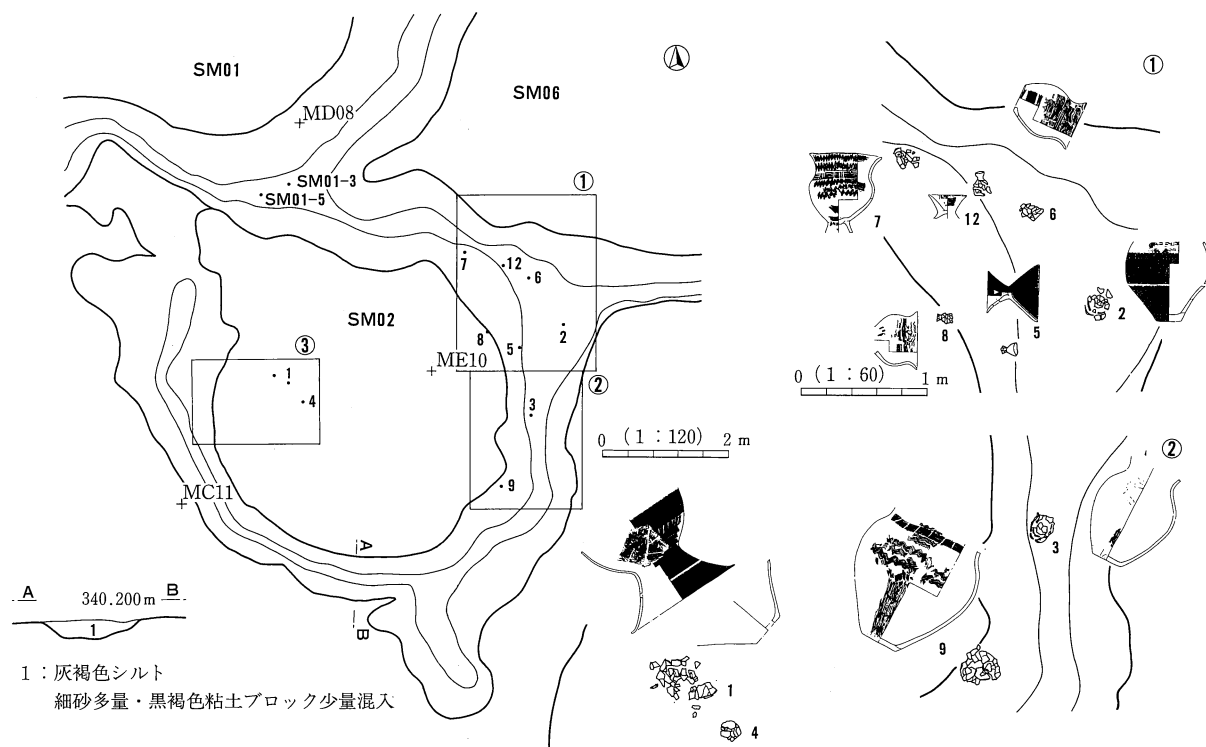
される。SM01と周溝を共有し、土器集中遺構SQ54と近接する。SQ54から更に南西にSQ41があり本址からSQ41まで数基の周溝墓が連続していた可能性がある。周溝幅は0.6~1.0mであったが、SM13と接する南東部が幅広となり、周溝低面に2.8×1.8mの卵形の浅い掘り込みが検出された。この土坑からは壺1点が横位で出土した。

SM04 [第213・218図, PL23・44・45]

現代の用水路によって西側周溝部の一部を欠くが規模は把握された。SM05と周溝を共有し、周溝内辺6.2mで南東部に1カ所のブリッジがある。東側周溝内に1.8×0.8mの長方形土坑が確認され、土坑上層からは7個体の完存する土器が出土した。この土坑内の土器は全て北方向に口縁を向けた横位で出土し、1の台付き壺の口縁内に2の壺底部が差し込まれた状況が確認された。

SM05 [第213・221図, PL23・45]

SM04・06と周溝を共有し、本址西側には未検出であった周溝墓があった周溝形状となる。周溝内辺3.6mで南西コーナーが途切れるがブリッジかは削平により不明である。周溝幅は0.5~0.8mで東西の周溝内に横位で完存する壺が2個体出土した。本址はSM04側の周溝形状がやや内側に膨らむことと小規模

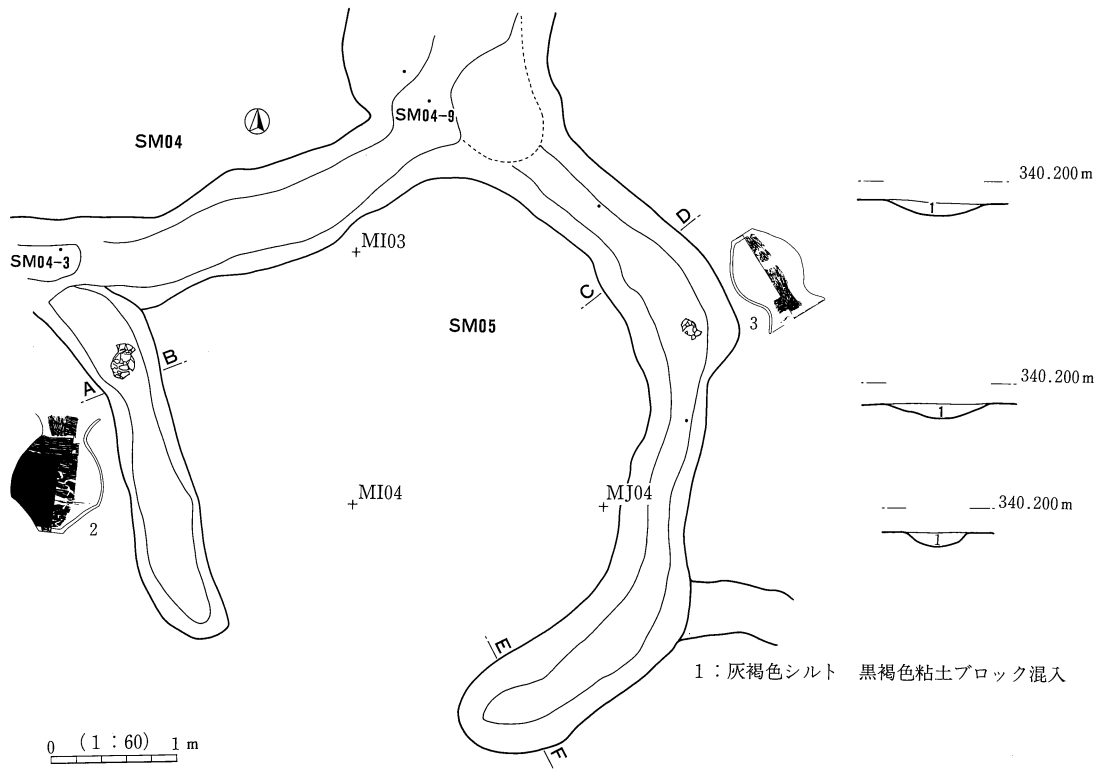
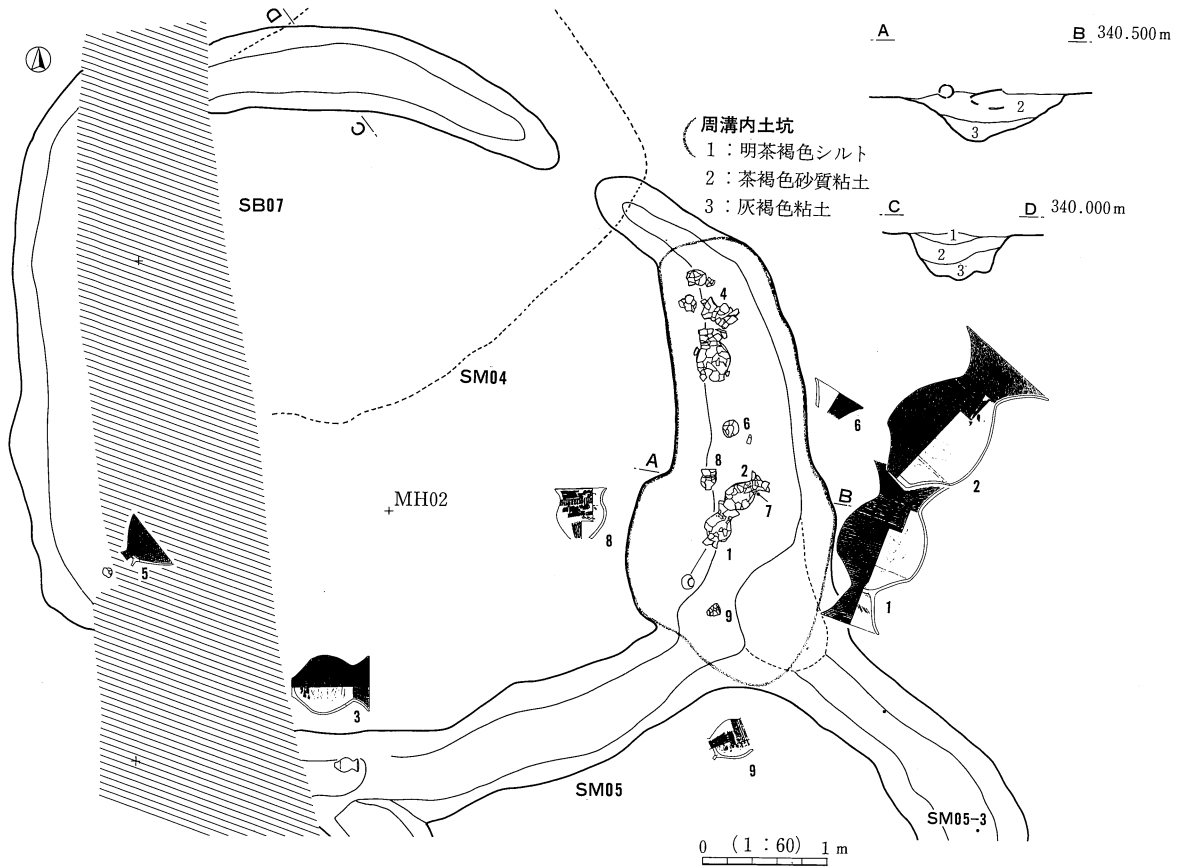


第212図 SM02・03実測図及び出土遺物状況図

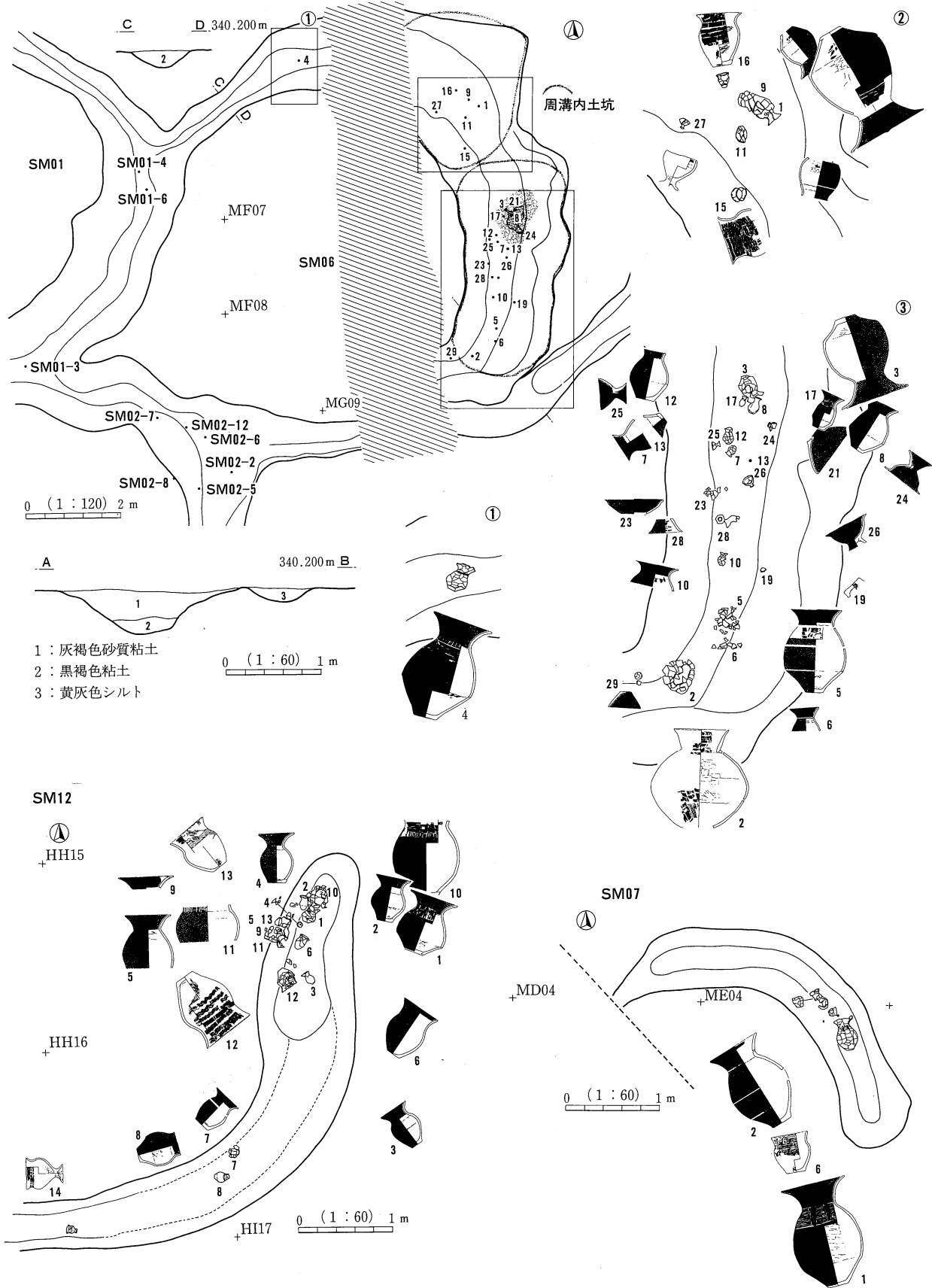
であることからSM04に追加付設された周溝墓と捉えた。

SM06 [第214・219・220図, PL23・46・47・48]

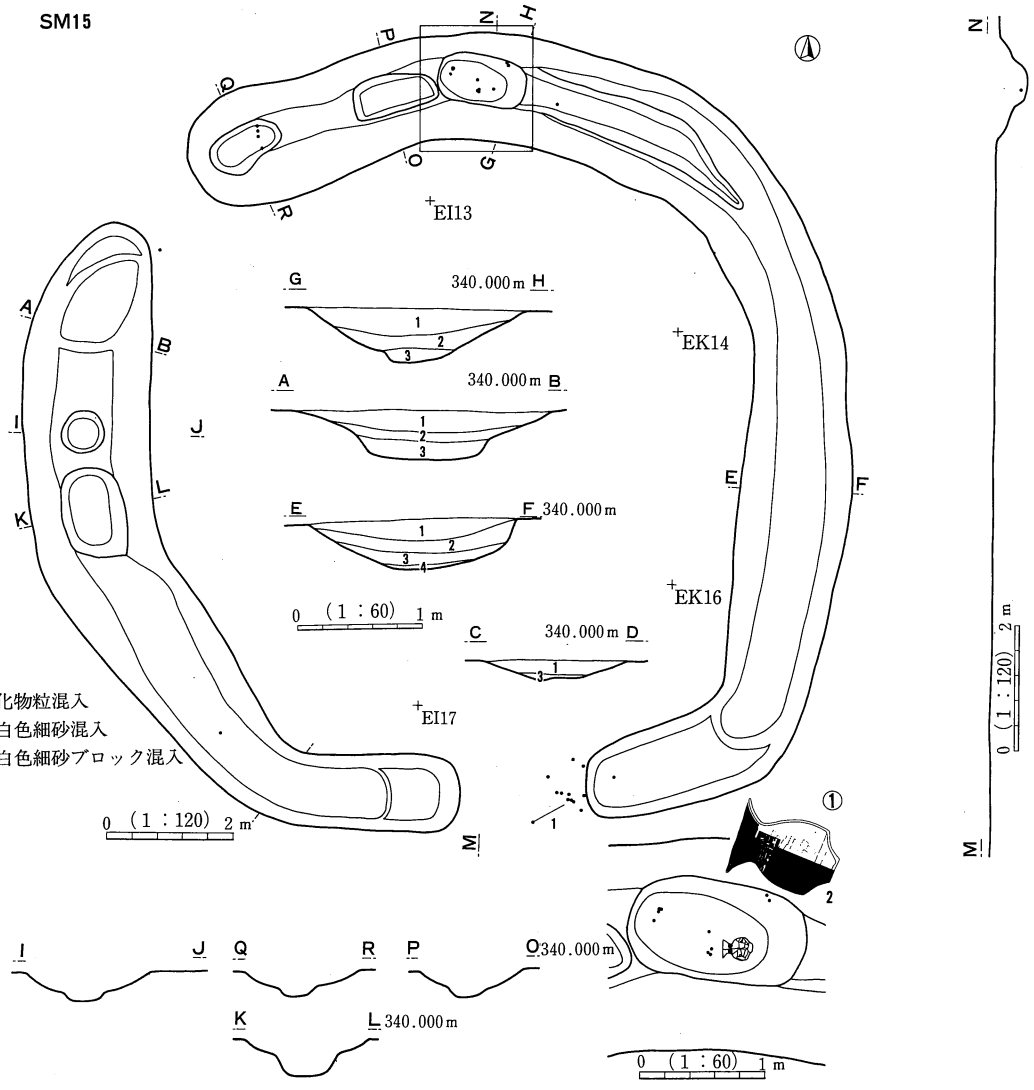
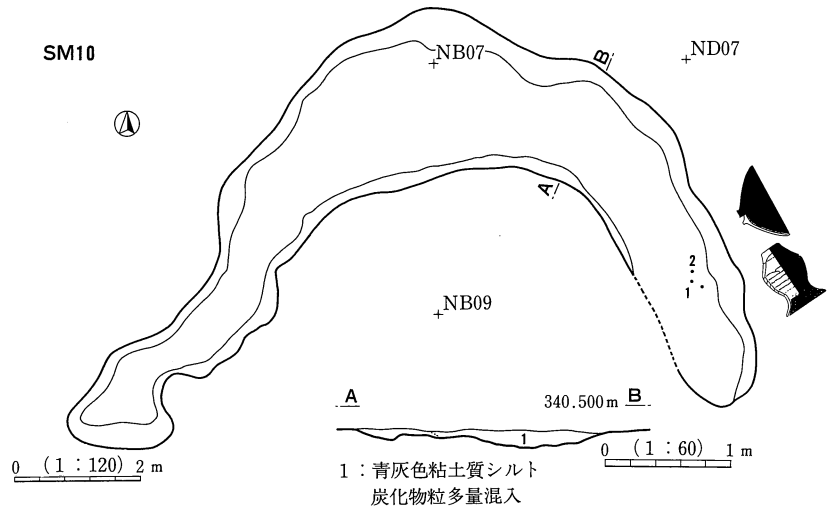
SM01・02・05と周溝を共有し、本址北側と南側に周溝墓があった可能性がある。周溝内辺7.7×6.6mで本領域内では最も大きい周溝墓で、南西コーナーに1.5mの突出部がある。周溝幅はSM01との共有部と東側が2.5mと広く、コーナー付近の狭まる箇所は0.6m程であった。東側の周溝には土器集中が2カ所確認され、20個体に及ぶ土器が出土した。東側周溝中央部の土器集中には焼土と炭が検出され溝底が20cm程掘り込まれていたことから周溝内土坑と捉えた。



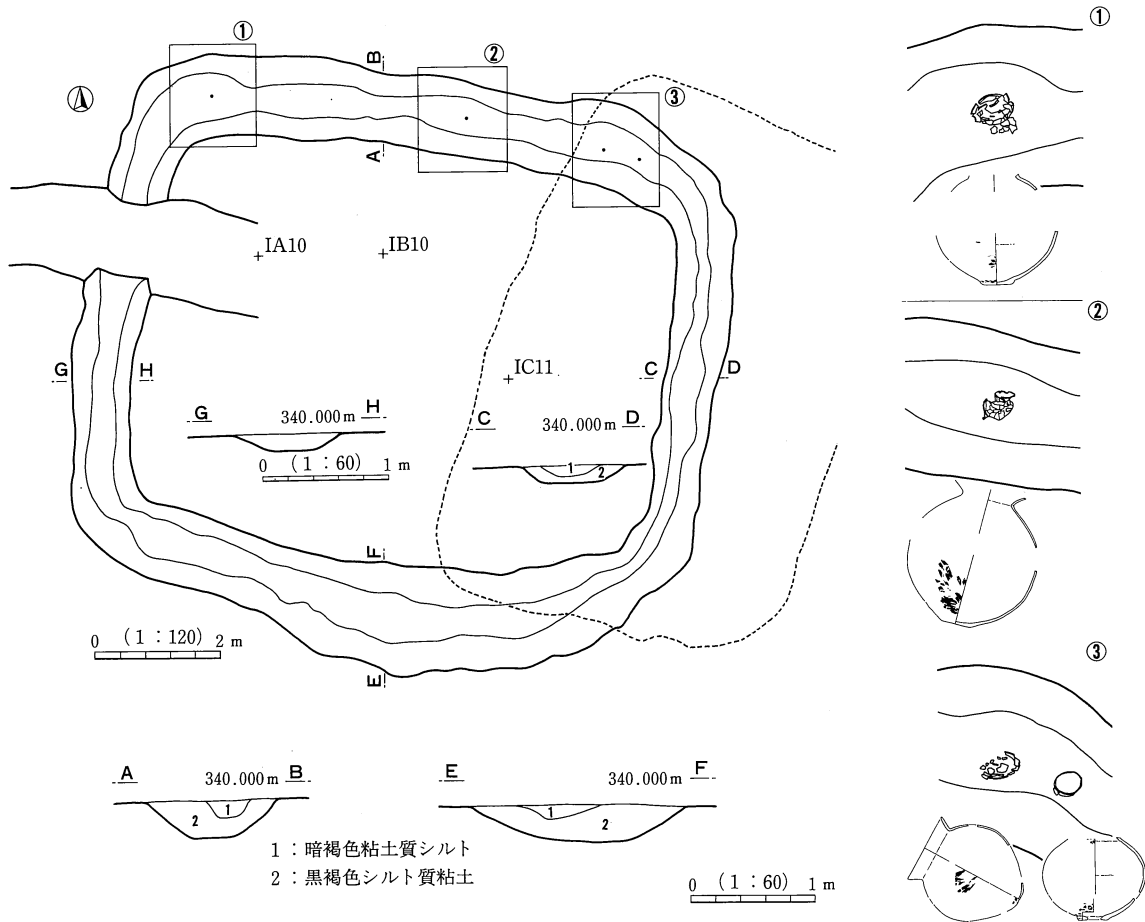
第213図 SM04・05実測図及び出土遺物状況図



第214図 SM06・07・12実測図及び出土遺物状況図



第215図 SM10・15実測図及び出土遺物状況図



第216図 SM14実測図及び出土遺物状況図

SM07 [第214・221図, PL23・42・43]

SM01北東側に弧状に回る溝が検出され、遺物の出土状況から周溝墓と捉えた。周溝規模は不明であるがSM05に類似した小形になると推定される。周溝内からは口縁部を北西方向に向けた壺と甕が並んで4個体出土した。

SM12 [第214・222図, PL23・46・48・49]

弥生中期竪穴住居SB01の埋土上層に構築されていたため溝底面が一部曖昧となり北西側が調査区外に至るため全容は不明であるが北端の周溝が途切れブリッジと捉えられた。周溝幅は80cmで北端には明瞭な掘り込みが確認され壺を主体とする11個体の土器が重なり合って出土した。

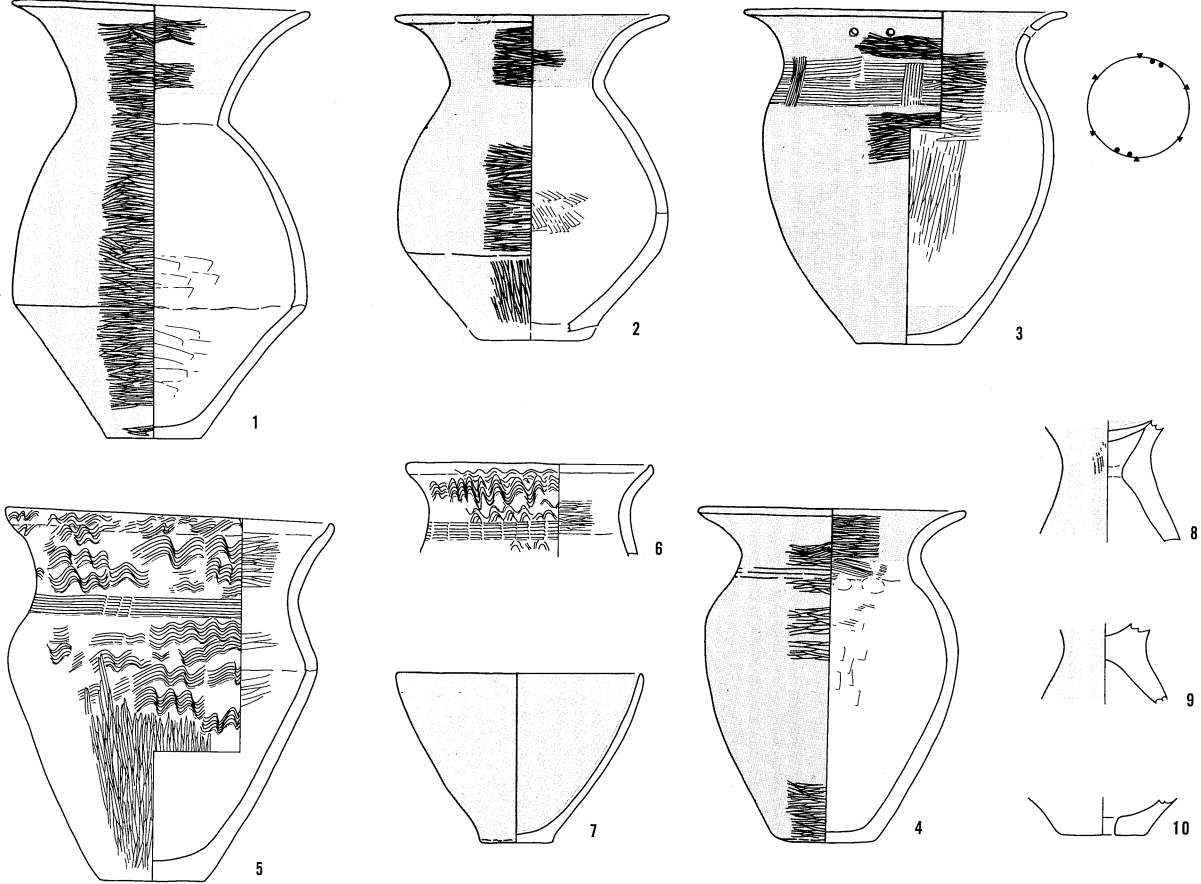
SM13 [第210図]

本址は弥生後期集落と同一の検出面まで下げて確認できた周溝であり、本領域の周溝墓群の溝底形状として捉えた。周溝の1/2程度の検出で全容は不明であるが、直径8mの円形に近い周溝形状となる。

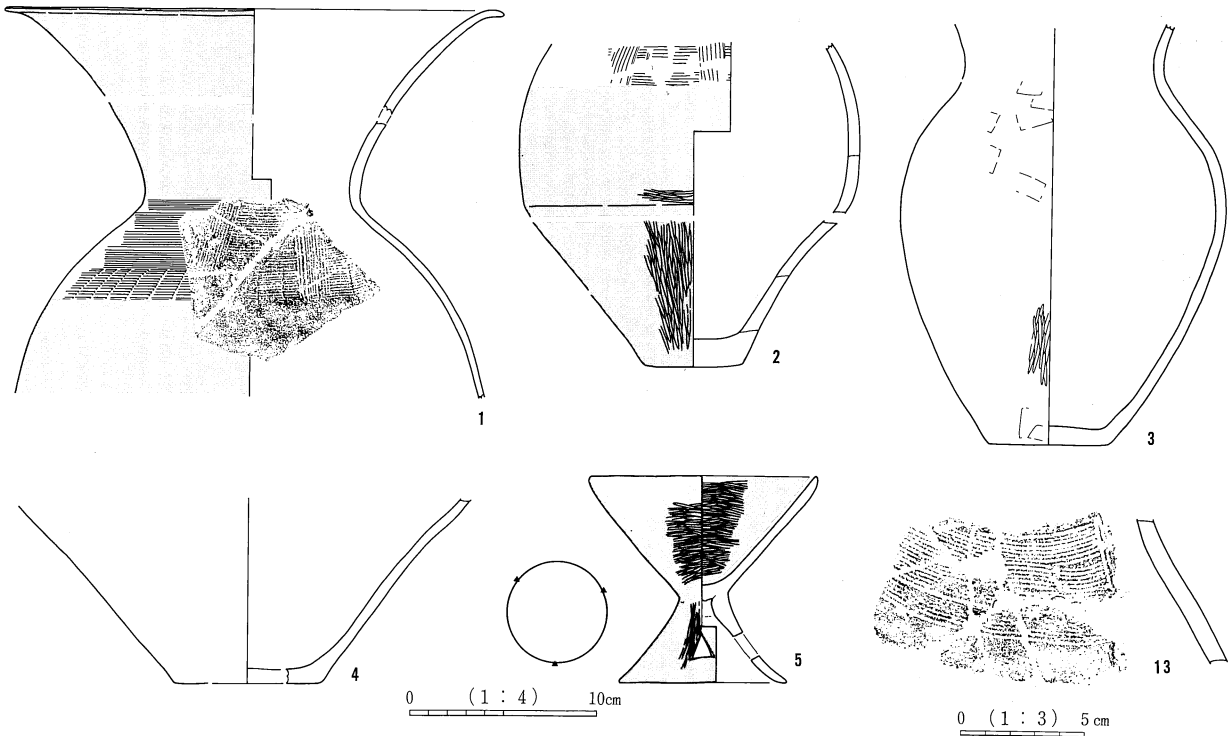
(2) **SD16区画外の方形周溝墓** (IV区-E・I・Nグリッド)

SD16の東側調査域からはコーナーが明瞭に角となる方形周溝墓が3基と2箇所ブリッジを配す大形の隅丸方形の周溝墓が2基、削平によって形状が不明となる大形周溝墓が1基の計6基が検出された。

SM01

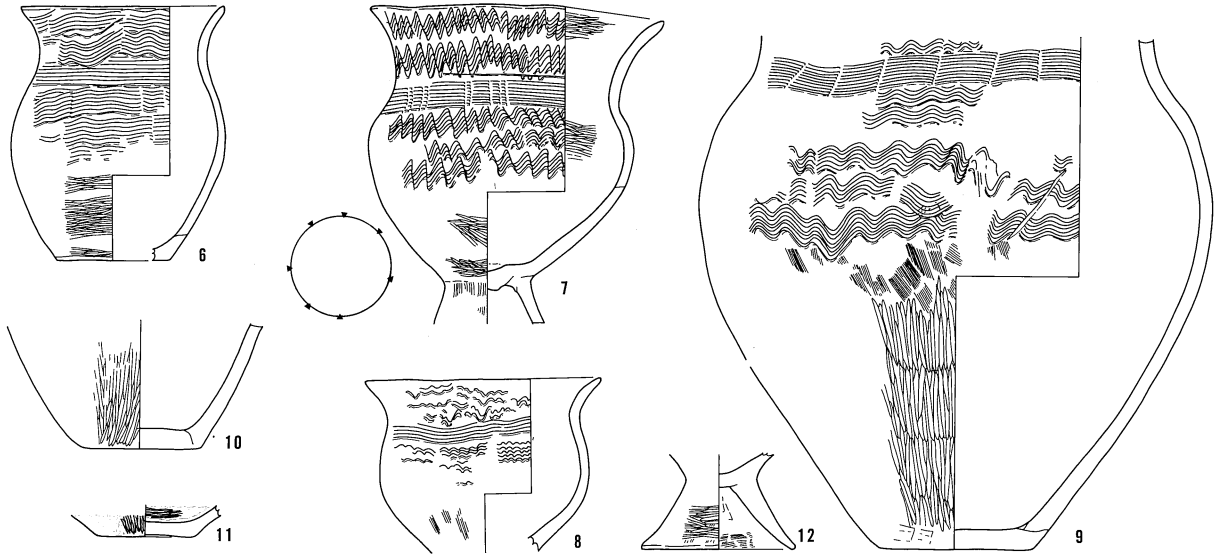


SM02

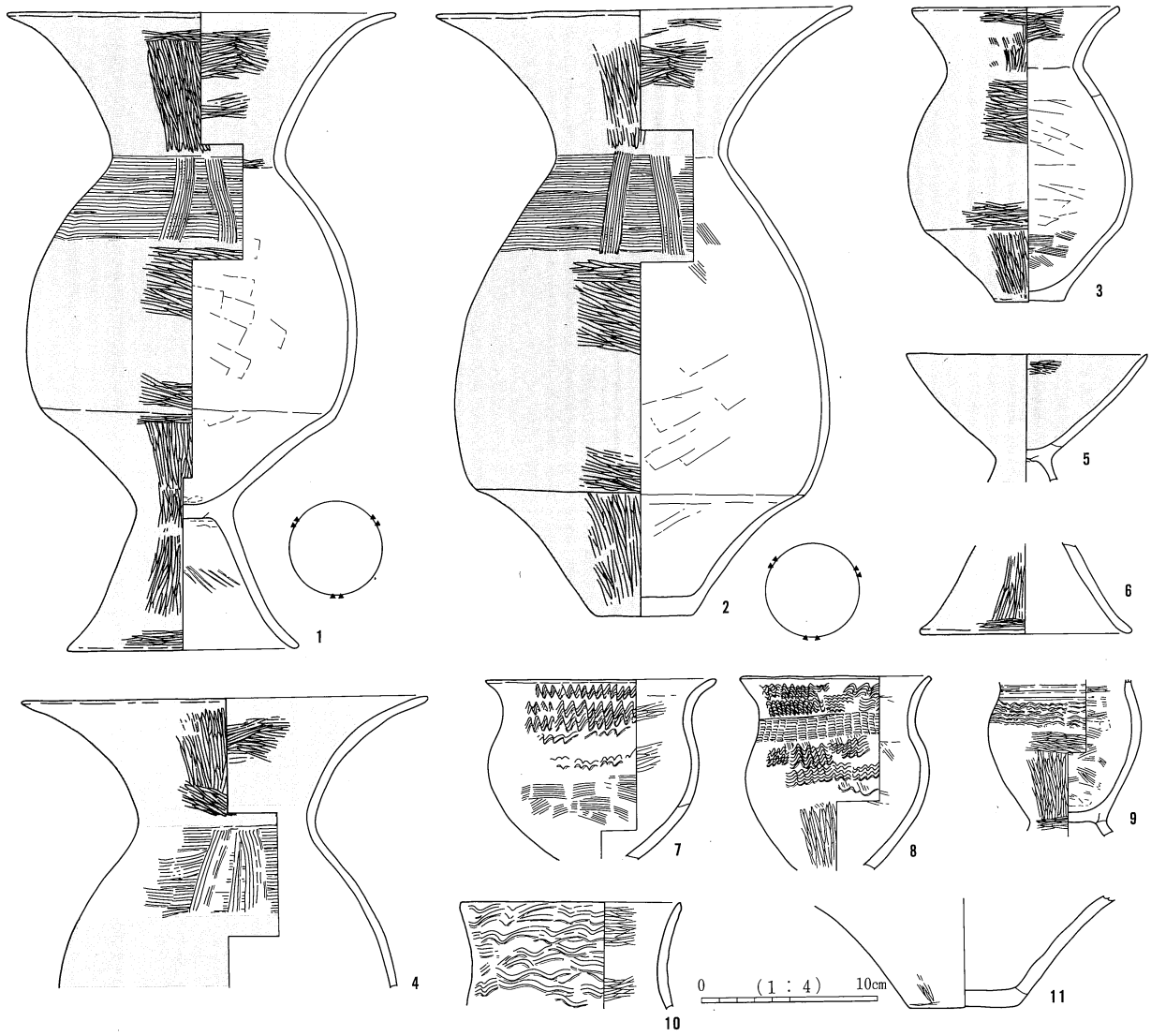


第217図 SM01・02出土土器実測図・拓影

SM02

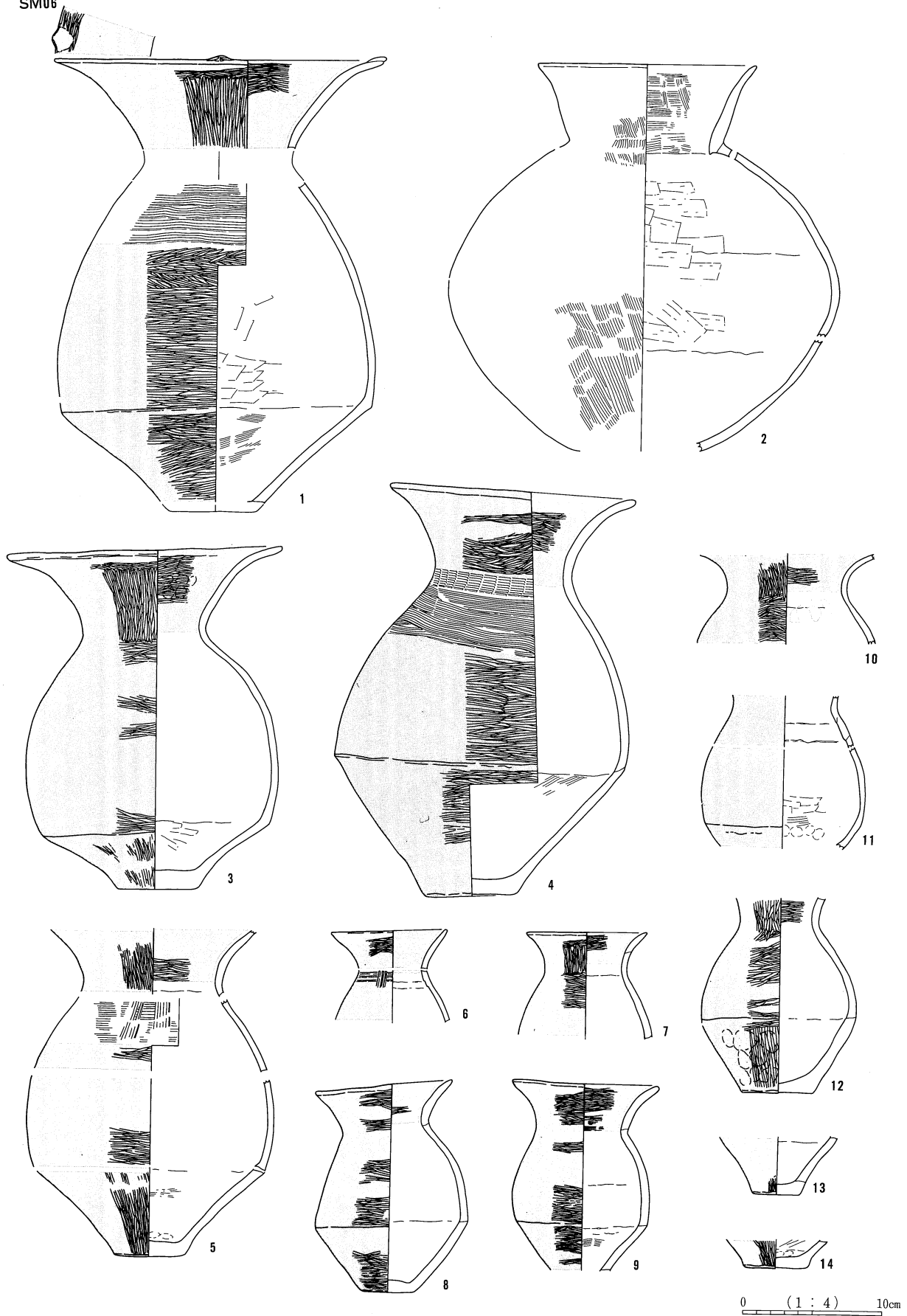


SM04



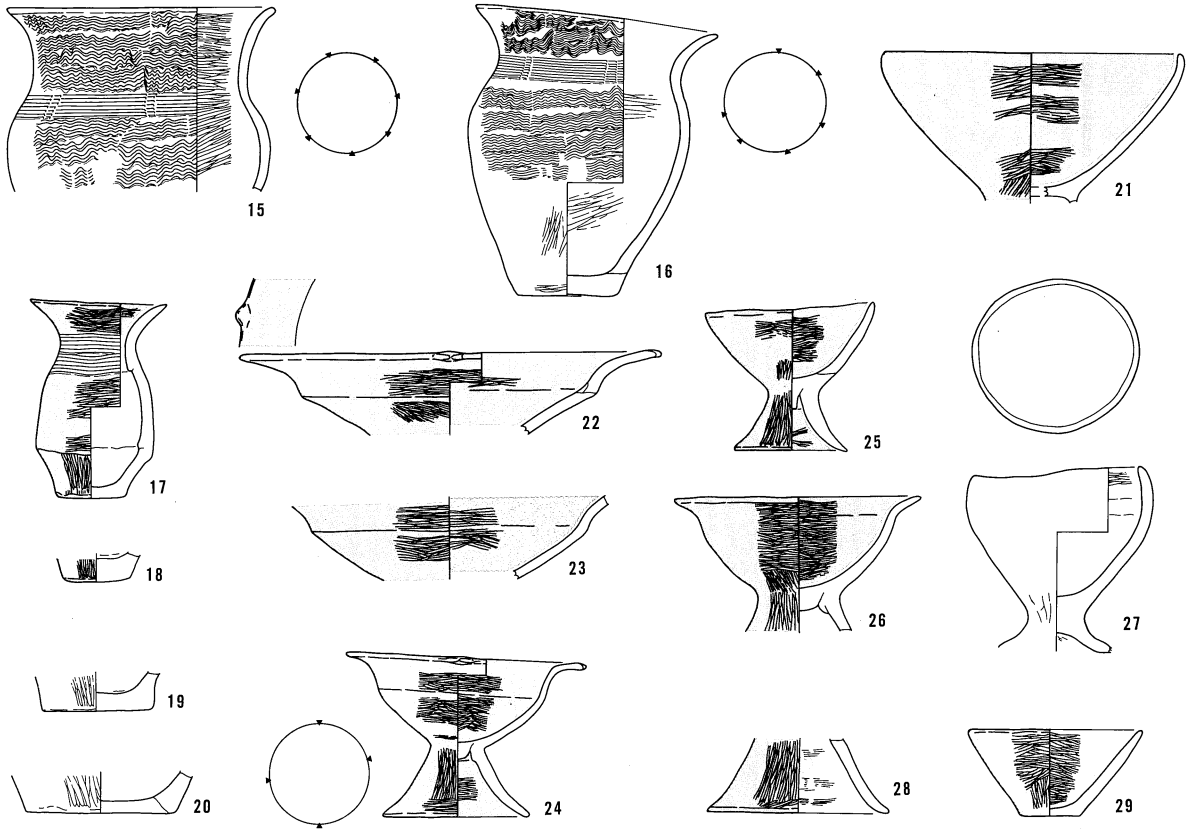
第218図 SM02・04出土土器実測図

SM06

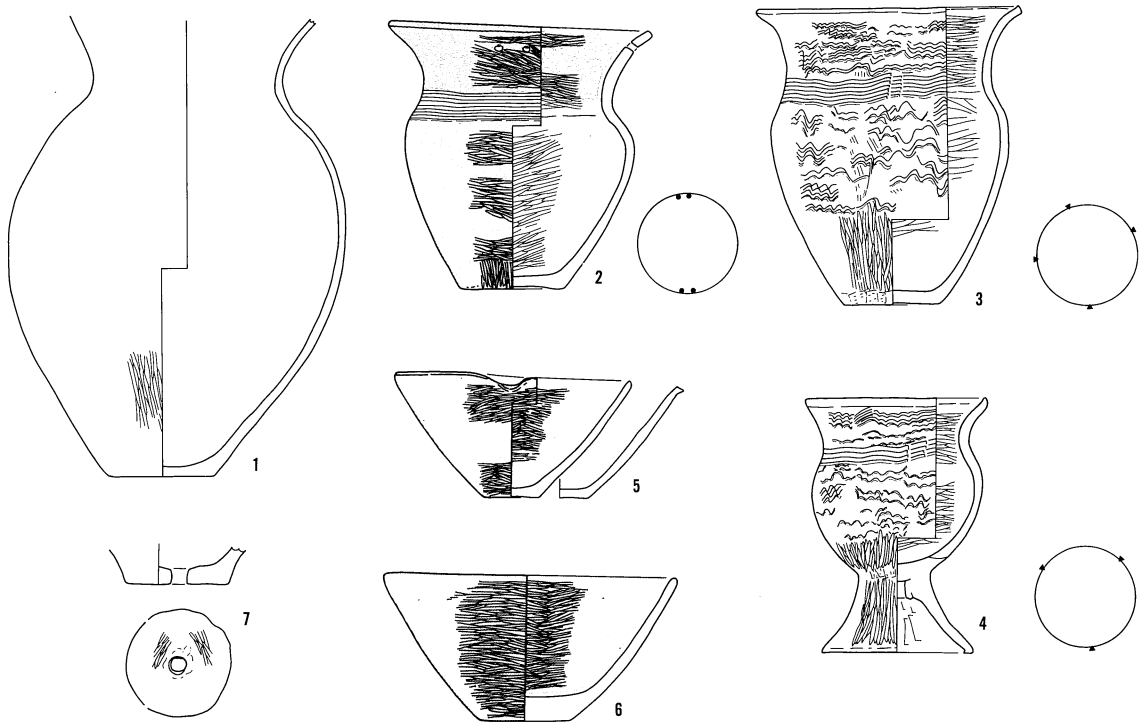


第219図 SM06出土土器実測図

SM06



SM03



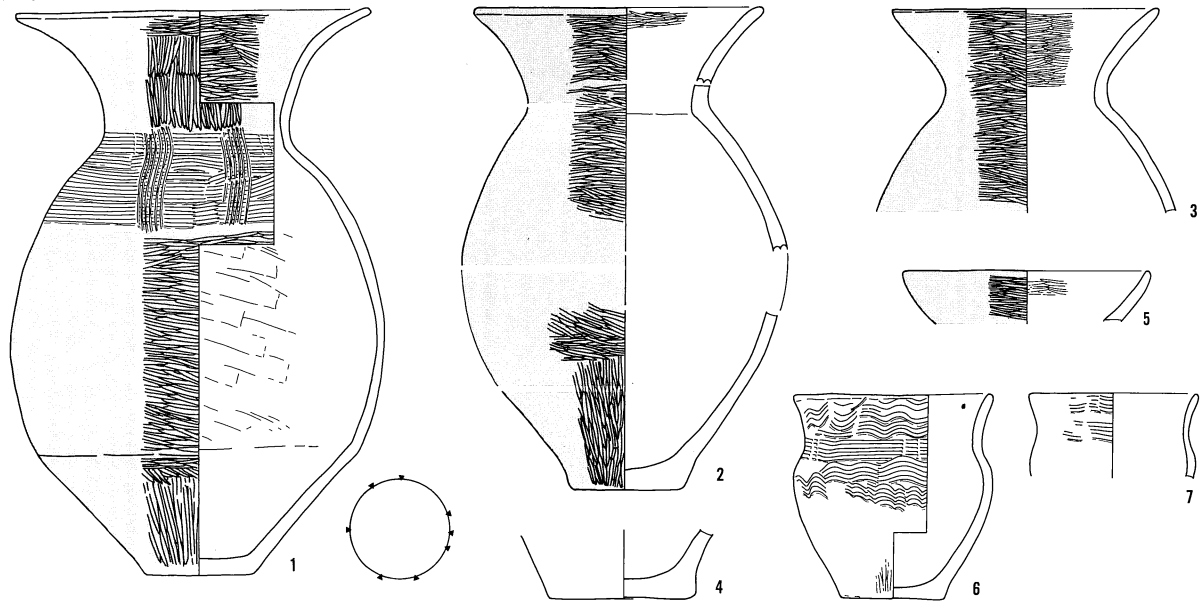
0 (1 : 4) 10cm

第220図 SM06・03出土土器実測図

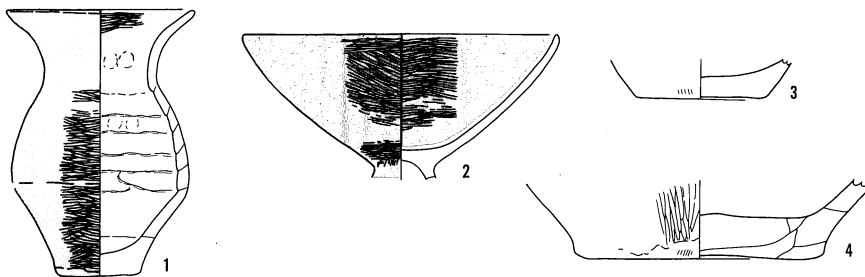
SM05



SM07



SM10



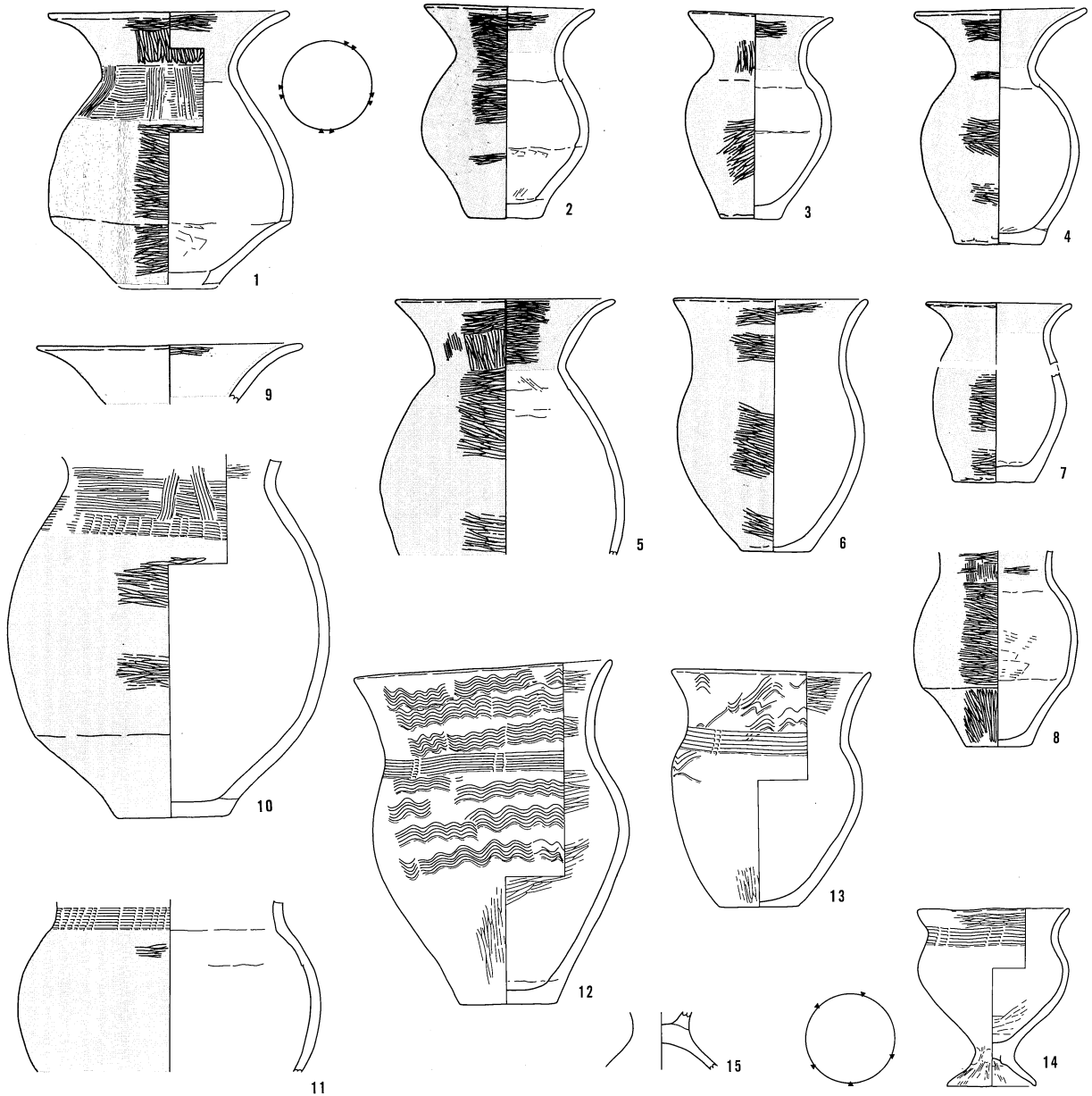
SM09



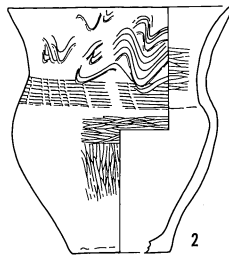
0 (1 : 4) 10cm

第221図 SM05・07・09・10出土土器実測図

SM12

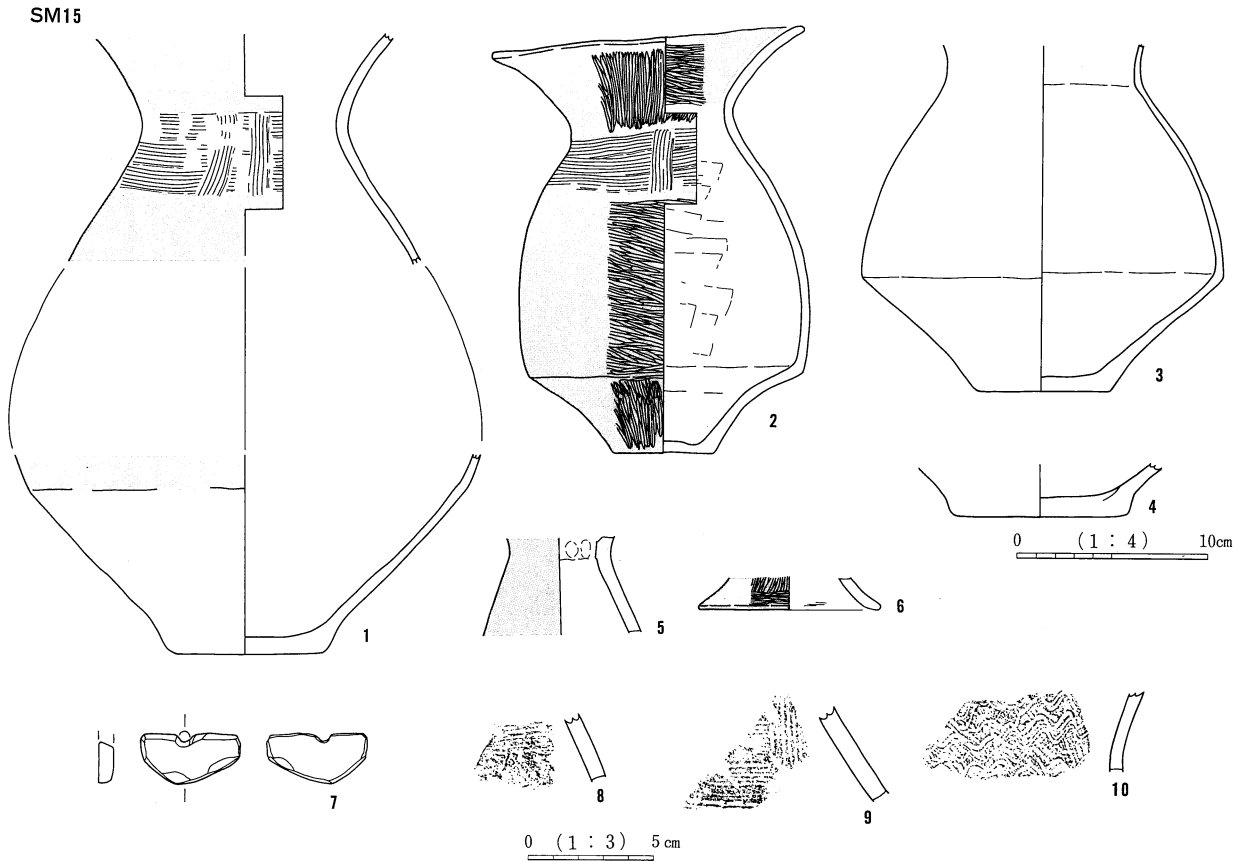


SM16



0 (1 : 4) 10cm

第222図 SM12・16出土土器実測図



第223図 SM15出土土器実測図・拓影

SM15 (IV区-Eグリッド) [第215・223図, PL1・24・49]

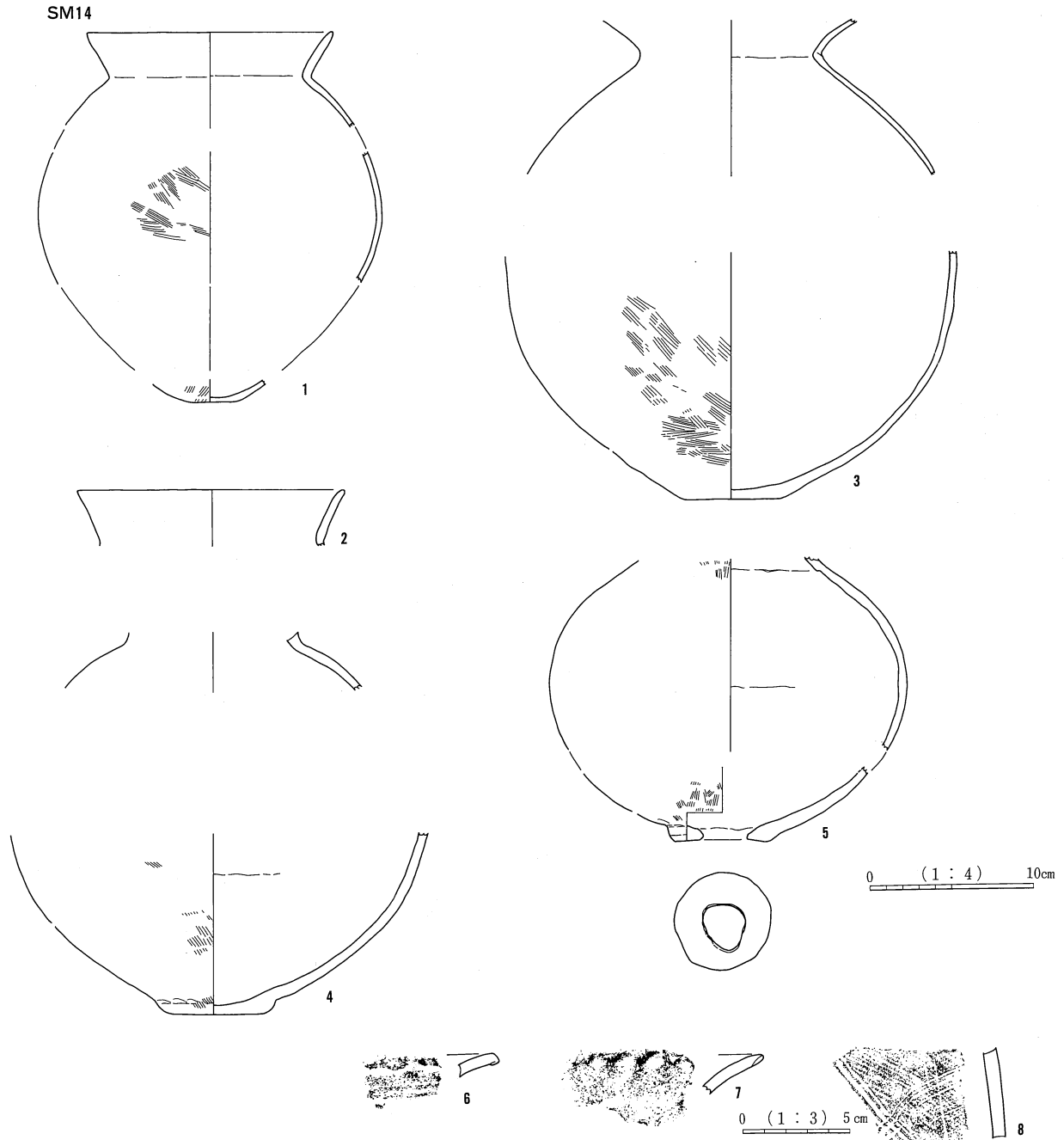
周溝外辺の1辺が13.2mの不整形で、北西側と南側の2カ所にブリッジをもつ。周溝の深さは検出面から20~40cmで、幅は1.6~2.0mである。埋土はシルトの自然堆積層であるが、下層(3層)の一部に細砂ブロックと炭化物粒を混入した埋め戻し土がある。北西側の周溝内には底面から約20cm程度の掘り込みが4カ所で確認され、周溝内土坑として捉えた。土坑内からは壺破片が多数あり、北側の土坑からは壺の完形個体(2)が口縁西向きの横臥状態で出土した。土製円盤が周溝内から出土したが、竪穴住居に帰属すると考えられる。

SM16 (IV区-Iグリッド) [第222図, PL1・49]

周溝外辺の1辺が13.4mの不整形で、平面形状及び規模ともにSM15とほぼ同一となる。北側と南側の2カ所にブリッジをもち、周溝の深さは検出面から30~40cmで、幅は1.6~2.0mである。埋土は砂質のシルトで自然堆積層である。南側ブリッジ脇の西周溝内には甕の完形個体(2)が出土し、底面がやや深くなることから周溝内土坑となる可能性がある。

SM10 (IV区-M・Nグリッド) [第215・221図, PL24・49]

溝幅80~120cm、検出面から15cm程の弧状に回る溝址である。分割された調査区に跨がったため調査上の制約から全容は不明であるが、土器出土状況とSM15・16の分布状況から周溝墓と捉え、規模もSM15に類似するものと考えられる。



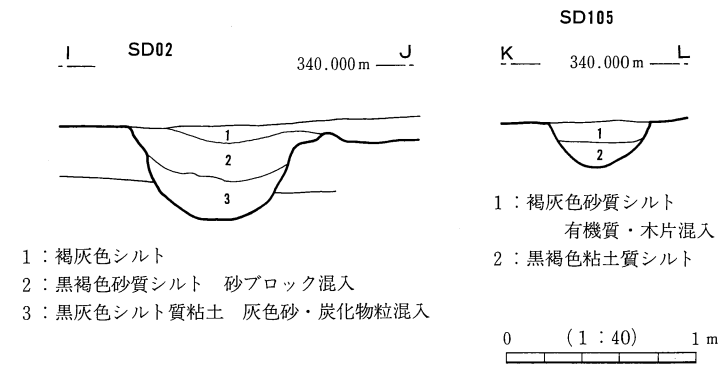
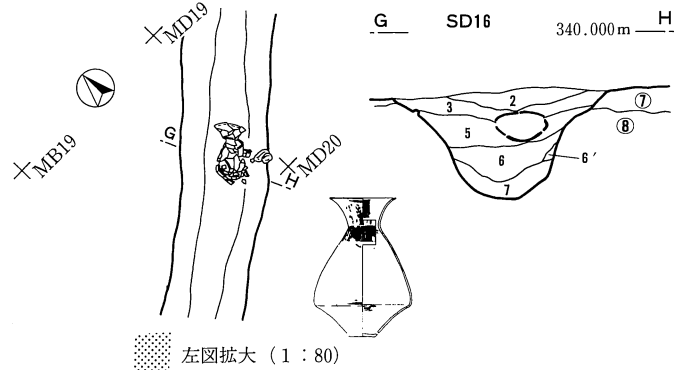
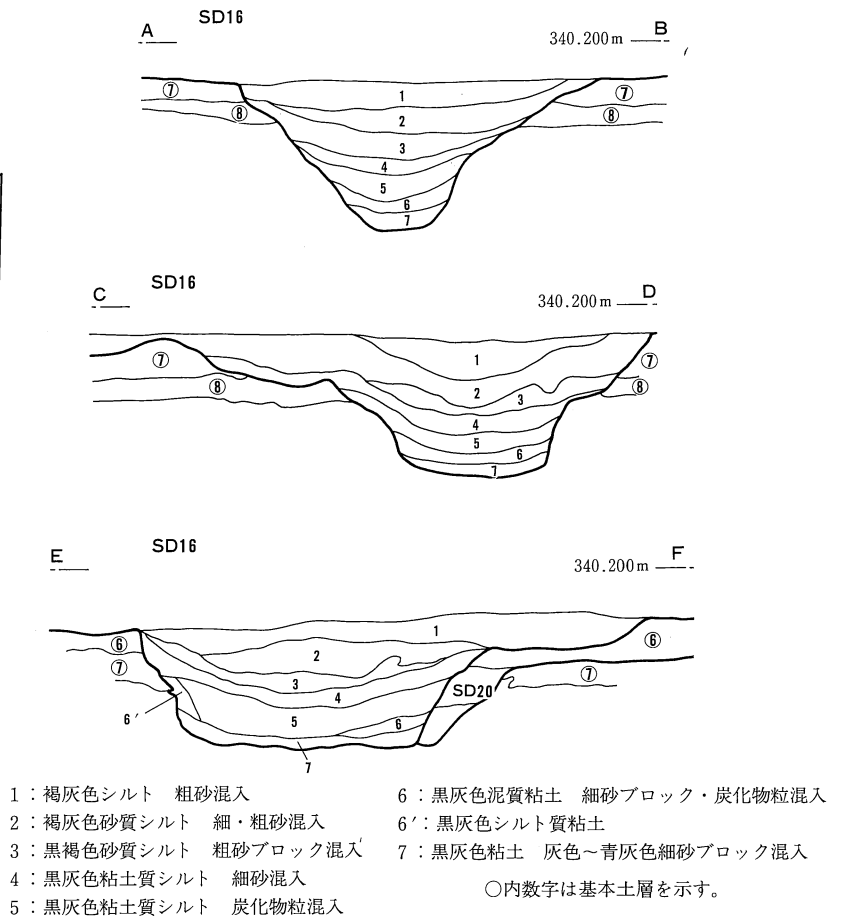
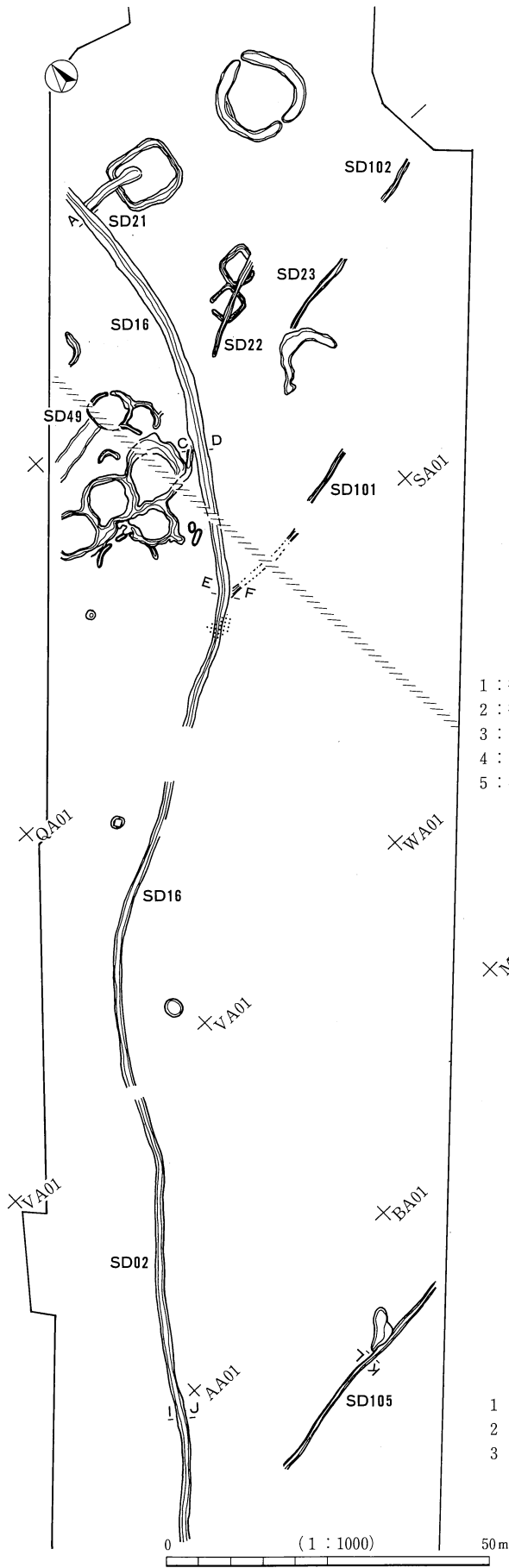
第224図 SM14出土土器実測図・拓影

SM14 (IV区-H・Iグリッド) [第216・224図, PL24]

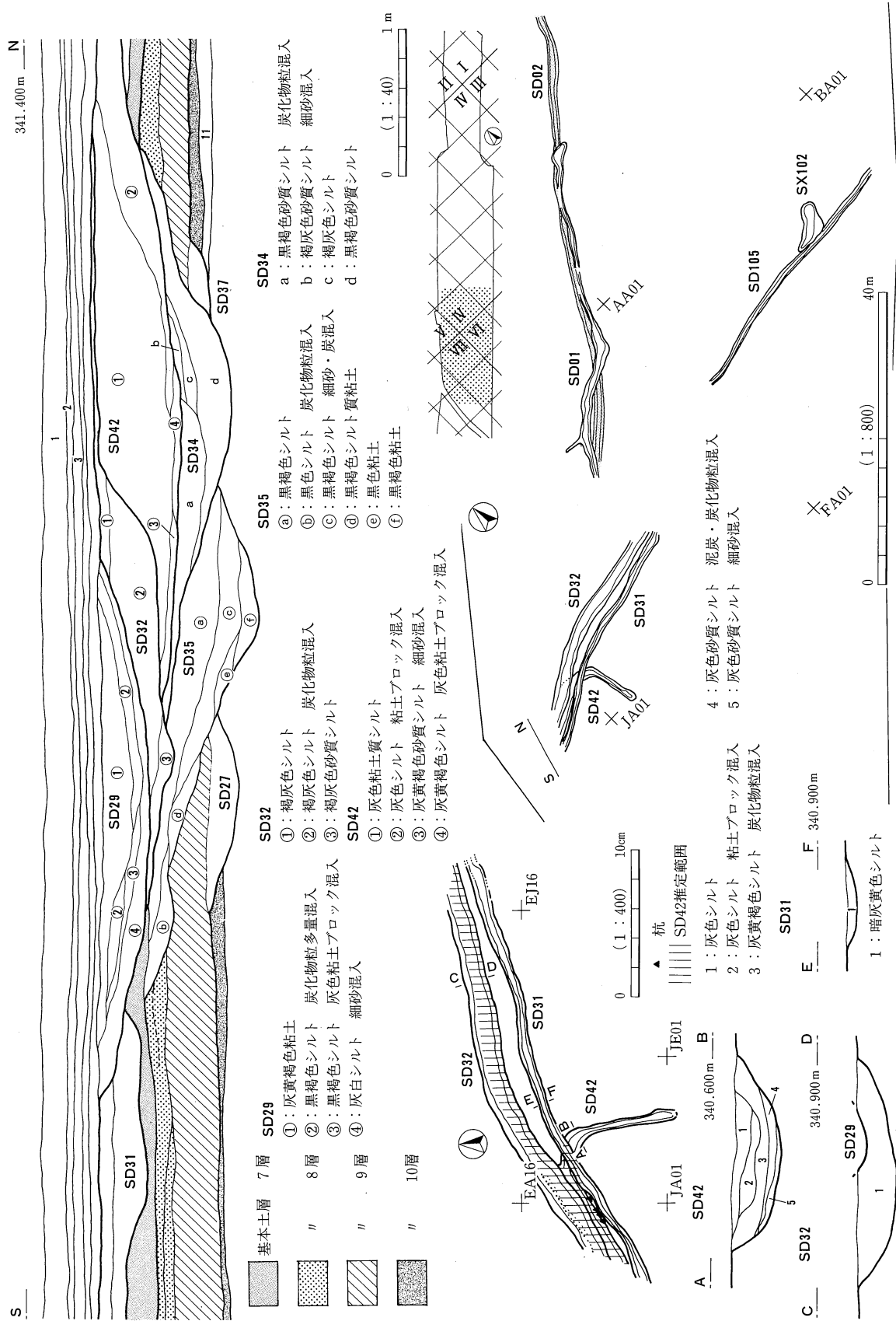
古墳前期溝址SD21によって周溝北側の一部を壊され、後期住居SB12と重複する。周溝は東西方向にやや長いが方形に全周し、規模は周溝外辺が東西11.0、南北9.4mとなる。検出面からの深さは25～30cmで、周溝最大幅は1.6mである。遺物は北側周溝底面から4個体の土器が正位に立って出土した。1・2は胴部が球形になる「く」の字甕、3～5は二重口縁壺の可能性があり、壺5の底部には焼成後の穿孔がある。本址からはブリッジが検出されず、出土土器や周囲の状況から墳丘に付随する周溝と捉えられる。

SM08.09 (IV区-H・I・M・Nグリッド) [第210図, PL24]

古墳前期溝址SD22によって一部を削られ、後期住居SB18・土坑SK55と重複する。両者ともに東西南

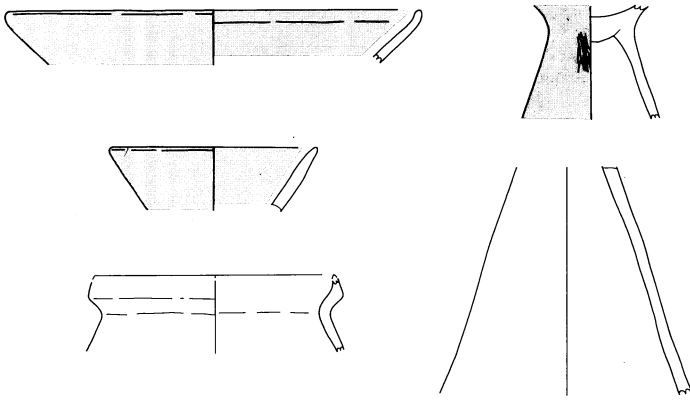


第225図 周溝墓群・溝址全体図及びSD02・16・105実測図

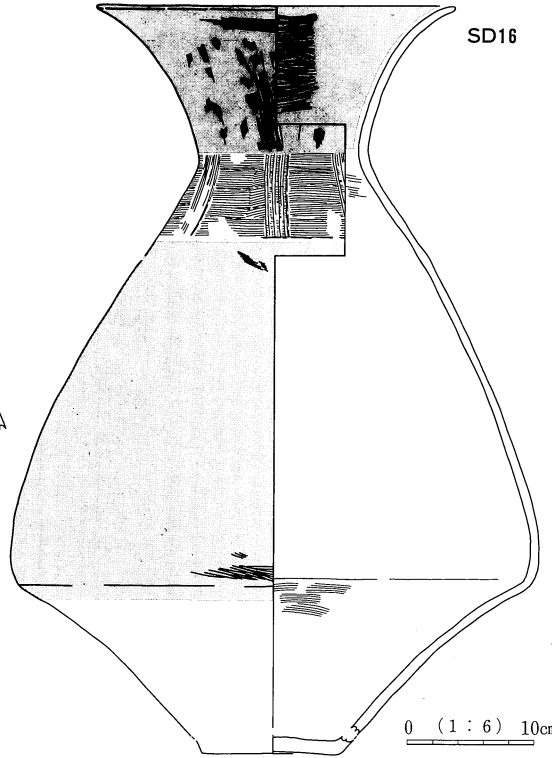


第226図 古墳前期溝址実測図及びVII区法面溝址断面図

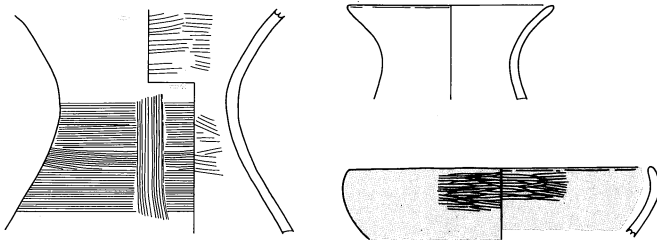
SD02



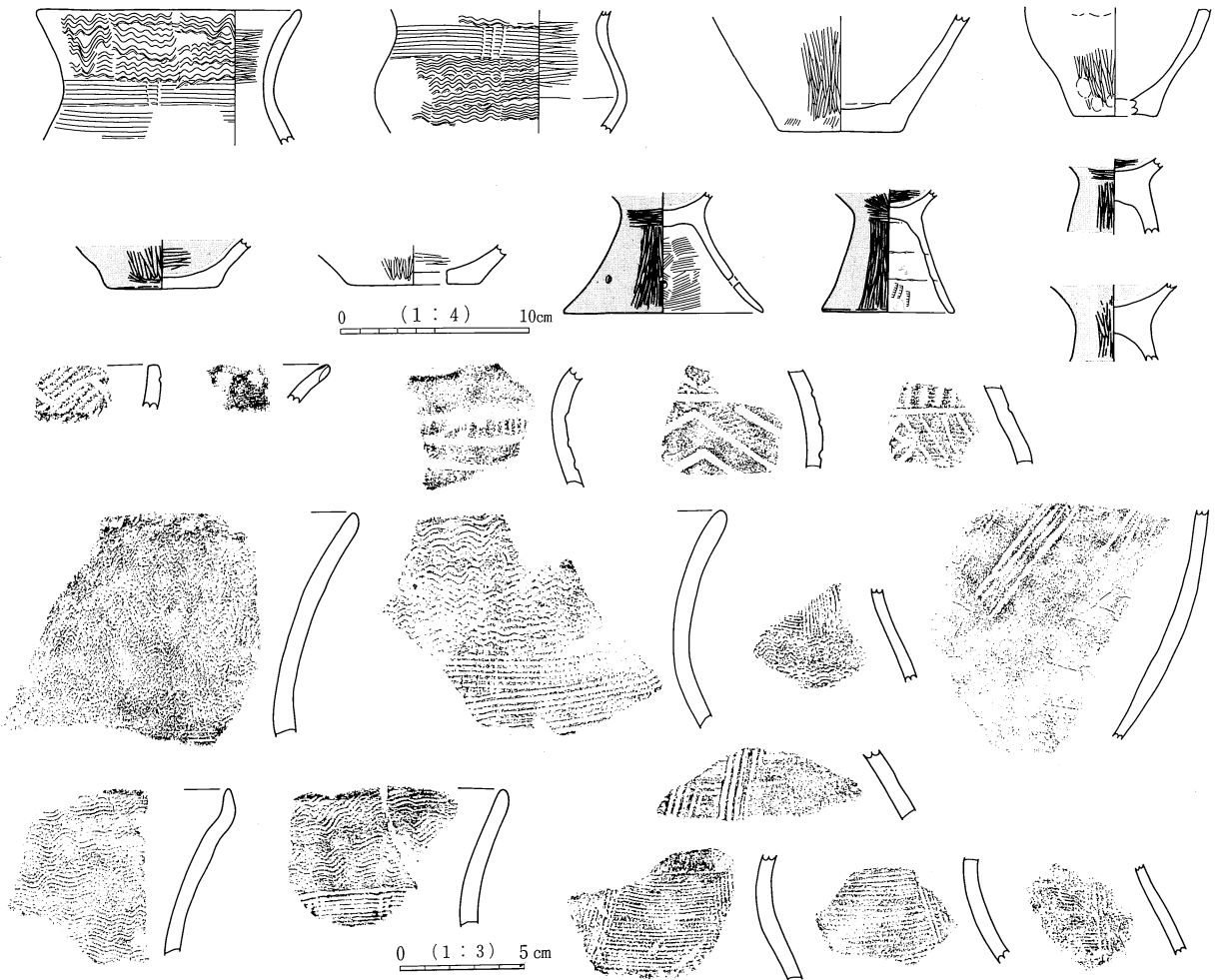
SD16



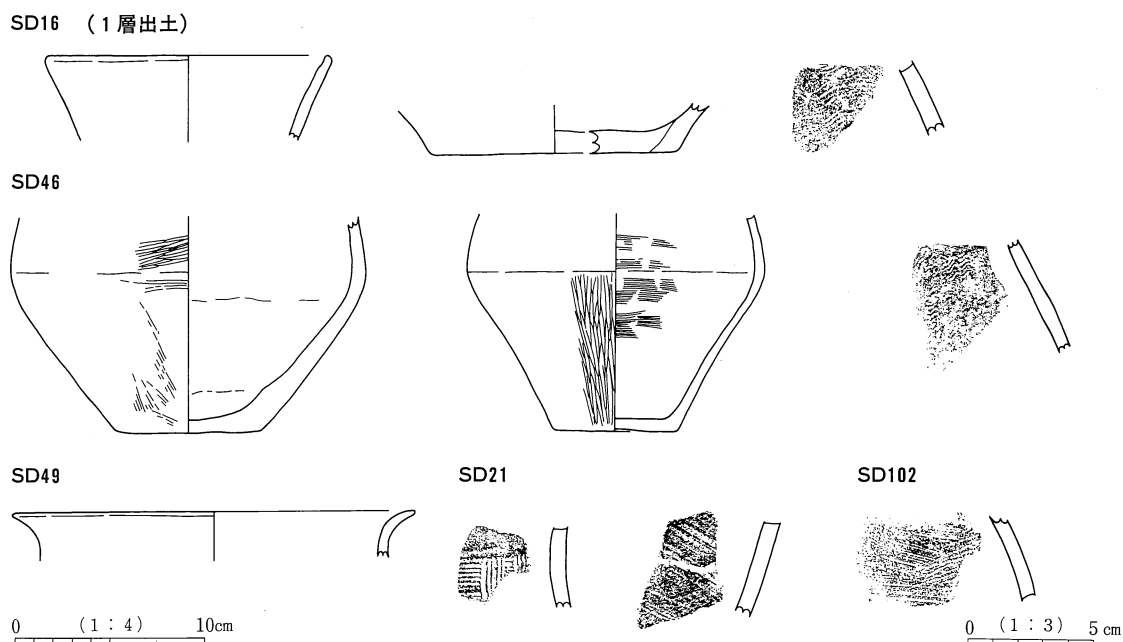
SD16 (3~5層出土)



SD16 (4~7層出土)



第227図 SD02・16出土土器実測図・拓影



第228図 SD16・21・46・49・102出土土器実測図・拓影

北方向を頂点とする正方形の周溝で、SM18は北西コーナー、SM09が南東コーナーにそれぞれ1カ所のブリッジがある。周溝外辺はSM08が一边5.1～5.2m、SM09が5.4～5.6mとほぼ同一規模となり、周溝幅は40～90cmで、検出面から約20cmの深さである。出土遺物はないが、SM14と同形態であることから古墳前期の可能性はある。

2 溝 址

本遺跡が集落から墓域へと変遷した段階から墓域として利用されなくなる段階（古墳前期末）に帰属する溝址は14条ある。この内墓域形成にかかわる溝はSD16 (02) で、検出面と遺構重複関係からSD105・42が同時期に存在していたと捉えられた。墓域以後の土地利用に関しては断定できないが、隣接する川田条里遺跡において水田域に忽然と周溝墓が検出された状況から本遺跡が生産域であったと推測され、10条の溝址は生産（水田）域に関わるものと考えられる。

(1) 墓域に関わる溝址

(IV区-H・L・M・P・Q・U、V区-Y、VI区-A、VII区-D・Eグリッド) [第225・226・227図、PL1・22・26・27・40]

4条の溝址のうちSD105とSD42は前代からの微高地と低地境に位置し、墓域内及び微高地には周溝墓群を区画するSD16と更に南西方向に連続するSD02がある。

SD42はVII区調査法面の溝断面観察（第244図）により検出され、古墳前期SD32とほぼ同一規模で重複していることを確認した。本址は溝の大半をSD32によって壊されているため全容は不明であるが、南西に4カ所で杭が検出され南に分岐屈曲する形状となる。

(2) 墓域後（古墳前期）の溝址 (IV区-H・I・M・N、VII区-D・Eグリッド) [第225・226・227図、PL1・24・26]

基本土層6層内から構築された溝址を全て古墳前期と捉えて本段階の遺構としたが、溝内からは弥生後

期～後期終末に属する土器片が出土したのみで、遺物からの時期特定はできず、遺構の重複関係と検出土層の相対から時期判断した。このため隣接区の今後の調査によっては古墳中期まで下る可能性もある。本時期に帰属する溝は、調査上の制約から溝址の全容は十分に把握出来ず、傾斜方向や個々の関連は不明となった。IV区北東側には東西方向に走行する溝が6条と南北方向に走行する溝が1条ある。SD21・22・49の3条は周溝墓の一部、SD23・102は弥生後期竪穴住居、SD46は弥生中期の土坑、SD101は弥生後期の溝をそれぞれ壊した状況で検出された。

SD46・21・49の3条は微高地上に位置する幅2.0m以上の大形の溝である。SD46は10条の溝址中で唯一南北方向に走行し、幅約2m、検出面からの深さ約20cmで、約6mにわたって確認された。SD21は幅1.3～2.1m、検出面から10cmの深さで、西から東南東方向に10.2m走行し、SM14、SB12、SD16と重複関係にある。SD49は東西方向10mにわたって走行するが、西端は調査区外に至り、東端は現代の用水路によって分断されていた。SD49の幅は2.5mと広いが検出面から深さ12cmと浅い。この3条の溝址の埋土はいずれも炭化物粒を少量含んだ暗褐色～褐灰色のシルト質粘土であり、断面は底面から直立気味に傾斜した底幅の長い形状となる。断片的に確認されたこれらの溝が南北あるいは東西に連続走行するか否かは不明であるが、集落域から墓域へと利用された本領域内に大形溝が方位に沿って出現したことは土地利用の大きな画期と捉えられる。

微高地上には大溝のほかに、西南西から東北東方向に走行する幅1m前後の溝が3条検出された。SD22はSM08・09、SB18の一部を切り、3.8mにわたって直線走行する。幅は50～95cm、検出面から20cmの深さで埋土は褐灰色砂質シルトであった。このSD22から約10m南側にSD23とSD102がある。この2条(SD23・102)は調査年次を隔てて検出されたため分断されているが、双方の延長線上に位置し、規模や埋土が共通することから同一の溝とみなされ、少なくとも28mに及んでいたと推測される。幅は57～82cm、検出面から10cmの深さで、埋土は暗褐色シルトであった。SD101は弥生後期溝址SD20とほぼ同一位置に検出され、近世土坑SX101によって東側が途切れるが、SD20と同程度の全長(50m)があったものと考えられる。幅は80～120cm、深さ20cm前後で、埋土は細砂を含む褐灰色シルトであった。これら3条の溝は、埋土が異なるため埋没経過に相違があったことが窺われる。

南西低地寄りには弥生後期から継続する溝址上に3条検出された。SD01はSD03(17)→SD02(16)、SD31・32はSD35→SD34→SD42とそれぞれ重複する位置関係にある。本領域では土層を下げて検出を行ったため規模は正確に把握されなかったが、SD01は幅1.0m、深さ25cmで断続的に35mほど検出された。埋土は炭化物粒を多量に混入した暗茶褐色シルトで、弥生後期の土器片が数点出土した。傾斜方向はSD02とは反対方向の北東から南西への緩い勾配となる。

SD31・32は弥生終末期のSD42の大半を壊し、西南西から東北東に約30m並走する。SD32は幅1.8mと大形で、深さ40cmあり側壁面傾斜の緩いU字形の断面形である。これに対しSD31は幅40～75cmで、深さ20cmと小規模で椀状の断面形であった。傾斜方向は両者とも東端の一部を古墳後期溝址(SD29・30)に壊されているため微妙であるが北東から南西方向と考えられる。埋土はSD32が炭化物を含む褐色シルトで、SD31が灰黄色シルトとなり同時存在していた溝であるが、機能や埋没過程に違いがあったものと推測される。

SD01とSD32は調査区を隔てたため両者の関連性は十分に確認できなかったが、傾斜方向と埋土が一致することから同一遺構である可能性が高い。またこの両者の傾斜方向は本段階に看られる変化で、微高地上の大形溝址出現と合わせて本遺跡の画期となる。

第10表 弥生時代後期～古墳時代前期周溝墓出土土器観察表

色調及び胎土の記号は第3表弥生中期観察表と同一である。

SM01

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	15.8	5.0	23.2	完存	E	a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) 篋状工具によるナデケズリ(胴)	
2	壺	14.5		(17.4)	口縁・胴部完存	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩(口縁) 斜位ハケ→ナデ(胴)	
3	壺	17.0	5.5	17.7	ほぼ完存	A	a	・横線文(6本中→上・下)→T字文(7本6単位)→横位ミガキ→赤彩 底面ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) 縦位ミガキ→横位ミガキ→ナデ(胴) 底面赤色顔料付着	穿孔4 0.4~0.5
4	壺	14.2	5.2	17.7	完存	B	a	・摩滅 弱い線条痕(3本)→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁)→ハケ→ナデ(胴)	
5	甕	17.4	5.6	19.5	全形1/2	B D	a	・波状文→廉状文(7本3廉)→縦位ミガキ(緻密) ・横位ミガキ(口縁) ナデ(胴)	焼成堅
6	甕	13.2			口縁部1/2	A	a	・摩滅 波状文→廉状文(6本複数単位) ・横位ミガキ	
7	鉢	13.0	3.8	9.0	完存	B	a	・摩滅 ミガキ→赤彩 ・摩滅 赤彩 黒斑	
8	台付壺				接合部5/8	E	a	・摩滅 ハケ→ミガキ→赤彩 ・摩滅 赤彩(胴)	円形接合
9	高杯				接合部完存	A B	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 赤彩	
10	有孔鉢		4.6		底部1/4	A D	a	・摩滅 ・摩滅	穿孔径1.4

SM02

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	26.6			口縁1/8 胴部1/6	B D	a	・摩滅 横線文(12本4段)→廉状文→T字文→赤彩 ・摩滅 煤付着黒色化	口縁と頸部接点なし図上復元
2	壺		5.2		胴部2/3 底部完存	E	a	・摩滅 T字文(7本)→ミガキ→赤彩 ・摩滅 ナデ	胴上半と下半の接点なし図上復元
3	壺		6.4		胴・底部完存	D E	a	・ナデ 一部縦位ミガキ 黒斑2 ・摩滅 ナデ 黒色化	
4	壺		7.8		胴下半完存 底部1/3	A C D	a	・摩滅 煤付着 黒色化 ・摩滅	2次焼成
5	高杯	12.0	9.0	10.9	完存	A D	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 脚部三角孔3単位 ・横位ミガキ→赤彩(杯)ナデ(脚)	
6	甕	10.8	6.0	13.5	全形1/3	D E	a	・横線文(8本)→波状文→横位ミガキ 口縁・胴上半黒色化 ・摩滅 ミガキ 上半黒色化	
7	台付甕	15.5			口縁・胴・接合部 ほぼ完存	E D	a	・波状文(上→下)→廉状文(9本4・5廉7単位)→ミガキ ハケ(脚)黒色化 ・横位ミガキ→ナデ 口縁黒色化	
8	台付甕	12.4			口縁・胴部1/3	E	a	・ハケ→横線文(5本)→波状文 櫛描文粗雑 ・摩滅	
9	甕		8.1		胴部1/2 底部完存	B D	a	・ハケ→波状文(6~8本)→廉状文(10本1廉複数単位)→縦位ミガキ 黒斑 ・摩滅 ナデ	
10	甕		6.4		底部完存	A D	a	・縦位ミガキ 底面ミガキ ・ナデ 底面以外煤付着	
11	鉢		5.0		底部2/3	A B	a	・縦位ミガキ→赤彩 底面ミガキ ・横位ミガキ→赤彩	上げ底
12	台付甕		7.6		脚部完存	E	a	・ハケ→横位ミガキ→ナデ ・ナデ(胴) 横ハケ(脚)	

SM03

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺		5.6		胴・底部ほぼ完存	A	a	・摩滅 縦位ミガキ 黒斑3 ・摩滅	器形の歪み顕著

第3章 各時代の遺構・遺物

2	壺	14.0	5.6	14.2	完存	A	a	・摩滅 横線文(9本)→縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 黒斑3 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) 横・斜位ミガキ部分的に赤色顔料付着	穿孔4 0.3~0.35
3	甕	13.7	5.0	15.7	完存	AD	a	・ハケ→廉状文(7本2廉4単位)→波状文ケズリ(底)→縦位ミガキ 煤付着 黒色化 ・横位ミガキ→ナデ 黒色化	口縁部 面とり
4	台付甕	9.6	8.0	13.5	完存	ED	a	・波状文→廉状文(4~6本2廉3単位)→縦位ミガキ 黒色化 ・横位ミガキ→ナデ(胴・脚)	
5	片口鉢	12.5	3.0	6.7	完存	A	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 底面ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
6	鉢	15.6	5.0	7.8	完存	AB	a	・横位ミガキ→赤彩 底面ミガキ 黒斑 ・横位ミガキ→赤彩 黒斑2	
7	有孔鉢		5.3		底部完存	EF	a	・摩滅 底面ミガキ ・摩滅 ナデ	孔径1.4

SM04

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	台付壺	22.0	13.0	37.1	ほぼ完存	A	a	・横線文(8本4段上→下)→T字文(8本2条1対3単位)→縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 黒斑2 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) 篋状工具によるナデ・線条痕(胴・脚)	
2	壺	23.4	7.4	34.5	完存	A	a	・横線文(8本上→下)→T字文(8本2条1対3単位)→縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 黒斑4 ・ハケ→横位ミガキ→赤彩(口縁) 篋状工具によるナデ	
3	壺	11.6	3.8	16.7	完存	AD	a	・ハケ→縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 黒斑2 ・横位ミガキ→赤彩(口縁)→斜・横位ハケ(胴) 黒斑1	
4	壺	22.8			口縁・胴部上半1/2	AE	a	・摩滅 横線文(8本4段上→下)→T字文(7~8本)→縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩(口縁)	
5	高杯	13.5			杯部3/4	A	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩	
6	高杯		12.0		脚部下半完存	A	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 黒斑 ・ナデ	
7	台付甕	13.1			口縁・胴部ほぼ完存	DE	a	・横位ハケ→波状文(下→上) 黒色化 ・摩滅 横位ミガキ→ナデ 黒色化(口縁)	
8	台付甕	10.7			口縁・胴部ほぼ完存	DE	a	・ハケ→波状文→廉状(8本1廉複数単位)→縦位ミガキ 黒斑2 ・摩滅 ハケ→ナデ	
9	台付甕				胴・接合部ほぼ完存	C	a	・波状文→横線文(3本)→縦位ミガキ→横位ミガキ 黒斑1 ・ハケ→ナデ→横位ミガキ	焼成堅
10	甕	12.6			口縁部1/2	AD	a	・波状文 部分的に煤付着 ・横位ミガキ	焼成堅
11	壺		6.1		底部完存	B	a	・摩滅 縦位ミガキ ・摩滅	

SM05

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺		7.0		胴部1/2 底部完存	AE	a	・摩滅 縦・横位ミガキ→赤彩(口縁) 斜位ミガキ→赤彩(胴) ・摩滅 赤彩(口縁)	口縁と胴接点なし 図上復元
2	壺		5.2		口縁端部以外完存	BE	a	・斜位ハケ→横線文(8本3段上・下→中)横・縦位ミガキ→赤彩(胴) 黒斑 ・横位ミガキ(口縁) 横・斜位ハケ(胴)	焼成堅 ミガキ赤彩でない
3	壺	13.9	5.5	21.1	全形2/3	AD	a	・縦位ミガキ→ナデ ・横位ミガキ(口縁) ナデ(胴)	上げ底気味
4	鉢	6.9	4.4	6.8	ほぼ完存	AE	a	・摩滅 横・斜位ミガキ 底面ミガキ ・摩滅 ミガキ→ナデ	
5	台付甕				接合部完存	BD	a	・摩滅 縦位ミガキ ・摩滅	

S M06

図版No.	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	23.6	(5.2)	(32.6)	口縁破片 胴部1/2	A	a	・横位ミガキ→縦位ミガキ→赤彩 山形突起 (口縁) 横線文(5本4本5段上→下) 横・ 斜位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ハケ→ナデ(胴)	口縁・胴接点なし 図上復元
2	壺	15.6			口縁1/2 胴部1/4	C	a	・摩滅 縦位ハケ→ナデ→赤彩 ・ケズリ→ナデ	口縁・胴接点なし 図上復元
3	壺	19.6	5.4	24.54	完存	A	a	・摩滅 横位ミガキ→縦位ミガキ→赤彩底面ミ ガキ 黒斑1 ・摩滅 指頭圧痕→横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(胴) 黒斑2(口縁)	
4	壺	17.6	6.4	29.8	完存	A	a	・糜状文(8本1 糜複数単位)→横線文(8本) 横位ミガキ→赤彩 黒斑1 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ハケ→ナデ	歪み顕著やや上げ 底
5	壺		5.0		口縁1/4 頸・胴下半1/6	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩(口縁) 横線文(8 本)→T字文 横位ミガキ→赤彩(胴) ・摩滅 横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(胴)	口縁・胴上・下・ 底部とも接点なし 図上復元
6	壺	8.3			口縁1/4 胴部1/8	A	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩→横線文(3本)→T 字文(3本) ・摩滅 赤彩	口縁・胴接点なし 図上復元 口縁の歪み顕著
7	壺	8.6			胴上半1/4	A	a	・縦・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(胴)	
8	壺	9.8	3.6	11.2	ほぼ完存	A	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 底面ミガキ→赤彩 黒斑2 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(胴)	
9	壺	10.4			ほぼ完存	A	a	・横位ミガキ→赤彩 ・ハケ→横位ミガキ→赤彩(口縁) ハケ→ナデ (胴)	
10	壺				頸部1/3	A	a	・横位ミガキ→縦位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ 部分的に赤 色顔料付着(胴)	
11	壺				胴上半1/6 胴下半1/4	A	a	・摩滅 赤彩 黒斑 ・摩滅 ハケ→ナデ 指頭圧痕	胴上・下接点なし 図上復元
12	壺		6.4		胴上半3/4 胴下半完存	A	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 胴下半凹凸 顕著 底面ミガキ 指頭圧痕 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(胴)	
13	壺		3.4		底1/2 胴下半1/3	A	a	・摩滅 縦位ミガキ→赤彩 ・摩滅 ナデ	口縁・胴上半の破 片があるが全形不明
14	壺		4.6		底部ほぼ完存	A C	a	・斜位ミガキ→赤彩 ・ナデ 籠状工具の線条痕 指頭圧痕	No.6の胎土・焼 成と類似
15	甕	14.2			口縁部完存	E	a	・糜状文(7本2 糜7単位)→波状文(上→下) 黒斑1 ・斜位ハケ→横・斜位ミガキ	
16	甕	13.0	5.2	15.3	ほぼ完存	D E	a	・糜状文(9本2 糜6単位)→波状文(上→下) 斜・縦位ミガキ 黒色化 ・ナデミガキ→ナデ 黒色化	
17	ミニチュア (壺)	7.2	3.7	10.5	完存	A	a	・横線文(6本2段) 横位ミガキ→赤彩 ハケ →縦位ミガキ(胴下半) 底面ミガキ ・横位ミガキ→赤彩(口縁) 輪積み痕顕著→ナ デ	
18	壺		3.6		底部完存	A	a	・縦位ミガキ→赤彩 底面ミガキ ・ナデ	胴下半と上半部接 点なし 図上復元
19	甕		5.4		底部2/3	C D	a	・縦位ミガキ 黒色化 ・ナデ	
20	甕		7.8		底部1/3	D	a	・縦位ミガキ 黒色化 ・ナデ 黒色化	
21	高杯	8.0			杯部1/2	A	a	・摩滅 斜位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩	脚部張付け円形接 合
22	高杯	12.4			口縁部1/6	A	a	・横位ミガキ→赤彩 山形突起(口縁端) ・摩滅 横位ミガキ→赤彩	
23	高杯				杯部1/4	A	a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
24	高杯	12.4	7.7	8.7	完存	F	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ(緻密)→赤彩 山形 突起4単位(口縁端) ・横位ミガキ→赤彩(杯・脚)	
25	高杯	9.0	6.0	7.7	完存	A	a	・摩滅 縦・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
26	高杯	12.8			杯・接合部完存	A B	a	・縦・斜位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(杯) ナデ(脚)	
27	高杯	8.8			杯・接合部ほぼ完 存	D E	a	・摩滅 ナデ 黒斑 ・摩滅 横位ミガキ→ナデ	器形の歪み顕著

第3章 各時代の遺構・遺物

28	高杯		9.6		脚部完存	A	a	・縦位ミガキ→赤彩 ・横位ハケ→ナデ 赤色塗彩付着	
29	鉢	9.2	3.2	4.6	完存	A	a	・縦位ミガキ→斜・横位ミガキ→赤彩 底面ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	

SM07

図版No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	18.6	5.8	30.0	ほぼ完存	A	a	・廉状文(6本)→横線文(6本4段上→下)→T字文(6本8単位)→赤彩縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) 篋状工具のナデ	
2	壺	15.2	5.8	(25.5)	口縁・胴下半3/4 胴上半1/4	AE	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 黒斑2 ・横位ミガキ(口縁) ナデ(胴)	口縁と胴接点なし 図上復元
3	壺	14.0			口縁・胴部上半1/4	DE	a	・横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→ナデ	
4	甕		7.8		底部完存	D	a	・摩滅 黒色化 ・ナデ	
5	鉢	13.0			口縁1/2	AC	a	・横位ミガキ(緻密)→赤彩 ・摩滅	
6	甕	10.6	5.6	10.8	口縁1/4 胴部1/2 底部完存	ED	a	・廉状文(6本2廉)→波状文→縦位ミガキ ・摩滅	
7	甕	9.0			口縁1/6	E	a	・摩滅 波状文 ・摩滅	破片多数接合せず 器形不明

SM09

図版No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	甕		8.0		底部1/6	D	a	・ハケ→ミガキ ・ナデ 煤付着 黒色化	

SM10

図版No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	10.0	4.0	14.2	口縁部1/4 底部完存	EF	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(胴) 輪積み痕顕著	
2	高杯	16.8			杯部ほぼ完存	A	a	・ハケ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
3	壺		7.0		底部3/4	AD	a	・摩滅 ハケ 黒斑 ・ナデ	上げ底
4	壺		13.0		底部2/3	A	a	・ハケ→縦位ミガキ ・摩滅	

SM12

図版No	器種	法量			残存度	色調	胎土	・外面調整 ・内面調整	備考
		口径	底径	器高					
1	壺	14.0	(6.0)	(16.5)	ほぼ完存	A	a	・横線文(7本3段)→T字文(7本2条4単位)→縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 黒斑3 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(胴)	
2	壺	10.0	4.3	12.6	完存	A	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 黒斑2 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(胴)	
3	壺	8.4	3.8	12.1	胴部完存	A	a	・ハケ→縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 底面ミガキ ・ナデ(胴)	
4	壺	10.0	5.1	14.0	全形5/6	A	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 黒斑1 ・摩滅 赤彩(口縁)	
5	壺	13.0			口縁・胴部上半完存	AE	a	・摩滅 ハケ→縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(胴)	
6	壺	11.1	4.0	15.0	完存	A	a	・摩滅 横・斜位ミガキ→赤彩 黒斑1 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩(口縁)	
7	壺	8.7	4.8	(10.7)	口縁1/2・胴部2/3 底部完存	A	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 赤彩(口縁) ナデ(胴)	口縁と胴接点なし 図上復元
8	壺		3.8		胴部完存	AB	a	・摩滅 縦・横・斜位ミガキ→赤彩 黒斑 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(胴)	
9	壺	15.6			口縁部1/3	A	a	・摩滅 ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ミガキ→赤彩	
10	壺		5.5		胴部5/6	A	a	・摩滅 横線文(6本4段)→廉状文(7本1廉複数)→横位ミガキ→赤彩 ・摩滅 横位ミガキ(口縁) ナデ(胴)	

11	壺				胴部1/3	A	a	・摩滅 廉状文(8本1廉複数)→ミガキ→赤彩 ・摩滅	
12	甕	15.0	5.6	20.4	ほぼ完存	A E D	a	・摩滅 廉状文(7本2廉)→波状文→縦位ミガキ 黒斑2 ・横位ミガキ(口縁)→ナデ	一部ベンガラ付着
13	甕	11.8	4.8	14.2	ほぼ完存	D E	a	・摩滅 波状文→廉状文(6本2廉)→縦位ミガキ 器壁剥落者 ・摩滅 縦位ミガキ ナデ 黒色化(胴上半～口縁)	
14	台付甕	8.9	5.1	10.6	ほぼ完存	D E	a	・廉状文(6本2廉5単位 2廉の内1廉の止めは弱い)→横位ミガキ ナデ(胴) ハケ(脚) 黒斑 ・横・斜位ナデ ハケ(脚) 黒色化	
15	蓋				撮み部1/2	A D	a	・摩滅 ・摩滅	

SM14

図版No.	器種	法 量			残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	甕	15.0	2.6		口縁部ほぼ完存 胴部破片 底部3/4	B D	a	・摩滅 斜位ハケ ・摩滅	丸底 口縁と胴・ 底部の接点なし 図上復元
2	甕	16.2	7.0		口縁部2/3	D	a	・摩滅 ・摩滅	
3	甕		6.2		口縁部1/2 胴部下半1/4 底部完存	A B	a	・摩滅 斜位ハケ 黒斑1 ・摩滅	胴上半と下半部接 点なし 図上復元
4	壺		5.8		胴上半1/8・胴部 下半ほぼ完存	D A	a	・摩滅 斜位ハケ 黒色化 ・摩滅	胴上半と下半接点 不明
5	壺		5.8		胴部1/6 底部完存	A	a	・摩滅 ハケ 黒斑1 ・摩滅 黒色化 底部焼成後穿孔 孔径3.0×2.45	胴と底部接点なし 図上復元

SM15

図版No.	器種	法 量			残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	壺		8.2			A	a	・横線文(7～8本3段)→T字文(5本2条) 赤彩 器壁剥落 ・摩滅	頸と胴下半の接点 なし 図上復元
2	壺	16.4	5.2	22.6	完存	A	a	・横線文(6本3段)→T字文(6本3単位) 縦 位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩(口縁) ナデ(胴)	
3	壺		7.0		胴部1/2 底部完存	B D	a	・摩滅 ・摩滅	
4	壺		9.0		底部1/3	B	a	・摩滅 ・摩滅	
5	高杯				接合部完存	B D	a	・摩滅 赤彩 ・摩滅 指頭圧痕	
6	高杯		9.6		胴部下半完存	A	a	・縦位ミガキ→横位ミガキ→赤彩 ・ナデ	

土製品

図版No.	器種	直 径	器厚	孔径	重量g	残存度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
7	有孔土製円盤	(4.0)	0.6	(0.4)	5.76	全形1/2以下	E	a	・摩滅 ・摩滅	破片転用 器種不明

SM16

図版No.	器種	法 量			残 存 度	色 調	胎 土	・外面調整 ・内面調整	備 考
		口径	底径	器高					
1	壺	25.0		1	口縁部1/4	A	a	・摩滅 横位ミガキ→赤彩 ・横位ミガキ→赤彩	
2	甕	11.1	5.2	13.0	全形1/2	B D	a	・廉状文(8本1廉複数単位)→波状文(粗)→縦 位ミガキ→横位ミガキ ・横位ミガキ→ナデ	
3	台付甕				接合部1/2	F	a	・縦位ミガキ ・摩滅	

第5節 古墳時代後期・平安時代・近世

1 概観

本遺跡では第2章で述べたごとく古墳前期を境に遺構・遺物が激減する。ことに弥生時代中・後期に集落・墓域として利用されていた微高地からは近世まで明確な遺構・遺物は検出されず、低地に検出された遺構も断片的であった。このことは沖積地の重層面調査といった制約や弥生時代調査面に主眼が置かれた調査上の問題点も指摘されるが、古墳中期以後の本遺跡の土地利用において生活痕跡を残しにくい要因が考えられる。つまり隣接する川田条里遺跡での弥生時代から近世に至る各時代の広域な水田址の存在から、本遺跡も墓域利用以後は耕地となっていたと推測される。数少ない検出遺構はこの耕地（水田）に関連する施設として捉えられる。

古墳前期以後の状況は、出土遺物と検出面から古墳時代後期、平安時代前半期、近世後半期に帰属する遺構が底地に検出された。古墳後期の遺構は溝址2条で南西側低地から微高地に至る地点に土器集中をともなっていた。平安前半期の遺構は微高地西側に溝址溝1条と東側低地に遺物集中が1カ所確認された。

近世面は砂層に覆われた南西低地約1000㎡の範囲に水田関連遺構が確認され、この砂層及び水田耕作土層を前後する時期の土坑が10数基と溝址1条が検出された。

2 古墳時代後期

SD29 (VII区D・Eグリッド) [第229図 PL28]

調査区北西端に位置し、溝両端は調査区外となる。第5層（黒褐色シルト）において南西から北東方向に約21m走行する溝址を検出する。また東寄りで弥生後期面（8層）まで下げて東北東方向に分岐する溝（SD29-2）を約12m確認した。この分岐した溝は調査面の違いから溝幅が狭く表現されているが本来は同一規模であったものと判断される。幅は1.5～2.4m、深さは40cmで断面U字形状を呈する。埋土は黒色粘土で上層（4層）に近似する。遺物は摩滅の著しい弥生後期土器片と木片が少量出土したが本址にかかわる遺物は出土しなかった。検出面から該期の遺構とした。

SD30 (VII区D・Eグリッド) [第229・234図 PL28]

調査区北西端に位置し、SD29と隣接する。第5層（黒褐色シルト）で北東から南西に走行する溝址を約7m検出した。東端は調査区外となり、西側は調査上の制約により上面を一部削平され全容が不明となるが南西方向に弧状に連続する形状を示すと判断され、SD29に接していた可能性がある。埋土は黒褐色粘土でSD29同様に上層（4層）に近似する。幅は60cm、深さは20cmで断面形は緩いU字形状を呈する。溝底面は凹凸が著しい。遺物は北東寄りに多量の土器片が集中して出土し、一括廃棄された状況を示す。土器は全て破片資料であるが長胴甕4～5個体（1～6）と、内面黒色処理した高杯（7）等があり古墳後期前半（6世紀代）に帰属する。

3 平安時代前半期

(1) 溝址

SD45 (VI区Aグリッド) [第231・233・234図 PL28]

東西正方位に走行する溝1条が約12m検出された。弥生後期面（8層）での検出であり溝幅は約60cm、

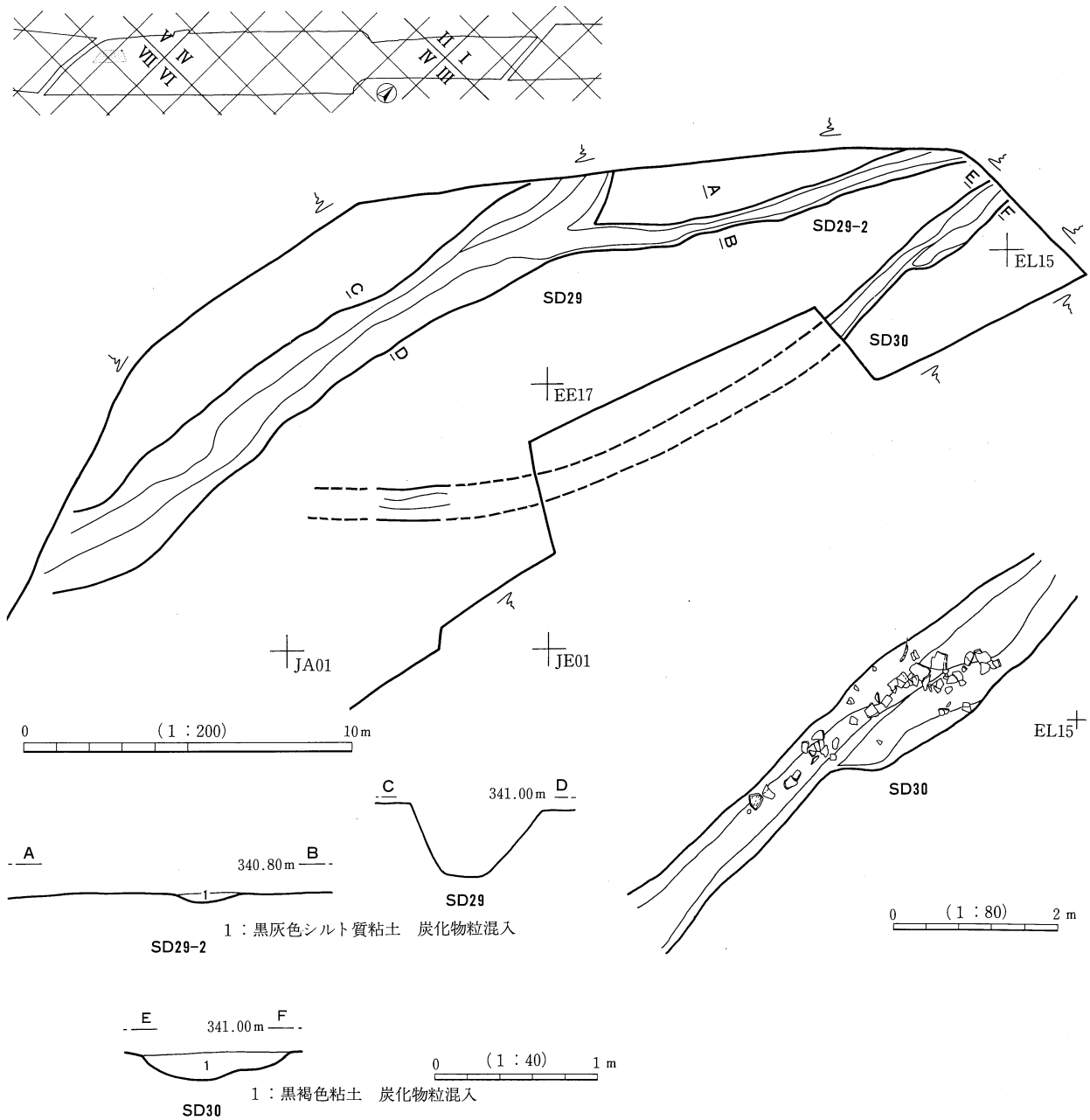
深さは僅かに15cm程度であったが、埋土は黒褐色シルト質粘土で平安前半期の遺物が複数出土した。本址は走行する方向から条里型地割の一部を形成すると考えられ、川田条里遺跡の平安水田の成果が注目される。

(2) 遺物集中

東側低地遺物集中 (I区Uグリッド) [第231・234図 PL28・52]

泥炭層下部及び明灰色粘土層から板材とともに須恵器長頸壺1点(1)が単独で、隣接地点から坏3枚が重なった状態で出土した。坏は土師器1点(4)、須恵器2点(2・3)で『廣』(?)『广■』の墨書が認められた。平安時代の遺物が出土した明灰色粘土内には縄文晩期～弥生後期の土器も採取され、本址周辺が縄文晩期から流路と低湿地を繰り返した地形であると理解される。

複数個体の坏の出土は、長野市石川条里遺跡で水田畦畔脇から10枚重ねの坏の事例(文1)があり、祭祀



第229図 SD29・30実測図及びSD30出土遺物状況図

行為とする考え方もある。本址の事例と出土立地や個体数では異なるが、当該期に本遺跡が水田であった可能性もあり、同様の性格付けができる。

4 近世

調査区全域で検出された近世洪水砂層（2層）はⅦ区Ⅰ・Ⅱグリッドにおいて20～25cmの堆積厚となり畦畔が完全に被覆された状況で検出された。水田遺構は東西畦畔6条、南西畦畔6条の計12条と溝1条で、東西畦畔には溝を挟んだ大畦畔が2条確認された（以下近世埋没水田とよぶ）。耕作土は褐灰色粘土（3層）で下部には鉄・マンガンの集積が顕著に認められ、洪水砂層を除去した水田面には東西方向に列状に並ぶ凹凸が明瞭に検出された。この凹凸は耕作時に生じた歩行の痕跡として捉えられる。^(註1)

畦畔・水田面のほか近世埋没水田耕作土直下を検出面とする土坑が4基と溝1条、洪水砂層上面に掘り込みをもつ土坑が6基検出された。前者は埋没水田直前の遺構で中世～近世の時期が該当し、後者は洪水直後の水田遺構と捉えた。洪水砂埋没後の土坑6基のうちSX01～05は埋没水田内に位置し、水田区画の制約を受けた配置を示し前代の地割を踏襲していたものとみられる。

(1) 近世埋没水田址

水田区画（畦畔）（Ⅶ区Ⅰ・Ⅱグリッド）[第230・231図 PL28]

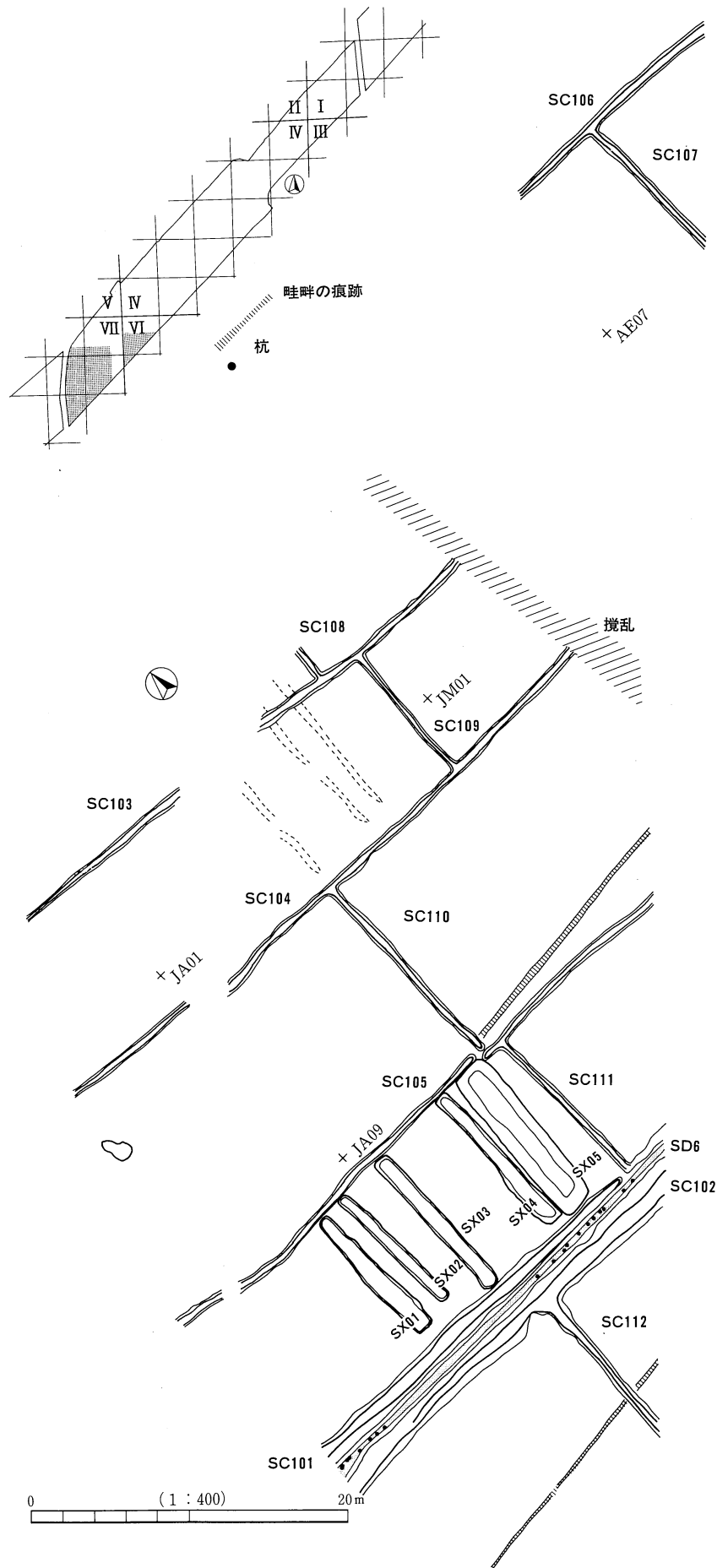
大畦畔を含めた東西畦畔6条（SC101～106）は全て東西に連続する畦畔区画となり、南北畦畔6条（SC107～112）は東西畦畔を阿弥陀状に結ぶ形態で短い区画となる。東西大畦畔（SC101・102）は幅約4mで30mにわたって検出され、中央部に溝（SD06）がある。小畦畔は上面幅30～40cm、下面60～80cmで、水田面から20～25cmの高まりとなる。大畦畔2条の方向軸は東西にぶれることなく走行し、地割の基本となる恒常的な区画と見ることが出来る。東西小畦畔は大畦畔北側に4条平行して検出され、SC101から約12m間隔においてSC105、更に約14mにおいてSC104、約11mにおいてSC103、約14m離れてSC106が位置する。畦畔の軸方向はSC106が大畦畔と同様東西軸となり、SC105がE-2°-N、SC104とSC103がE-5°～2°-Sとなる。SC103～SC105は蛇行形状で走行するため方向にぶれを生じている。南北小畦畔は東西畦畔を交差して連続することなく小区画として付設されている。畦畔の軸方向はSC107・SC111が南北を示しSC110・SC112がN-2～3°-E、SC108・SC109がN-4°-Eであった。畦畔施設ではSC105とSC110の交点、SC101とSC111の交点に水口が検出された。

水田面は連続歩行の凹凸以外に、不規則な円形凹凸の連続密集が列状にあり旧水田の区画畦畔の痕跡とみなされる。この畦畔痕跡は、SC112に交差する南側とSC105の北側に検出され、やや北側にずれた方向に走行する（E-5°-N）。またSC103、SC104内の水田面には南北方向に浅い窪みが3条走行していた。

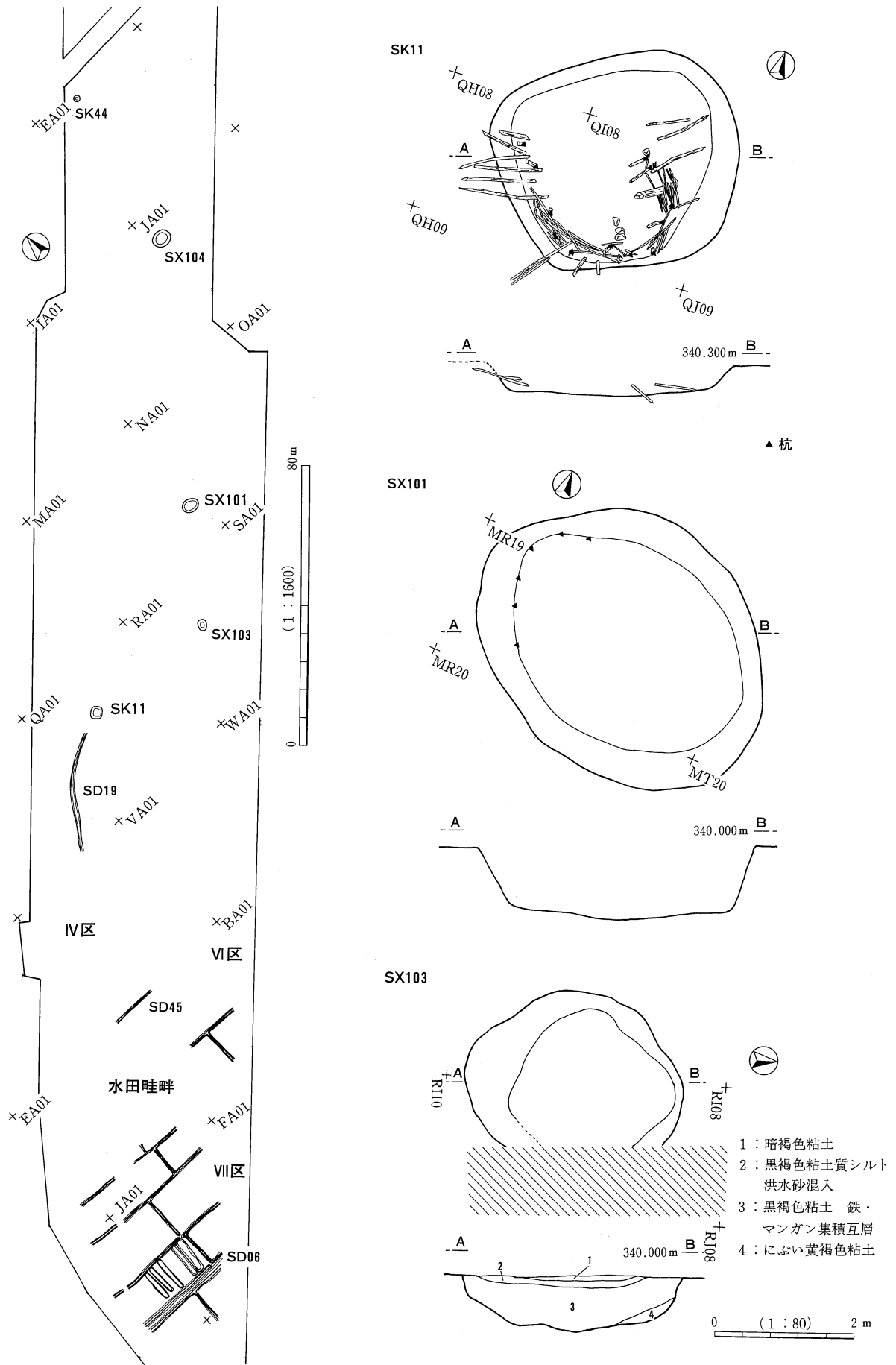
近世水田地割は東西方向の区画を基本とし南北方向を細分区画する形態である。水口は水田東側に設けられており北西から南東方向への水田傾斜、水回しとなる。水田一筆の規模は完全な形で確認されなかったが東西畦畔SC106とSC103、南北畦畔SC107とSC108を延長した区画の水田面が35.5×14mで、497㎡になる。一歩3.3㎡（一反991㎡）とするとほぼ½反にあたる。

SD06（Ⅶ区Ⅰ・Ⅱグリッド）[第230・231図 PL28]

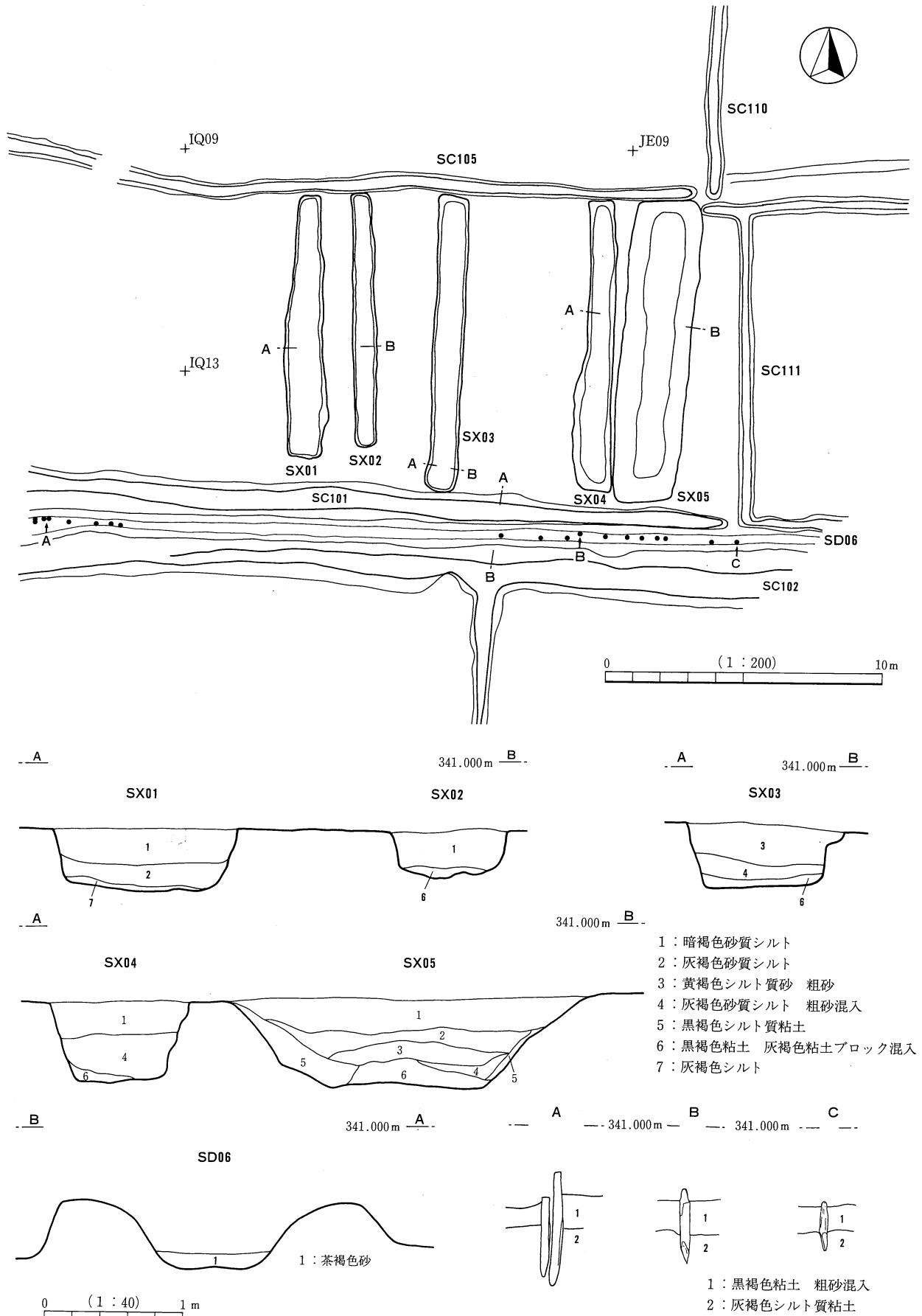
東西大畦畔（SC101・102）に挟まれた状況で東西方向に走行する溝址が約30m検出された。東西両端は調査区外に至る。本址上部は大畦畔を含め部分的に攪乱をうけていたため規模が均一であったか判然としない箇所もあったが、畦畔上部での溝最大幅1.5m、底面幅0.6mとなり断面逆台形状を呈する。埋土は水



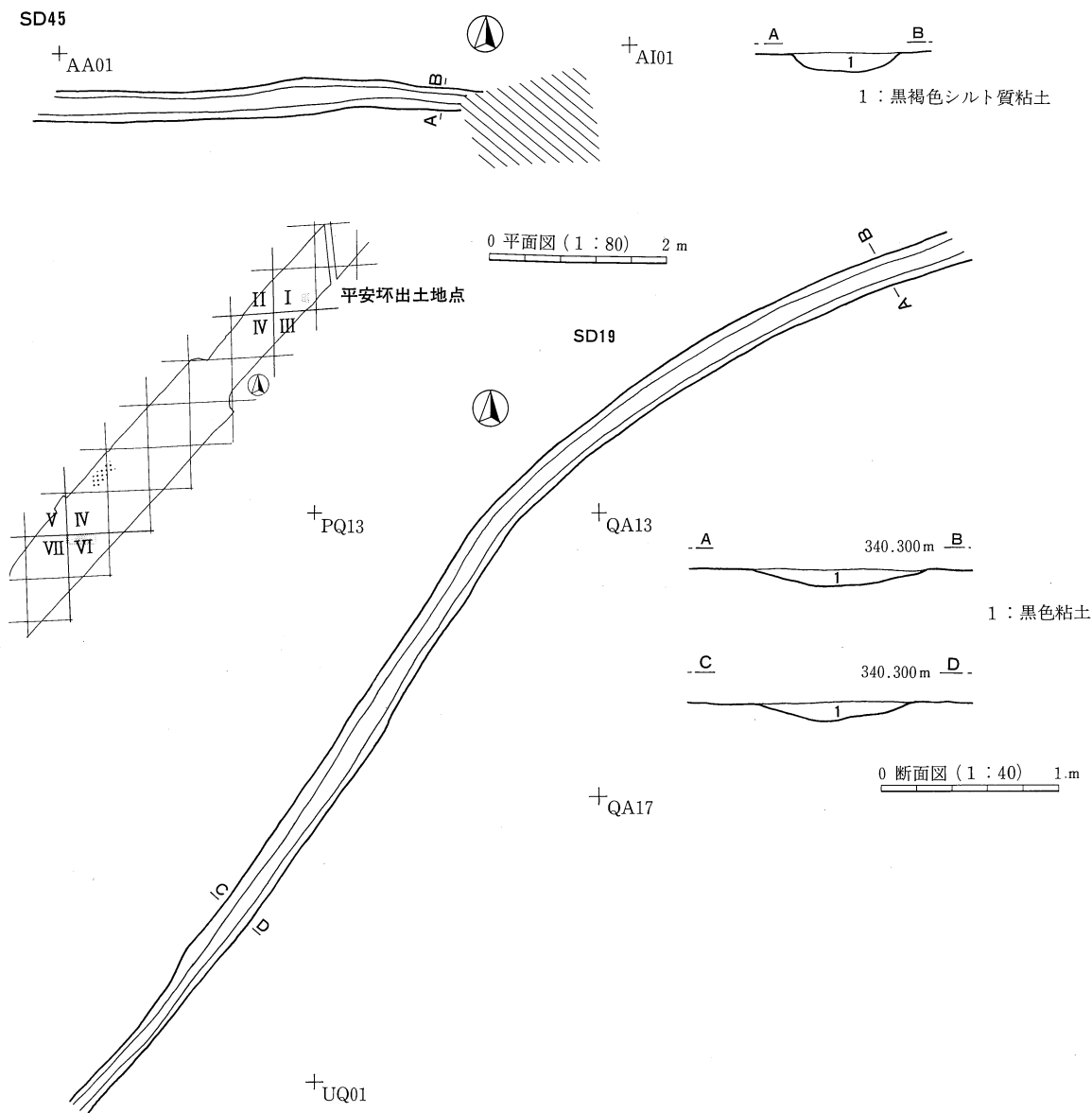
第230図 近世水田址全体図



第231図 平安～近世遺構分布図及び近世土坑実測図



第232図 近世水田溝址断面及び近世埋没水田上層遺構実測図



第233図 SD19・45実測図

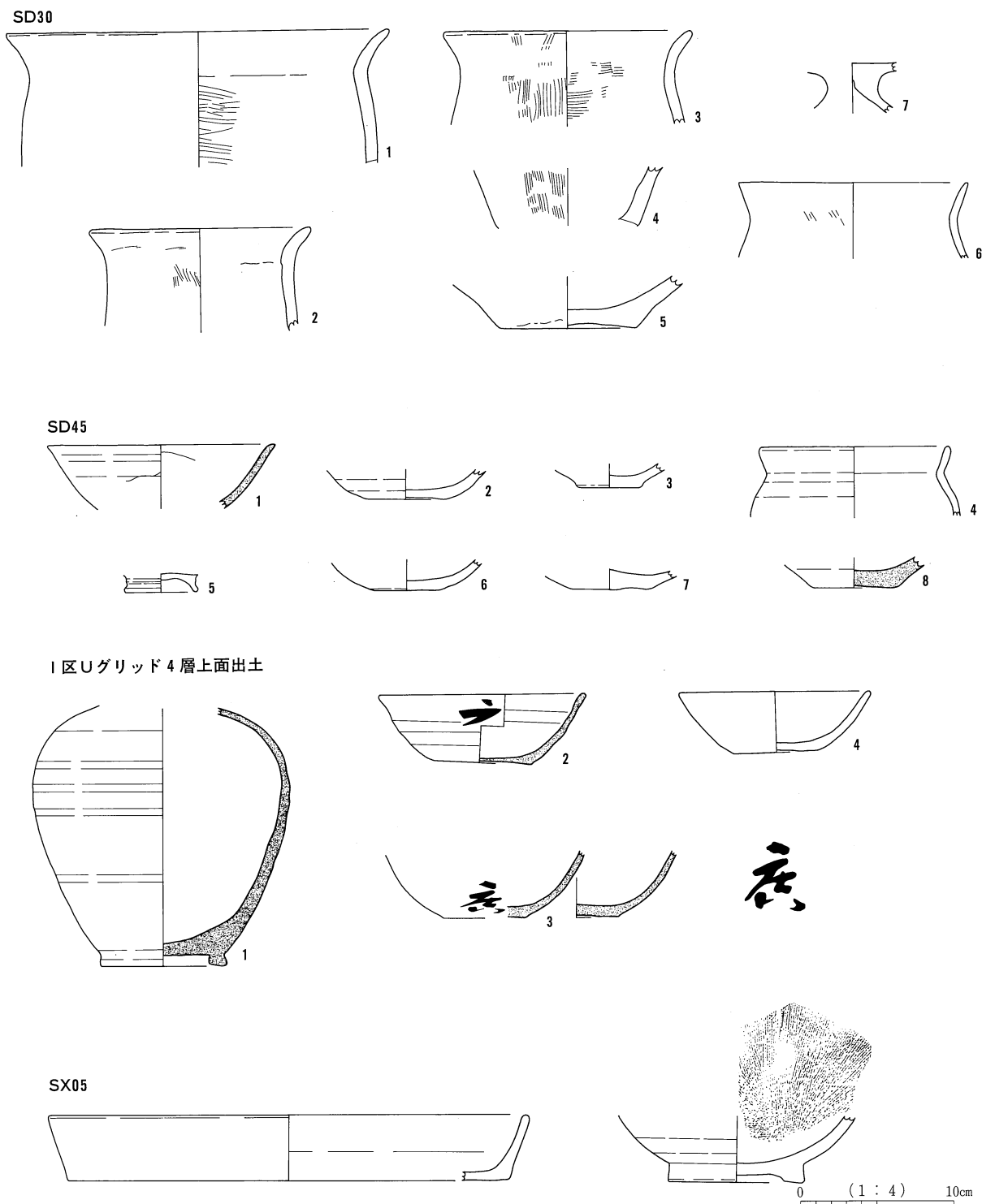
田面を覆っていた砂層であり、下部は鉄・マンガンの集積を受け茶褐色に変色していた。本址も水田面と同様に洪水時に埋没し、その後溝として復旧されていない。

溝底と隣接水田面との比高差は北側が-15~20cmで、南側が-5cm前後とほとんど差がない。このことは本址が北側（高地）水田の排水と南側（低地）水田の配水機能を備えていたと見ることができる。溝内には杭が18本打ちこまれた状態で検出された。これらの杭は溝中央寄りの東西護岸脇に位置し、畦畔盛り土内に包蔵された状況にないことから、護岸補強施設として列状に配置されたものと判断される。杭配置の平面位置は東西2カ所に集中し、東寄りの杭列地点はSC111との交点にあたり水口がある。おそらく杭列は排水上の補強と考えられ、西寄り杭列の西側は未調査区であるが畦畔と水口が想定される。杭はいずれも丸木芯もち材で、先端部は尖り20~40cmの深さに打ち込まれていた。

(2) 近世埋没水田上層の遺構

SX01~05 (VII区 I・J グリッド) [第232・234図 PL28]

東西畦畔SC101（大畦畔）とSC105、南北畦畔SC111に囲まれた水田内に南北に細長い長方形土坑5基が



第234図 SD30・45・I区Uグリッド4層・SX05出土土器実測図

検出された。検出面は近世洪水砂の上面で、洪水砂を切って構築された遺構である。5基の土坑は9.2~10mのほぼ同一の長さとなり、幅はSX05のみが2.4mと広いほかは1.2~1.5mである。深さは検出面から40~60cmでほぼ垂直に掘り込まれている。埋土は褐色の砂質シルトを主体とし、部分的に粗砂、粘土ブロックを混入する埋め戻し土である。遺物はSX05の底面から部材が1点出土した(第240図25)ほか焙烙、摺り鉢片が出土した。これら5基の土坑の性格は不明であるが、埋没水田の区画内に収まる規模を有し、長軸方向が南北畦畔と同一を示す点から洪水直後の耕作にかかわる遺構とみなされる。

SK44 (IV区Eグリッド) [第231図]

東西方向にやや長い1.6×1.5mの規模を有する円形土坑である。検出面からの深さは52cmで埋土は褐色粗砂ブロックを混入した暗褐色粘土である。遺物の出土はない。本址と同様の土坑はIV区Mグリッド内にも数基検出されたが性格は不明である。

(3) 近世埋没水田下層の遺構

SK11 (IV区Qグリッド) [第231図]

東西方向に長軸をとり3.6×2.8mの規模の隅丸台形を呈する。深さは45cm黒褐色シルトを埋土とし礫と枝材が多数出土した。土坑壁には西から南、北東へと弧状に杭があり、立ち杭が11本、壁面横倒しの杭が11本検出された。杭列には細い枝を横木とし柵を形成する。本址の性格は不明である。

SX101・103・104 (IV区M・R・Jグリッド) [第231図]

3基の土坑は3層内を検出面とし、いずれも80cm前後の掘り込みとなり不正円形プランを呈する。埋土は黒褐色粘土を基調とし、鉄・マンガンの集積が互層をなす。SX101は東西方向が長く4.6×3.6mの規模となり、南西壁沿いには6本の杭が検出された。SX103は現用水路に東側一部を削平され、規模は判然としない部分があるが3.2×2.8mに復元される。SX103にも西壁沿いに1本の杭が検出された。SX104は6.2×4.2mの大形であるが施設はない。SX101・103はSK11と類似し同一形態の土坑と考えられる。

SD19 (IV区P・Qグリッド) [第233図]

本址は基本土層3層内を確認面とし、IV区P・Qグリッド内に遺構の一部のみを検出した。本址は調査域広範囲に存在した遺構と推察されるが、遺構面への攪乱が随所に見られたことと弥生後期遺構群の調査に主眼を置き確認面を除去して掘削調査したことにより部分検出となった。溝幅80～90cm、深さ12cmで、南西から緩やかに湾曲して北東へ約37m走行する。埋土は黒褐色粘土である。近世水田層下部の遺構であることから先述したSK・SXより古く中世の可能性はある。

文1 長野市教育委員会：1989「石川条里遺跡(4)」

註1 近世水田に関しては川田条里遺跡で詳細な調査が実施され、稲株の配列や水田面の凹凸に関する検討が行われている。本址は川田条里遺跡E-2地区近世水田と同一時期の埋没水田として、水田区画を含め所見に異なる点はない。川田条里遺跡報告書を参考にされたい。

第4章 遺物各説

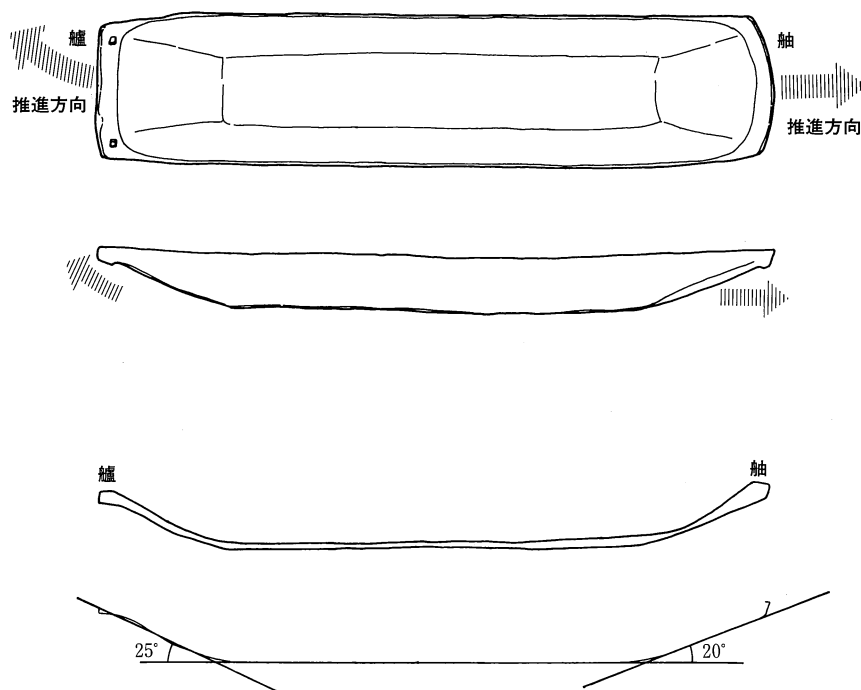
第1節 木製品

丸木舟 (第235・236図1 PL78・79)

本丸木舟は、縦・横に3～4分割され、弥生後期の井戸（SK43）の方形井筒として転用されていた。横枠に使用されている井筒材を接合復元した結果、一艘の丸木舟であることが判明した。

全長290cm、最大幅64cm、最深長28cmの規模となり、長方形大型槽の形状である。両端の平面形は舳が緩やかな外湾形状、艫が直線形状で艫綱を留める方形の穴が2カ所に穿孔されている。舳、艫先端の底には方形の突起が2カ所ずつ削り出されている。艫綱の穴は舳に向かって左側が一辺2.8cmでほぼ垂直に穿孔されているのに対し、右側が3.0×2.8cmとやや横に広く孔部中程が左方向（内側）に大きく抉られている。この艫穴には舳方向（前方）に向かって左側に激しく擦れた摩滅痕が確認される。舳幅は59cmで舟底面との水平角は20°であり、舳底面の中央ラインが僅かに突出し傾斜の極めて緩い『V』字のキールラインを呈する。艫幅は56cmで舟底面との水平角は25°、艫底面は平坦で舳に向かって左側に摩滅痕が残る。舟底幅は最大で32.8cmで全体は平坦底となる。

舳に確認されたキールラインは明瞭なものではなく、緩流で自在に方向転換をする利用が考えられる。艫底面に残された摩滅状況は、艫に向かって右斜め方向に力が加わった痕跡とみなされ、艫綱の擦れ痕と合わせて考えると、綱によって左後方（艫に向かって右前方）へ引っ張ったものと推定される。



第235図 丸木舟の構造

容器 (第237図6 巻首写真 PL80)

剝物の片口鉢が1点あり、弥生後期SB30の支柱穴内からの出土である。容器内・外全面には赤漆が地に塗り込められ、口縁端部には黒漆による鋸歯文(刻み目状)が施されている。平面形は注ぎ口方向に長軸をとる楕円形で、長さ約1.5cmの注ぎ口が突出する。注ぎ口断面は円筒形で欠損部を考慮すると5/6円弧の管に復元される。本容器は赤と黒の漆を施した特殊な片口鉢であり、出土住居及び本集落の特異性を示す資料である。

武器 (第237図2 PL80)

丸木弓1点が、弥生後期の溝址SD47内から出土した。ほぼ中央部から折損し、全長は160cm程度に復元される大形の武器弓である。一端の弓弭が完存し一般的な凸型形態となる。外湾面には幅1.0cmの樋が彫り込まれ、弓弭から50cmまでに樺皮を巻いた細かな擦れ痕が顕著に残る。

農・工具 (第237図3～5 PL80)

弥生後期の農・工具類の柄が3点ある。3・4は膝柄で3は手斧(鉄斧か)柄、4は鍬膝柄の身部装着部で、5は削りだしによる丸木柄である。3・4は竪穴住居、5は井戸からの出土である。農・工具としては断片資料であるが集落遺構から出土した特異な例である。

建築材 (第238～244図 PL81～87)

柱材 (第257・258・261・262図 13・17～21・40・42・46・47)

本遺跡には竪穴住居及び掘立柱建物址の柱穴や出入り口施設から数多くの柱材が残存し、SD47・48からはほぼ完存する柱材が出土した。柱穴内に柱材が出土した遺構は以下の通りであるが、劣化や破損が著しく形状等の記録が可能な材は少ない。

- ・掘立柱建物…ST01ーピット3・4、ST101ーピット6・11・14、①群ピットーSK18・22、②群ピットーSK111
- ・竪穴住居 …SB06 P₃(出入り口) SB11 P₅(出入り口) SB30 P₄・P₅(支柱穴) P₆・P₇(出入り口) SB32 P₁ SB102 P₅・P₆(出入り口)

17・18は竪穴住居の柱で径16cm、17はSB30支柱穴内、18はSB31埋土下部から出土した資料である。両者には綱留めの抉りがあり、17には細かな手斧痕が残存する。19・20・21は掘立柱建物の柱で最大径20～25cmとなる。19・21の残存する木口(下部)には手斧痕が残り、平坦面を作り出している。13は高床構造の柱で幹側の木口には2方向から鈍角な削りがあり、枝側の木口には径4.5cmの柄がある。表面には丸木材から形状を整えた手斧痕が明瞭に残るが、幹側木口から90cmまでは劣化が著しい。この加工痕の不目瞭な部分が土中であつた痕跡と見られ、残る1.6m程が地上に突出した高床建物と推定される。

40・42・46・47は竪穴住居の出入り口施設ピット内出土である。全容を知る資料はないが、一辺10cm程の板目もしくは斜めの角材であつたと推測される。

垂木・扱首 (第248・249図 7～12・14)

7～11は流路のSD47・48の柵出土、12はSB31からで、全て弥生後期に帰属する。7・8・9は棟材にかかる抉りがあり、7・8には抉り加工の裏面を入念に削り平坦面を作り出し7は先鋭状、8は有頭状となる。7・8の全体形状は抉り面に湾曲(撓み)をもつ。9は約10cmの間隔に2カ所の抉りがあり、先端部の抉りに対し下段部の抉りは45°ずれた面に位置する。10・11はいわゆる有頭状木製品であり、削りによる入念な有頭部の作り出しの加工痕が残存する。両者は残存長が短いため抉りは確認されなかったが、

棟材もしくは桁材にあたる抉り加工が入ると推測され垂木とした^(註1)。12は抉り部を部分的に残すが大半を欠損し全容は不明である。残存する木口は斜めの切断痕があり、抉り部とほぼ90°に木面がずれている。12は垂木としたが横架材の可能性もある。

14は枝側木口を欠損し全形は不明であるが、径約12cm、全長2mの大形材である。幹部木口は先端の一部を欠損するが、斜め形状もしくは有頭状に作り出した削り痕がある。幹部木口寄りに2.5cmの深い抉りが2カ所と側面に浅い抉りが1カ所あり、深い抉り面とほぼ反対面の枝側に1カ所の抉りがある。幹側の抉り部で棟木を支え、枝側の抉り部が桁材に掛かると推測され扱首とした。

板 材 (第239・241～243図 15・16・22～39)

部材は竪穴住居 (SB30・31)・井戸 (19・35) の埋土から少量とSD47・48の柵周辺から多量に出土した。SD47・48出土部材は26の楕材、16・35・36の大形板目材、15・22・23・24の方形の柄穴・仕口を有する板材があり高床建物の構造材と見られる。これら部材の残存する木口には木表・木裏から削りによる切断痕が残る。26の楕材は隣接する川田条里遺跡からも数点出土しており、同一種の建物の廃材を利用して水田区画や用水施設を築造したと捉えることができる。大形板目材は台輪材、床板材とされ、16・36は数少ない完存する部材である。15は一端木口に約2.0cmの削りによる段差の柄と、更に反対面に仕込み栓の柄穴をもつ仕口を削りだした部材で、台輪、桁材の可能性がある。22・23は中央部に一辺1.5cmの方形柄穴が複数並ぶ材で、木表には手斧痕が明瞭に残る。竪穴住居出土板材は全て破損資料で構造を知る部材はないが、37は幅21cmの大形板材であり1.5～2.0cmの厚みをもつ板材である。また焼失住居出土の炭化材である中期SB01からは板材のほか割り材、カヤの丸木材が出土した。25は近世土坑SX05内出土で、転用加工された部材である。

杭 (第244～246図 43～45・48～60 PL88～90)

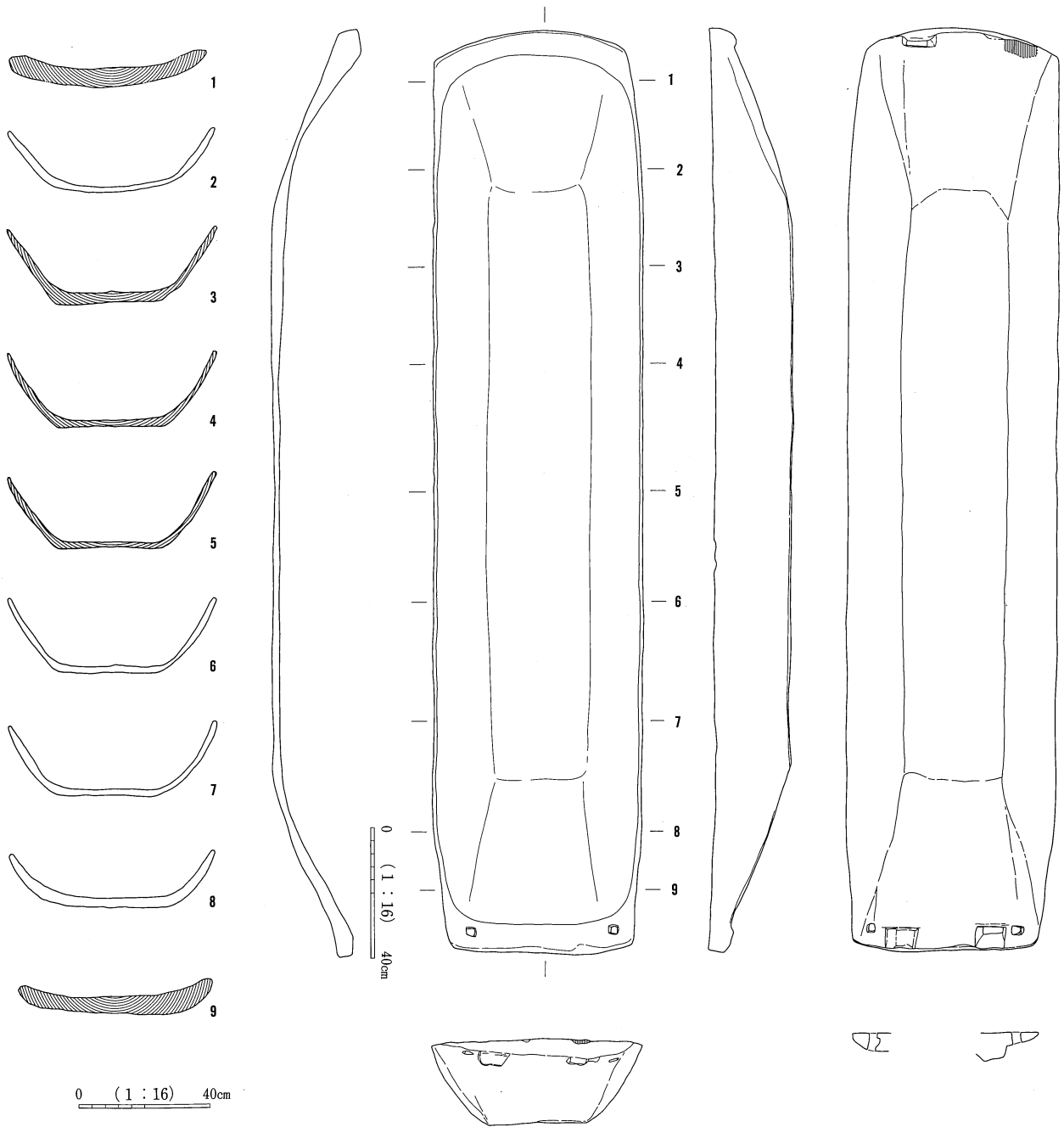
本稿で扱う杭は遺構内に立ち杭として機能していたもの、もしくは杭と推測される先端加工を施したものを指す。杭が検出された遺構は弥生後期と中・近世であり、弥生後期では竪穴住居施設と井戸井筒関連施設、SD47・48内の柵、中・近世では水田内の溝 (SD06) 施設と土坑内施設である。

弥生後期の杭は、部材から転用された杭 (以下転用杭とよぶ) と自然木を素材とした杭があり、後者は加工形状から割り材と丸木材に分類される。43・44はSB20北側壁沿いに検出された杭で、木取りは丸木材であるが先端に鈍角な抉りがあり頭部を作り出していた痕跡が認められた。樹種はイヌガヤ、カヤといった弾力性が強い材で、垂木転用材の可能性が高い。49・50は丸木舟を井筒した井戸の隅柱 (49) と側板の杭である。丸木材と割り材を素材とした杭であるが2方向からの単純な削りによって先端部を作り出している。50・51・53・57～60は溝内の杭である。51・53は建築材 (板材) 転用、50・57～60は自然木を素材とし50は割り材、ほかは丸木芯もち材である。先端加工は51・53・58・59が周縁から鋭角で緻密な削りを施し、50・57・60が2～3方向からの比較的な単純な削りを施している。

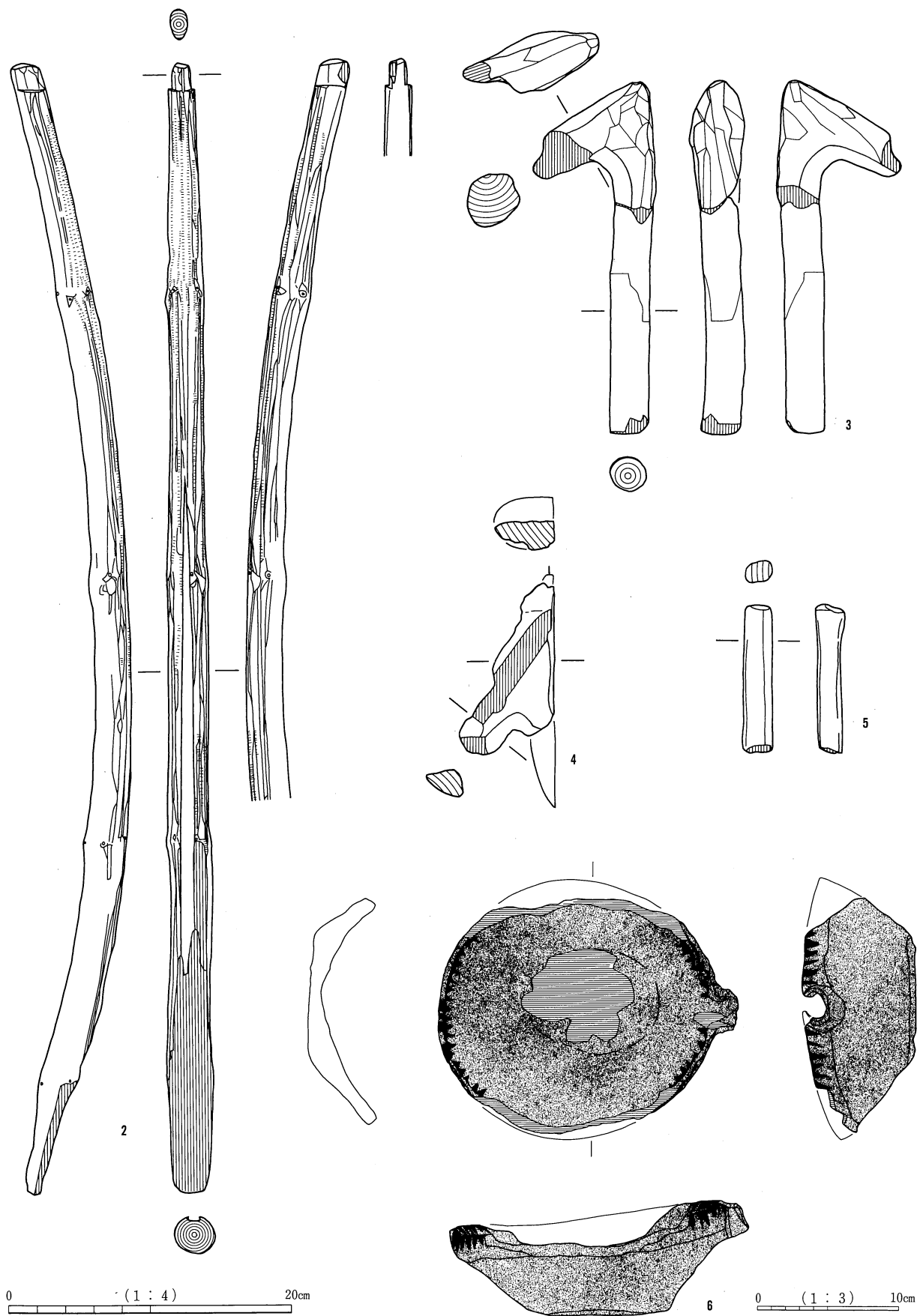
48は全長154cmの弓状木製品で幹部木口に先鋭加工が残る。弥生後期の井戸内に斜位で出土し、用途不明であるが杭とした。

近世の杭はSK11、SX101・103、SD06から多数出土した。図示した杭は3点のみであるが樹種、素材及び先端加工形状は同一である。径6cm前後の丸木芯もち材を素材とし、先端は4ないし5方向から数回の切断面で鋭角に尖らせている。枝方向に杭の先端加工を施す特長があり樹種はアカマツが大半を占める。

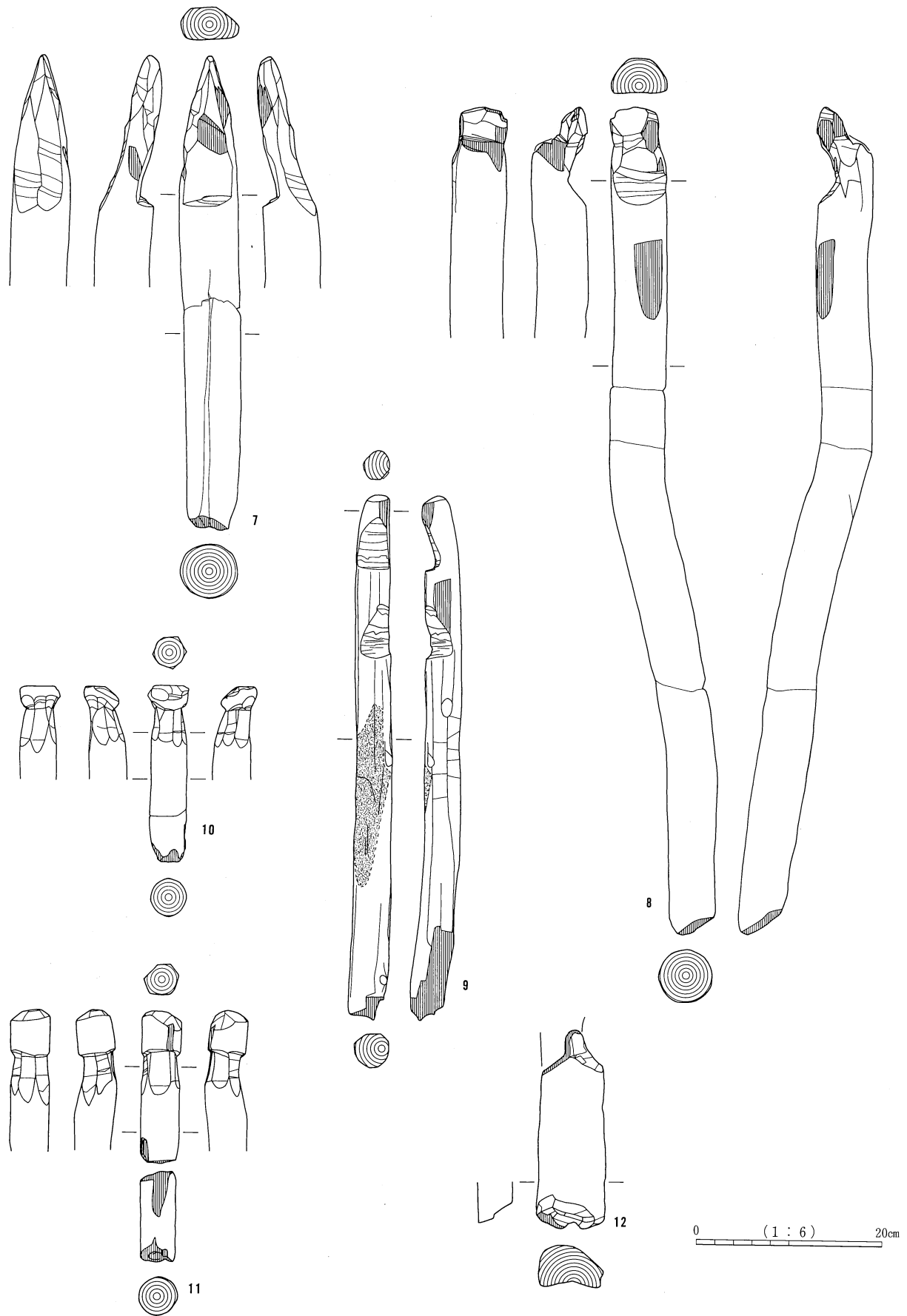
註1 長野県埋蔵文化財センター1997「石川条里遺跡 第3分冊」第8節の有頭状木製品IV類となる。



第236図 丸木舟



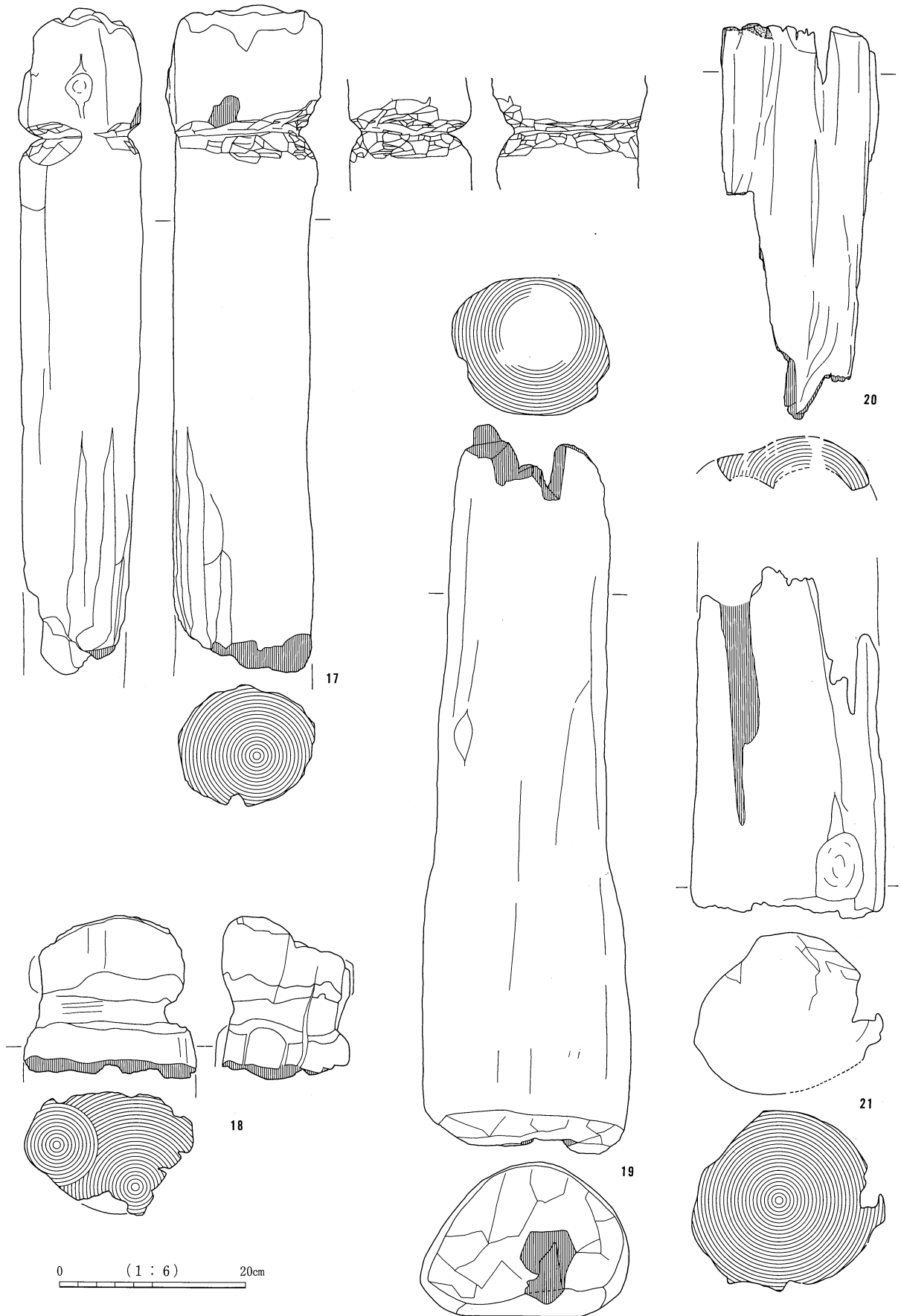
第237図 容器、武具、農・工具柄



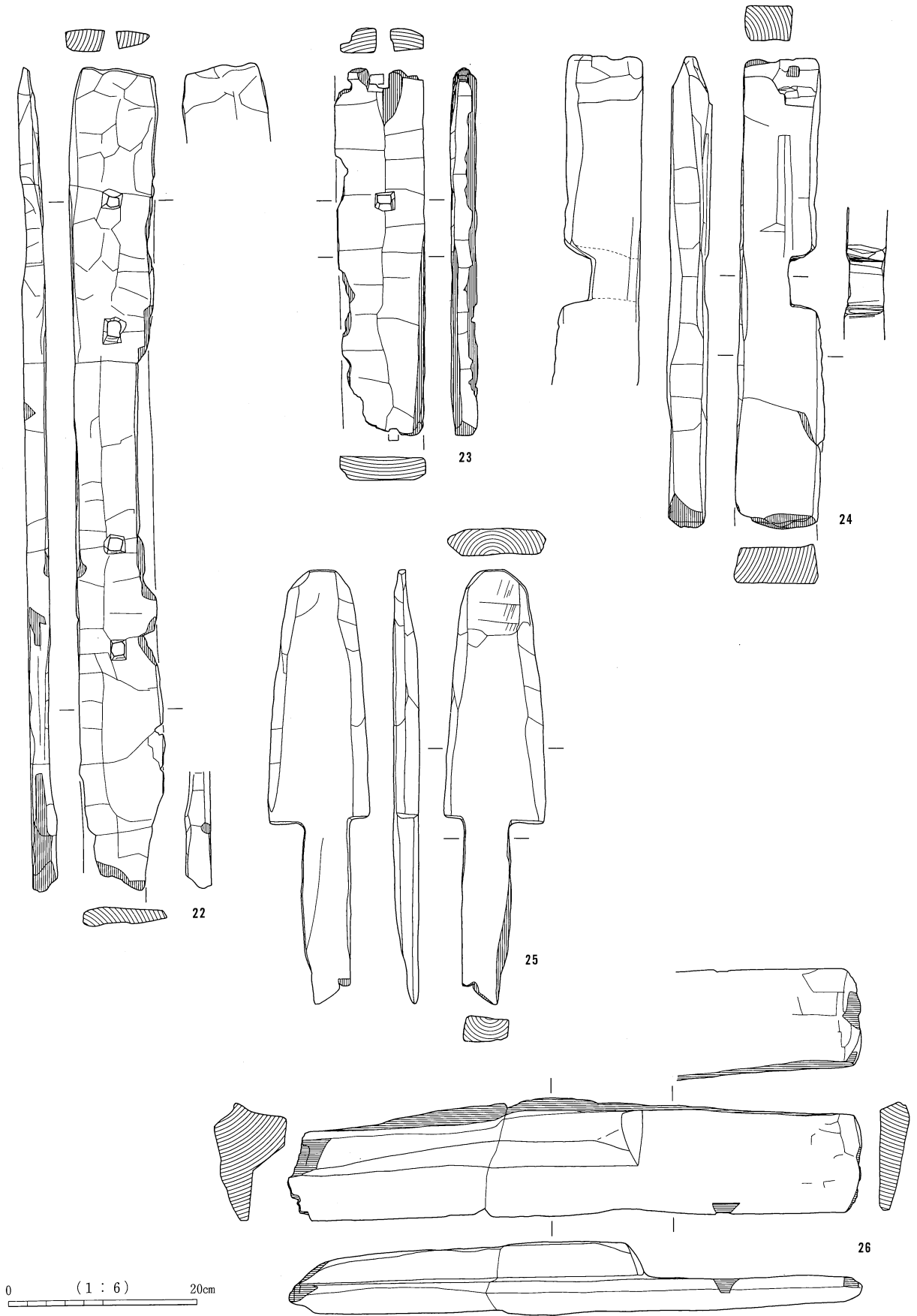
第238図 建築材 1



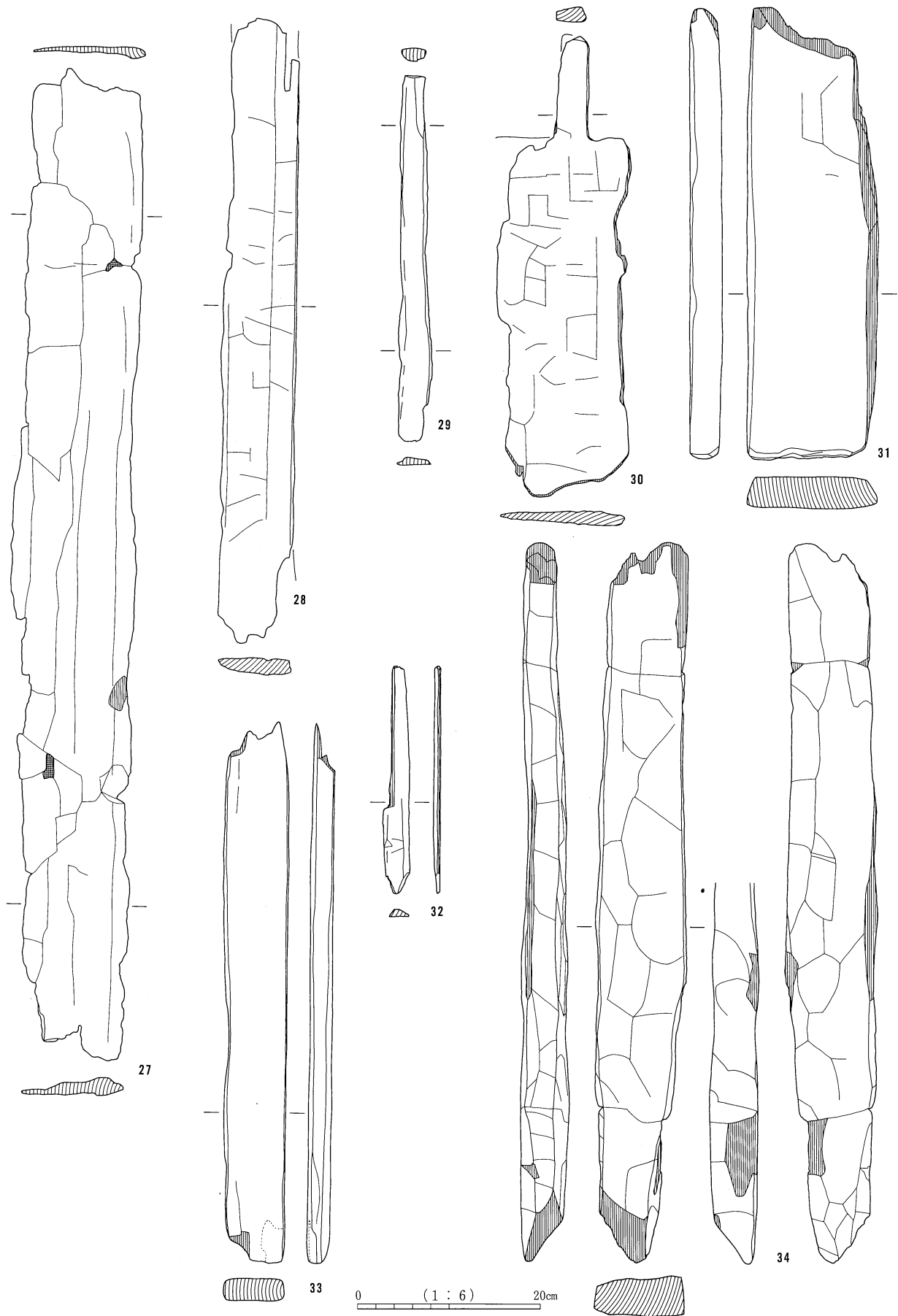
第239図 建築材 2



第240図 建築材 3



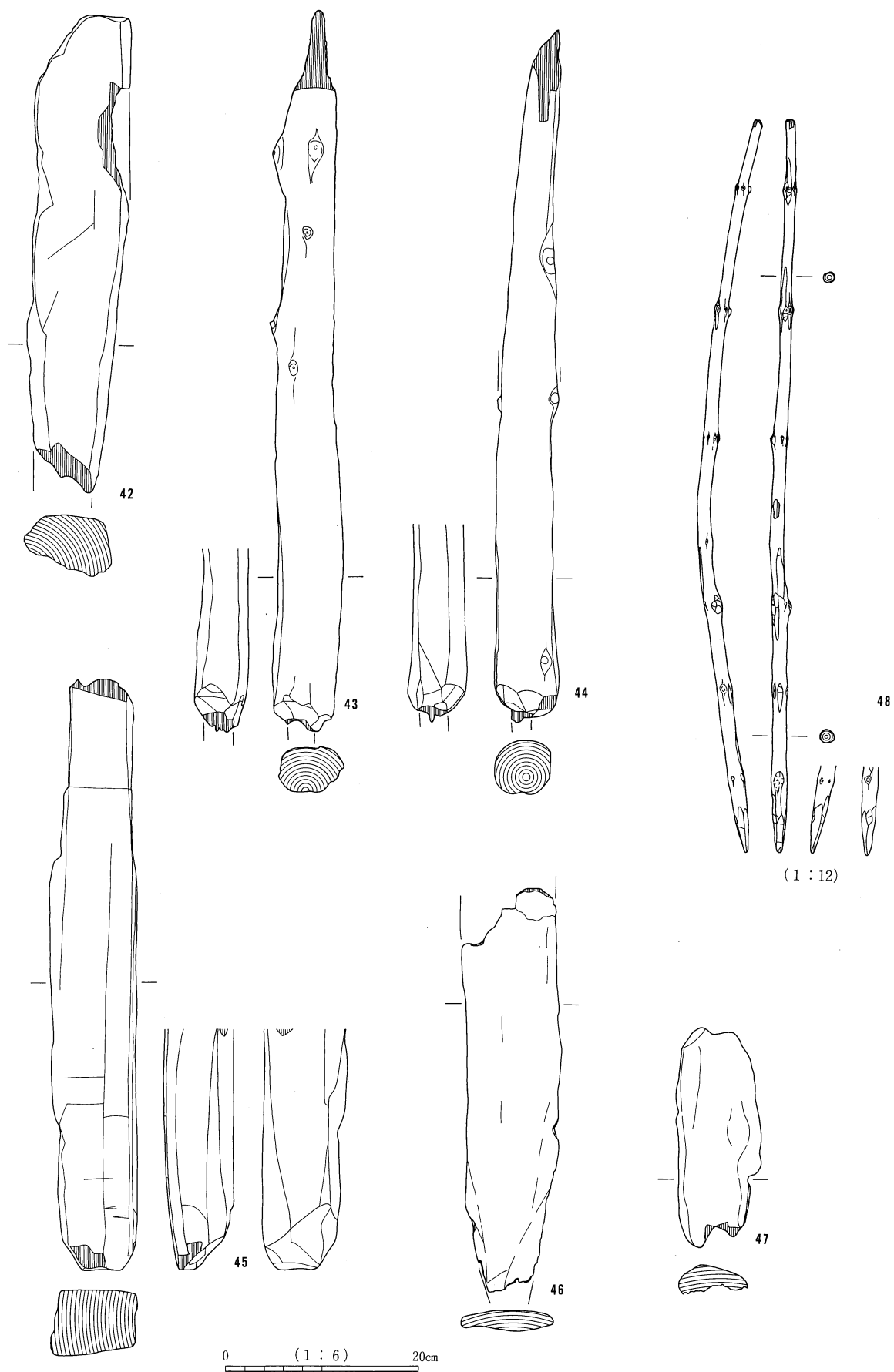
第241図 建築材 4



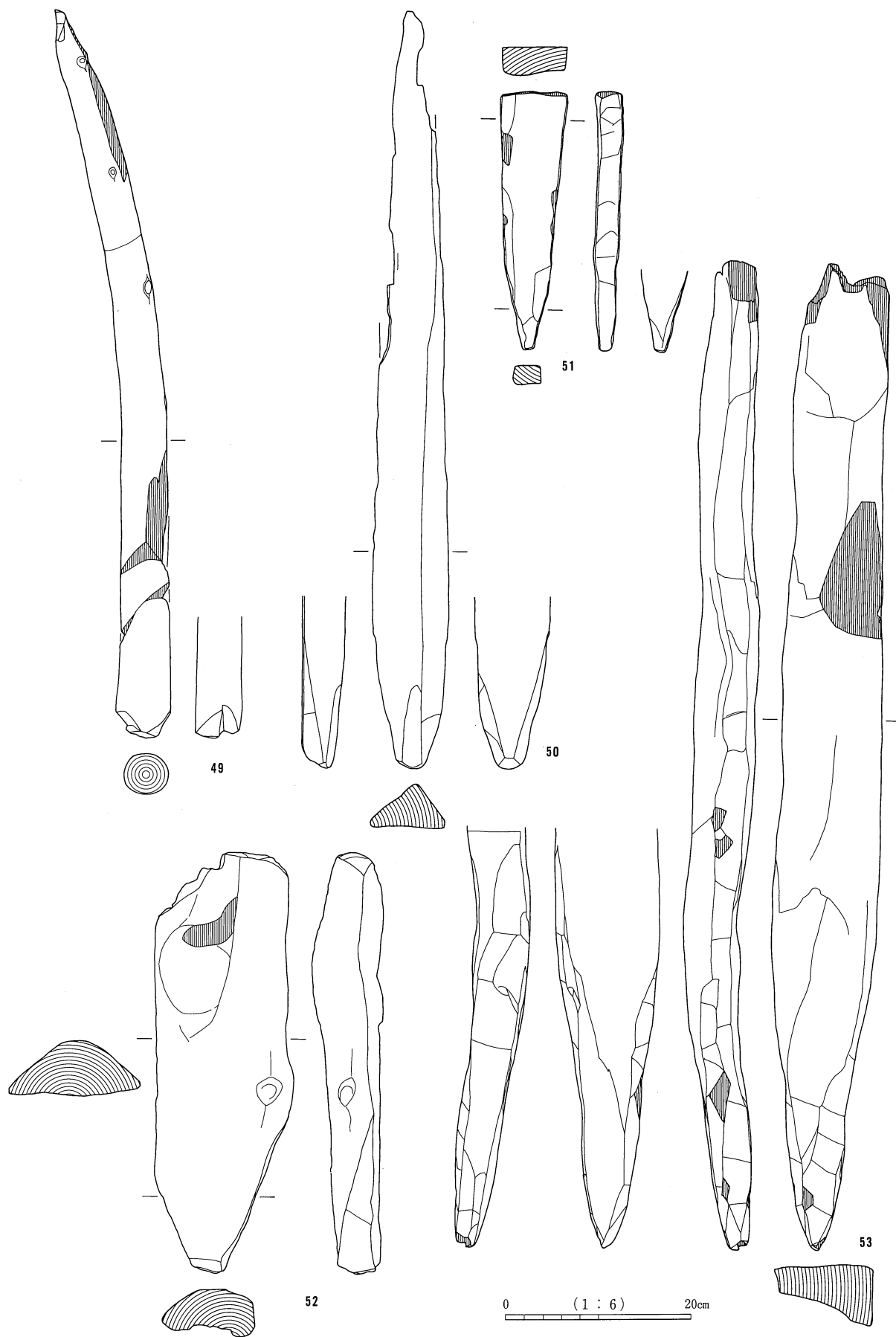
第242図 建築材 5



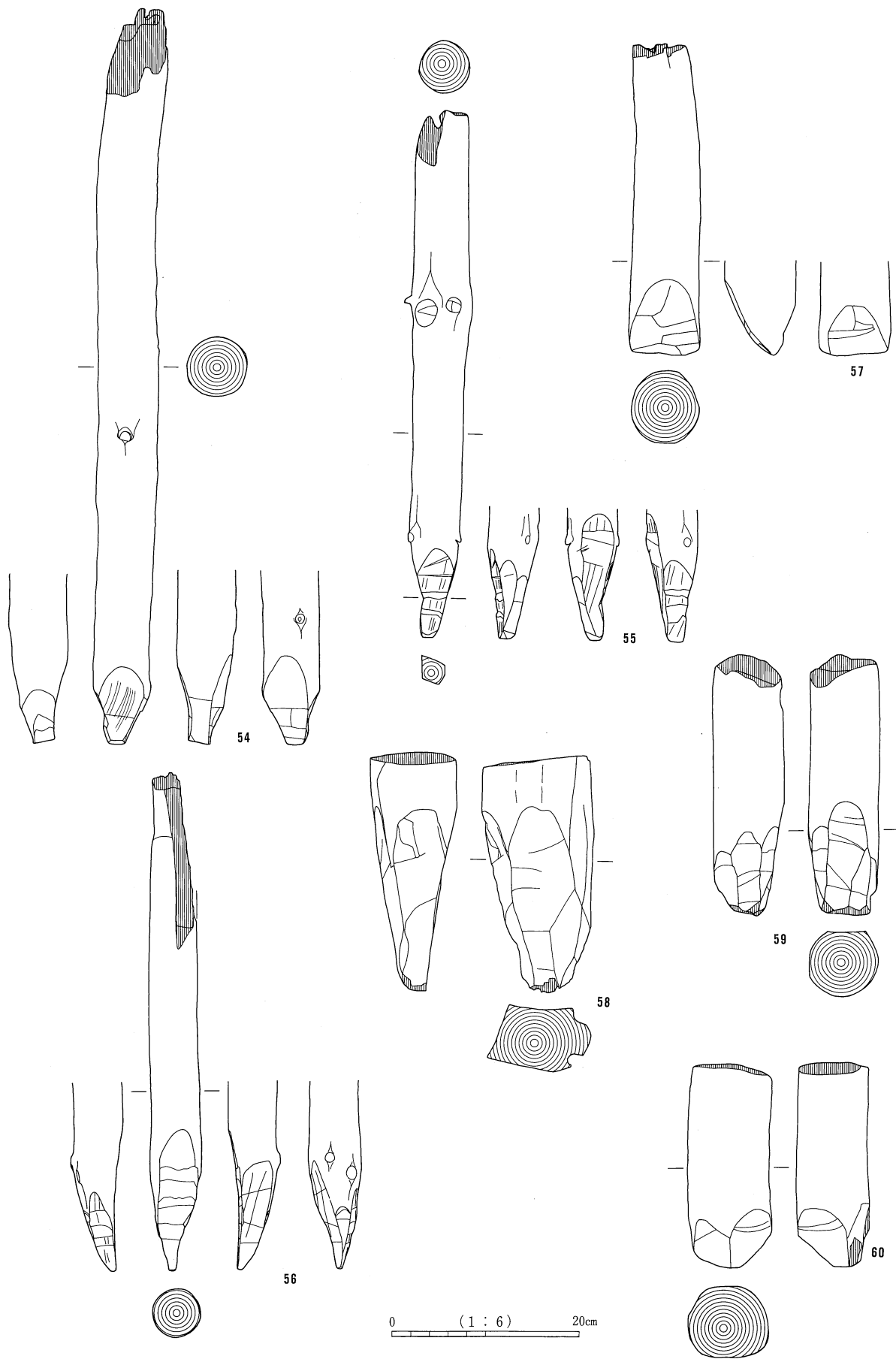
第243図 建築材 6、木棺



第244図 建築材 7、杭 1



第245図 杭 2



第246図 杭 3

第11表 木製品観察表

図版番号 整理番号	器種	長さ×幅×厚さ(径)cm 欠損による計測値は+α	出土遺構・位置	時代・時期	木取り	遺存状態	樹種
1 <1>	井筒 丸木船転用	288.5(全長)×64(最大幅)×28(最深長)	SK43	弥生後期中	剝物 割り材1/2	約5/6残存	トチノキ
2 <39>	丸木弓	82.0+α×3.3(径) 2.0×2.3(厚)(弓弭部)	SD47	弥生後期	丸木芯もち	一端木口欠損	イヌガヤ
3 <3>	膝柄 (工具)	24.9+α(全長)×2.8(柄部径) 10.0+α×3.9×3.4(着身部)	SB31主柱穴	弥生後期後	丸木芯もち	柄部先端/着身部先端欠損	コナラ節
4 <20>	膝柄 (農具)	13.1+α×4.3×2.0+α(着身部)	SB18床直上	弥生後期後	削りだし 股木	柄部/着身部1/2	コナラ節
5 <30>	農工具柄	10.4+α×2.0(径)	SK08	弥生後期	削りだし	一端木口欠損	ケヤキ
6 <0>	片口鉢	21.3×16.6+α×8.1(器高)	SB30	弥生後期後	剝物	ほぼ完存	ケヤキ
7 <42>	建築部材 垂木材	51.3+α×6.2(径)	SD47	弥生後期	丸木芯もち	一端木口欠損	コクノキ
8 <41>	建築部材 垂木材	90.2+α×5.8(径)	SD47	弥生後期	丸木芯もち	一端木口欠損	エノキ属
9 <36>	建築部材 垂木材	56.5+α×4.0(径)	SD47	弥生後期	丸木芯もち	一端木口欠損(扱首の可能性もある)	モミ属
10 <34>	建築部材 垂木材	18.9+α×4.4(径)	SD47	弥生後期	丸木芯もち	一端木口欠損	エノキ属
11 <38>	建築部材 垂木材	15.4+9.7+α×4.2(径)	SD47	弥生後期	丸木芯もち	一端木口欠損	ケンボナシ属
12 <8>	建築部材 垂木材か	21.3+α×7.4×3.8	SB31	弥生後期後	割り材1/2	一端木口欠損	ヤナギ属
13 <53>	建築部材 柱材	225.2×12.2×9.3 18.8×4.5(径)(ほぞ部)	SD47	弥生後期	丸木芯もち	完存	カヤ
14 <22>	建築部材 扱首	192.3+α×9.7(径)	SK04	弥生後期後	丸木芯もち	両端木口欠損	カヤ
15 <45>	建築部材	155.9+α×11.5×5.2	SD47	弥生後期	板材 柱目	一端木口欠損	クリ
16 <32>	建築部材 床材	170.0×22.3×5.2	SD47	弥生後期	板材 板目	完存	エノキ属
17 <15>	建築部材 柱材	71.6+α×16.4(径)	SD30	弥生後期後	丸木芯もち	一端木口欠損	ヤマザクラ
18 <4>	建築部材 柱材	17.4+α×18.5×13.6	SB31	弥生後期後	丸木芯もち	一端木口/片側木端の一部欠損	クリ
19 <14>	建築部材 柱材	78.2+α×22.4(径)	SB30	弥生後期後	丸木芯もち	一端木口欠損	ヤマグワ
20 <64>	建築部材 柱材	42.2+α×17.0+α×6.6	ST01	弥生後期	丸木芯もち	一端木口/両側木端欠損一部炭化	クリ
21 <63>	建築部材 柱材	37.7+α×20.8(径)	ST01	弥生後期	丸木芯もち	一端木口欠損	カヤ
22 <43>	建築部材	87.8+α×0.9×2.3	SD47	弥生後期	板材 斜め	一端木口/片側木端の一部欠損	ケヤキ
23 <55>	建築部材	39.0+α×9.5×2.8	SD47	弥生後期	板材 板目	両端木口/両側木端の一部欠損	ケヤキ
24 <52>	建築部材	50.0+α×9.4×4.3	SD47	弥生後期	板材 柱目	一端木口欠損	エノキ属
25 <65>	建築部材	46.2+α×10.8×2.8	SX05	近世	板材 板目	一端木口欠損	モミ属
26 <51>	建築部材 楣材	61.2+α×12.6+α×7.8	SD47	弥生後期	角材 斜め	一端木口/片側木端欠損	イヌエンジュ
27 <7>	建築部材	108.5+α×13.6×2.0	SB31	弥生後期後	板材 斜め	両端木口/両側木端の一部欠損	エノキ属
28 <13>	建築部材	68.1+α×8.0×1.9	SB30	弥生後期後	板材 板目	両端木口/片側木端の一部欠損	モミ属
29 <19>	部材	39.9+α×3.5+α×1.5	SB30	弥生後期後	角材 柱目	両端木口/両側木端欠損	コナラ節
30 <6>	建築部材	50.5+α×14.9×1.6	SB31	弥生後期後	板材 板目	一端木口/両側木端欠損	モミ属

第4章 遺物各説

31 <40>	建築部材	$49.2 + \alpha \times 14.2 + \alpha \times 3.5$	SD47	弥生後期	板材 柱目	一端木口／片側木端 欠損	ケヤキ
32 <70>	部材	$24.8 + \alpha \times 2.9 \times 1.2$	SK19	弥生後期	板材 斜め	一端木口／片側木端 の一部欠損	—
33 <26>	井筒	$59.1 + \alpha \times 7.2 \times 2.5$	SK35	弥生後期	板材 柱目	一端木口欠損	サワラ
34 <48>	建築部材	$78.7 + \alpha \times 9.9 \times 5.3$	SD47	弥生後期	板材 斜め	一端木口／一端木口 の一部欠損	エノキ属
35 <59>	建築部材	$123.2 + \alpha \times 21.5 \times 6.5$	SD48	弥生後期	板材 板目	両端木口／片側木端 の一部欠損	エノキ属
36 <44>	建築部材	$96.6 + \alpha \times 9.6 \times 2.8$	SD47	弥生後期	板材 板目	一端木口欠損	ケヤキ
37 <17>	建築部材	$43.2 + \alpha \times 21.0 \times 4.4$	SB30	弥生後期後	板材 板目	両端木口欠損	クリ
38 <49>	建築部材	$40.6 + \alpha \times 6.7 \times 3.8$	SD47	弥生後期	板材 板目	両端木口欠損	ケヤキ
39 <16>	建築部材	$45.5 + \alpha \times 2.9 + \alpha \times 2.0$	SB30	弥生後期後	割り材1/4	両端木口／片側木端 欠損	クリ
40 <18>	建築部材	$24.2 + \alpha \times 13.4 + \alpha \times 0.7 + \alpha$	SB30入口部ピット	弥生後期後	板材 板目	一端木口／片側木端 欠損	樹皮不明
41 <2>	木棺	$21.5 + \alpha \times 16.2 \times 6.0$	SK59	弥生後期後	板材 板目	両端木口／片側木端 の一部欠損	クリ
42 <9>	建築部材 柱材	$49.3 + \alpha \times 9.6 \times 7.5$	SB06入口部ピット	弥生後期後	角材斜め 芯もち	一端木口／片側木端 の一部欠損	クリ
43 <12>	杭 部材転用	$74.8 + \alpha \times 6.9 \times 5.4$	SB20	弥生後期中	丸木芯もち	両端木口欠損	カヤ
44 <11>	杭 部材転用	$71.9 + \alpha \times 6.8$ (径)	SB20	弥生後期中	丸木芯もち	両端木口欠損	イヌガヤ
45 <50>	建築部材	$61.3 + \alpha \times 9.1 \times 7.3$	SD47	弥生後期	角材 柱目	一端木口欠損	ケンポナ シ
46 <10>	建築部材	$41.9 + \alpha \times 9.9 \times 2.2$	SB11入口部ピット	弥生後期後	板材 板目	両端木口欠損	ヤマグワ
47 <5>	建築部材	$22.6 + \alpha \times 8.6 \times 2.8$	SB31	弥生後期後	板材 板目	一端木口／木端縁辺 欠損	クリ
48 <21>	弓状木製品	$154.3 + \alpha \times 3.0$ (径)	SK19	弥生後期	丸木芯もち	一端木口欠損	カヤ
49 <25>	井筒杭	$83.2 + \alpha \times 5.8$ (径)	SK43	弥生後期後	丸木芯もち	一端木口欠損	ヤマグワ
50 <57>	杭 部材転用か	$81.4 + \alpha \times 8.0 \times 4.7$	SD42	弥生後期	割り材1/8	一端木口／両側木端 の一部欠損	クリ
51 <47>	杭 部材転用	$27.6 + \alpha \times 7.2 \times 2.9$	SD47	弥生後期	板材 斜め	一端木口欠損	ケヤキ
52 <24>	井筒杭	$45.2 + \alpha \times 14.8 \times 7.4$	SK43	弥生後期後	割り材1/2 芯部削り	一端木口欠損	キリ
53 <35>	杭 部材転用	$106.1 + \alpha \times 11.3 \times 6.7$	SD47	弥生後期	角材 柱目	一端木口欠損	エノキ属
54 <61>	杭	$78.3 + \alpha \times 6.5$ (径)	SD06	近世	丸木芯もち	一端木口欠損	コナラ節
55 <62>	杭	$56.0 + \alpha \times 6.0$ (径)	SD06	近世	丸木芯もち	一端木口欠損	アカマツ
56 <60>	杭	$52.8 + \alpha \times 5.5$ (径)	SD06	近世	丸木芯もち	一端木口欠損	アカマツ
57 <37>	杭	$33.0 + \alpha \times 7.5$ (径)	SD47	弥生後期	丸木芯もち	一端木口欠損	ハリギリ
58 <56>	杭	$25.1 + \alpha \times 11.9 \times 9.2$	SD47	弥生後期	丸木芯もち	両端木口欠損	ヤナギ属
59 <46>	杭 部材転用か	$27.6 + \alpha \times 7.0$ (径)	SD47	弥生後期	丸木芯もち	両端木口欠損	ニレ属
60 <64>	杭	$21.6 + \alpha \times 8.2$ (径)	SD47	弥生後期	丸木芯もち	一端木口欠損	カエデ属

< > 内整理番号は収納番号であり、遺物にかかわる記録類と共通する。

第2節 石 器

1 磨製石斧の評価

(1) 太型蛤刃石斧

a SB01出土の磨製石斧

IV区-Hグリッドにて検出されたSB01は所謂「焼失住居」であり、遺構内からは太型蛤刃石斧7点、石槌1点、扁平片刃石斧2点、台石1点、凹石1点、砥石1点が出土した。注目すべきはP₈。「床下土坑」から太型蛤刃石斧が5点重なって出土した点(第21図)、扁平片刃石斧と鉄斧の共伴(第22図)が確認された点である(文¹)。ここではそれらの磨製石斧について、観察結果をまとめる。

太型蛤刃石斧

P₈から出土した蛤刃石斧は、第256~258図No1.2.3.5.7の5点で、すべて完形品である。最も大きいNo1(T24)を下に、3(T23)・2(T22)→7(T21)→5(T20)の順に重ねられた状態で出土した(第21図)。材質はいずれも火成岩で、斜長石の石基で構成されたophiticな間粒状組織(intergranular texture)を持つ「輝緑岩」(diabase)と考えられ、特に緑簾石や緑泥石などの変質鉱物の混入が著しく、変質作用の認められる所謂「変輝緑岩」(meta-dabase)である。「変輝緑岩」は新第三系中新世の内村層相当層、保科玄武岩類に求められ、遺跡背後の妙徳山域に産出する。本遺跡から2km程離れた榎田遺跡では「変輝緑岩」を用いた大規模な太型蛤刃石斧製作址が確認されており(文²)、関連性を考慮する必要がある。榎田遺跡の成果に照らせば、長さ16.0cm以上のb'類が3点(No1.3.5)と12.0cm以上のc'類が2点(No2.7)であり、大形品と中形品で構成されていることが解る。形式的には5点とも刃部に最大幅を持ち、形態的に台形状を呈するC類である。C類は県内で中期後半の特徴型式と考えられるから、SB01の所属時期ともほぼ合致する。石斧には顕微鏡観察の結果、すべての刃部に摩耗痕跡(図中スクリーン部分)が認められたので、未使用ではないらしい。No3などは特に痕跡が顕著で、明瞭な線状痕さえ認められる。装着を想定できる痕跡は確認できなかったが、側面部に敲打痕のある例2点(No3.7、図中矢印部分)が確認できた。資料の属性観察を第12表に示す。

第12表 SB01出土の磨製石斧属性

挿 図 番 号	法 量 (最大値)				刃 部				使 用 痕 跡				基 部 形 態	装 着 痕 跡	付 着 物	敲 打 痕 跡	欠 損 部 位	再 利 用 器 種	石 材	用 法	分 類	出 土 地 区 遺 構 名	備 考	
	長 さ <cm>	幅 <cm>	厚 さ <cm>	重 さ <g>	数	刃 長 <cm>	刃 幅 <cm>	刃 角 <度>	形 平	態 断	長 さ <cm>	幅 <cm>												類 度
1	19.6	7.3	4.4	1096.9	1	—	7.3	76°	3	両	2.4	7.3	○	摩耗	1b	—	△	完	—	変輝緑岩	伐採斧C	I b'	B 2-2 SB01 T24	P 8 出土
2	14.2	6.1	3.8	563.0	1	—	6.1	69°	3	両	1.1	6.1	○	摩耗 線状	1c	—	△	完	—	変輝緑岩	" C	I c'	B 2-2 SB01 T22	P 8 出土
3	17.9	7.0	3.7	790.8	1	—	7.0	80°	3	両	3.6	7.0	◎	摩耗 線状	1a	—	○	完	敲打	変輝緑岩	" C	I b'	B 2-2 SB01 T23	P 8 出土
5	17.6	7.0	4.2	856.2	1	—	7.0	82°	3	両	0.8	7.0	○	摩耗	1c	—	△	完	—	変輝緑岩	" C	I b'	B 2-2 SB01 T20	P 8 出土
7	15.7	6.3	4.3	706.7	1	—	6.3	76°	1c	両	1.5	6.3	○	摩耗	2	—	○	完	敲打	変輝緑岩	" C	I c'	B 2-2 SB01 T21	P 8 出土
4	13.4	6.5	3.1	460.9	1	—	6.4	71°	3	両	2.1	6.4	○	摩耗	1c	—	赤色 ○	完	—	変輝緑岩	" A	I c'	B 2-2 SB01 T2	
8	12.1	5.9	2.9	348.5	1	—	5.9	65°	3	両	0.9	5.9	◎	摩耗 線状	1b	—	白色 赤色 ○	完	—	変輝緑岩	" C	I c'	B 2-2 SB01 T3	
6	13.0	6.5	4.5	774.5	—	—	—	—	—	—	6.5	4.3	◎	摩耗	1b	—	—	完	石槌	変輝緑岩	石槌	(Ib')	B 2-2 SB01 T6	
9	5.4	3.7	1.1	38.4	1	1.1	3.7	55°	1b	片	0.4	3.7	◎	摩耗 線状	1b	—	白色 ○	完	—	蛇紋岩	加工斧II	II c	B 2-2 SB01 T5	
10	3.6	2.9	0.8	18.3	1	0.4	2.9	53°	1a	片	0.4	2.9	◎	摩耗 線状	1a	○	—	完	—	蛇紋岩	加工斧III	II e	B 2-2 SB01 T15	

(2) 扁平片刃石斧

a 石材

本遺跡出土の磨製石斧資料は、太型蛤刃石斧が21点、扁平片刃石斧が27点の計48点である。これらの石斧に観察される岩石学的特徴は、玄武岩・輝緑岩または「緑色岩」^(註1)と呼ばれる火成岩類が89.6%あり、蛇紋岩などの変成岩類が4.2%と、全体の約9割を火成岩が占める点にある。石斧内に於ける形式別石材の内訳では、太型蛤刃石斧で変輝緑岩が90.4%、変質玄武岩が4.8%、扁平片刃石斧で「緑色岩」が66.7%、変輝緑岩が18.5%、蛇紋岩が7.4%であり、それぞれに名称鑑定不能なものがほかにある。また石斧資料中に占める未製品(≠未完成品≠失敗品)の割合では、太型蛤刃石斧に2点があり、ともに変輝緑岩製で、扁平片刃石斧では18点があり、13点が「緑色岩」製、3点が変輝緑岩製、2点が名称鑑定不能な資料に相当する(第13・14表)。

太型蛤刃石斧の未製品(PL55-6.PL57-3)は肉眼観察で変輝緑岩と判定できるが、斜長石を多量に含み、全体が白っぽく、やや青味をおびた感じを受ける。本遺跡に近接し、太型蛤刃石斧の製作遺跡として知られた榎田遺跡には、このような特徴を持つ資料は1点も確認できていないので、少なくとも榎田とは別の遺跡地で製作されたものと推定できる。もちろんのこと、本遺跡内に製作を裏付けるであろう剥片や碎片等の石屑類が存在していれば問題はないが、それが皆無に近い状況にある。しかしながら、これらの未製品が変輝緑岩である限り、その帰属は榎田遺跡あるいは春山遺跡の背後に連なる妙徳山城の新第三系中新世、内村層相当層保科玄武岩類に求められるのは確かなのだから、未製品が今回調査された榎田遺跡や春山B遺跡以外の別地点^(註2)で製作されたものである可能性は十分想定できる。現時点では未製品が2点のみであること、製作関連の石屑が存在しないなどの事実から、太型蛤刃石斧は多くを製品もしくはそれに近い段階で遺跡内に搬入したものと考えておきたい。

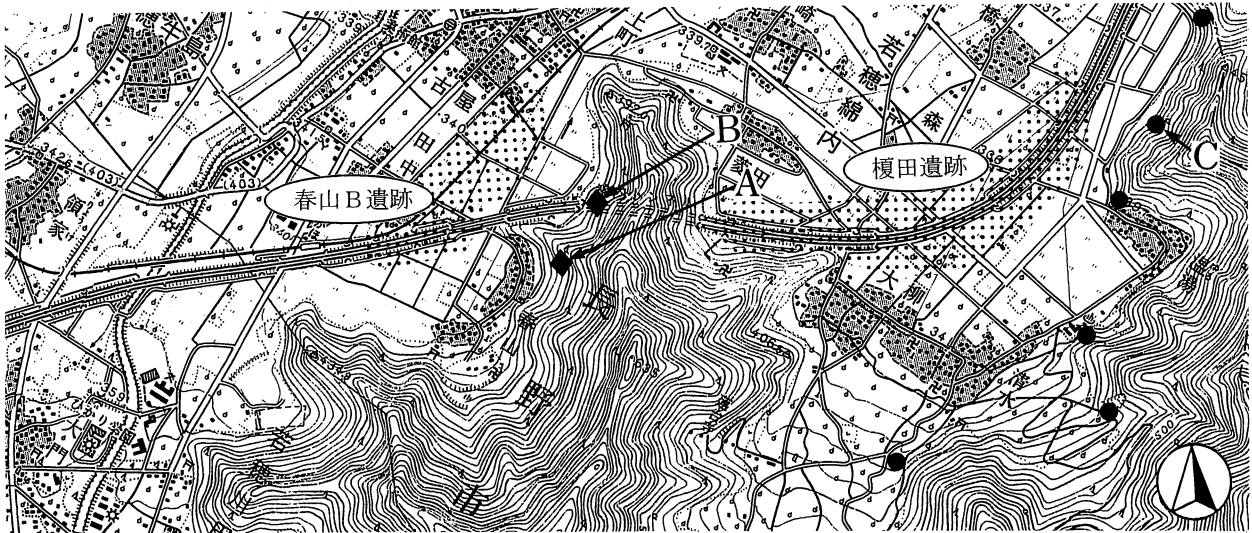
さて扁平片刃石斧の未製品(PL56-2・10~17・20・21・23, PL57-1・2・4~7)では、13点(72%)が肉眼観察で判断した「変質の玄武岩(顕微鏡鑑定による「緑色岩」)」であり、3点(0.17%)が変輝緑岩である。「変質の玄武岩」とした石材と同材の製品は5点(PL56-6~9)出土しており、製作関連の剥片も出土していることから、本遺跡内で少なからず製作が行われていた可能性は高い。この岩石は、遺跡背後にある妙徳山城の城ノ峰裾部、近いところで直線距離にして200m程度(第247図B)に確認できるのであるから、まさに「裏山の石」に相当する。これに対して変輝緑岩は、先の太型蛤刃石斧のものとは違って、深緑色で榎田遺跡出土資料に類似している。5点ある剥片資料もすべてがこれに該当する。本遺跡の裏山を踏査する限り、この石材は確認できないので、「裏山の石」ではないらしい。榎田遺跡では出土資料もさることながら、遺跡裏山に良質な岩帯が確認されており、本遺跡地からは2Kmほど離れた地点にある(第247図C)。興味深いことに榎田遺跡の裏山には、本遺跡での「変質の玄武岩」と外観上よく似た石材(第248図)も少量ながら確認されているが、その石材は石斧製作には用いられていない。外観を異にし見かけ上似てないが、岩石学上、同材と判定された所謂「変質玄武岩」の利用でさえ、太型蛤刃石斧で1/58点、扁平片刃石斧で7/65点に過ぎないのである。つまり、このことは、2つの遺跡の扁平片刃石斧の製作が、量質ともに恵まれた双方の「裏山の石」を選択しており、場合によっては、本遺跡の変輝緑岩製の扁平片刃石斧が榎田遺跡あるいはその周辺遺跡に帰属した製作物であった可能性さえ予想できるのである。現に変輝緑岩製の製品2点(PL56-1・5)は、同材の未製品(PL56-15.PL57-1・2)とは形式的に異質であるし、未製品の製作工程内に『打裂成形段階を欠く』点もまた不自然なことである。仮に『遺跡ごとに製作が実施され、そこに石材選択の差』が生じているのであれば、榎田遺跡の扁平片刃石斧の製作と春山B遺跡のそれを整理し、中部地方の弥生文化研究に成果を提供していく必要がある。ここでは十分な論を尽くせないが、調査によって得られた成果の要点を簡略ながらまとめておく。

第13表 磨製石斧関連石材別内訳1 ()内は大型蛤刃石斧

	第二工程	第三工程				第四工程			製品	合計
	未B	未C ₁	未C ₂	未C ₃	未D	未E ₁	未E ₂	未E ₃		
変質玄武岩									(1)	(1)
変輝緑岩			(1)		2(1)	1			2(17)	5(19)
緑色岩	3					6	3	1	5	18
蛇紋岩									2	2
不明						1		1	(1)	2(1)
合計	3		(1)		2(1)	8	3	2	9(19)	27(21)

第14表 磨製石斧関連石材別内訳2 (礫・剥片・碎片)

	礫 (1,000g未満)			剥片			碎片		
	敲石素材	その他	合計	一	二	合計	一	二	合計
変質玄武岩	1		1				1		1
変輝緑岩					5	5			
緑色岩	1	1	2		1	1	2	4	6
凝灰角礫岩		4	4	1		1			
合計	2	5	7	1	6	7	3	4	7



第247図 保科玄武岩類の岩石サンプル採取地点

ア 偏光顕微鏡鑑定

春山B遺跡の出土資料を分析するに当たり、榎田遺跡及び松原遺跡^(註3)の整理成果を引用する。春山B遺跡には、岩石薄片を作成するだけの十分な量の保証がないため、遺跡出土資料と明瞭に同材と判断できる「裏山の石—所謂原産地」のサンプルを用いて、偏光顕微鏡による岩種名の鑑定を実施した^(註4)。結果として鑑定では、仮称した「変質の玄武岩」ではなく、デカッセイト組織の認められる「緑簾石—プレーナイト岩 (緑色岩)」と判定され、原岩は「中性～塩基性の火山岩で変質玄武岩である可能性」(P302)が指摘された。つまりは、榎田遺跡で少ないながらも用いられた「変質玄武岩」のさらに変質したものであり、見かけ上の違いも去ることながら、石材名称として分離してもよいことが示されたわけである。本遺跡地背後の露頭では「変質流紋岩」(第247図A、P305～P306)そして「緑簾石—プレーナイト岩 (緑色岩)」(第247図B、P302～P304)が主として認められ、榎田遺跡で主に選択されていた「変輝緑岩」あるいは「変質粗粒玄武岩」の露頭が確認できないことはすでに述べたとおりであり、やはり遺跡間で『石材選択の差』が生じていたことは間違いなさそうである。ただし榎田の成果にもあるように、それらの岩石は

試料番号 1

岩石名：緑簾石-プレーナイト岩（緑色岩）

岩石の組織：デカッセイト組織

主成分鉱物

石英：中量～少量存在し、粒径1.5mm以下の他形で粒状を呈し、一部濃集して、径3.5mm以下のアミグダル状のプールの形成するものもある。

プレーナイト：中量存在し、粒径0.5mm以下の他形で柱状～放射柱状を呈し、無方向性の結晶配列を示す。一部、粗粒な石英に包有されるものもある。

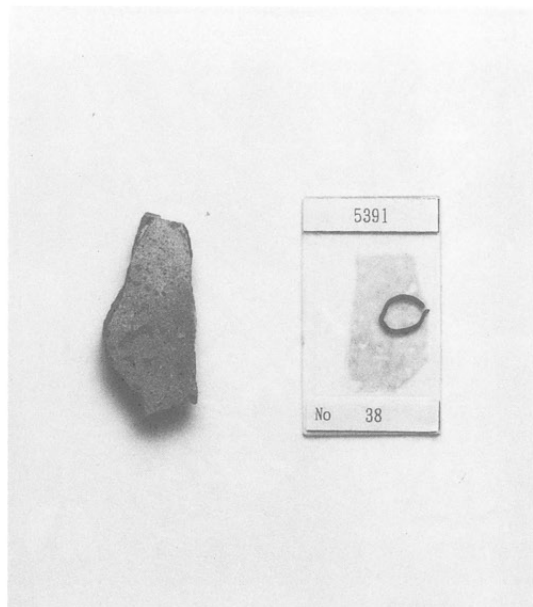
緑簾石：少量存在し、粒径0.5mm以下の半自形～他形で、柱状～粒状を呈する。淡緑色～淡黄緑色の多色性を示し、緑泥石と接するものが多くみられる。

副成分鉱物

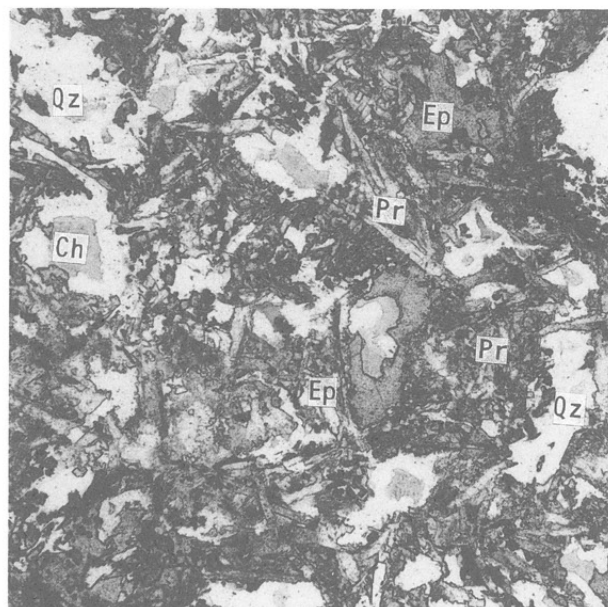
緑泥石：微量存在し、粒径0.1mm以下の他形で、繊維束状～放射繊維束状を呈する。緑色を呈し、異常干渉色を示す。アミグダル状の放射繊維束状の細粒集合体となっているものが多い、周囲に石英および緑簾石を伴うことが多い。

不透明鉱物：きわめて微量存在し、粒径0.1mm以下の半自形～他形で粒状を呈し、酸化鉄となって周囲を土状に汚染しているものが多い。

記事：デカッセイト組織を示す変質岩で、緑色岩の一種である。主成分鉱物として、石英、プレーナイトおよび緑簾石を含み、副成分鉱物として緑泥石および不透明鉱物を伴う。緑泥石、緑簾石および石英で充填されるアミグダル状のプールの残存しており、原岩は中性～塩基性の火山岩で変質玄武岩である可能性が高い。



切断面とプレパラート



プレパラート・平行ニコル



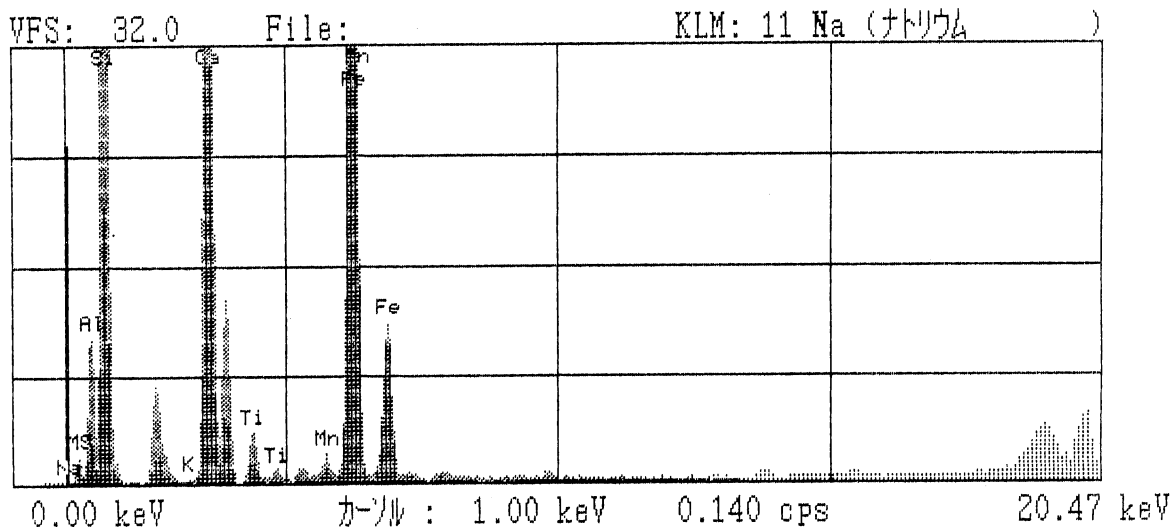
第248図 磨製石斧関連の原材料 1

保科玄武岩類に求められ、苦鉄質貫入岩類の緑泥石化・アクチノ閃石化の認められる岩石として「緑色岩 (green rock)」を総称するのであるから、あくまで両者は同一の岩帯として大別されるものであることは言うまでもない。

イ 県内の事例

これまでに調査報告のあった県下の弥生遺跡から、材質別内訳及び製品・未製品の内訳を百分率比で示した。中期後半単独、もしくは中期から後期にまたがる遺跡で、後期単純遺跡は除外し、石材及び分類名はすべて報告書所収の記載に基づいた。まず第254図の製品・未製品の内訳から読み取れることは、県下で扁平片刃石斧の未製品が報告された遺跡は8箇所のみで、大部分の遺跡の出土例が製品段階のものとい

蛍光X線分析



資料No.・位置	成分	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	FeO	MnO	Na ₂ O	K ₂ O
1 -1 切断面		58.5	11.2	15.0	6.48	0.639	6.79	0.118	1.23	0.019
2 表面		50.8	14.7	21.2	4.51	0.765	7.21	0.133	0.584	0.065
③ 裏面		50.5	15.5	21.9	4.05	0.730	6.85	0.154	0.277	0.033

蛍光X線分析による主要9元素値

化学成分分析

試料No.・成分	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	FeO	Fe ₂ O ₃	MnO	Na ₂ O	K ₂ O
1 -1 化学	60.3	10.2	16.1	4.14	0.65		5.81	0.13	0.11	<0.01
蛍光	58.5	11.2	15.0	6.48	0.64	6.79		0.12	1.23	0.02

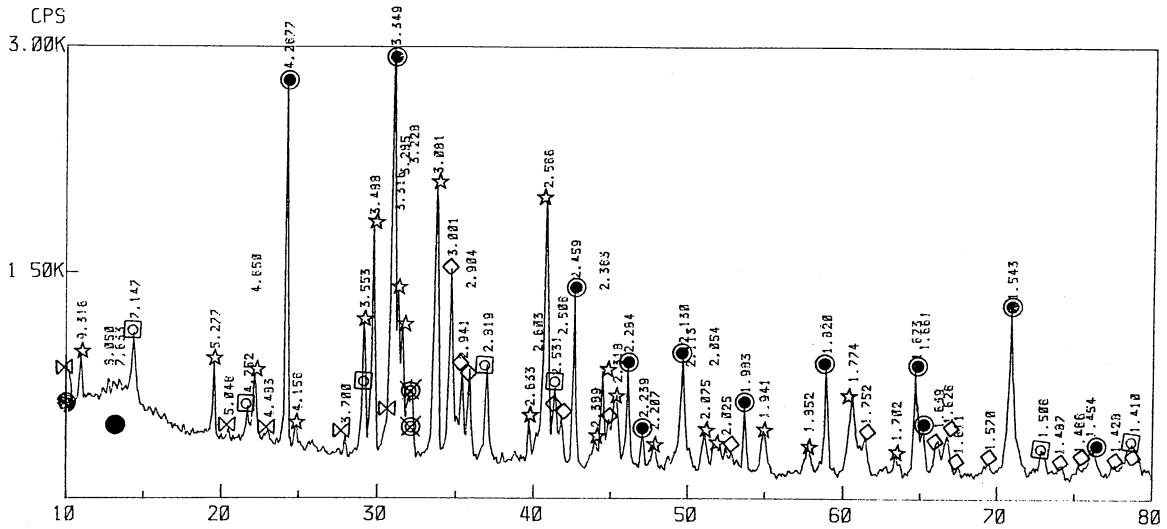
【化学分析】はJISに準拠し、以下の方法で行った。
 T. Fe : 三塩化チタン還元—ニクロム酸カリウム滴定法
 FeO : ニクロム酸カリウム滴定法
 Fe₂O₃ : 計算
 C : 燃焼—赤外線吸収法
 CaO, MgO, MnO, Cr₂O₃, Na₂O : ICP発光分光分析法
 SiO₂, Al₂O₃, CaO, MgO, TiO₂, K₂O : ガラスビード蛍光X線分析法
 但しCaO, MgO, MnO, は含有率に応じてICP分析法または蛍光X線分析法

化学成分分析による主要9元素値

第249図 磨製石斧関連の原材1

うことである。製品・未製品の別をいかなる指標によって分けるかは難しいところであるが、刃部研ぎ出しの完了をもって、それを律することが現状での最良の策である。8つの遺跡とは、長野市榎田遺跡(59点)・同春山B遺跡(18点)・同松原遺跡(14点)^(文3)・同中俣遺跡(1点)^(文4)、佐久市北西ノ久保遺跡(1点)^(文5)・西裏遺跡(1点)^(文6)、松本市県町遺跡(3点)^(文7)、飯田市恒川遺跡群(2点)^(文8)である。この内、製作工程の復元や製作時の石屑出土などから製作痕跡を追跡できる遺跡は、長野市榎田・春山Bそして松原の3遺跡に目下のところ限られる。3遺跡とも「緑色岩」を選択しているが、前2者が「緑色岩」にはほぼ限定されるのに対して、松原遺跡は「緑色岩」を含むものの主体は頁岩などの堆積岩にある。もっとも松原遺跡周辺に「緑色岩」の露頭は確認されていないのであるから、松原での「緑色岩」製石斧の製作痕跡自体が意義のあることのように見える。こうしたことを念頭に置いて、8遺跡の未製品の石材を調べると、榎田遺跡では「緑色岩」52点・頁岩5点・片岩1点・ホルンフェルス1点、春山B遺跡は「緑色岩」16点・不明2点、松原遺跡は頁岩(≒粘板岩)5点・「緑色岩」3点・砂岩1点・ホルンフェルス1点・不明4点、中俣遺跡は「緑色岩」1点、北西ノ久保遺跡は「緑色岩」1点、西裏遺跡は蛇紋岩1点、県

SAMPLE NAME : No.16



資料No	Qua	Cri	Pla	Chl	Mus	Dio	Mag	Hyd	Tri	Geo	Cal	pre
1	◎	—	△	△	△	□	—	—	—	—	—	○

X線回折分析による主な鉱物値

凡 例

(1) 鉱物の記号		
Cal : Calcite;	方解石	CaCO ₃
Chl : Chlorite;	緑泥石	(Mg, Al) ₆ (Si, Al) ₄ O ₁₀ (OH) ₈
Cri : Cristoballite;	クリストバル石	SiO ₂
Dio : Diopside;	透輝石	CaMg(Si ₂ O ₆)
Geo : Geothite;	針鉄鉱	α-FeOOH
Hyd : Hydrogrossural;		Ca ₃ Al ₂ Si ₂ O ₈ (OH) ₄
Mag : Magnesioriebeckite;		(Na, Ca) ₂ (Mg, Fe) ₅ Si ₈ O ₂₂ (OH) ₂
Mus : Muscovite;	白雲母	KAl ₂ Si ₃ AlO ₁₀ (OH) ₂
Pla : Plagioclase;	斜長石	(Na, Ca)(Al, Si) ₄ O ₈
Pre : Prehnite;	ブドウ石	Ca ₂ Al[(OH) ₂ AlSi ₃ O ₁₀
Qua : Quartz, low;	石英, 低	SiO ₂
Tri : Tridimite;	リンケイ石	SiO ₂
(2) 回折ピーク強度の分類		
◎ : 100~80超	○ : 80以下~60超	□ : 60以下~40超
△ : 40以下~20超	▽ : 20以下	

第250図 磨製石斧関連の原材1

町遺跡は砂岩1点・ホルンフェルス1点・蛇紋岩1点、恒川遺跡群田中・倉垣外地籍で輝緑凝灰岩1点、新屋敷地籍で綠色片岩1点の内訳となる。「綠色岩」製石斧の製品の分布は、善光寺平南部を中心とし、ほぼ全県に及ぶが、善光寺平と佐久地域の遺跡にその未製品が出土している。「綠色岩」とされた未製品の岩種名は、すべての遺跡で「変輝緑岩≒閃緑岩」(註5)と記され、榎田遺跡と同材と考えられる。ただし松原遺跡には「玄武岩質安山岩」あるいは「変質玄武岩」(註6)の未製品も確認されており、春山B遺跡と類似した石材のものが存在している。このことは、榎田遺跡と同材の未製品が広い範囲に分布し、春山B遺跡と類似する石材が狭い範囲の、現在のところでは、ごく限られた遺跡に存在していることを示しているように看取される。短絡的に評価すれば、大型蛤刃石斧と同材の「変輝緑岩」製扁平片刃石斧が広域に動き、殆ど蛤刃石斧に使用されない「変質玄武岩」製のそれが限定された遺跡に動いていると言えそうなのである。

試料番号 2

岩石名：緑色変質岩（変質流紋岩）

岩石の組織：交代状組織

主成分鉱物

カルセドニ（玉髓）：多量～中量存在し、原岩の石基となる火山ガラスを交代して、粒径0.18～0.05mmの球顆状ないし繊維放射状を呈する。

石英：少量存在し、粒径0.65mm以下の他形粒状～不規則粒状を呈し、緑廉石および緑泥石を伴って、径2.0～0.1mmの孔隙を充填し、一部は仮像を残して斜長石を交代している。

斜長石：微量存在し、粒径0.45mm以下の半自形～他形で針状～長柱状を呈し、一部、弱い定向性を示す。

緑泥石：中量～少量存在する。粒径0.1mm以下の放射繊維束状を呈する。淡緑色の色調で、孔隙を充填する。板状～粒状の斑晶状斜長石を完全に交代して、仮像を形成しているものもある。緑廉石とともに、肉眼的に岩石試料が淡緑色を帯びる原因となっている。

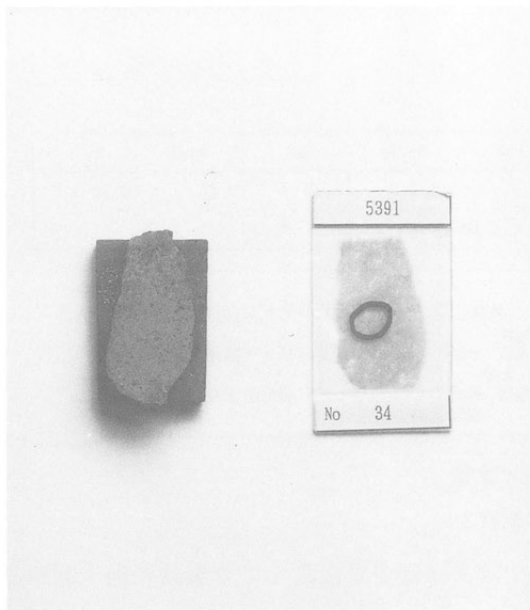
緑廉石：中量～少量存在し、原岩の火山ガラスの一部を交代している。粒径0.58mm以下の半自形～他形で板状、粒状または放射繊維束状を呈し、淡緑色を示す。

火山ガラス：少量存在し、石基を構成している。火山ガラスの大部分はカルセドニで構成されるが、一部は未変質であり、鏡下では褐色のガラスに杏仁状孔隙が多くみられる。また、ガラス中には、長柱状の斜長石が析出している。

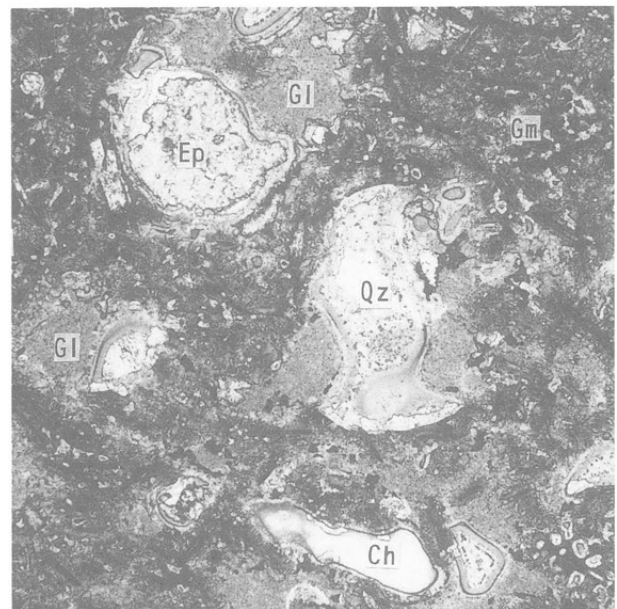
副成分鉱物

スフェーン：きわめて微量存在し、粒径0.2mm以下の他形で、柱状～放射針状を呈する。褐色を呈し、緑泥石および緑廉石を伴って、径1.2mm以下のアミグダ組織を形成する。

記事：主に緑色を呈する変質鉱物からなる緑色岩で、石基は顕著にカルセドニ化し、このほかに石英、斜長石、緑泥石および緑廉石を含んでいる。残された岩石の組織から、原岩はガラス質流紋岩と推定される。



切断面とプレパラート



プレパラート・平行ニコル

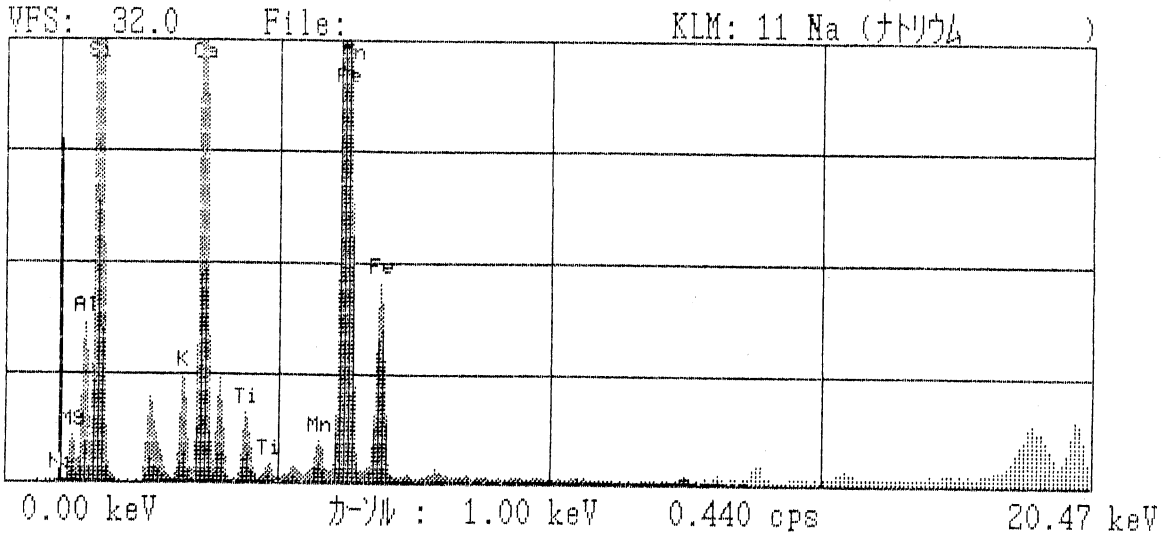
0 0.5mm

第251図 磨製石斧関連の原材 2

ところで頁岩製石斧では、やはり製品の分布がほぼ全県に及ぶのに対し、未製品の出土例は松原遺跡以外に報告されていない。どうやら「緑色岩」と頁岩では、未製品の出土事例一製作と動き一に差がありそうである。ただし製品と未製品の別が、器面表裏に及ぶ刃部研ぎ出しの有無によって弁別される限りに於いて有効な判断であって、以下 **b 製作** のところで述べることになるが、未製品がいかなる製作段階で搬出されるかによっては、評価の仕方も異なってくる。比較には製作技術を踏まえた判断が必要である。

次に蛇紋岩製石斧では、飯山や善光寺平など北信地方に分布が濃厚であるが、現在のところ、その製作遺跡は確認されていない。出土事例から推定すると、恐らく原石素材で搬入されて仕上げられる礫核石器であったと考えられる(註7)。

蛍光X線分析



資料No.・位置	成分	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	FeO	MnO	Na ₂ O	K ₂ O
2-1 切断面		58.7	11.8	6.70	10.5	0.625	5.99	0.142	4.47	1.07
2 表面		45.0	15.6	4.86	16.3	1.23	13.3	0.176	2.83	0.678
3 表面		53.5	14.2	4.59	14.5	0.881	7.54	0.139	3.54	1.12

蛍光X線分析による主要9元素値

化学成分分析

試料No.・成分	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	FeO	Fe ₂ O ₃	MnO	Na ₂ O	K ₂ O
2-1 化学	46.4	16.4	6.20	12.5	1.18		10.7	0.18	1.83	0.79
蛍光	58.7	11.8	6.70	10.5	0.63	5.99		0.14	4.47	1.07

【化学分析】はJISに準拠し、以下の方法で行った。
 T. Fe : 三塩化チタン還元—ニクロム酸カリウム滴定法
 FeO : ニクロム酸カリウム滴定法
 Fe₂O₃ : 計算
 C : 燃焼—赤外線吸収法
 CaO, MgO, MnO, Cr₂O₃, Na₂O : ICP発光分光分析法
 SiO₂, Al₂O₃, CaO, MgO, TiO₂, K₂O : ガラスビード蛍光X線分析法
 但しCaO, MgO, MnO, は含有率に応じてICP分析法または蛍光X線分析法

化学成分分析による主要9元素値

第252図 磨製石斧関連の原材2

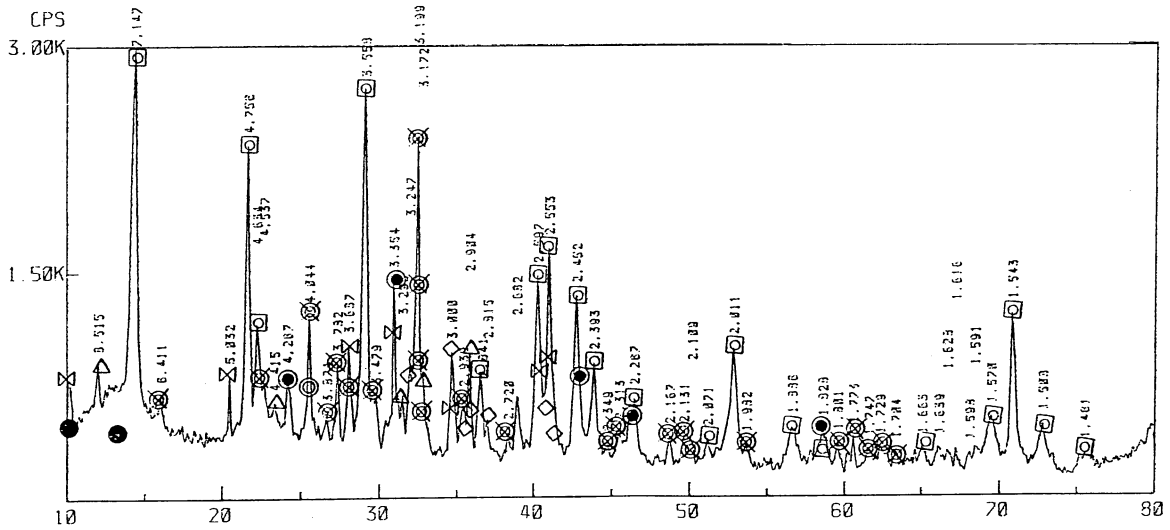
最後に、砂岩やホルンフェルスあるいは片岩といった石材では、ほぼ全県に及んで未製品の出土例がある。このことは、やはり全県にわたって製作痕跡の知られた磨製石鏃と同様な状況にあり、材質の類似性をも考慮すれば、複数の遺跡で独自に製作された可能性を予想することができる。

以上から扁平片刃石斧の材質は、火成岩系と堆積岩系に大別でき、両者には産出地の違いはもちろんのこと、製作そして動きに違いのあることが予想される。そして春山B遺跡は前者の材質に属し、製作と使用が遺跡内で、あるいは極めて限られた地域内を対象としているように予想されるのである。

b 製作

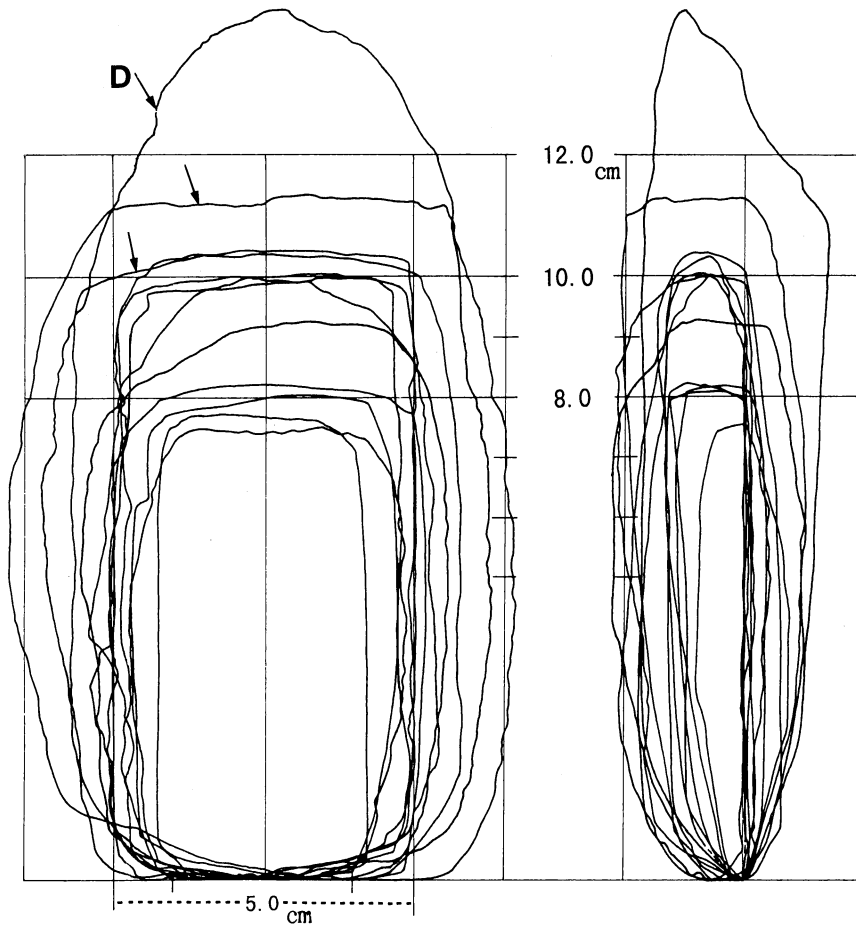
本遺跡の扁平片刃石斧は、火成岩系の岩石で変質した玄武岩「緑簾石—プレーナイト岩（緑色岩）」を使用している。原材料は、発掘地点より200m程離れた裏山に求められ、石材獲得に優れて有利な条件下に設営された集落、①『原産地直下型の遺跡』と判断される。さらに遺跡内には礫状の素材？(註8) から剥片・碎片までが出土し、②『素材から製品までの資料、全工程が存在する』遺跡と認めることができる。各段階の資料数内訳については第13表及び第14表に示す。

SAMPLE NAME : No.13



資料No	Qua	Cri	Pla	Chl	Mus	Dio	Mag	Hyd	Tri	Geo	Cal	pre
2	□	▽	○	◎	△	△	△	—	—	—	—	—

X線回折分析による主な鉱物値



第253図 春山B遺跡出土の扁平片刃石斧未製品の量

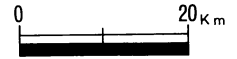
製作工程は太型蛤刃石斧の呼称法を援用し、4つの工程^(文9)に大別して考える。原石の分割及び素材の獲得段階を「第一工程・粗割」、剝離による成形段階を「第二工程・打裂」、敲打による成形段階を「第三工程・敲打」、研磨による整形段階を「第四工程・琢磨」とする。本遺跡は第二工程段階からが明瞭であり、第二工程での未製品資料3点(PL57-6.7)と剝片資料6点(この内5点が輝緑岩)、碎片資料4点がある。第三工程の資料は少なく、未製品が2点(PL57-1.2、2点とも輝緑岩)のみである。第四工程では未製品が13点(PL56-2.10~17・20・21・23, PL57-5、この内15のみ輝緑岩)と、全数の48%に相当する。第二工程と第四工程の未製品が多く、第三工程が少ないという傾向は、変輝緑岩または変質粗粒玄武岩製の扁平片刃石斧製作遺跡である榎田遺跡と類似した特徴である。むしろ後述するように、第三工程・敲打を介在せずに製作が進むのが堆積岩系扁平片刃石斧の一般的な特徴であるから、それを介在させる春山Bそして榎田遺跡にこそ特質が認められると言えるのである。因に榎田遺跡では第二工程が27点、第三工程が6点、第四工程が26点ある。太型蛤刃石斧では、第三工程を3つの段階に区別したが、扁平片刃石斧では敲打成形の施された器面を順序立てて区分することを可能としない。つまり火成岩系石材を使用する春山Bそして榎田遺跡でさえも、第三工程はいずれも第3段階「素材の側面及び表裏面に敲打を施すもの」のみの資料に限られており、本工程が余り明確な段階差をもって位置付けられないことを示している。大別4工程は第四工程をさらに3つの段階に細別する。3つの段階とは、第1段階が「素材の表裏いずれか一方、あるいは表裏面に研磨を施すもの」、第2段階が「素材の側面に研磨を施すようになったもの」、第3段階が「素材の表裏及び側面に研磨を施し、さらに刃部作出の研磨が開始されたもの」と定義することができる。本遺跡で第四工程内に占める各段階の内訳は、第1段階8点(62%)、第2段階3点(23%)、第3段階2点(15%)となり、第1段階での未製品が6割を占めている。

ところで本遺跡の未製品中で、第二工程から製品段階までの資料を確認できるのが、「緑簾石一プレーナイト岩(緑色岩)」、所謂「裏山の石」である。これに対して変輝緑岩は第三工程に2点(PL57-1.2)と第四工程第1段階に1点(PL56-15)で、第二工程の未製品を欠落する。第三工程が変輝緑岩のみに認められる点は特質すべき要点である。本遺跡で主体となる「裏山の石」に第三工程が介在しない点は、その工程が頁岩をはじめとする堆積岩系の製作工程と類似していることを示唆し、少なくとも変輝緑岩製の未製品とは異質であること暗示する。a 石材が遺跡近くにない・b 第二工程の未製品を欠落する・c 第三工程・敲打段階が介在するなどの諸点から、③『変輝緑岩製未製品の由来が春山B遺跡以外一現状では榎田遺跡あるいはその周辺遺跡と推定される一に求められる可能性は高い』。したがって本遺跡内には、第二工程以降の段階で搬入された可能性を想定できるのである。

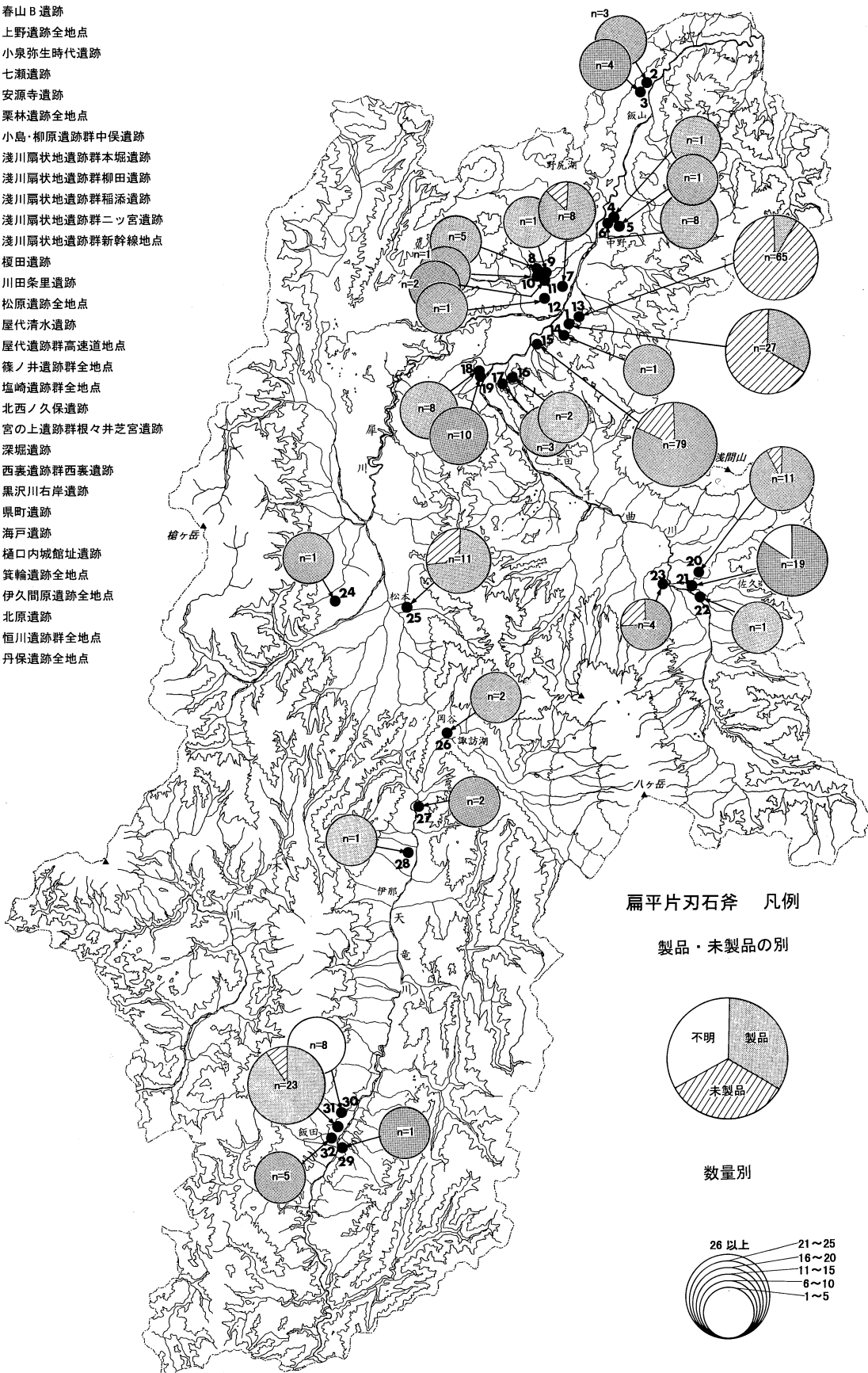
c 動き

ここで第272図に立ち返ってみると、県内の遺跡で「緑色岩」とされる未製品の出土遺跡は、春山Bと榎田以外に3遺跡ある。長野市中俣遺跡18号住居址(図101-52)の1点は、第四工程第1段階の資料。松原遺跡ⅢSA104(第290図-130)・SA106(第289図-116)は第四工程第3段階、包含層の1点(第290図-127)は第二工程段階?の資料である。佐久市北西の久保遺跡表採資料1点(第271図-93)は第二工程である。松原遺跡Ⅲ出土例のSA104及びSA106は、器面に剝離痕跡(第二工程の痕跡)を大きく残し、刃部に研磨の施された資料であり、中俣遺跡と北西の久保遺跡例は、器面の一部に研磨が施されるか、または研磨以前の資料に該当している。つまり「緑色岩」製と報告のある未製品は、いずれも第二工程に限りなく近い状態のものとして捉えることのできる資料なのである。春山B遺跡の変輝緑岩製の未製品を調べてみても、第三工程と第四工程第1段階の資料に限られ、刃部が無成形か、剝離成形された状態に留まる例である。仮に榎田遺跡あるいはその周辺の遺跡からの搬出が予想された場合には、刃部研磨以前の段階が有力視される。ま

扁平片刃石斧発掘報告遺跡



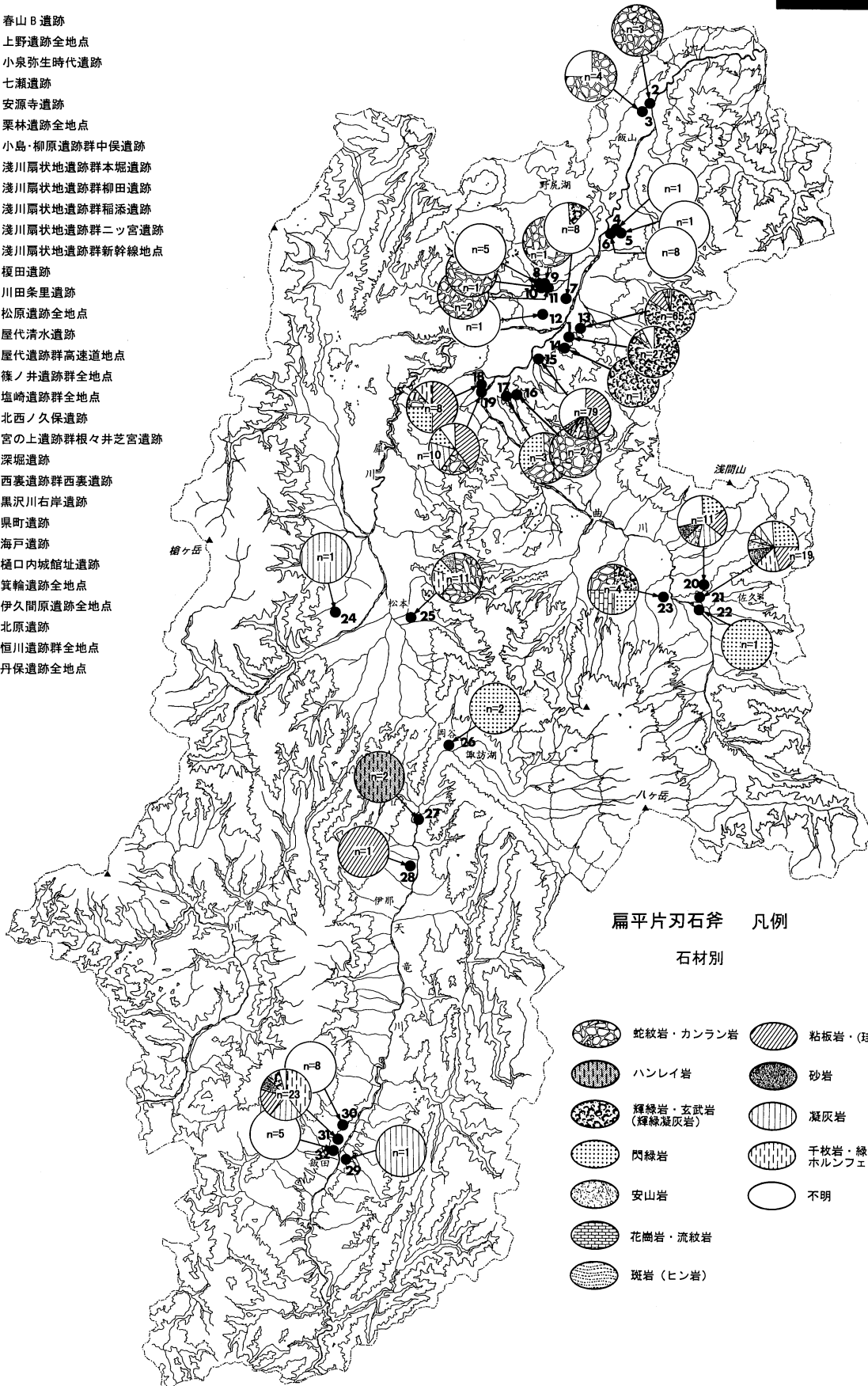
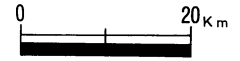
1. 春山B遺跡
2. 上野遺跡全地点
3. 小泉弥生時代遺跡
4. 七瀬遺跡
5. 安源寺遺跡
6. 栗林遺跡全地点
7. 小島・柳原遺跡群中俣遺跡
8. 浅川扇状地遺跡群本堀遺跡
9. 浅川扇状地遺跡群柳田遺跡
10. 浅川扇状地遺跡群稲添遺跡
11. 浅川扇状地遺跡群ニツ宮遺跡
12. 浅川扇状地遺跡群新幹線地点
13. 榎田遺跡
14. 川田条里遺跡
15. 松原遺跡全地点
16. 屋代清水遺跡
17. 屋代遺跡群高速道地点
18. 篠ノ井遺跡群全地点
19. 塩崎遺跡群全地点
20. 北西ノ久保遺跡
21. 宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡
22. 深堀遺跡
23. 西妻遺跡群西妻遺跡
24. 黒沢川右岸遺跡
25. 県町遺跡
26. 海戸遺跡
27. 樋口内城館址遺跡
28. 箕輪遺跡全地点
29. 伊久間原遺跡全地点
30. 北原遺跡
31. 恒川遺跡群全地点
32. 丹保遺跡全地点



第254図 県内出土の扁平片刃石斧（製品・未製品の内訳）

扁平片刃石斧発掘報告遺跡

1. 春山B遺跡
2. 上野遺跡全地点
3. 小泉弥生時代遺跡
4. 七瀬遺跡
5. 安源寺遺跡
6. 栗林遺跡全地点
7. 小島・柳原遺跡群中俣遺跡
8. 浅川扇状地遺跡群本掘遺跡
9. 浅川扇状地遺跡群柳田遺跡
10. 浅川扇状地遺跡群稲添遺跡
11. 浅川扇状地遺跡群ニッ宮遺跡
12. 浅川扇状地遺跡群新幹線地点
13. 榎田遺跡
14. 川田条里遺跡
15. 松原遺跡全地点
16. 屋代清水遺跡
17. 屋代遺跡群高速道地点
18. 篠ノ井遺跡群全地点
19. 塩崎遺跡群全地点
20. 北西ノ久保遺跡
21. 宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡
22. 深堀遺跡
23. 西裏遺跡群西裏遺跡
24. 黒沢川右岸遺跡
25. 県町遺跡
26. 海戸遺跡
27. 樋口内城館址遺跡
28. 箕輪遺跡全地点
29. 伊久間原遺跡全地点
30. 北原遺跡
31. 恒川遺跡群全地点
32. 丹保遺跡全地点



扁平片刃石斧 凡例
石材別

- | | | | |
|--|--------------------|--|---------------------|
| | 蛇紋岩・カンラン岩 | | 粘板岩・(珪質)頁岩 |
| | ハンレイ岩 | | 砂岩 |
| | 輝緑岩・玄武岩
(輝緑凝灰岩) | | 凝灰岩 |
| | 閃緑岩 | | 千枚岩・緑色片岩
ホルンフェルス |
| | 安山岩 | | 不明 |
| | 花崗岩・流紋岩 | | |
| | 斑岩(ヒン岩) | | |

第255図 県内出土の扁平片刃石斧(石材別内訳)

た一方で「緑簾石—プレーナイト岩（緑色岩）」製の未製品は、第三工程を欠落し、第四工程第1段階から第3段階までの資料がある。本遺跡資料と外観まで良く似た石材は、管見の限り、他の遺跡には確認できていないので、現状では④『春山B遺跡の「緑簾石—プレーナイト岩（緑色岩）」製扁平片刃石斧は、別の遺跡へ搬出されていない』と判断できる。ただし岩種名が類似した「変質玄武岩」製の扁平片刃石斧は、すでに述べたように松原遺跡^(註9)に確認されているのであるから、春山B遺跡以外の周辺遺跡から、それが搬出されている可能性を用意しておく必要がある。

ところで「頁岩≒粘板岩」とされる未製品の出土遺跡は、今のところ県内では松原遺跡に限られる。松原では5点報告があり、SA117（第289図-120）・SA124（第290図-128）・SA146（第290図-135）、いずれも第四工程第3段階の資料である。「刃部が研磨調整を前主面・後主面とも終えているかいなか」（p245、久保1993）で判断した場合において該当する資料であるが、いずれも刃部片面研磨ありの状態を示している。つまり「頁岩」製と報告のある未製品は、いずれも「第二工程・打裂、剝離による成形段階」に近い形状の第四工程第3段階の資料であり、刃部研磨が開始された状態にあるということである。仮に頁岩製の石斧が、その状態で搬出された場合には、搬入遺跡で製品・未製品の別をつけることは難しくなる。松原遺跡からの搬出が予想された場合、中俣遺跡4号住居址出土例（図100-43）などは、まさにその例に該当してくるのかも知れない。

「変輝緑岩」に代表される火成岩系の扁平片刃石斧と「頁岩」に代表される堆積岩系のそれとでは、未製品として遺跡からの搬出と搬入を想定した場合に、未製品の製作状況に違いのあることが予想される。そこに両者の“動き”の違いを加味し、製作遺跡の質を問うてはいかがなものだろう。残念ながら春山B遺跡で、それを追求するには不十分であるが…。

d まとめ

本遺跡の扁平片刃石斧は、火成岩系の岩石で保科玄武岩類に属する「緑簾石—プレーナイト岩（緑色岩）≒変質の玄武岩」を用いる。製作工程は堆積岩系の岩石とほぼ同様な手順を踏み、第三工程・敲打を伴わない。未製品の大きさは、目的値として2種類が想定でき、長さ8.0cm・幅4.5cmの資料群と長さ10.0cm・幅5.0cmの資料群である（第253図下）。規格化された大形品であるが、未製品あるいは製品での“動き”は想定できず、遺跡内のみでの消費が考えられる。同様に保科玄武岩類に属する「変輝緑岩」製の扁平片刃石斧では、製作工程に第三工程・敲打を介在させるといった火成岩系の手順が認められる。未製品3点とも長さ10.0cm・幅5.0cmを越える資料群（第253図下のライン矢印D）で、同材の製品2点とは形態をまったく異にする。恐らくは未製品あるいは製品で“動き”を捉えることのできる資料群であり、春山B遺跡への搬入、製作、消費を想定することができる例と考えられる。

註

- 1) 岩石名称の鑑定はパリオ・サーヴェイ株式会社に業務委託した。委託は榎田遺跡（県埋蔵文化財センター1999）の整理事業の一環として、磨製石斧製作に関連したと考えられる石材産地の岩石学的検討によるものである。また岩石の成分分析（蛍光X線分析・化学成分分析・X線回折分析）は川崎テクノリサーチ株式会社に同様な主旨で業務委託した結果である。なお千曲川右岸に立地する弥生遺跡での石器石材とそれら遺跡の背後に連なる河東山地の岩石との比較は、松原遺跡発掘調査報告書第V分冊第3章第1節に所収する予定である。
- 2) 保科玄武岩類を産出する妙徳山城には、今回調査の実施された榎田遺跡や春山B遺跡以外に、石斧製作遺跡が存在している可能性は極めて高い。本遺跡出土の「変輝緑岩」製の大型蛤刃石斧の一部と扁平片刃石斧、さらには松原遺跡出土の「変質玄武岩」製の扁平片刃石斧などを製作した遺跡が存在するものと予想される。
- 3) 現在、県埋文センターにて整理中の松原遺跡（高速道地点）のことを指す。高速道地点は2000年3月までに、全8分冊『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5—長野市内その3—松原遺跡』として報告される予定である。なお本稿で断りのない限り、松原遺跡は長野市教育委員会1993『松原遺跡III主要地方道中野更埴線道路改良事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』の成果を引用する。

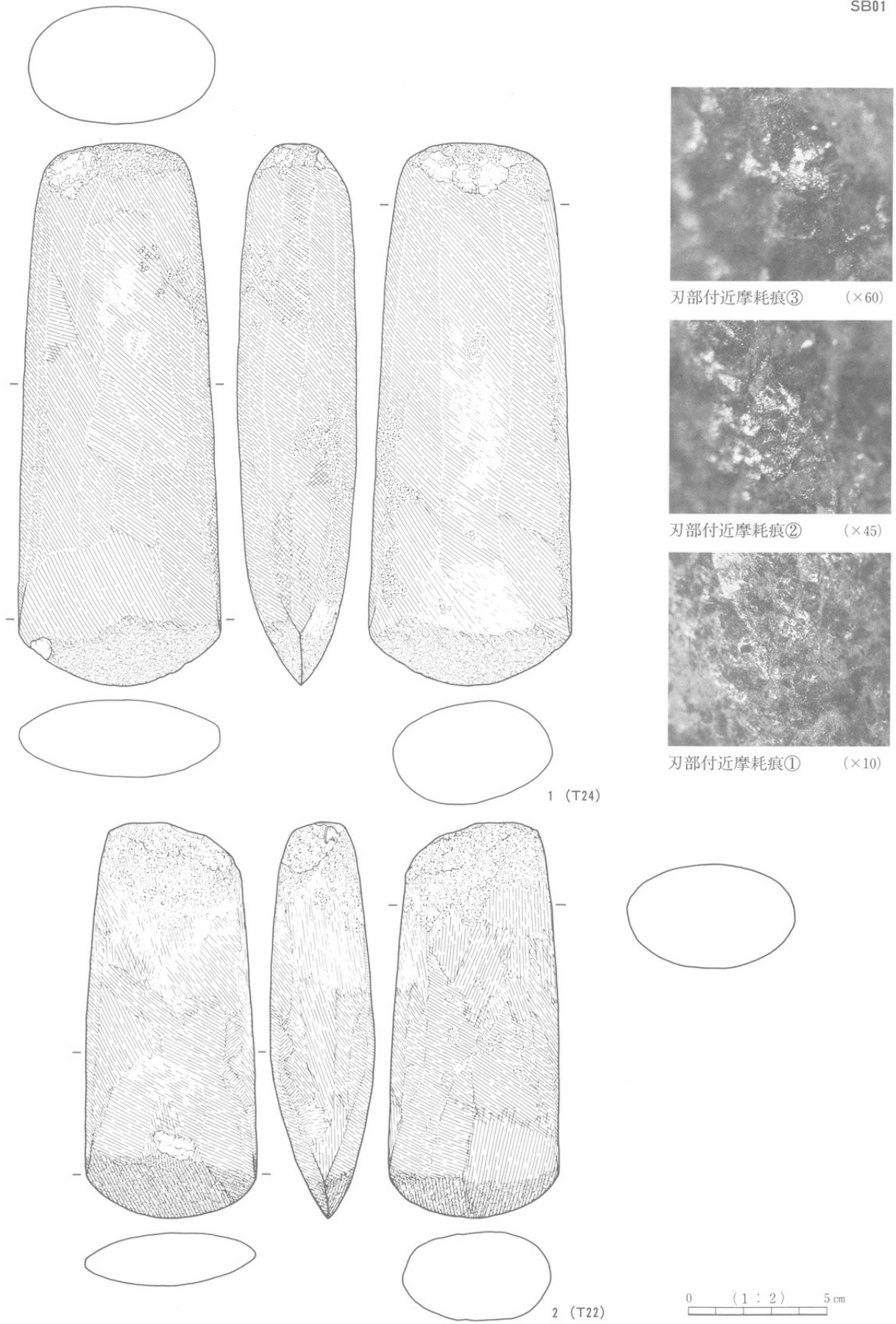
第4章 遺物各説

- 4) 註1に同じ。
- 5) 註1の結果から、俗に肉眼観察で「閃緑岩」製と判定されてきた石斧の多くが、「変輝緑岩」である可能性が示唆された(県埋蔵文化財センター1999)。ただし既出資料の全てが「変輝緑岩」と判断してよいという訳ではないことは、良識の範囲である。
- 6) 註3に同じ。
- 7) これまで県内の弥生遺跡から、蛇紋岩の剥片・碎片資料の報告例はない。
- 8) 1,000g未満の礫状の剥片7点が確認されているが、いずれも現資料から石斧素材を推定することは難しい。4点は凝灰角礫岩であり、現存する石斧にはない粗悪な岩石である。「緑色岩」1点と変質玄武岩の1点は形状から判断して敲石素材が予想され、残る「緑色岩」1点は素材を推定する根拠にかけ礫状の剥片資料である。
- 9) 註3に同じ。

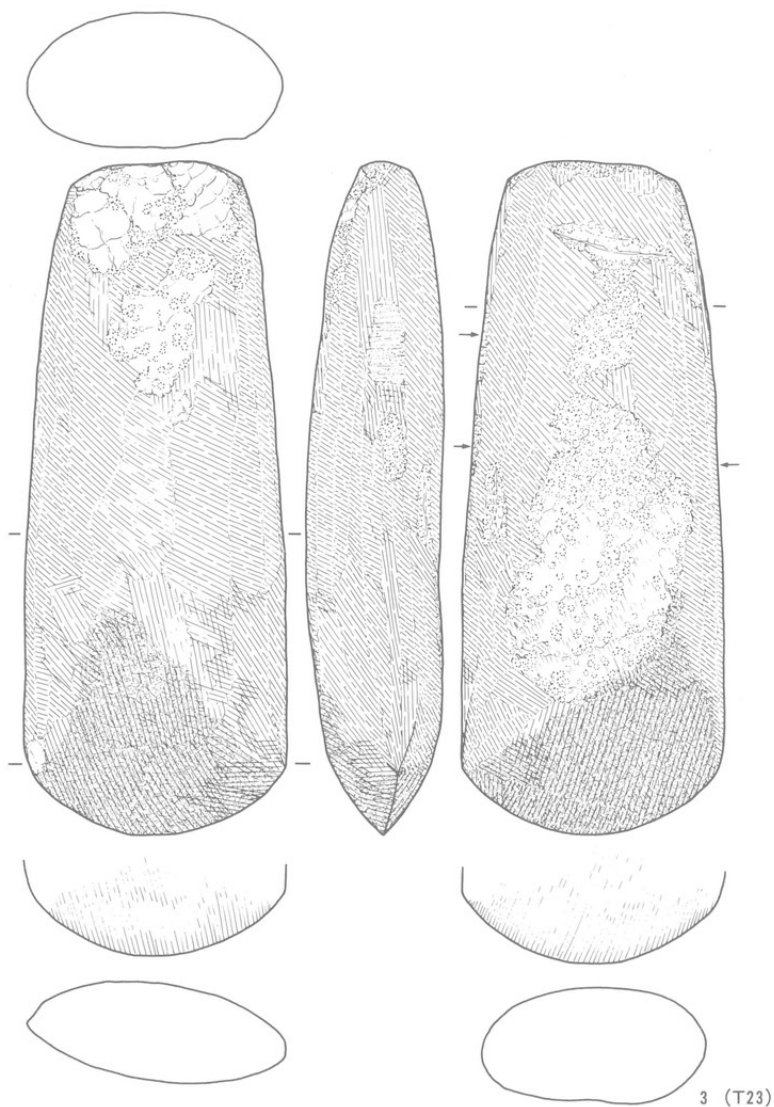
文献

- 1) 白居直之・町田勝則：1997『第4回 東日本における鉄器文化の受容と展開—発表要旨』
- 2) 長野県埋蔵文化財センター：1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12—長野市内その10—榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書37
- 3) 久保勝正ほか：1993「第5節松原遺跡の石器群の様相」『松原遺跡III—主要地方道中野更埴線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長野市の埋蔵文化財58集 長野市教育委員会
- 4) 長野市埋蔵文化財センター：1991『小島・柳原遺跡群中俣遺跡 浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・壇田遺跡』長野市埋蔵文化財第41集
- 5) 佐久市埋蔵文化財調査センター：1987『北西の久保—南部台地上の調査—長野県佐久市岩村田北西の久保遺跡第2次発掘調査報告書』佐久市埋蔵文化財調査報告書第8集
- 6) 佐久市埋蔵文化財調査センター：1986『西裏遺跡群 西裏・竹田峯』佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第1集
- 7) 松本市教育委員会：1990『松本県町遺跡』松本市文化財調査報告No.82
- 8) 飯山市教育委員会：1986『恒川遺跡群 一般国道153号線座光寺バイパス用地内埋蔵文化財発掘調査報告(遺物編)』
- 9) 中山平次郎：1924「筑前糸島郡今山に於る石斧製造所址」『考古學雜誌』第十四卷第十四號

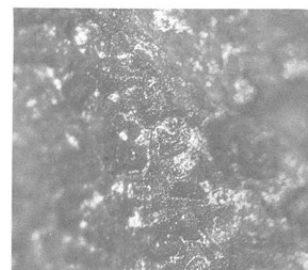
SB01



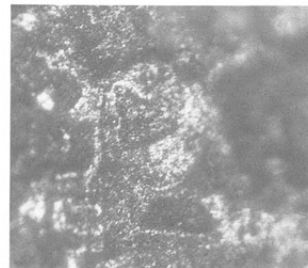
第256図 SB01出土石器実測図1



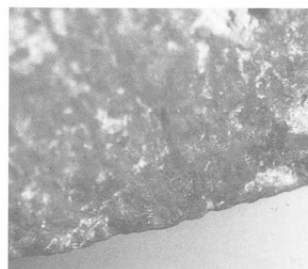
3 (T23)



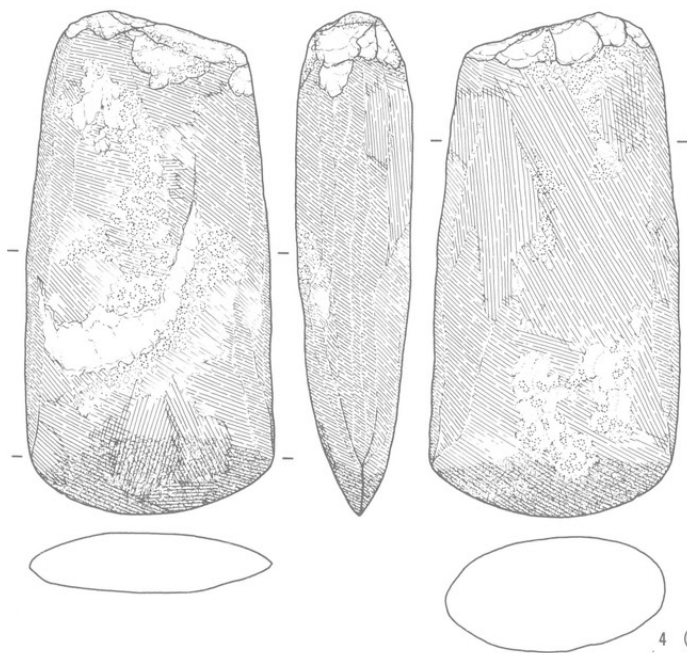
刃部付近摩耗痕① (×30)



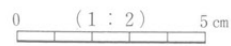
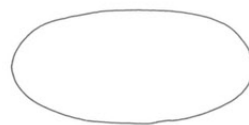
刃部付近摩耗痕② (×30)



刃部摩耗線状痕 (×10)

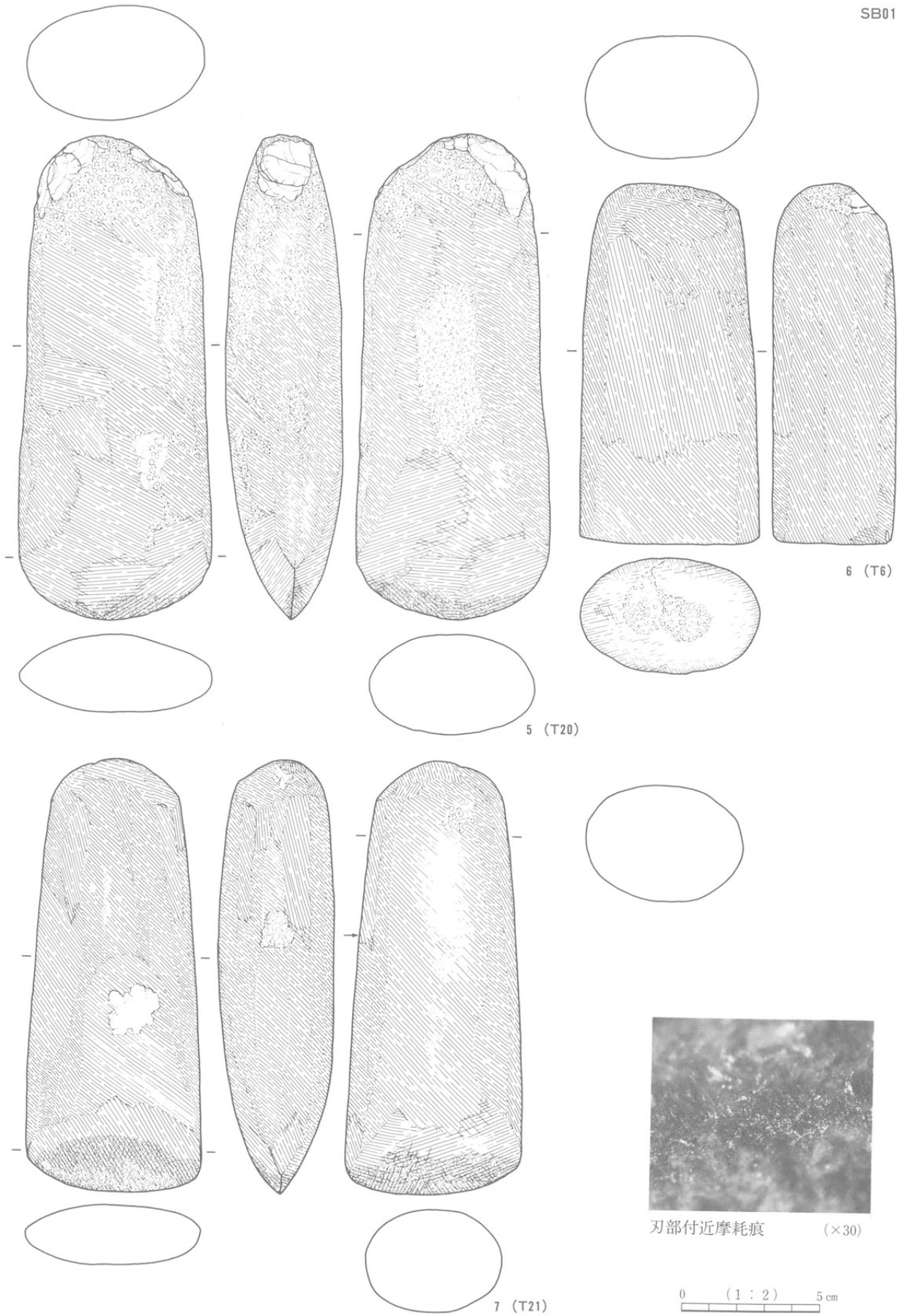


4 (T2)

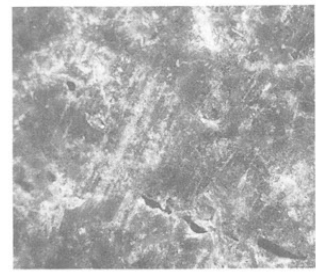
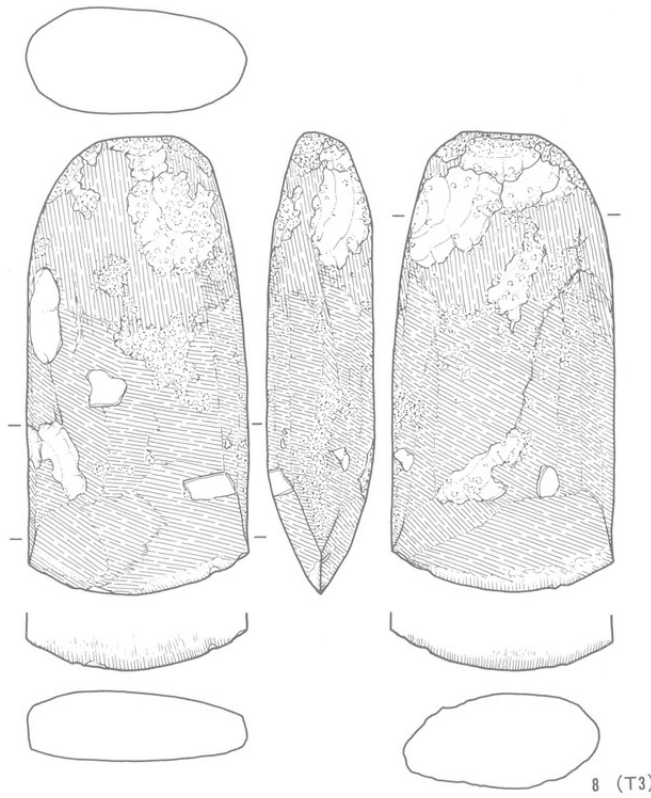


第257図 SB01出土石器実測図2

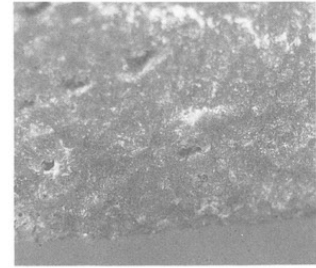
SB01



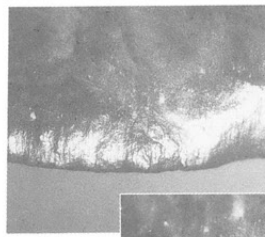
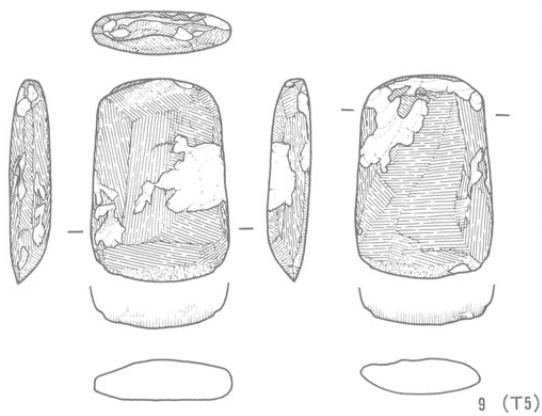
第258図 SB01出土石器実測図 3



基部研磨痕 (×10)



刃部付近の摩耗線状痕 (×10)

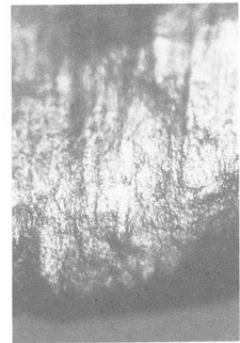


(×10)

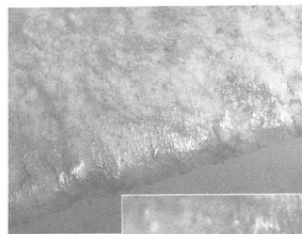
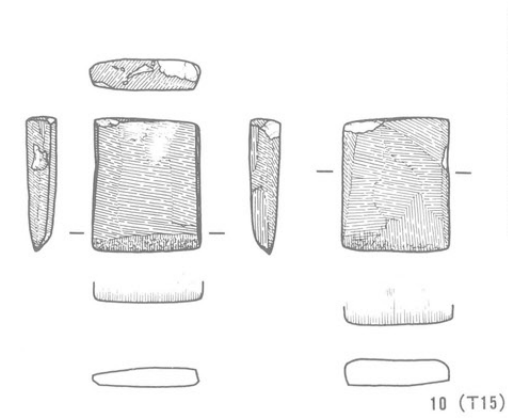


(×22)

刃部摩耗線状痕

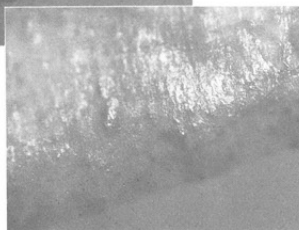


(×60)



(×10)

刃部摩耗線状痕



(×45)



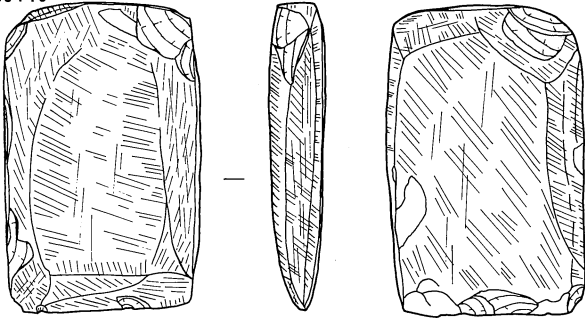
(×10)

基部装着痕



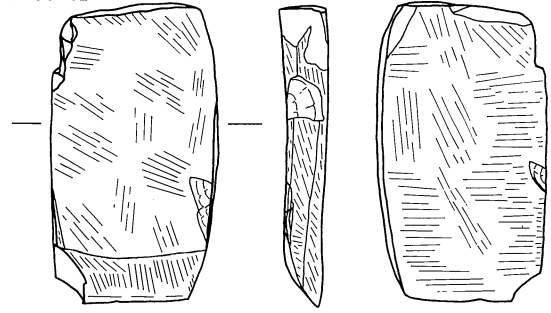
第259図 SB01出土石器実測図4

SB05T13

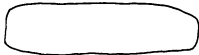


1

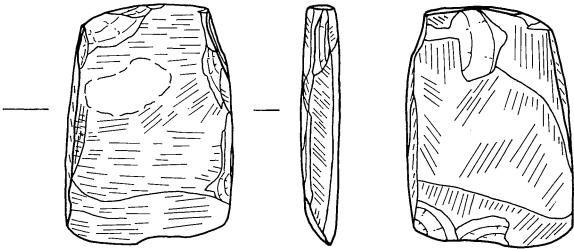
SB34T12



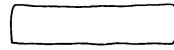
2



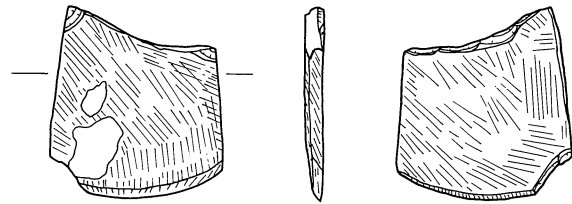
IV区Mグリッド



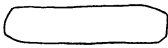
3



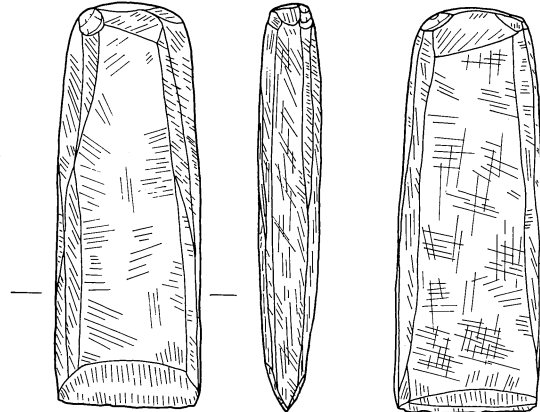
IV区Mグリッド



4



SB08T6

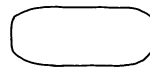


6

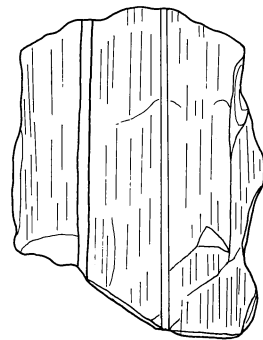
SB37T1



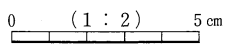
5



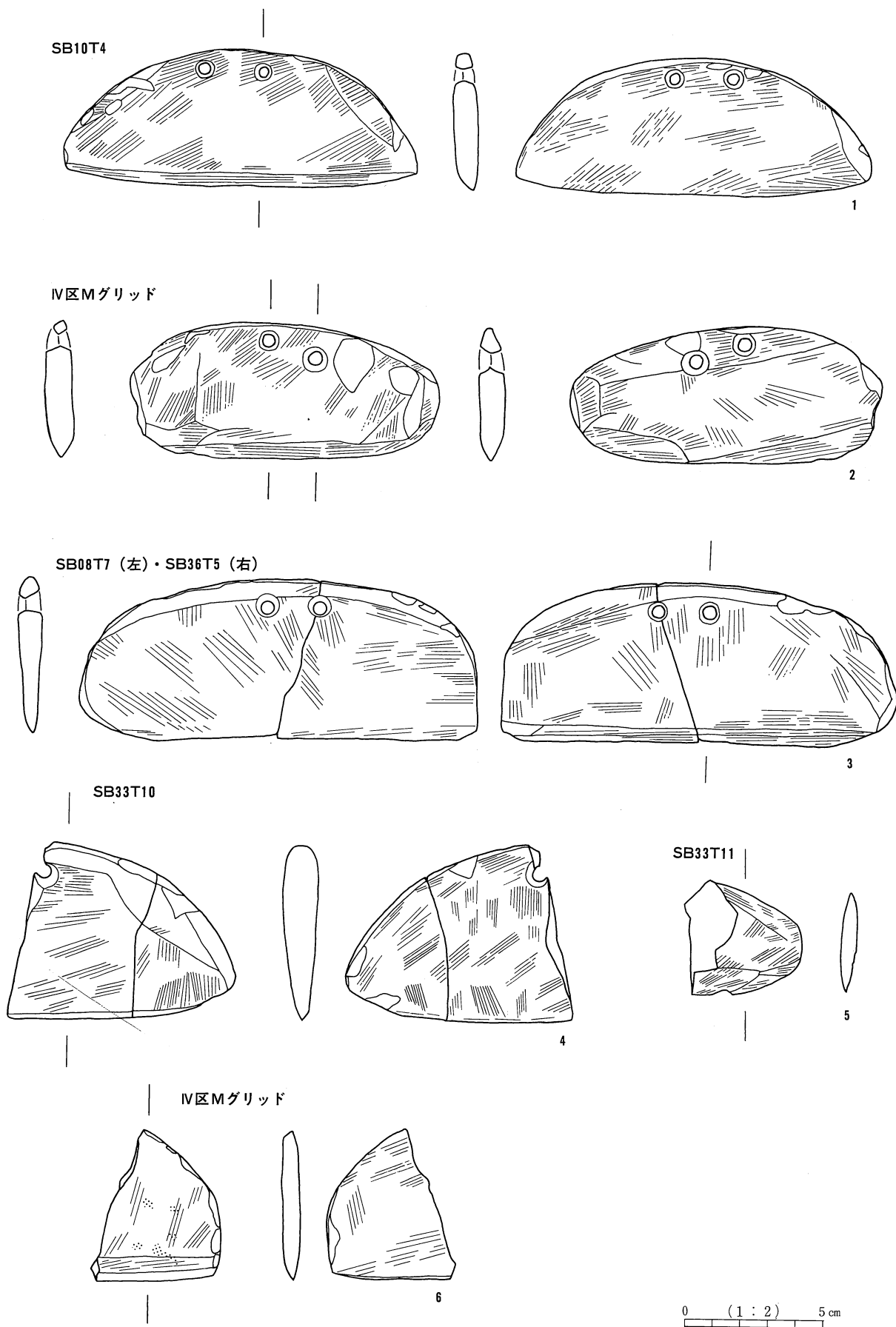
SB01T4



7



第260図 主要磨製石器実測図



第261図 磨製石庖丁実測図

第3節 金属製品

本遺跡からは弥生時代中・後期の竪穴住居から金属製品が7点出土した。7点の内2点が鉄製品で5点が青銅製品、鉄器1点が中期でほかは全て後期の遺構からである。出土状況については第3章の遺構の記載で触れているが、SB108出土の鉄片が混入遺物の可能性があるほかは各遺構内に残存、遺棄もしくは投棄された遺物である。

1 鉄製品 (第262図6・7 PL77)

中期後半SB01出土の板状鉄斧(7)は長さ4.6cm、幅4.8cm、厚さ5.5mmで平面形態はほぼ方形となる。刃部方向に厚みを減じているが明瞭な研ぎ出し面は観察されない。後期SB108出土鉄片(6)は厚さ2～4mmで周縁を全て欠損するため形状は不明であるが、断面が湾曲し縁辺一部に折り返された槌状の窪みがあることから袋状鉄斧になる可能性がある。

長野県内からは弥生時代の鉄器が後期を中心に数多く出土し、器種・量とも全国的に特殊な地域である(文1)。県内には管見の限り中期3遺跡、後期56遺跡で、鉄片を含め総数約200点が報告(註1)されている。地域別には北信16、東信13、中信12、南信15遺跡に分布し各地域に平均されるが、本遺跡を含む千曲川流域では125点があり出土分布の中心をなしている。ことに善光寺平南部に位置する篠ノ井遺跡群(文2)からは44点の各種鉄器が確認され集中遺跡として注目される。

中期に帰属する鉄器は長野市光林寺裏山遺跡(文3)と佐久市社宮司遺跡(文4)の板状鉄斧の2点と、徳間遺跡(文5)に鉄片1点がある(註2)。該期の器種は本遺跡を含め扁平片刃石斧と同形態の鉄斧である。鉄斧出土の2遺跡とも出土状況が不明確であるが、共伴したとされる遺物が装飾品であることから遺棄の可能性が高い。本遺跡の鉄斧は焼失住居出土という偶然性があり、中期の鉄器の稀少性は遺棄されたもの以外は、破損しても金属利器として後期まで引き継がれたと解釈できる。またSB01は鉄斧のほかに太形蛤刃石斧8点と扁平片刃石斧2点が共伴する特殊な住居であることから、鉄器を含めた加工具の所有形態が個人にあったことを示唆している。

後期出土鉄器の器種内訳は釧65点、鏃26点、ヤリガンナ15点、斧12点、剣9点、刀子8点、鎌4点、鍬鋤先3点でほかに矛、釣り針などがあり50点余りが器種不明である。該期の鉄斧は板状鉄斧に加え袋状鉄斧が存在し、板状鉄斧も縦長の大型形態となる。板状鉄斧(鑿を含む)は飯山市東長峰遺跡(文6)、光林寺裏山遺跡、佐久市後沢遺跡(文7)、坂城町塚田遺跡(文8)、上田市琵琶塚遺跡(文9)、辰野町樋口五反田遺跡(文10)、飯田市酒屋前遺跡(文11)で各1点、袋状鉄斧は池田町滝の台遺跡(文12)で1点、光林寺裏山遺跡で4点が確認されている。

2 銅製品 (第262図1～5 PL77)

青銅製品5点はいずれも銅釧でSB14・16から各2点、SB42から1点出土している。1～3・5の4点は釧の湾曲形状はなく、扁平に延ばされた形態である。この4点のうち1・2は依存状態が極めて良く部分的にブロンズ色が観察される。1の表面には断面V字形の樋が部分的に2条刻まれ、2には1条の樋が両端まで深く刻まれ、一端は切断面から裏面の一部まで確認される。この2資料の両端部欠損面には微妙な膨らみがあり、湾曲面側に折り曲げて切断した痕跡と見ることができる。つまり2に見られる様に銅釧を切断(折損)後に、樋を刻み入れた再加工製品である。またSB42出土の釧は湾曲形状を残すが再加工を意図した折損の可能性が高い。本遺跡出土の住居出土銅釧は、転用製品もしくはその素材となる。墓壇以

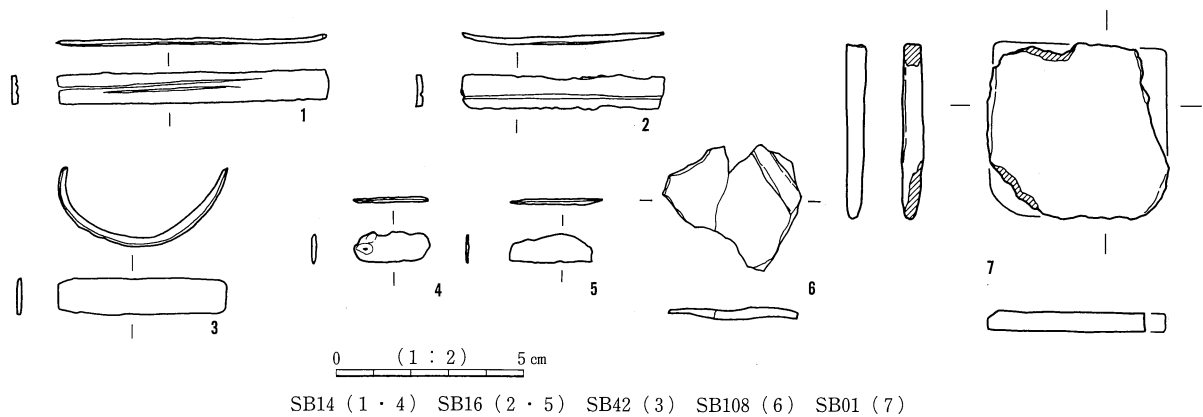
外から銅釧が出土し確実に竪穴住居に共伴した例は、長野市鶴前遺跡SB28^(文13)、同四ツ屋遺跡SB9^(文5)、上田市琵琶塚遺跡62住、佐久市北西ノ久保遺跡Y88住^(文14)、があり、いずれも破片資料である。これらの遺構に佐久市上直路遺跡1住銅釧出土事例^(文15)のごとく埋葬施設が存在した可能性はありえるが、本遺跡例にみる再加工を目的とした素材あるいは再利用された銅製品の遺棄（投棄）の可能性が指摘される。

註

- 1) 県内出土遺跡の概要及び引用文献については文献1を参考されたい。
- 2) 飯田市寺所遺跡では中期の溝址から鉄片3点が出土しているという報告があるが、混入の可能性が極めて高いと判断し除外した。

文献

- 1) 鉄器文化研究会編：1997『第4回 東日本における鉄器文化の受容と展開—発表要旨』
- 2) 長野市教育委員会：1992 篠ノ井遺跡群（4）—聖川堤防地点—
長野県埋蔵文化財センター：1997 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16 篠ノ井遺跡群
長野県埋蔵文化財センター：1998 北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4 篠ノ井遺跡群ほか
- 3) 更級埴科地方史刊行会：1978 更級埴科地方史 第2巻原始古代中世編
- 4) 八幡一郎：1956 長野県野沢発見の弥生式遺物 考古学雑誌38-5・6
- 5) 長野市教育委員会：1987 四ツ屋・徳間・塩崎遺跡IV
- 6) 桐原健：1959 北信濃長峯丘陵における弥生式遺跡 考古学雑誌45-1
- 7) 長野県史刊行会：1982 長野県史 考古資料編全1巻(2) 主要遺跡（北・東信）
- 8) 坂城町教育委員会：1995 南条遺跡群 塚田遺跡II
- 9) 上田市教育委員会：1989 琵琶塚II
- 10) 辰野町教育委員会：1974 樋口五反田遺跡緊急発掘調査報告書
- 11) 長野県教育委員会：1972 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯田市内その2
- 12) 池田町教育委員会：1993 滝の台 弥生後期の集落跡
- 13) 長野県埋蔵文化財センター：1994 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書14 鶴前遺跡
- 14) 佐久市教育委員会：1987 北西の久保 —南部台地上の調査—
- 15) 佐久市教育委員会：1988 佐久市埋蔵文化財 年報6



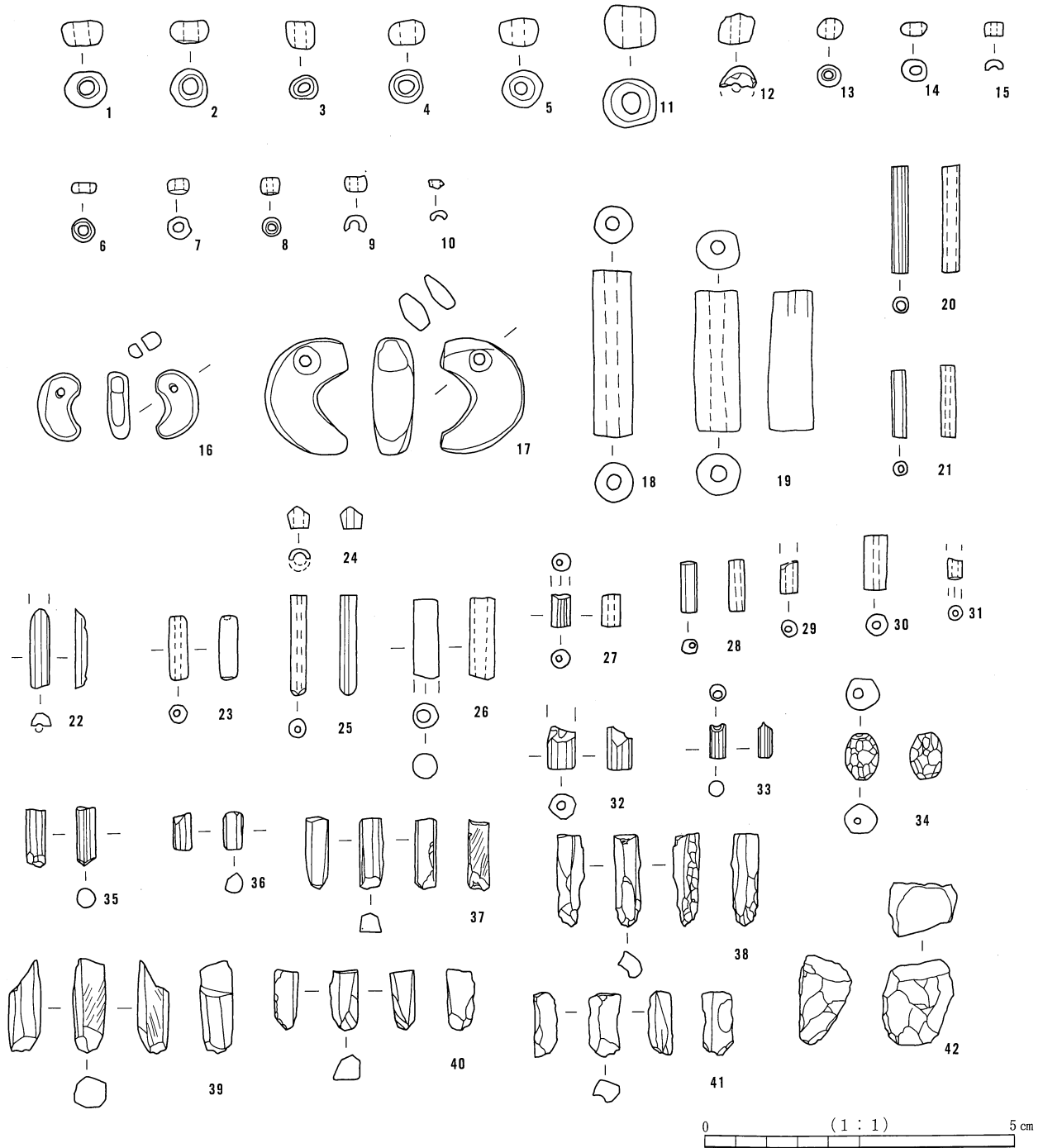
第262図 銅釧・板状鉄斧実測図

第4節 玉 類 (第263図、第2・15表、巻首写真)

本遺跡から出土した玉類はガラス小玉15点、ヒスイ製勾玉2点、緑色凝灰岩製管玉9点、鉄石英製管玉5点であり出土遺構及び遺物法量等は第12表の通りである。本遺跡で特に注目される玉類は弥生中期の竪穴住居出土の鉄石英製管玉の未製品及びその破片である。鉄石英の剥片、細片を多量に出土した住居は第3章2節の第2表にまとめたSB05・08・13・33・34であるが、これらの遺構からは玉造に関連した特殊

施設は検出されていない。また各遺構からは鉄石英の剥片ばかりでなく、チャートや黒曜石、閃緑岩、安山岩等の碎片も一定量出土した。

玉造関係の遺物では未製品のほか筋砥石1点があるが、石針、石鋸といった加工具はなく、また大形石



SK01 (1~10) SD02 (11) SX102 (12・16・30)
SQ41 (28) SD16 (19)
遺構外 (17・18・31)

SB03 (29)・SB05 (33~36・38~42)・SB10 (22)・SB13 (13・23)
SB16 (14・24・25)・SB19 (26・27・37)・SB22 (20)・SB24 (32)
SB37 (21)・SB42 (15)

第263図 ガラス小玉・勾玉・管玉実測図

核・板状剥片や擦切施溝の残る剥片等の玉造技術工程を解明する資料も出土していない。未製品は四角柱体をなす剥片8点、多角柱体から研磨加工されたものが6点、穿孔過程で欠損したものが6点である。

県内では中期から後期にかけて鉄石英製の管玉が数多くの遺跡で出土しているが、今日まで鉄石英製の玉造関連の遺構は発見されていない。本遺跡では玉造を専業としていた集団とは見られず、集落の一角もしくはある時期に製作をおこなった痕跡と捉えられる。

第15表 玉類一覧表 (実測掲載した製品のみ)

図版番号	出土遺構	器種	材質	色調	重量g	出土地点・層位
1	SK01	ガラス小玉	ガラス	コバルト・ブルー	0.19	埋土中層
2	SK01	ガラス小玉	ガラス	コバルト・ブルー	0.15	埋土中層
3	SK01	ガラス小玉	ガラス	コバルト・ブルー	0.13	埋土中層
4	SK01	ガラス小玉	ガラス	コバルト・ブルー	0.17	埋土中層
5	SK01	ガラス小玉	ガラス	コバルト・ブルー	0.03	埋土中層
6	SK01	ガラス小玉	ガラス	スカイ・ブルー	0.02	埋土中層
7	SK01	ガラス小玉	ガラス	スカイ・ブルー	0.01	埋土中層
8	SK01	ガラス小玉	ガラス	スカイ・ブルー	0.01	埋土中層
9	SK01	ガラス小玉	ガラス	スカイ・ブルー	0.01以下	埋土中層
10	SK01	ガラス小玉	ガラス	グラウィッシュオリーブ	0.01以下	埋土中層
11	SD02	ガラス小玉	ガラス	コバルト・ブルー	0.6	埋土上層
12	SX102	ガラス小玉	ガラス	コバルト・ブルー	0.13	埋土1層下部
13	SB13	ガラス小玉	ガラス	スカイ・ブルー	0.05	入口柱穴内
14	SB16	ガラス小玉	ガラス	スカイ・ブルー	0.01	埋土2層
15	SB42	ガラス小玉	ガラス	スカイ・ブルー	0.01	埋土中層
16	SX102	勾玉	翡翠	オリーブ・グレー	0.44	埋土1層下部
17	IV区-M	勾玉	翡翠	グリーン	2.67	基本層序6層
18	VIII区-J	管玉	緑色凝灰岩	グリニッシュ・グレー	1.19	黒褐色粘土層
19	SD16	管玉	緑色凝灰岩	ダーク・グリーン	2.21	埋土上層
20	SB22	管玉	緑色凝灰岩	ダーク・グリーン	0.23	埋土1層
21	SB37	管玉	緑色凝灰岩	ダーク・グリーン	0.10	検出面
22	SB10	管玉	鉄石英	ダーク・レッド	0.09	南東壁側柱穴内
23	SB13	管玉未製品	鉄石英	ダーク・レッド	0.18	床面直上
24	SB16	管玉	鉄石英	ダーク・レッド	0.01	埋土4層上部
25	SB16	管玉	鉄石英	ダーク・レッド	0.12	埋土4層上部
26	SB19	管玉未製品	鉄石英	ダーク・レッド	0.33	埋土上層
27	SB19	管玉	鉄石英	ダーク・レッド	0.09	埋土上層
28	SQ41	管玉	緑色凝灰岩	ダーク・グリーン	0.09	基本層序VII層
29	SB03	管玉	緑色凝灰岩	ダーク・グリーン	0.05	埋土1層
30	SX102	管玉	緑色凝灰岩	グリニッシュ・グレー	0.18	埋土1層下部
31	IV区-M	管玉	緑色凝灰岩	ダーク・グリーン	0.01	基本層序6層
32	SB24	管玉	鉄石英	ダーク・レッド	0.18	埋土炭層
33	SB05	管玉未製品	鉄石英	ダーク・レッド	0.07	埋土中層
34	SB05	管玉未製品	鉄石英	ダーク・レッド	0.34	埋土中層
35	SB05	管玉未製品	鉄石英	ダーク・レッド	0.17	埋土下層
36	SB05	管玉未製品	鉄石英	ダーク・レッド	0.11	炉内
37	SB19	管玉未製品	鉄石英	ダーク・レッド	0.27	埋土上層
38	SB05	管玉未製品	鉄石英	ダーク・レッド	0.37	埋土中層
40	SB05	管玉未製品	鉄石英	ダーク・レッド	0.28	埋土中層
41	SB05	管玉未製品	鉄石英	ダーク・レッド	0.31	埋土下層
42	SB05	管玉製作の残核	鉄石英	ダーク・レッド	1.4	床面直上

第5章 まとめ

本遺跡は弥生時代中期後半と後期中葉、後期終末期を主とする集落址である。この時期は千曲川流域で最も多く検出される遺跡で、ことに本遺跡を含めた長野・更埴市を中心とする善光寺平においては流域全の自然堤防上に集落址が密集している。中期後半と後期中葉～古墳前期前半期は遺跡数の多さもさることながら大規模遺跡で、遺物も土器・石器ばかりでなく金属器・木器など多様にある。これらの内容はこの地を『クニ』と呼ぶにふさわしい状況を示している。該期の遺跡については既に数多くの調査報告があるが、遺構密度が激しいため特定時期の遺構が復元されにくかったり、弥生中・後期以後の遺構によって多くを削平される事例が少なからずある。これに対し本遺跡で検出された竪穴住居址を始めとする遺構群は、大きな時代区分での遺構重複はいくつか認められるが各時代・時期別の位置関係は散在し、遺構相互に重複を避けている状況が確認された。

弥生中期の竪穴住居址は12軒検出され、これらには重複関係はなく堀立柱建物址を含む6群のピット群も分散し住居址との立地区分けも違和感なく集合している。集落は外郭に土坑群を配し、竪穴住居2～3軒に数棟の堀立柱建物址が隣接する遺構配置がみられ、複数単位集団がまとまっていたことを示している。また該期の住居出土遺物からは、鉄石英製玉造製作ばかりでなく各種石器が製作されていた状況を示し、さらに手工業生産にかかわる有孔土製円盤の多量出土には注目される。複数の生業を特定住居に限らず全ての住居に痕跡をとどめる集落であるが、本集落を専業集団とするには根拠が乏しく、今後周辺遺跡との検討が必要である。

弥生後期の竪穴住居址は45軒、土坑60基が検出されたが、住居址相互で明瞭に重複する遺構はない。ただSB13と14は位置的に同時存在は困難であり、井戸址SK43がSB20を切る状況やSK06・19がSB31に隣接する状況は単純な短期集落でないことを示している。しかし住居配置が分散密着することや堀立柱建物址の柱穴配列が軸をずらさないことなどから1世代ないしは2世代程度の居住時間幅であったと捉えられる。このことは複数の竪穴住居埋土に燃焼痕跡を残す炭層が2次堆積し、その堆積層に型式の異なる土器投棄が伴っていること、SK43の井戸は住居中央部の窪みを意識した可能性もあること、水田址埋没後の2面の検出面から出土する土器に大きな型式差がないことなどからも認められる。つまり遺構群の配置は前代の遺構痕跡を視野に入れて再構築した2～3段階に変遷した集落とみなされる。出土土器では後期前半まで遡る破片資料があるが、主体は後期中葉に限定された一括資料となり、従来見いだせなかった広口台付壺や台付甕類似の高杯などの器種を加えることができた^(註1)。竪穴住居址及び井戸址出土土器ともに後期中葉を逸脱する資料は見いだせずこの点からも居住時間幅の短さが確認される。土器についての詳細な検討は別稿に委ねるが、微妙な時間差は遺構検出状況から変遷を辿ることが可能である。本遺跡は後期の最も集落が拡大する段階であるが、今後は善光寺平に点在する各集落遺跡相互の関係をいくつかの観点から解明しこの地域の特性と共に、北陸、東海地域更には畿内との政治的関係を究明していく必要がある。

註1. 青木一男1998:『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡 弥生・総論6』の後期編年に照らすと3段階を主体とし一部4段階に該当する資料となる。

付 章

第1節 春山B遺跡出土木材樹種同定

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

春山B遺跡は長野市大字若穂綿内字田中の千曲川南東側の標高350m前後の自然堤防地帯と後背湿地に立地する遺跡である。おもな遺構は、弥生時代中期・後期の集落、弥生時代後期の方形周溝墓群、弥生時代後期と近世の水田面などが検出されている。ここでは、弥生時代中期後半と弥生時代後期の住居跡出土炭化材11点、弥生時代後期と後期以降の木製品65点の樹種同定結果を報告する。

2 樹種同定の方法

炭化材は先ず横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で観察し分類群のおおよその目安をつける。次に横断面だけでは同定できない試料(アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ以外)については、3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定する。またコナラ節やクヌギ節などでも、年輪幅の狭いぬか目や逆に年輪幅の広い試料などは実体顕微鏡下では誤同定の恐れがあるので、このような試料についても走査電子顕微鏡で確認する。走査電子顕微鏡用の試料は、横断面のほかに、接線断面(板目)と放射断面(柀目)は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り平滑面を出す。この3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子㈱製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

炭化していない木製品については、片刃の剃刀を用いて材の横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柀目)の3方向を薄く剥ぎ取りスライドガラスの上に並べ、ガムクロラルで封入し永久プレパラートを作成し、光学顕微鏡を用いて材組織を観察し同定を行った。

炭化試料の残りとプレパラート標本は、パレオ・ラボに保管されている。

3 結果

表16に同定結果を標本番号順に示した。木製品の器種・用途別の使用樹種を表17に集計して示した。当遺跡からは針葉樹5分類群、落葉広葉樹19分類群が検出され、1点は樹皮の部分であった。落葉広葉樹は、常緑性と落葉性の樹種を含み材組織からは識別できないクスノキ科とサクラ属そして不明環孔材を除きすべて落葉性の分類群であった。次に、時期別に結果をまとめた。

[弥生時代中期後半の試料]

8試料すべて炭化材である。弥生時代中期後半の焼失家屋であるSB01から出土した建築部材は、カヤ1点、ニレ属2点、カバノキ属とトネリコ属が各1点であった。同じく弥生中期後半のSB35から出土した板材はカバノキ属、SB33とSB36から出土した用途不明の炭化材はカバノキ属とケヤキであった。弥生後

期後半のSB102のpit-6から出土した割材はクスノキ科であり、SB12とSB38から出土した用途不明の炭化材はヤマグワとサクラ属であった。

[弥生時代後期後半・弥生時代以降の試料]

65試料は未炭化材であるが、3試料は炭化材である。

建築部材と建築柱には、針葉樹ではカヤとモミ属が各4点とイヌガヤ・サワラが各1点、広葉樹材ではエノキ属8点・ケヤキ7点・クリ7点・ケンポナシ属3点・ヤマグワ2点、コナラ節・ニレ属・クスノキ科・ヤマザクラ・イヌエンジュ・ユクノキ?・不明環孔材が各1点であった。エノキ属・ケヤキ・ニレ属のニレ科の材の出土数が多いのが特徴的であった。杭は、針葉樹のカヤ1点とアカマツ2点、広葉樹のクリ2点とヤナギ属・コナラ節・カエデ属が各1点である。木棺は、クリであった。膝柄2点は、コナラ節であった。丸木弓は、イヌガヤであった。農耕具柄は、ケヤキであった。井戸については、SK43の丸木舟を転用し井戸枠として再利用した材はトチノキであり、SK43の井戸枠杭はキリ2点・ヤマグワ1点、SK35の井戸枠3点はサワラ・トチノキ・ケヤキであった。器種・用途不明の4試料は、コナラ節・ヤマグワ・サクラ属・樹皮であった。

以下に同定の根拠となった組織の観察結果を記載する。

1) **カヤ** *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 第264図 1a.-1c. (BHA-B 22) 第271図 1a.-1c. (BHA-B 70)

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞をもたない針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかである。仮道管に2本が対になるらせん肥厚がある。分野壁孔は小さなヒノキ型が4個ある。

本州の宮城県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山地に生育する常緑高木である。材は水湿に強く加工しやすい。

2) **イヌガヤ** *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.koch イヌガヤ科 第264図 2a.-2c. (BHA-B 39)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。仮道管にらせん肥厚があり、分野壁孔は小さくトウヒ型とヒノキ型が見られ、1分野に1～2個である。カヤと似るが樹脂細胞がある点で識別される。

イヌガヤは本州の岩手県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山林の下に生育する常緑小高木である。材は緻密で固く小型の器具や細工物などに使われる。

3) **モミ属** *Abies* マツ科 第264図 3a.-3c. (BHA-B 36)

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞はない針葉樹材。しばしば傷害樹脂道が現れる。晩材部の仮道管の壁は非常に厚い。放射柔細胞の壁も厚く放射断面において細胞壁に数珠状肥厚が見られ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型のスギ型とヒノキ型が見られ、1分野に1～4個ある。放射組織の細胞高は比較的高い。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

4) **アカマツ** *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 第265図 4a.-4c. (BHA-B 62)

垂直・水平樹脂があり早材から晩材への移行はゆるやかで晩材部の量が多い針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には先の鋭く尖った鋸状の肥厚が顕著であることからアカマツと同定した。

アカマツは暖帯から温帯の陽地に生育し、二次林の主要樹でもある。材は耐水性がある。

5) サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) ヒノキ科 第265図 5a.-5c. (BHA-B 26)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少なく、樹脂細胞は年輪後半に短接線状に分布する。分野壁孔は大きく、孔口は大きく開いたヒノキ型、1分野におもに2個が水平に整然と配列する。孔口の開口がヒノキより大きく水平に近いことからサワラと同定した。

サワラは東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育する。材はヒノキよりやや軽軟で劣る。

6) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 第265図 6a.-6c. (BHA-B 62)

小型の管孔が単独または2~4個が複合し晩材部に向かいゆるやかに径を減じる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は単列異性、道管との壁孔は交互状から対列状で密在する。

ヤナギ属は暖帯から温帯の水湿地や丘陵地の陽地に生育する落葉高木または低木で多くの種類がある。材から種を特定はできていない。材質は軽軟で切削は容易だが耐朽性は低い。

7) カバノキ属 *Betula* カバノキ科 第271図 2a.-2c. (BHA-B 73)

中型の管孔が単独または放射方向に2~数個の管孔が複合して散在する散孔材。道管の壁孔の孔口は水平方向に流れて不規則な縞模様を開き、穿孔は階段数が10~15本の階段穿孔である。放射組織はほぼ同性、1~4細胞幅である。

カバノキ属は温帯から寒帯の山地の陽地に生育する落葉性の高木または低木で、約9種がある。本州以南に分布するミズメ、岐阜県以東に分布し崩壊地に二次林を形成するシラカンバ、高山に多いウダイカンバなどがある。材は重硬で有用材である。

8) コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus*, subgen. *Q.* sect. *Prinus* ブナ科 第266図 7a.-7c. (BHA-B 61)

年輪の始めに中型の管孔が配列し、晩材部では薄壁・角形の小型管孔が火炎状・放射状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと細胞幅の広い複合状または集合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は加工はややしにくく乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点がある。

9) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第266図 8a.-8c. (BHA-B 17)

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し徐々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通にある落葉高木である。果実は食用になり、材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。

10) ニレ属 *Ulmus* ニレ科 第266図 9a.-9c. (BHA-B 46)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、その後小型の管孔が多数集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は同性、3細胞幅の紡錘形である。軸方向に連結する結晶細胞がある。

ニレ属は北地の温帯に多いハルニレ・オヒョウ、暖帯の荒地や川岸に普通に見られるアキニレがあり、いずれも落葉高木である。材はやや重硬で割れにくく粘り気があるが、加工はやや困難で保存性は低い。

11) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第267図 10a.-10c. (BHA-B 28) 第272図 4a.-4c. (BHA-B 74)

年輪の始めに中型~大型の管孔が1~2層配列し、その後小型の管孔が多数集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1~7

細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅いが狂い易いので十分な乾燥が必要な材である。用途は建築材や容器が多い。

12) エノキ属 *Celtis* ニレ科 第267図 11a.-11c. (BHA-B 32)

中型の管孔が1～2層配列し、その後非常に小型の管孔が多数集合し塊状・斜状・接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在し、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は方形・平伏細胞からなる異性で、縁に鞘細胞がある。

エノキ属は落葉性の高木で、本州以南の低地から山地に普通のエノキ、北海道以南の山地に生育するエゾエノキ、近畿以西の山地にまれに生育するコバノチョウセンエノキがある。材は硬いが強くなく狂い易い弱点がある。

13) ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科 第267図 12a.-12c. (BHA-B 14) 第272図 5a.-5c. (BHA-B 71)

年輪の始めに大型の管孔が配列し徐々に径を減じて、晩材部では小型～非常に小型の管孔が複合して斜状・波状に配列する環孔材。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚があり、内腔にはチロースがある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形で上下端に方形細胞があり、縁に鞘細胞が見られ、道管との壁孔は大きく交互状に配列している。

ヤマグワは落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布する。材は重硬・強靱で心材は特に保存性が高い。

14) クスノキ科 Lauraceae 第272図 6a.-6c. (BHA-B 76)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は方形細胞を含む異性、1～3細胞幅、上下端に大きな油細胞があり、道管との壁孔は交互状でその孔口はやや大きい。管孔が大きく油細胞の出現頻度の高いクスノキやタブノキなど以外の樹種であるが、属または種を確定することはできなかった。

クスノキ科は暖帯～温帯に生育し、主に常緑性であるが一部落葉性の高木または低木である。葉や材に油細胞があるのが特徴である。

15) サクラ属 *Prunus* バラ科 第273図 7a.-7c. (BHA-B 75)

小型の管孔が単独または放射方向・斜状に2～数個複合し、管孔数が比較的多い散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚とチロースがある。放射組織はほぼ同性、細胞幅は発泡しており不明瞭であるが1～3細胞幅ほどである。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する落葉広葉樹林の代表的な属であり多くの種を含む。材は粘り気があり強く、保存性も高い。

16) ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Sieb. et Zucc. バラ科 第268図 13a.-13c. (BHA-B 15)

小型の管孔が様々な方向に複合し徐々に径を減じながら一様に散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚と着色物質が見られる。放射組織はほぼ同性、1～8細胞幅、細胞高は高くなる。

17) イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. subsp. *buergeri* (Maxim.) Kitamura マメ科 第268図 14a.-14c. (BHA-B 51)

年輪の始めに中型～大型の管孔が配列し徐々に径を減じ、晩材部では小型管孔が単独または2～数個複合し、年輪界では多数の非常に小型の管孔が塊状に複合し斜状・接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、1～3細胞幅である。木

部柔組織は層階状に配列する。

イヌエンジュは北海道から中部地方に分布し、山中や河岸の陽地に生育する落葉高木である。材は重硬で心材部の耐朽性は特に高い。

18) ユクノキ? *Cladrastia sikokiana?* (Makino) Makino マメ科 第268図 15a.-15c. (BHA-B 42)

年輪の初めに中型の管孔がやや疎らに分布し徐々に径を減じて行き、晩材部では小型から非常に小型の管孔が単独または放射方向に数個複合しまばらに分布する環孔材。柔組織は周囲状が顕著で、特に年輪界付近では管孔を取り囲み波状・帯状に分布する。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～6細胞幅である。マメ科の材組織は識別が難しいが、晩材部の特徴からユクノキに最も類似すると判断した。

ユクノキは関東以西の山中生育する落葉高木である。

19) カエデ属 *Acer* カエデ科 第269図 16a.-16c. (BHA-B 54)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して散在し年輪界は不明瞭で、帯状の柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹であり、約26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

20) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 第269図 17a.-17c. (BHA-B 27)

小型～中型の管孔が単独または2～数個が複合し分布する散孔材。道管の壁孔は交互状に接合して配列、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で層階状に配列し、道管と放射組織の壁孔はやや大きく、円形で交互状に密在する。

トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木である。種子はアク抜きが必要だが食用となり、材は軽軟緻密で加工し易く、材面は絹糸光沢がある。木理は不規則で耐久性は低く狂いがやすい。容器などによく使われている。

21) 不明環孔材 ring-porous wood 第269図 18a.-18c. (BHA-B 37)

年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じ、晩材部では小型から非常に小型の管孔が多数複合する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、主に5細胞幅の紡錘形、上下端に結晶を含む方形細胞がある。小道管のらせん肥厚や木部柔組織の層階性などは見られなかった。横断面の管孔配列からはニレ科やマメ科の可能性が考えられたが、当試料はやや乾燥しており十分に特徴を捉えることができなかった。

22) ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科 第270図 19a.-19c. (BHA-B 33)

年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じ、晩材部は小型から非常に小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合し分布する環孔材。管孔の壁は厚い。周囲状・翼状の柔組織が顕著である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、1～3細胞幅、上下端の単列部は方形・直立細胞からなり、結晶細胞がある。

ケンボナシ属は暖帯の山中に生育する落葉高木で、本州・四国に分布するケンボナシと、北海道から九州に広く分布するケンボナシがある。材質は良い方で建築材など遺跡からの出土例も多い。

23) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 第273図 8a.-8c. (BHA-B 67)

年輪の始めに大型の管孔が2～3層配列し、晩材部は小型の管孔が単独または2～4個が放射方向に複合し分布する環孔材。管孔の壁は厚い。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、1～4細胞幅である。

おもに温帯に生育する落葉高木でシオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。材は重硬で弾力性があり折れにくい特徴がある。

24) キリ *Paulownia tomentosa* (Thunb.) Steud. ノウゼンカズラ科 第270図 20a.-20c. (BHA-B 24)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、徐々に径を減じてゆき、晩材部では翼状や連合翼状に囲まれた単独または2～3個が複合した小型の管孔が分布する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は同性、おもに3細胞幅、接線断面での輪郭は整った紡錘形をなさずいびつであり、道管との壁孔は交互状である。木部柔細胞の壁は薄い。

キリは現在ではおもに本州以南の温帯で栽培されているが、本来の原産地は不明であり、栽培の起源も未解明な樹種である。

4 まとめ

当遺跡の南東部の千曲川沿いに位置する石川条里遺跡からは、大量の木製品が出土し樹種同定が行われている(能城・鈴木、1997)。当遺跡の弥生時代中期の試料は6点と少ないので、石川条里遺跡の同時期の346点の結果と同等には比較できないが、建築材の樹種を比較すると当遺跡の板2点はカバノキ属であったが、石川条里遺跡ではコナラ節やクリが多くカバノキ属は検出されていない。割材も当遺跡からはニレ属とトネリコ属が出土したが、石川条里遺跡からはこの2属は検出されておらずクヌギ節・コナラ節・クリが大量に出土している点が異なる。弥生時代後期後半または後期以降の建築材・部材・杭の使用樹種を比較すると、当遺跡で出土したほとんどの樹種が石川条里遺跡でも出土しており、カヤ・モミ属・クリ・ケヤキ・エノキ属・ニレ属・ケンポナシ属など比較的多く出土した樹種も両遺跡で一致していた。ただし、石川条里遺跡ではクヌギ節とコナラ節がモミ属について大量に検出されているが、当遺跡ではクヌギ節は全くそしてコナラ節はわずかししか検出されていない。このように当遺跡では、弥生時代中期後半および後期においてもクヌギ節とコナラ節の利用が目立たないのは単に試料数が少ないからなのか、それとも利用した森林の植生が石川条里遺跡とは違っていたことを反映しているのか、今後の課題と思われる。また石川条里遺跡の弥生時代後期からはクワ・モモ・ウルシ・キリの栽培樹種が報告されている。当遺跡においても弥生時代後期の井戸枠杭にキリが使われており、この時期には当地域一帯にキリが生育していた可能性が見えてきた。

引用文献

能城修一・鈴木三男、1997、石川条里遺跡出土木製品の樹種、68-138、「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条里遺跡 長野市内その3」、財団法人長野県埋蔵文化財センター。

第16表 春山B (BHA-B) 遺跡出土木材の樹種同定結果一覧

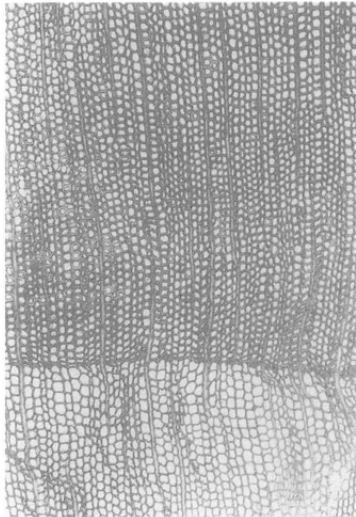
図版 番号	標 本 番 号	器種・用途	樹 種	出土遺構・地点		時代・時期	木取り	備 考
1	BHA-B 1	丸木舟	トチノキ	SK43	井戸枠	弥生後期 後半	剥物	井戸井筒に転用
41	BHA-B 2	木棺	クリ	SK59	主体部木棺	弥生後期 後半	板材 板目	木棺底板
3	BHA-B 3	膝柄	コナラ節	SB31	pit2内	弥生後期 後半	丸木芯もち	
18	BHA-B 4	建築材 柱	クリ	SB31	木No.1	弥生後期 後半	丸木芯もち	綱留め挟り痕
47	BHA-B 5	建築部材	クリ	SB31	木No.3	弥生後期 後半	板材 板目	
30	BHA-B 6	建築部材	モミ属	SB31	木No.5	弥生後期 後半	板材 板目	
27	BHA-B 7	建築部材	エノキ属	SB31	木No.6	弥生後期 後半	板材 斜め	
12	BHA-B 8	建築部材	ヤナギ属	SB31	pit-5	弥生後期 後半	割材1/2	
42	BHA-B 9	建築材 柱	クリ	SB06	入口部柱穴	弥生後期 後半	角材芯もち	
46	BHA-B 10	建築部材	ヤマグワ	SB11	入口部柱穴	弥生後期 後半	板材 板目	
44	BHA-B 11	建築部材	イヌガヤ	SB20	No.1	弥生後期 中葉	丸木芯もち	杭転用
43	BHA-B 12	建築部材	カヤ	SB20	No.2	弥生後期 中葉	丸木芯もち	杭転用
28	BHA-B 13	建築部材	モミ属	SB30	No.1	弥生後期 後半	板材 板目	
19	BHA-B 14	建築材 柱	ヤマグワ	SB30	pit 4	弥生後期 後半	丸木芯もち	
17	BHA-B 15	建築材 柱	ヤマザクラ	SB30	pit 5	弥生後期 後半	丸木芯もち	綱留め挟り痕
39	BHA-B 16	建築部材	クリ	SB30	No.9	弥生後期 後半	割材1/4	
37	BHA-B 17	建築部材	クリ	SB30	No.15	弥生後期 後半	板材 板目	
40	BHA-B 18	不明	樹皮	SB30	pit 5	弥生後期 後半	板材 板目	
29	BHA-B 19	不明	コナラ節	SB30	3面下	弥生後期 後半	板材 柱目	
4	BHA-B 20	膝柄	コナラ節	SB18	泥炭層下	弥生後期 後半	丸木芯もち	
48	BHA-B 21	杭	カヤ	SK19	木 1	弥生後期 後半	丸木芯もち	弓状杭
14	BHA-B 22	建築部材	カヤ	SK04		弥生後期 後半	丸木芯もち	扱首
	BHA-B 23	井戸枠杭	キリ	SK43	①杭	弥生後期 後半	割材芯部削	
52	BHA-B 24	井戸枠杭	キリ	SK43	Ⓚ杭	弥生後期 後半	割材芯部削	
49	BHA-B 25	井戸枠杭	ヤマグワ	SK43	隅柱	弥生後期 後半	丸木芯もち	
33	BHA-B 26	井戸枠	サワラ	SK35	剥抜井筒	弥生後期	丸木剥抜き	井戸内側井筒
	BHA-B 27	井戸枠	トチノキ	SK35	井筒補強材	弥生後期	板材 柱目	井戸外側
	BHA-B 28	井戸枠	ケヤキ	SK35	井筒補強材	弥生後期	板材 板目	井戸外側
	BHA-B 29	建築部材	ケヤキ	SK35	井戸枠内出土	弥生後期	板材 板目	
5	BHA-B 30	農工具柄	ケヤキ	SK08		弥生後期	丸木削りだし	
	BHA-B 31	建築部材	コナラ節	SB105	柱穴	弥生後期	丸木芯もち	
16	BHA-B 32	建築部材	エノキ属	SD47	No.7	弥生後期	板材 板目	床材
	BHA-B 33	建築部材	ケンポナシ属	SD47	杭列	弥生後期	角材 板目	杭転用
10	BHA-B 34	建築部材	エノキ属	SD47	杭列	弥生後期	丸木芯もち	垂木 杭転用
53	BHA-B 35	建築部材	エノキ属	SD47	No.1	弥生後期	角材 柱目	
9	BHA-B 36	建築部材	モミ属	SD47	No.2	弥生後期	丸木芯もち	扱首
57	BHA-B 37	建築部材	不明環孔材	SD47	No.3	弥生後期	丸木芯もち	杭転用
11	BHA-B 38	建築部材	ケンポナシ属	SD47	No.4	弥生後期	丸木芯もち	垂木
2	BHA-B 39	丸木弓	イヌガヤ	SD47	No.5	弥生後期	丸木芯もち	
31	BHA-B 40	建築部材	ケヤキ	SD47	No.6	弥生後期	板材 板目	
8	BHA-B 41	建築部材	エノキ属	SD47	No.9	弥生後期	丸木芯もち	梁or桁材
7	BHA-B 42	建築部材	ユクノキ?	SD47	No.10	弥生後期	丸木芯もち	垂木
22	BHA-B 43	建築部材	ケヤキ	SD47	No.1	弥生後期	板材 柱目	
36	BHA-B 44	建築部材	ケヤキ	SD47	No.3	弥生後期	板材 斜め	
15	BHA-B 45	建築部材	クリ	SD47	No.5	弥生後期	板材 柱目	
59	BHA-B 46	建築部材	ニレ属	SD47	No.11	弥生後期	丸木芯もち	垂木 杭転用
51	BHA-B 47	建築部材	ケヤキ	SD47	No.12	弥生後期	板材 斜め	
34	BHA-B 48	建築部材	エノキ属	SD47	No.13	弥生後期	板材 柱目	床材
38	BHA-B 49	建築部材	ケヤキ	SD47	No.14	弥生後期	板材 板目	
45	BHA-B 50	建築部材	ケンポナシ属	SD47	No.15	弥生後期	角材 柱目	杭転用
26	BHA-B 51	建築部材	イヌエンジュ	SD47	No.18	弥生後期	板材 柱目	楣材
24	BHA-B 52	建築部材	エノキ属	SD47	No.19	弥生後期	板材 柱目	
13	BHA-B 53	建築材 柱	カヤ	SD47	No.98	弥生後期	丸木芯もち	
60	BHA-B 54	杭	カエデ属	SD47	No.102	弥生後期	丸木芯もち	
23	BHA-B 55	建築部材	ケヤキ	SD47	No.105	弥生後期	板材 板目	柄穴
58	BHA-B 56	杭	ヤナギ属	SD47	No.106	弥生後期	丸木芯もち	
50	BHA-B 57	杭	クリ	SD42	No.2	弥生後期	割材1/8	
	BHA-B 58	杭	クリ	SD42	No.3	弥生後期	丸木芯もち	

35	BHA-B 59	建築部材	エノキ属	SD48	No. 1	弥生後期	板材	板目	
56	BHA-B 60	杭	アカマツ	SD06	杭No. 2	近世	丸木芯もち		
54	BHA-B 61	杭	コナラ節	SD06	No. 3	近世	丸木芯もち		
55	BHA-B 62	杭	アカマツ	SD06	No. 4	近世	丸木芯もち		
21	BHA-B 63	建築部材 柱	カヤ	ST01	pit 3	弥生後期	丸木芯もち		
20	BHA-B 64	建築部材 柱	クリ	ST01	pit 4	弥生後期	丸木芯もち		
25	BHA-B 65	建築部材	モミ属	SX05		近世	板材	板目	
	BHA-B 66	建築部材	カバノキ属	SB01	No. 1	弥生中期 後半	板材	板目	焼失家屋炭化材
	BHA-B 67	建築部材	トネリコ属	SB01	No. 2	弥生中期 後半	割材		焼失家屋炭化材
	BHA-B 68	建築部材	ニレ属	SB01	No. 3	弥生中期 後半	割材		焼失家屋炭化材
	BHA-B 69	建築部材	ニレ属	SB01	No. 5	弥生中期 後半	丸木芯もち		焼失家屋炭化材
	BHA-B 70	建築部材	カヤ	SB01	No. 6	弥生中期 後半	丸木芯もち		焼失家屋炭化材
	BHA-B 71	不明	ヤマグワ	SB12	No. 7	弥生後期	不明		炭化材
	BHA-B 72	不明	カバノキ属	SB33	No. 8	弥生中期 後半	不明		炭化材
	BHA-B 73	建築部材	カバノキ属	SB35	下層	弥生中期 後半	板材		炭化材
	BHA-B 74	不明	ケヤキ	SB36	下層	弥生中期 後半	不明		炭化材
	BHA-B 75	不明	サクラ属	SB38	炉内	弥生後期 中葉	不明		炭化材
	BHA-B 76	建築部材	クスノキ科	SB102	pit6	弥生後期 後半	割り材		炭化材

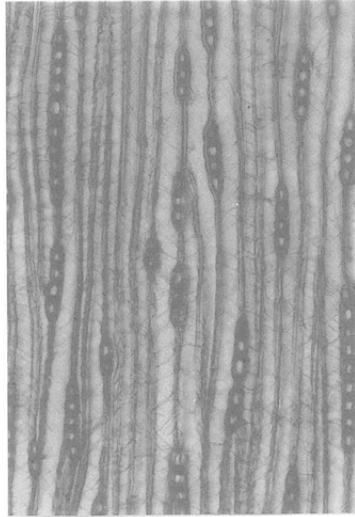
第17表 春山B遺跡出土木製品の器種・用途別の使用樹種

分類群	弥生中期後半		弥生後期											合計	
	建築部材	不明	建築部材	建築柱	杭	丸木舟	木棺	膝柄	丸木弓	井戸梓	井戸梓杭	農耕具柄	不明		
カヤ	1		2	2	1										6
イヌガヤ			1						1						2
モミ属			3												3
アカマツ															0
サワラ			1							1					2
ヤナギ属					1										1
カバノキ属	2	1													3
コナラ節			1					2					1		4
クリ			4	3	2		1								10
ニレ属	2		1												3
ケヤキ		1	7							1		1			10
エノキ属			8												8
ヤマグワ			1	1							1		1		4
クスノキ科			1												1
サクラ属													1		1
ヤマザクラ				1											1
イヌエンジュ			1												1
ユクノキ?			1												1
カエデ属					1										1
トチノキ						1				1					2
ケンボナシ属			3												3
トネリコ属	1														1
キリ											2				2
不明環孔材			1												1
樹皮													1		1
合計	6	2	36	7	5	1	1	2	1	3	3	1	4		72

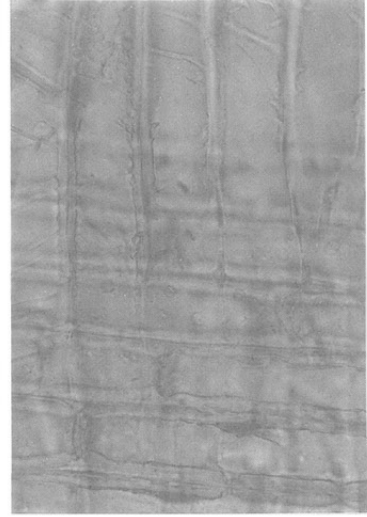
bar: 



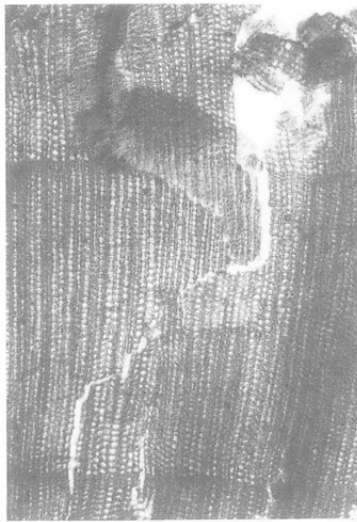
1a. カヤ (横断面)
BHA-B 22 bar: 0.5mm



1b. カヤ (接線断面)
BHA-B 22 bar: 0.2mm



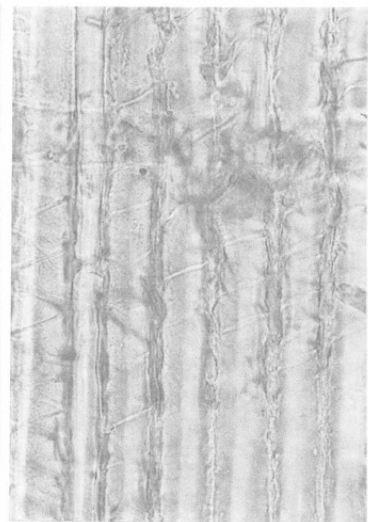
1c. カヤ (放射断面)
BHA-B 22 bar: 0.05mm



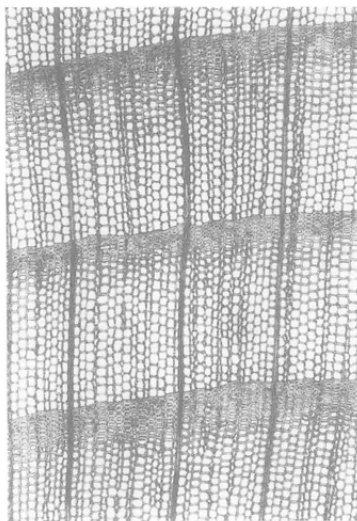
2a. イヌガヤ (横断面)
BHA-B 39 bar: 0.5mm



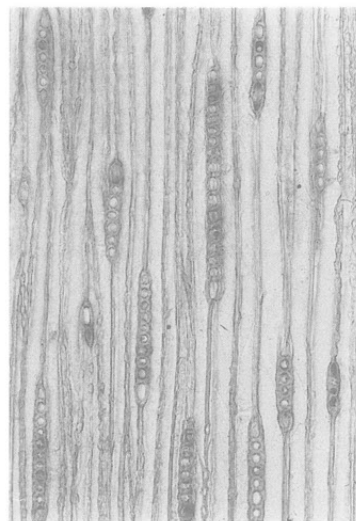
2b. イヌガヤ (接線断面)
BHA-B 39 bar: 0.2mm



2c. イヌガヤ (放射断面)
BHA-B 39 bar: 0.05mm



3a. モミ属 (横断面)
BHA-B 36 bar: 0.5mm



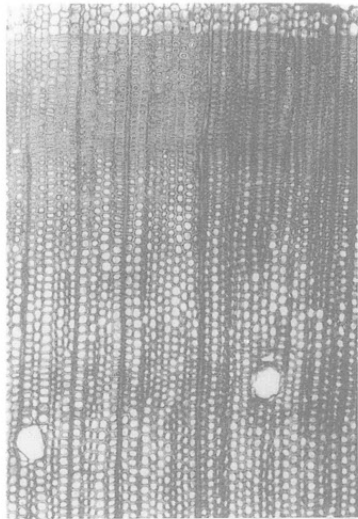
3b. モミ属 (接線断面)
BHA-B 36 bar: 0.2mm



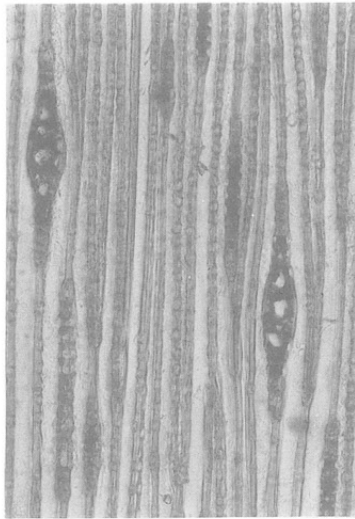
3c. モミ属 (放射断面)
BHA-B 36 bar: 0.05mm

第264図 春山B遺跡出土加工木の樹種(1)

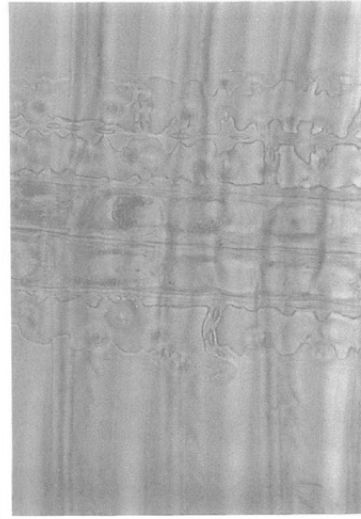
bar: 



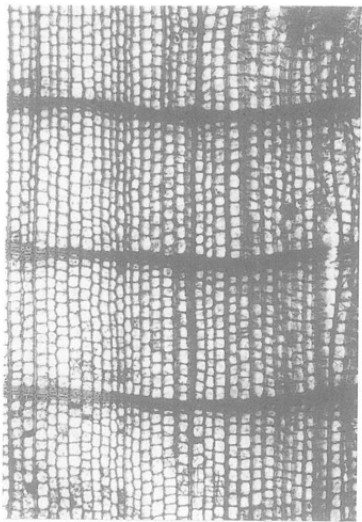
4a. アカマツ (横断面)
BHA-B 62 bar: 0.5mm



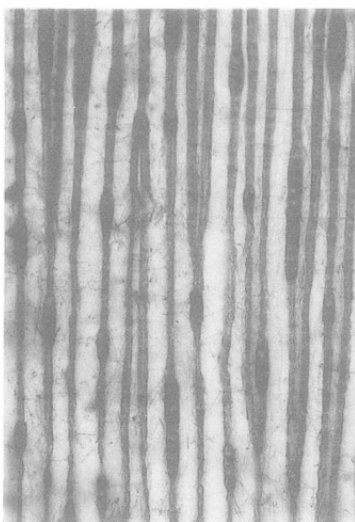
4b. アカマツ (接線断面)
BHA-B 62 bar: 0.2mm



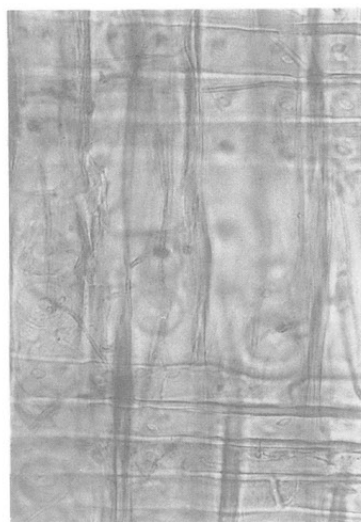
4c. アカマツ (放射断面)
BHA-B 62 bar: 0.05mm



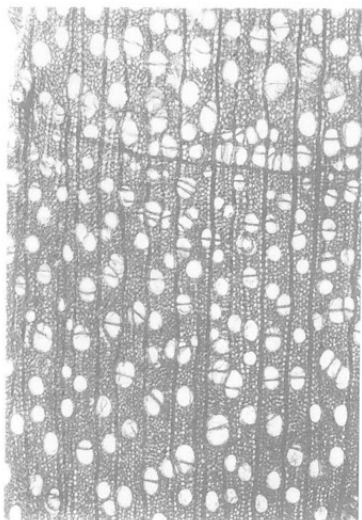
5a. サワラ (横断面)
BHA-B 26 bar: 0.5mm



5b. サワラ (接線断面)
BHA-B 26 bar: 0.2mm



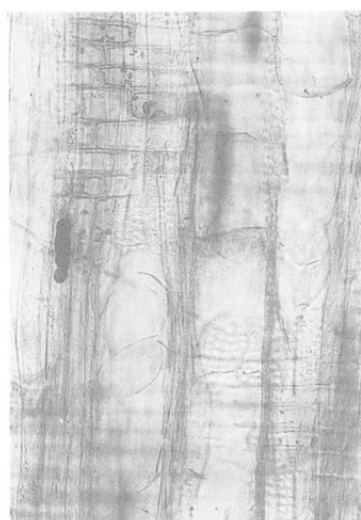
5c. サワラ (放射断面)
BHA-B 26 bar: 0.05mm



6a. ヤナギ属 (横断面)
BHA-B 56 bar: 0.5mm



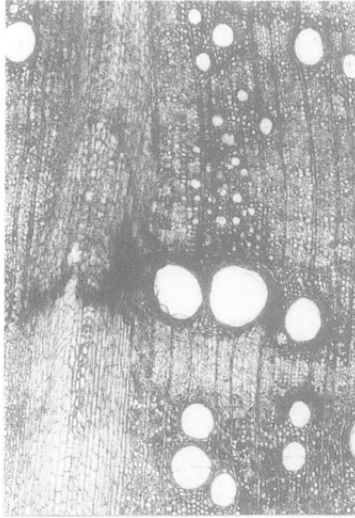
6b. ヤナギ属 (接線断面)
BHA-B 56 bar: 0.2mm



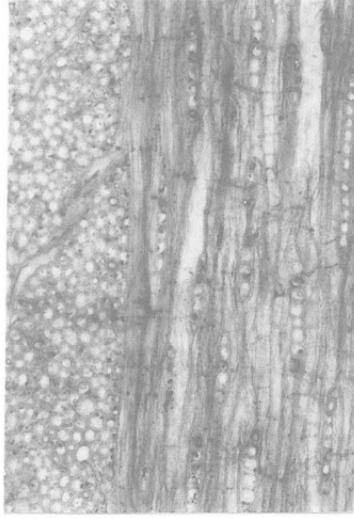
6c. ヤナギ属 (放射断面)
BHA-B 56 bar: 0.1mm

第265図 春山B遺跡出土加工木の樹種(2)

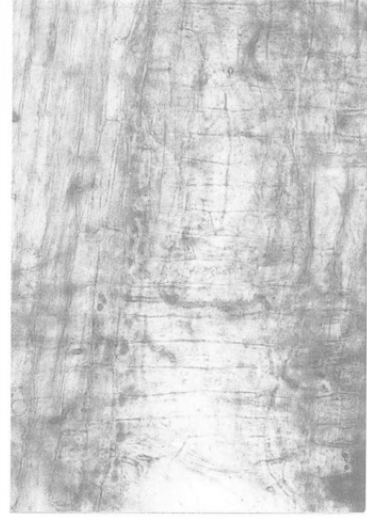
bar: 



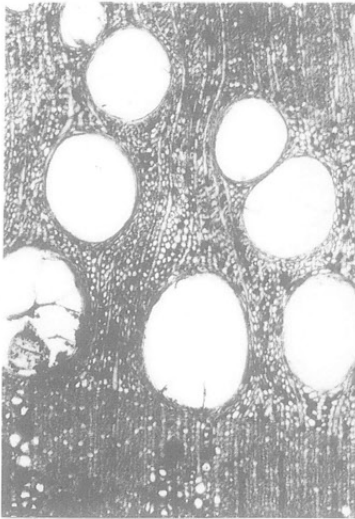
7a. コナラ節 (横断面)
BHA-B 61 bar: 0.5mm



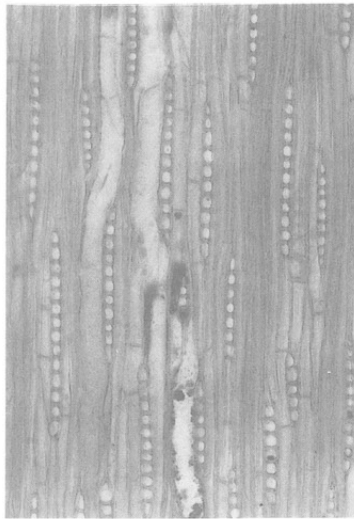
7b. コナラ節 (接線断面)
BHA-B 61 bar: 0.2mm



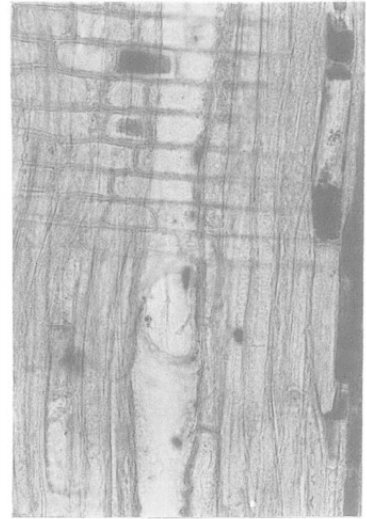
7c. コナラ節 (放射断面)
BHA-B 61 bar: 0.1mm



8a. クリ (横断面)
BHA-B 17 bar: 0.5mm



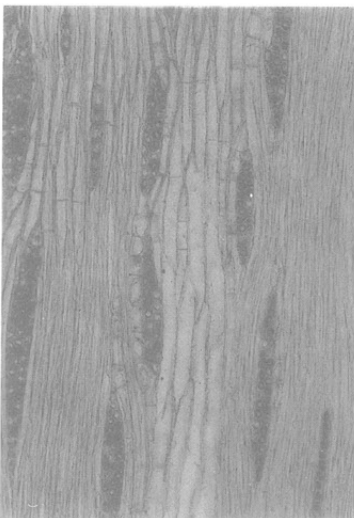
8b. クリ (接線断面)
BHA-B 17 bar: 0.2mm



8c. クリ (放射断面)
BHA-B 17 bar: 0.1mm



9a. ニレ属 (横断面)
BHA-B 46 bar: 0.5mm



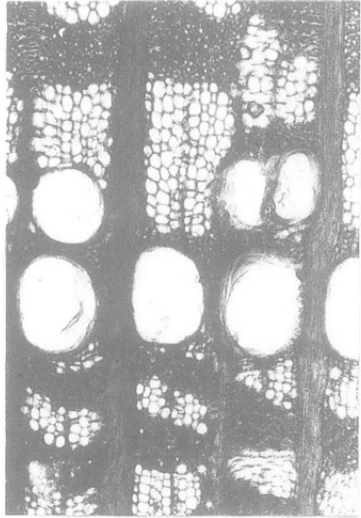
9b. ニレ属 (接線断面)
BHA-B 46 bar: 0.2mm



9c. ニレ属 (放射断面)
BHA-B 46 bar: 0.1mm

第266図 春山B遺跡出土加工木の樹種(3)

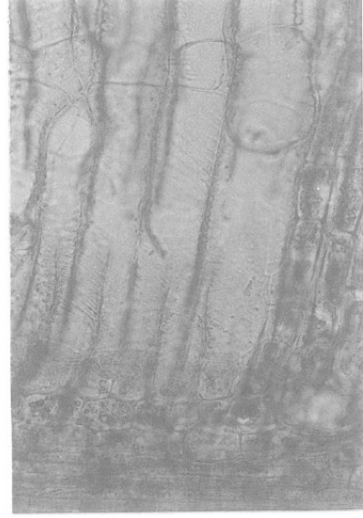
bar: 



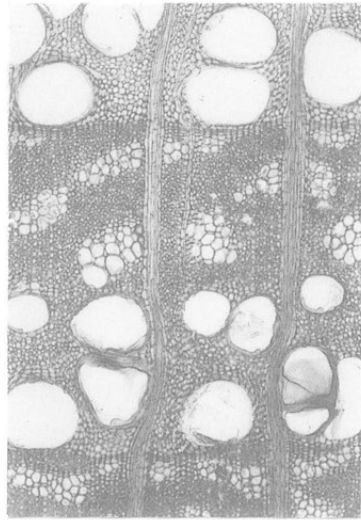
10a. ケヤキ (横断面)
BHA-B 28 bar: 0.5mm



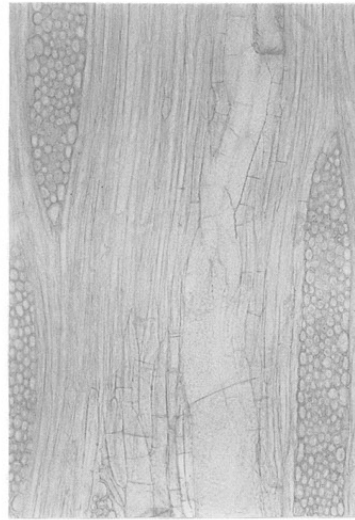
10b. ケヤキ (接線断面)
BHA-B 28 bar: 0.2mm



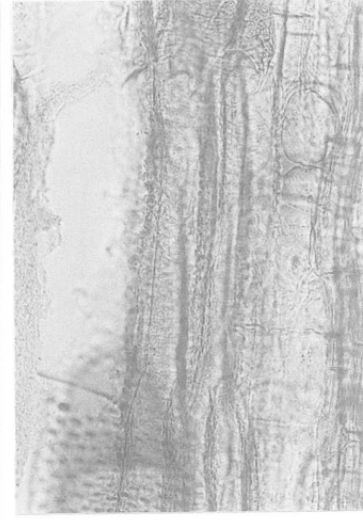
10c. ケヤキ (放射断面)
BHA-B 28 bar: 0.1mm



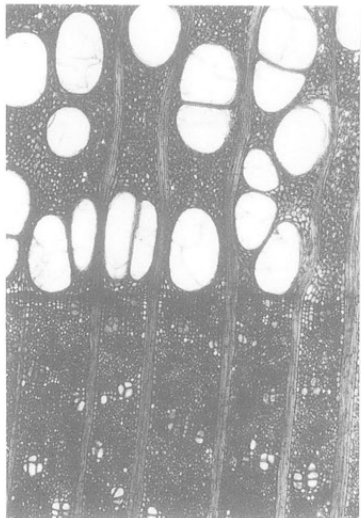
11a. エノキ属 (横断面)
BHA-B 32 bar: 0.5mm



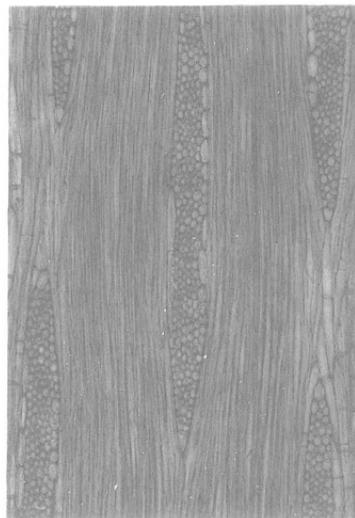
11b. エノキ属 (接線断面)
BHA-B 32 bar: 0.2mm



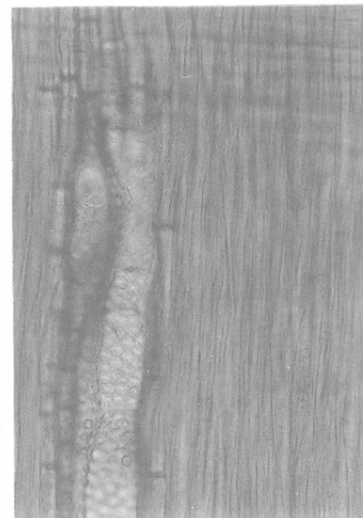
11c. エノキ属 (放射断面)
BHA-B 32 bar: 0.1mm



12a. ヤマガワ (横断面)
BHA-B 14 bar: 0.5mm



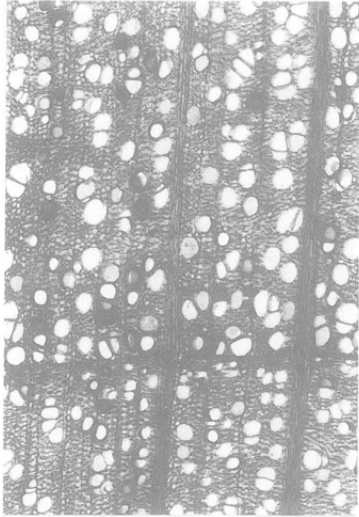
12b. ヤマガワ (接線断面)
BHA-B 14 bar: 0.2mm



12c. ヤマガワ (放射断面)
BHA-B 14 bar: 0.1mm

第267図 春山B遺跡出土加工木の樹種(4)

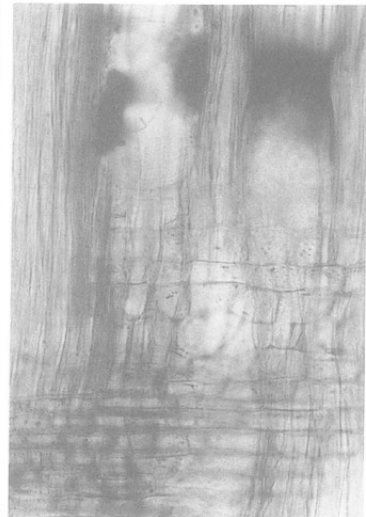
bar: 



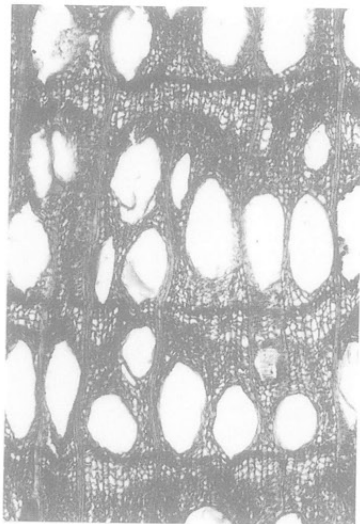
13a.ヤマザクラ (横断面)
BHA-B 15 bar:0.5mm



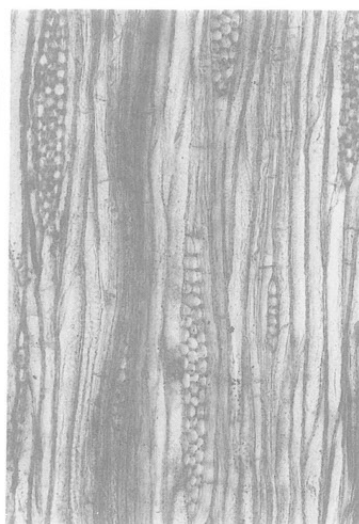
13b.ヤマザクラ (接線断面)
BHA-B 15 bar:0.2mm



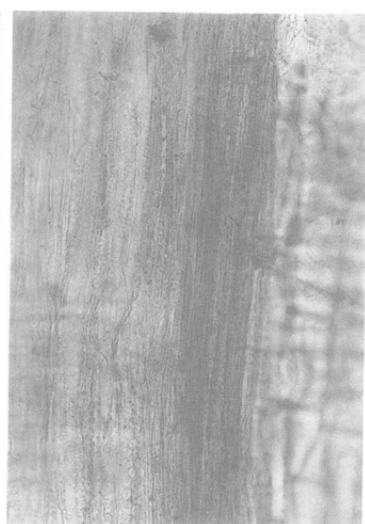
13c.ヤマザクラ (放射断面)
BHA-B 15 bar:0.1mm



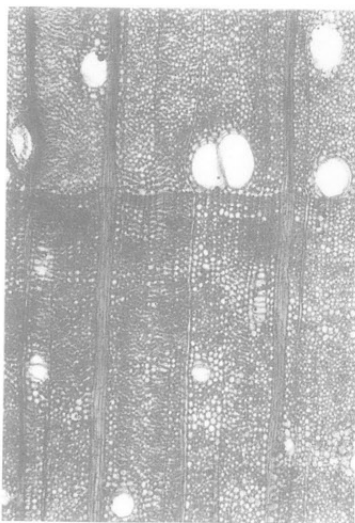
14a.イヌエンジュ (横断面)
BHA-B 51 bar:0.5mm



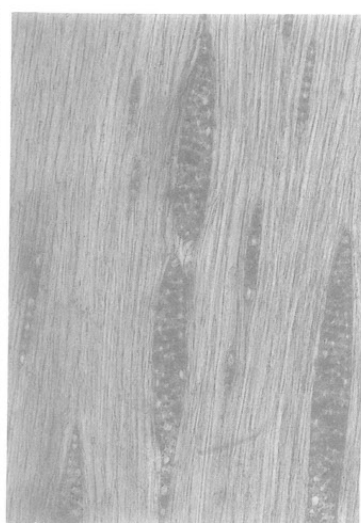
14b.イヌエンジュ (接線断面)
BHA-B 51 bar:0.2mm



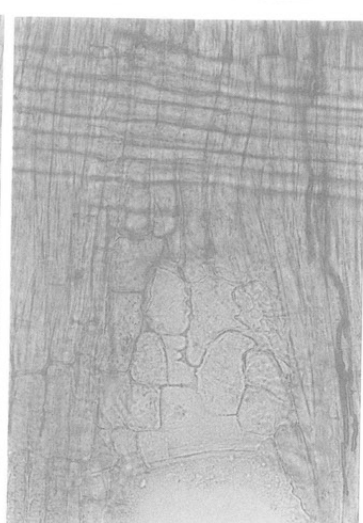
14c.イヌエンジュ (放射断面)
BHA-B 51 bar:0.1mm



15a.ユクノキ? (横断面)
BHA-B 42 bar:0.5mm



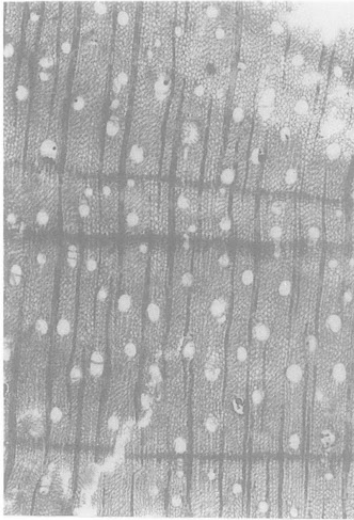
15b.ユクノキ? (接線断面)
BHA-B 42 bar:0.2mm



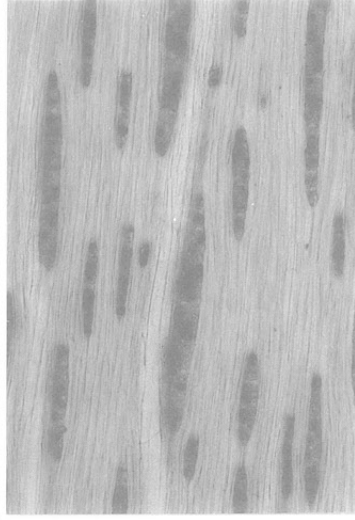
15c.ユクノキ? (放射断面)
BHA-B 42 bar:0.1mm

第268図 春山B遺跡出土加工木の樹種(5)

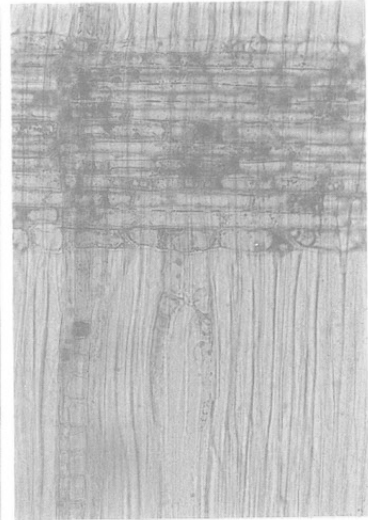
bar: 



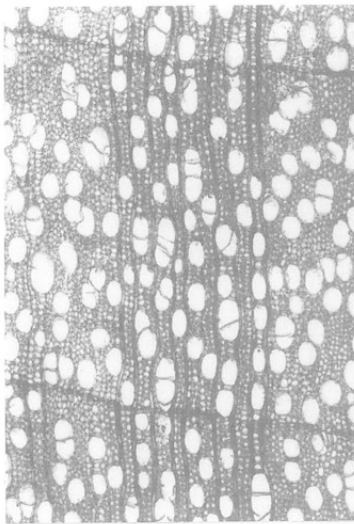
16a. カエデ属 (横断面)
BHA-B 54 bar: 0.5mm



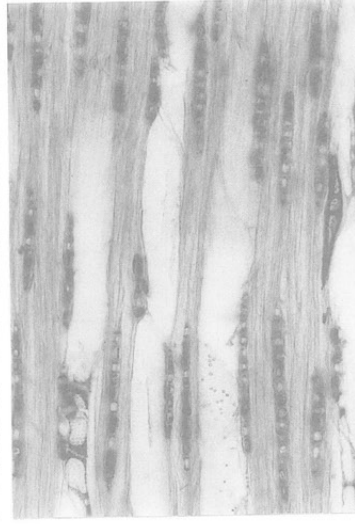
16b. カエデ属 (接線断面)
BHA-B 54 bar: 0.2mm



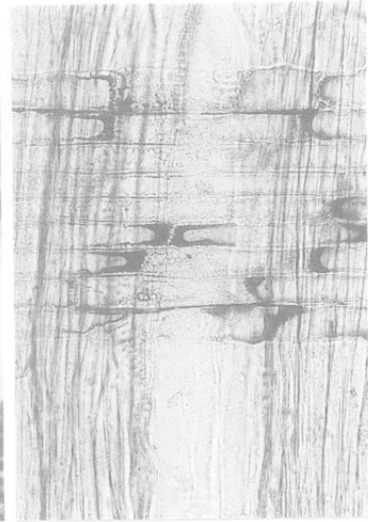
16c. カエデ属 (放射断面)
BHA-B 54 bar: 0.1mm



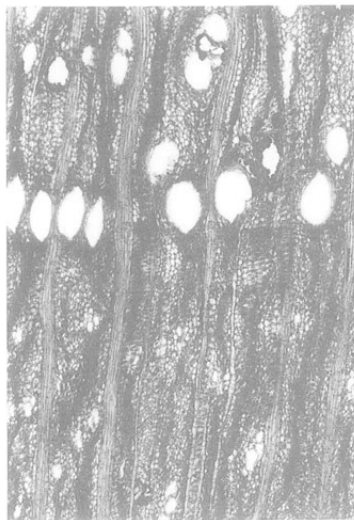
17a. トチノキ (横断面)
BHA-B 27 bar: 0.5mm



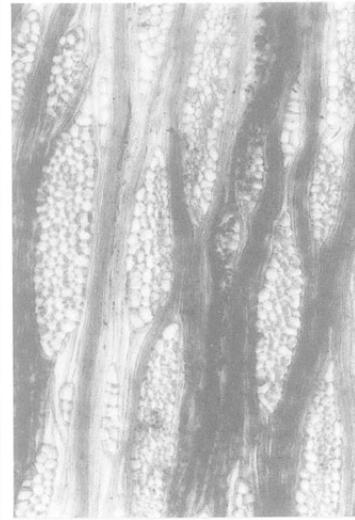
17b. トチノキ (接線断面)
BHA-B 27 bar: 0.2mm



17c. トチノキ (放射断面)
BHA-B 27 bar: 0.1mm



18a. 不明環孔材 (横断面)
BHA-B 37 bar: 0.5mm



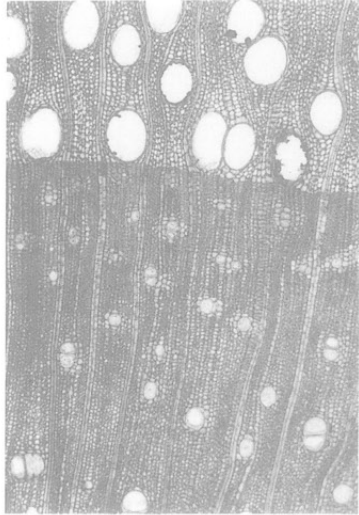
18b. 不明環孔材 (接線断面)
BHA-B 37 bar: 0.2mm



18c. 不明環孔材 (放射断面)
BHA-B 37 bar: 0.1mm

第269図 春山B遺跡出土加工木の樹種(6)

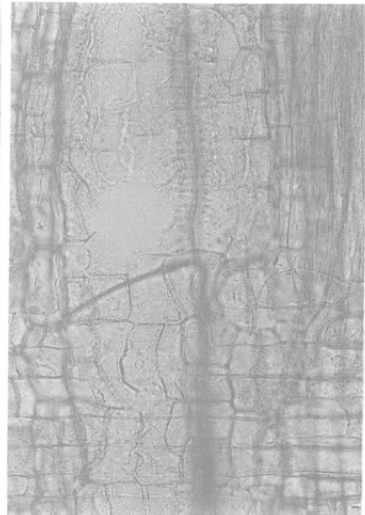
bar: 



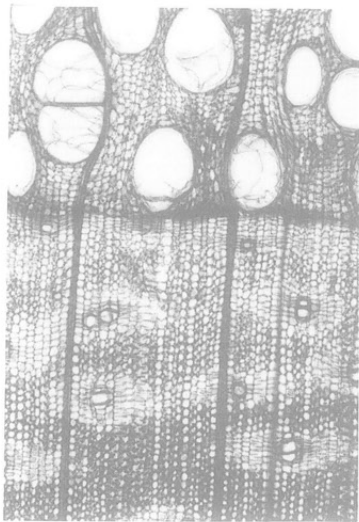
19a. ケンボナシ (横断面)
BHA-B 33 bar: 0.5mm



19b. ケンボナシ (接線断面)
BHA-B 33 bar: 0.2mm



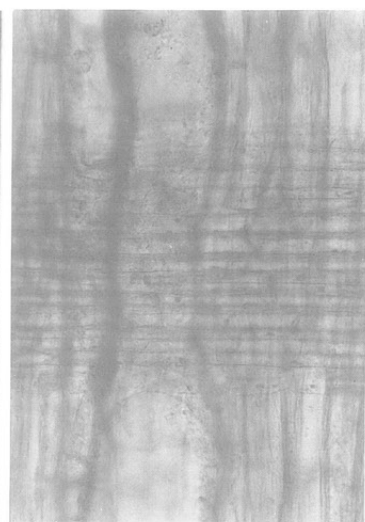
19c. ケンボナシ (放射断面)
BHA-B 33 bar: 0.1mm



20a. キリ (横断面)
BHA-B 24 bar: 0.5mm

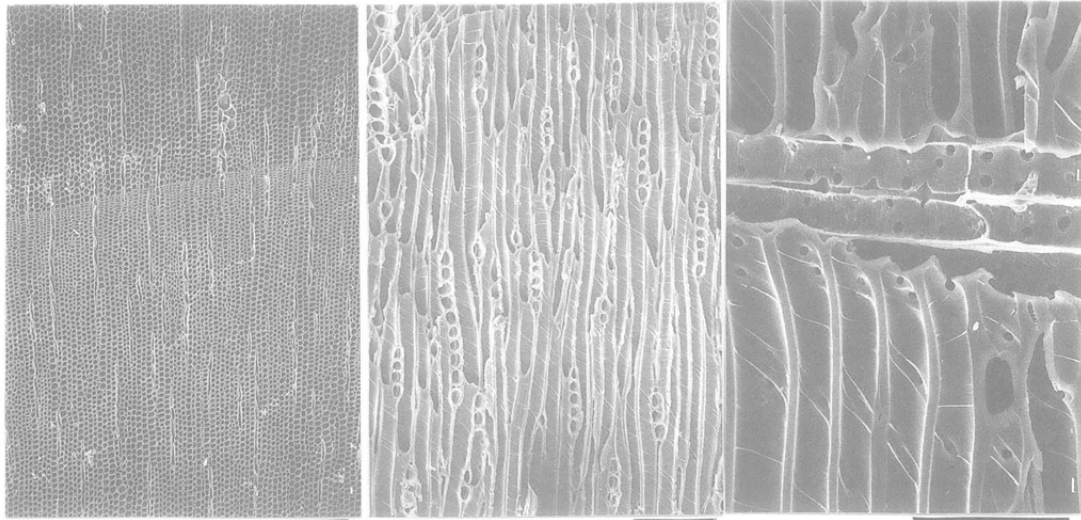


20b. キリ (接線断面)
BHA-B 24 bar: 0.2mm



20c. キリ (放射断面)
BHA-B 24 bar: 0.1mm

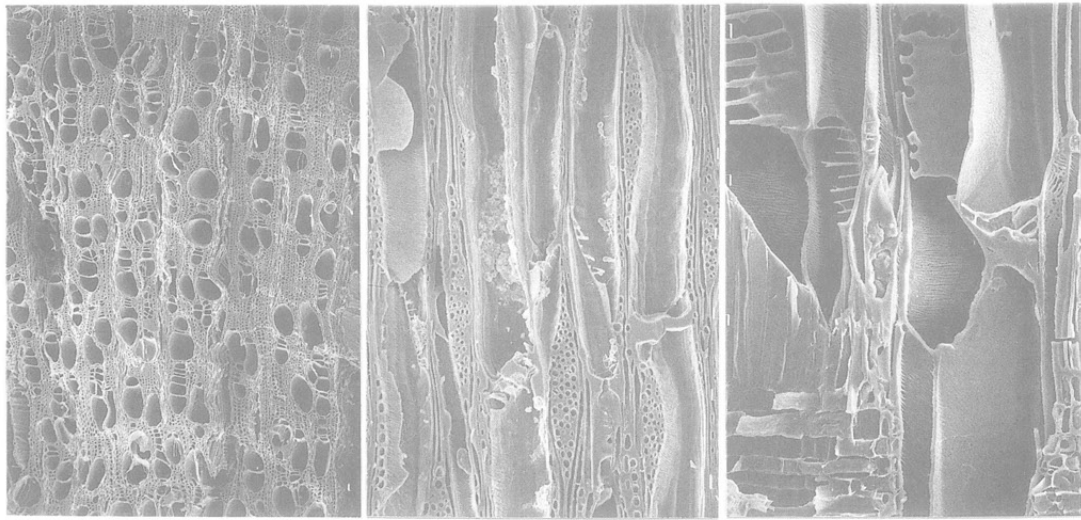
第270図 春山B遺跡出土加工木の樹種(7)



1a.カヤ (横断面)
BHA-B 70 bar:0.5mm

1b.カヤ (接線断面)
BHA-B 70 bar:0.2mm

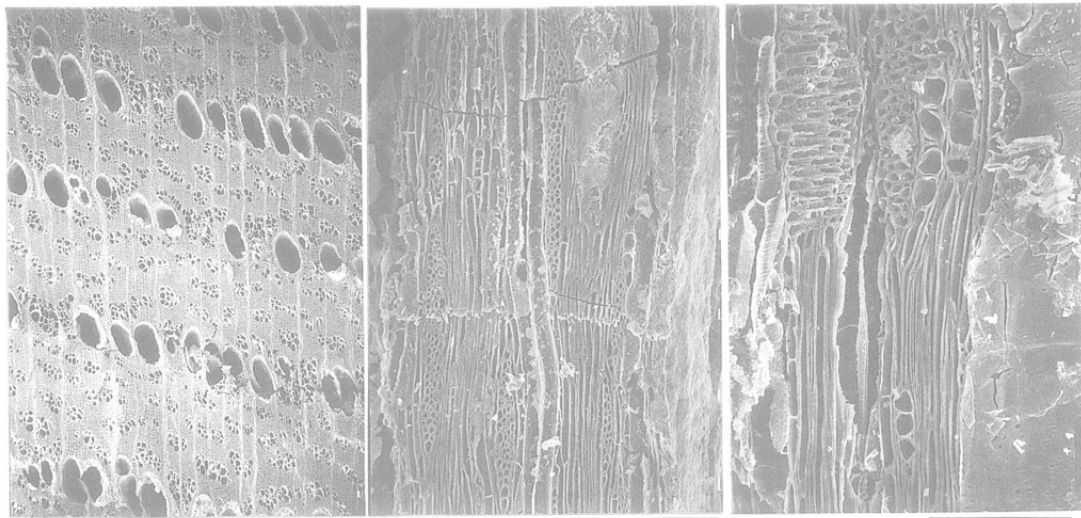
1c.カヤ (放射断面)
BHA-B 70 bar:0.05mm



2a.カバノキ属 (横断面)
BHA-B 73 bar:0.5mm

2b.カバノキ属 (接線断面)
BHA-B 73 bar:0.2mm

2c.カバノキ属 (放射断面)
BHA-B 73 bar:0.1mm

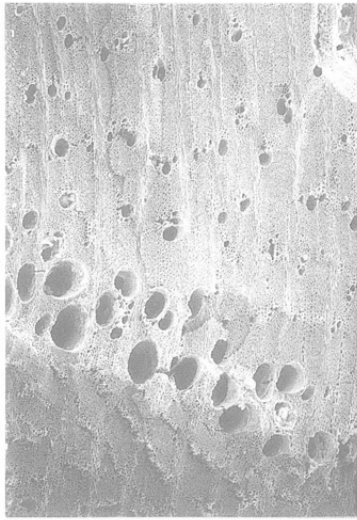


3a.ニレ属 (横断面)
BHA-B 68 bar:0.5mm

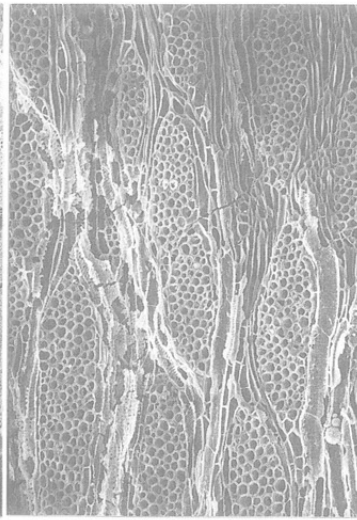
3b.ニレ属 (接線断面)
BHA-B 68 bar:0.2mm

3c.ニレ属 (放射断面)
BHA-B 68 bar:0.1mm

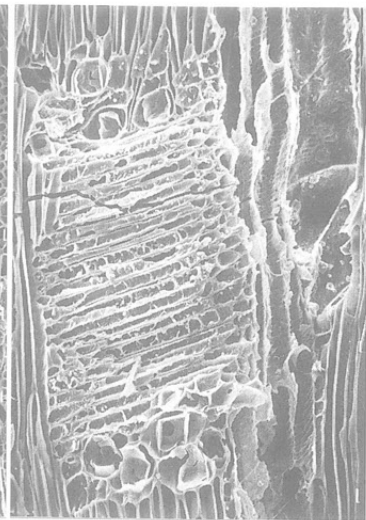
第271図 春山B遺跡出土炭化材の樹種(1)



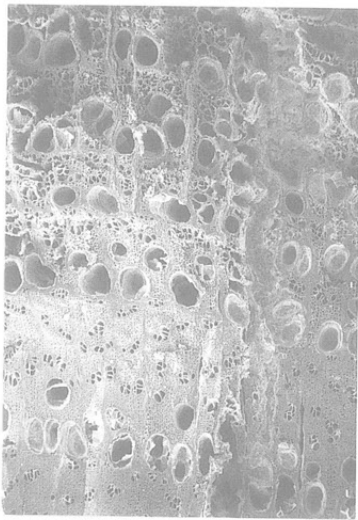
4a. ケヤキ (横断面)
BHA-B 74 bar: 0.5mm



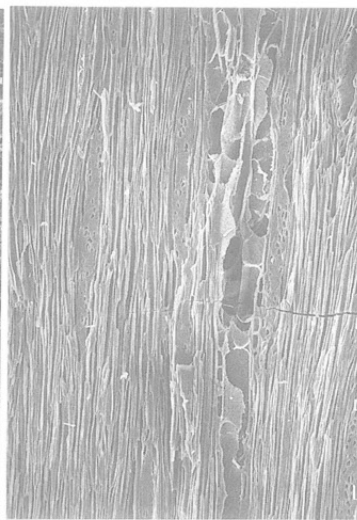
4b. ケヤキ (接線断面)
BHA-B 74 bar: 0.2mm



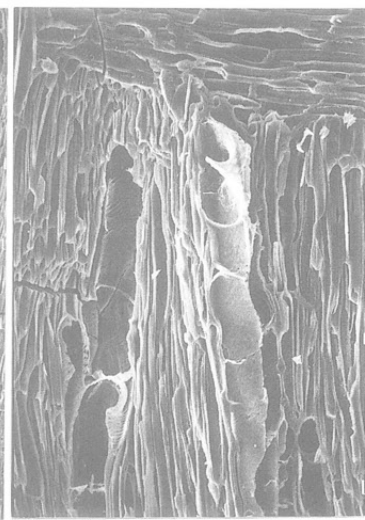
4c. ケヤキ (放射断面)
BHA-B 74 bar: 0.1mm



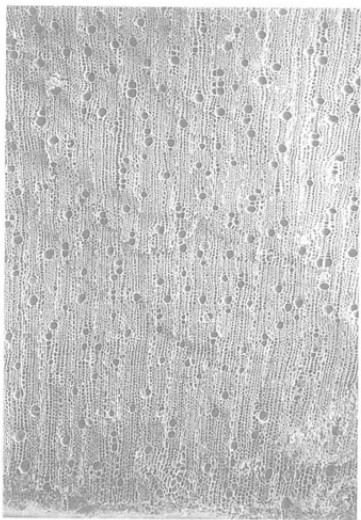
5a. ヤマグワ (横断面)
BHA-B 71 bar: 0.5mm



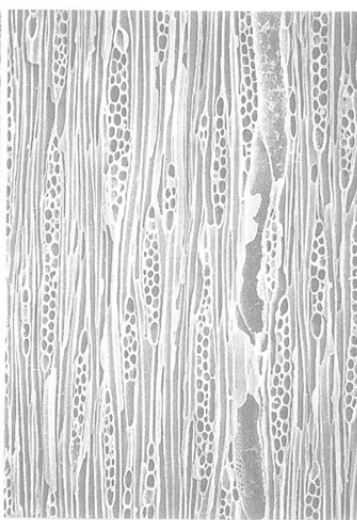
5b. ヤマグワ (接線断面)
BHA-B 71 bar: 0.2mm



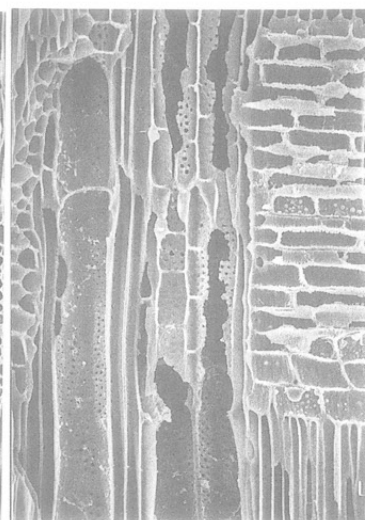
5c. ヤマグワ (放射断面)
BHA-B 71 bar: 0.1mm



6a. クスノキ科 (横断面)
BHA-B 76 bar: 0.5mm

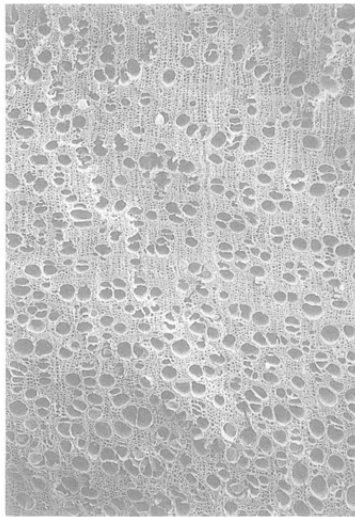


6b. クスノキ科 (接線断面)
BHA-B 76 bar: 0.2mm

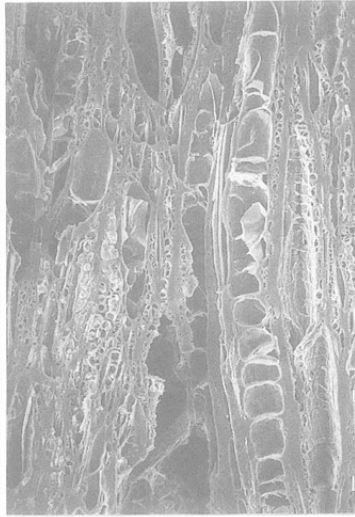


6c. クスノキ科 (放射断面)
BHA-B 76 bar: 0.1mm

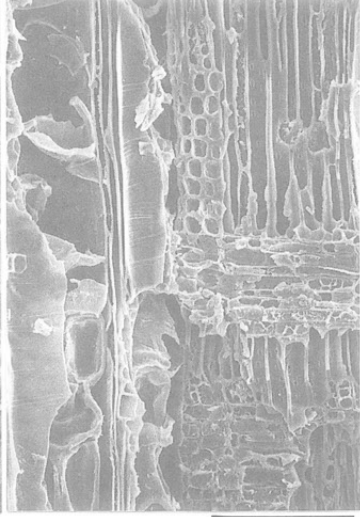
第272図 春山B遺跡出土炭化材の樹種(2)



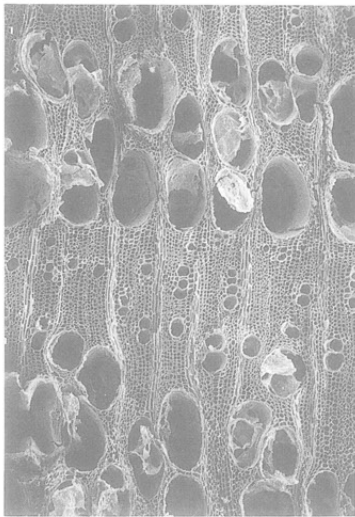
7a. サクラ属 (横断面)
BHA-B 75 bar: 0.5mm



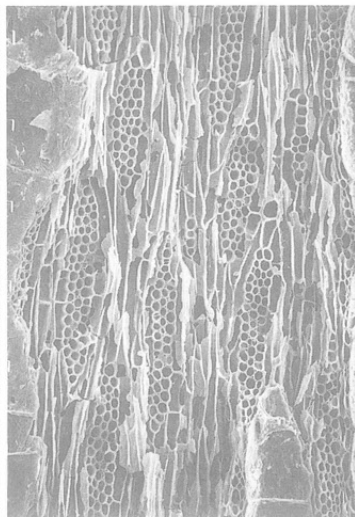
7b. サクラ属 (接線断面)
BHA-B 75 bar: 0.2mm



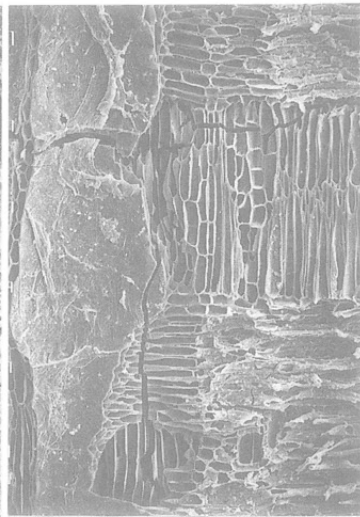
7c. サクラ属 (放射断面)
BHA-B 75 bar: 0.1mm



8a. トネリコ属 (横断面)
BHA-B 67 bar: 0.5mm



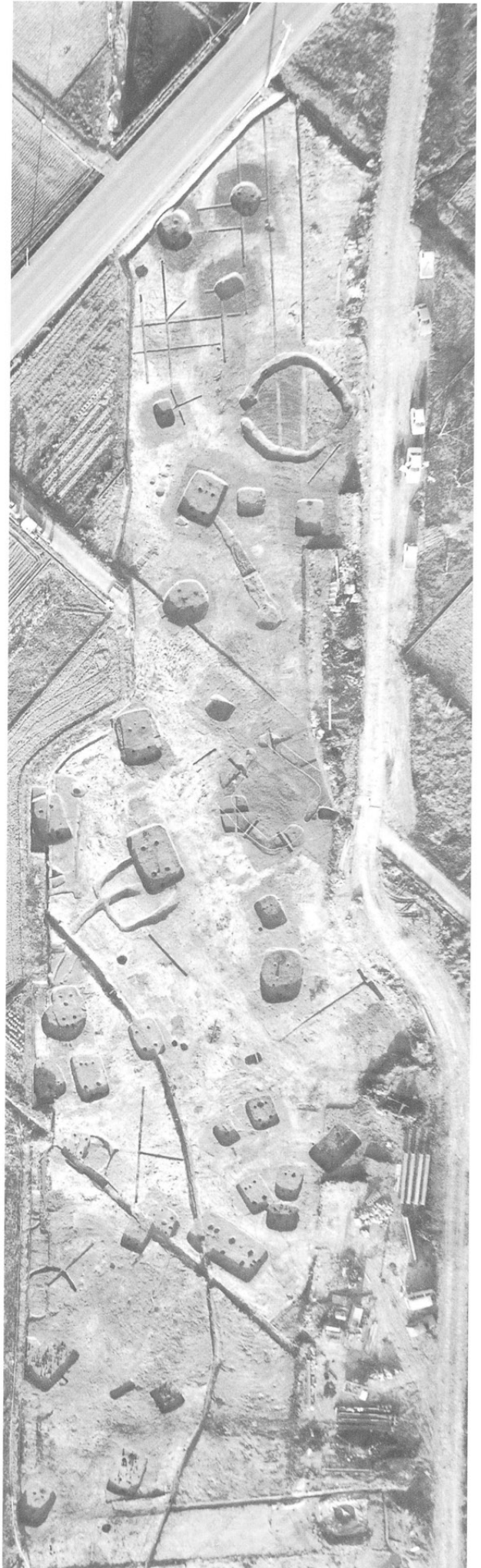
8b. トネリコ属 (接線断面)
BHA-B 67 bar: 0.2mm



8c. トネリコ属 (放射断面)
BHA-B 67 bar: 0.1mm

第273図 春山B遺跡出土炭化材の樹種(3)

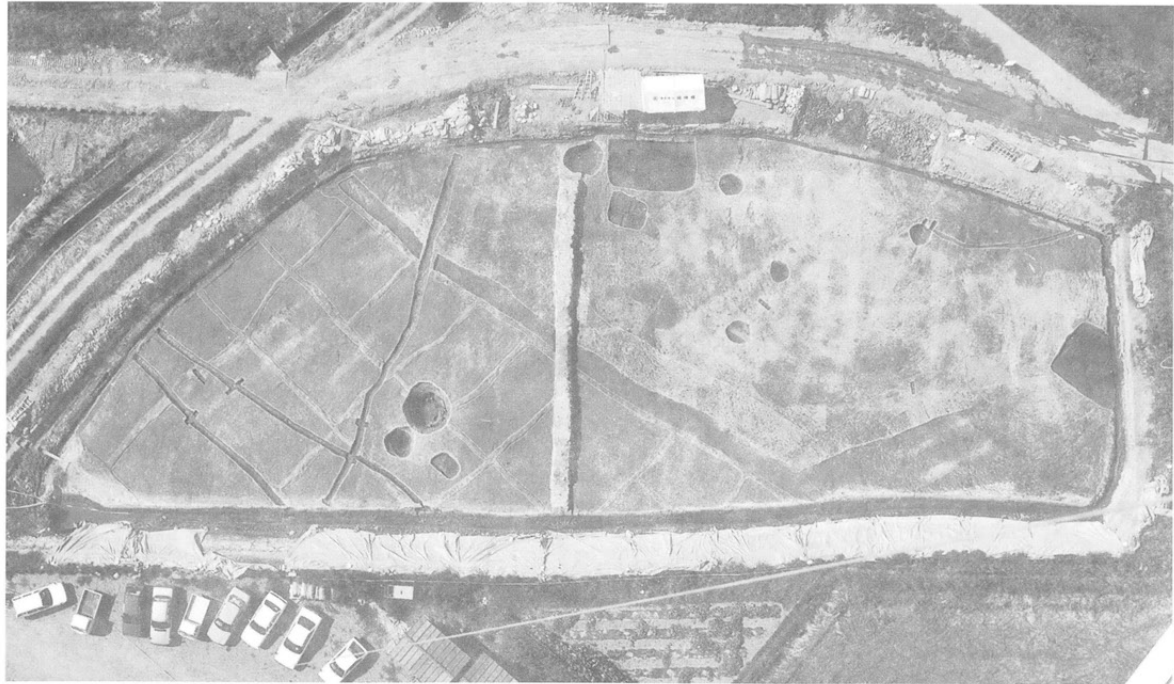
写真図版



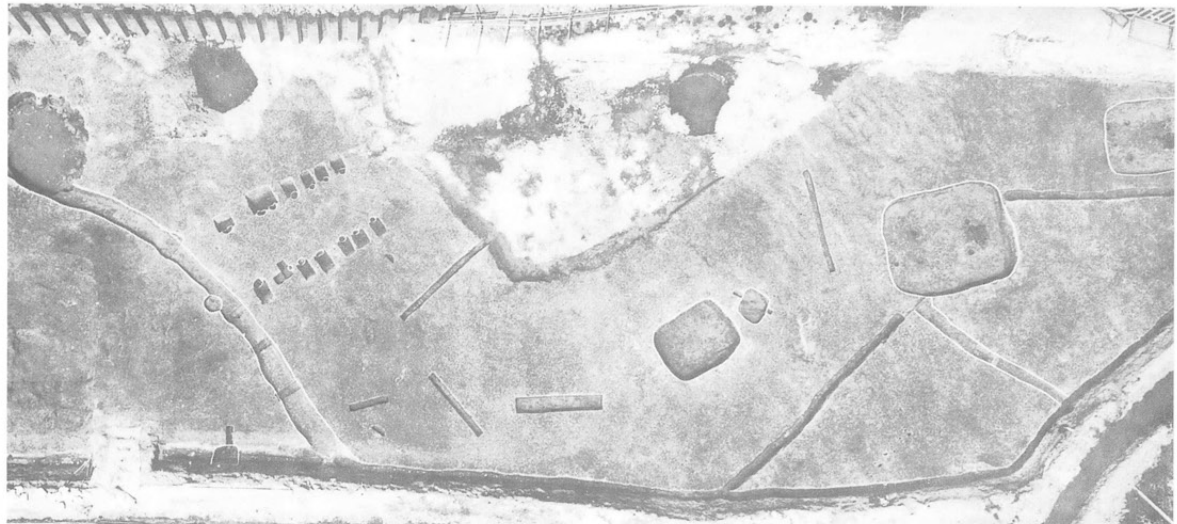
IV区調査区全景
(上空南東より)

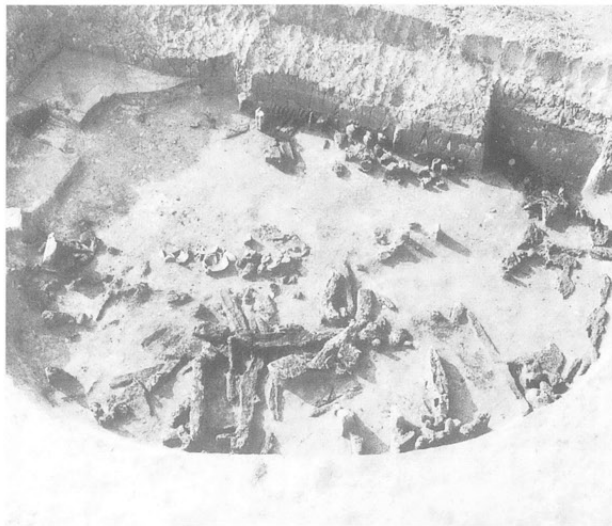


VIII区 弥生後期水田全景
(上空より)

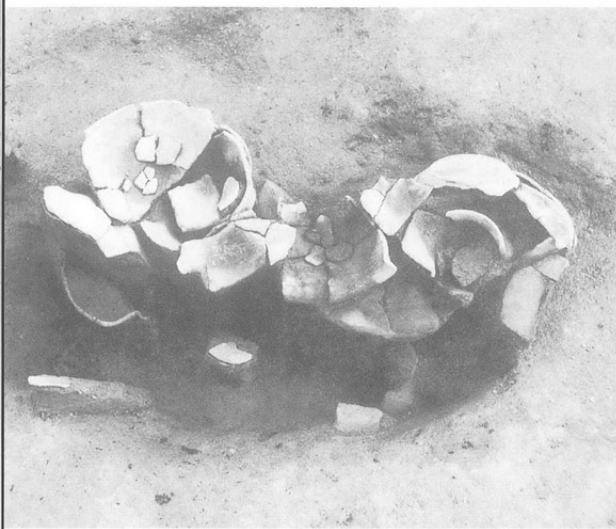


VI区 弥生後期竪穴住居と
掘立柱建物址柱穴
(上空より)





左 SB01完掘
右 SB01遺物出土状況



左 SB01ピット内遺物
出土状況
右 SB01遺物出土状況

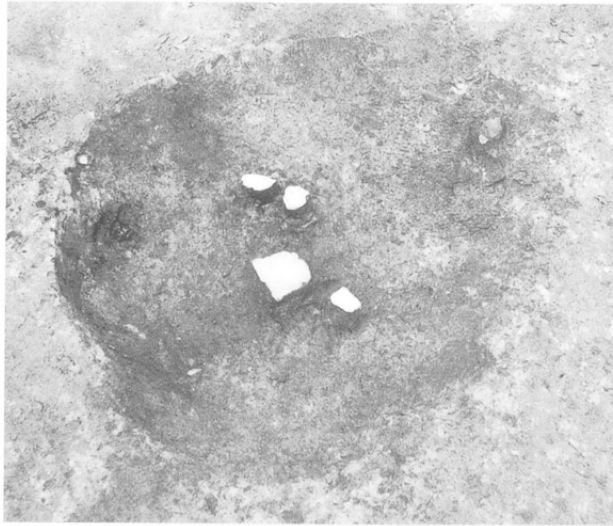


左 SB01ピット内太形
蛤刃石斧出土状況
右 SB01壺出土状況



左 SB05完掘
右 SB05遺物出土状況

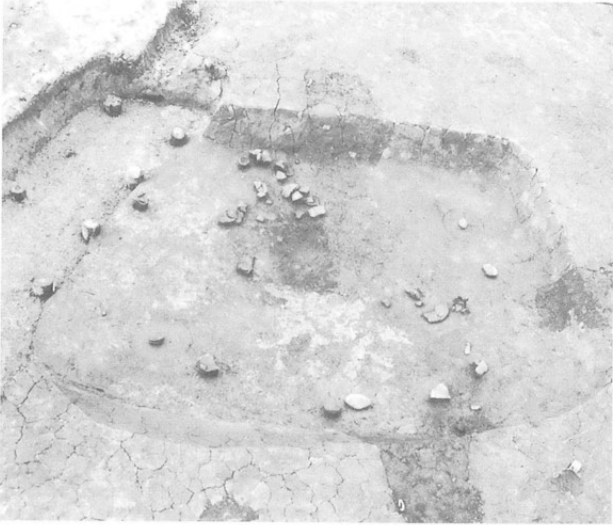
左 SB05炉内遺物出土
狀況



右 SB07完掘



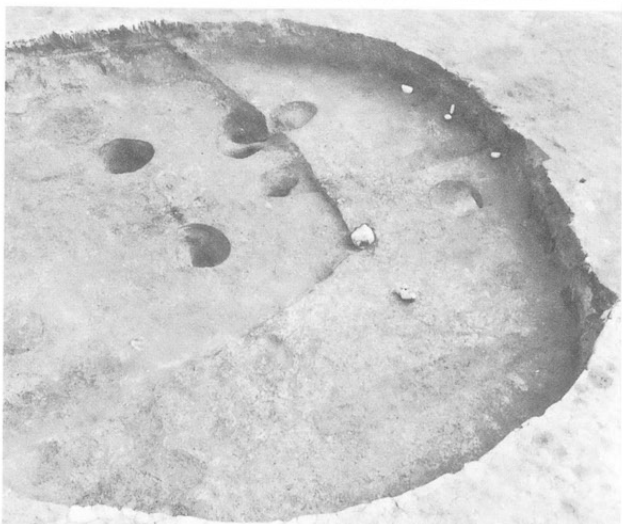
SB07遺物出土狀況



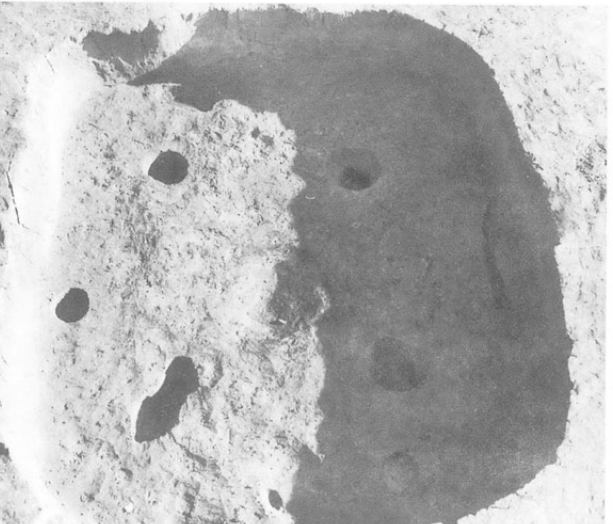
左 SB08遺物出土狀況



右 SB08完掘



左 SB19完掘



右 SB26完掘





左 SB33遺物出土状況
右 SB33完掘



左 SB34遺物出土状況
右 SB34完掘



左 SB35遺物出土状況
右 SB35完掘

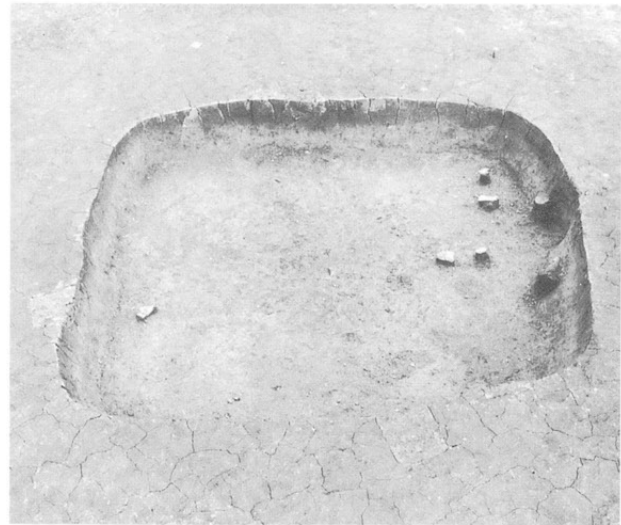
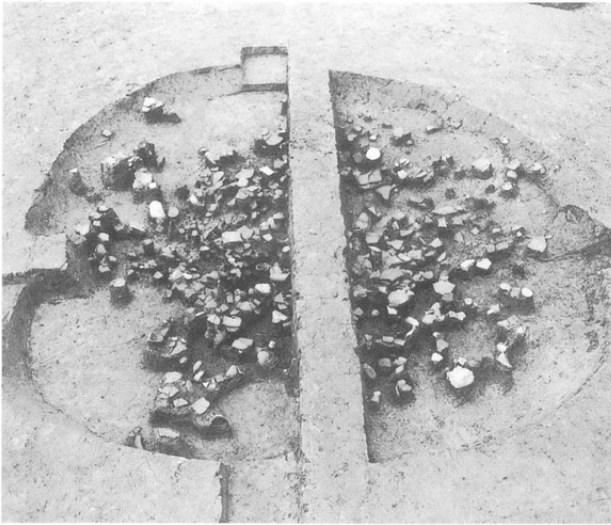


SB36遺物出土状況

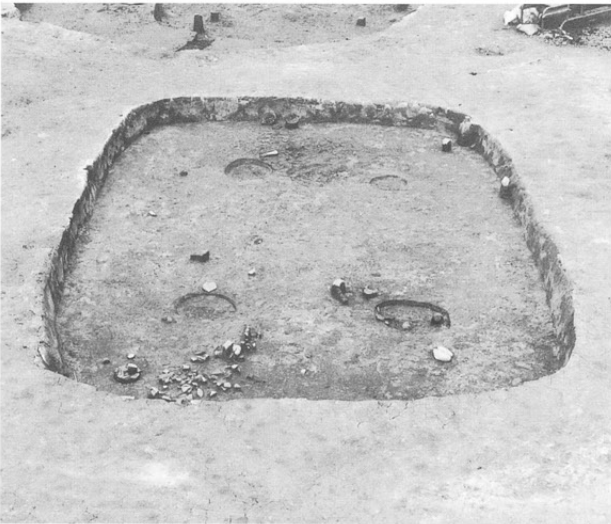
左 SB36完掘
右 SB40完掘



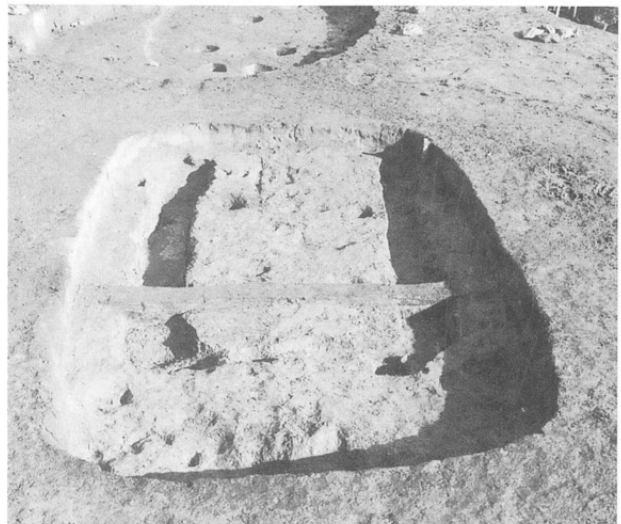
左 SB37遺物出土状況
右 SB37完掘



左 SB02遺物出土状況
右 SB02ピット内土器出土状況



左 SB02完掘
右 SB02掘り方





左 SB02ピット内遺物
出土状況
右 SB02出入口ピット内
土器出土状況



左 SB03遺物出土状況
右 SB03完掘



左 SB04完掘
右 SB04ピット内遺物
出土状況

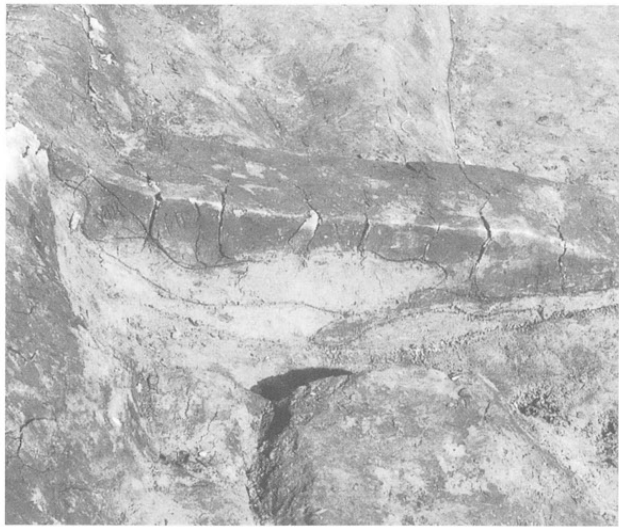
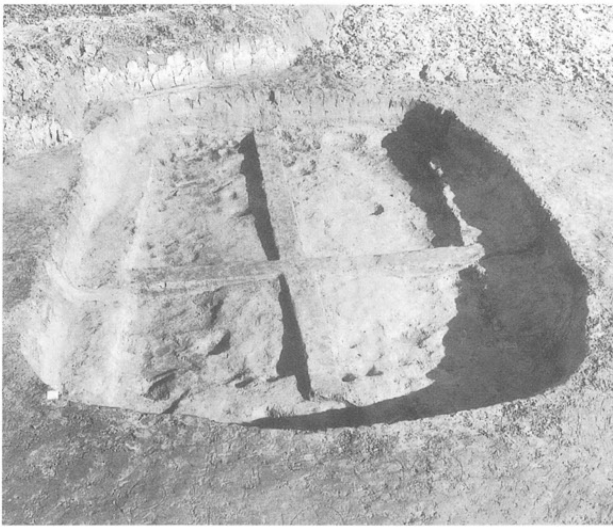


左 SB06遺物出土状況
右 SB06完掘

SB09完掘



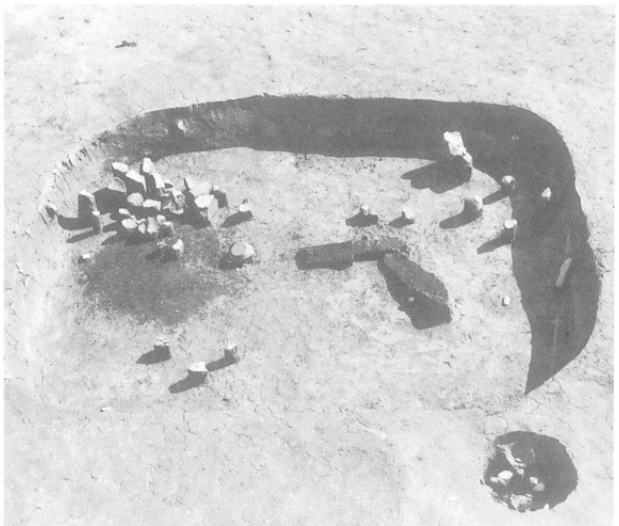
左 SB09掘り方
右 SB09ベッド状遺構
断面

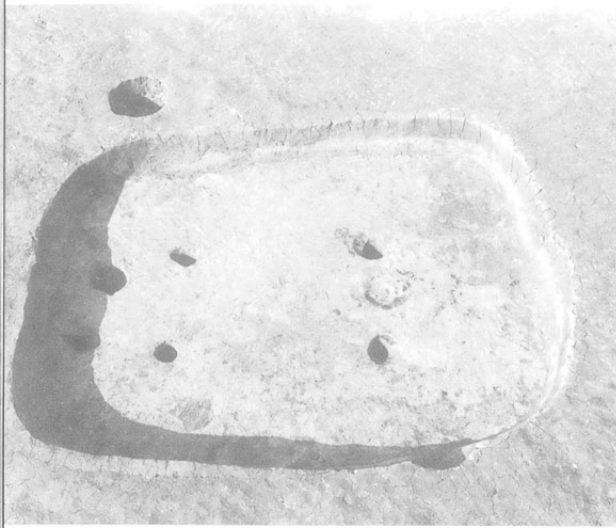


左 SB10完掘
右 SB10掘り方



左 SB10漆附着布出土
出土状況
右 SB11遺物出土状況





左 SB11完掘



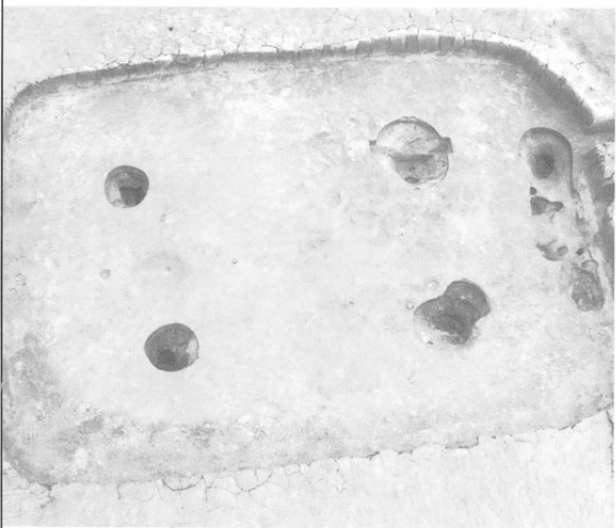
右 SB12遺物出土狀況



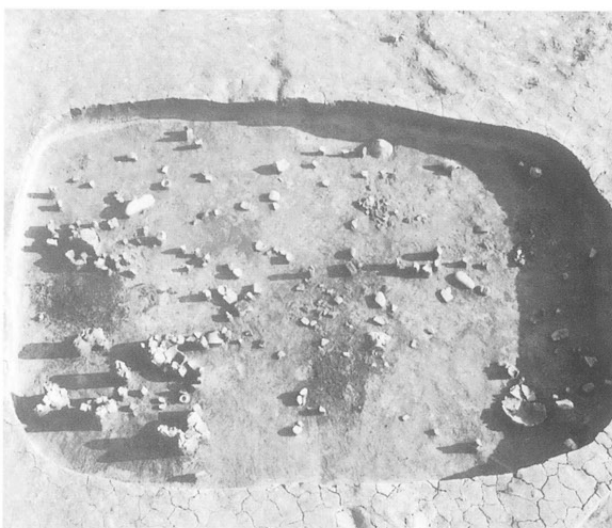
左 SB13遺物出土狀況



右 SB12完掘

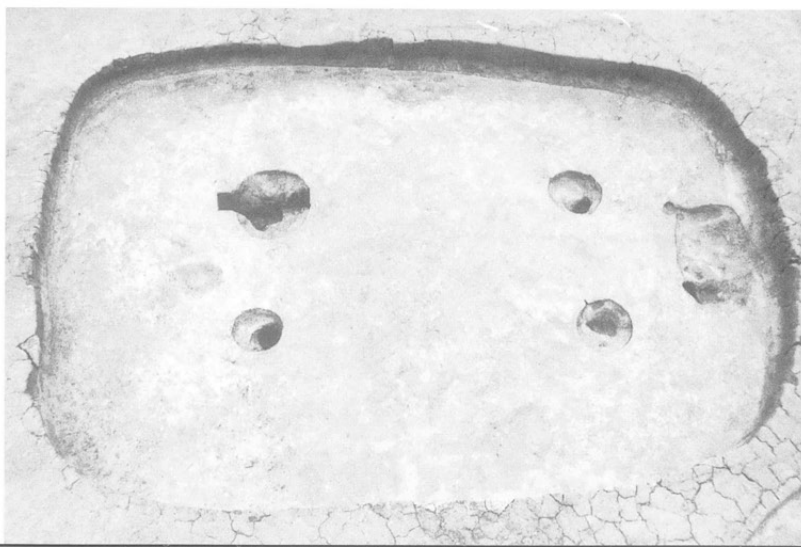


左 SB13完掘

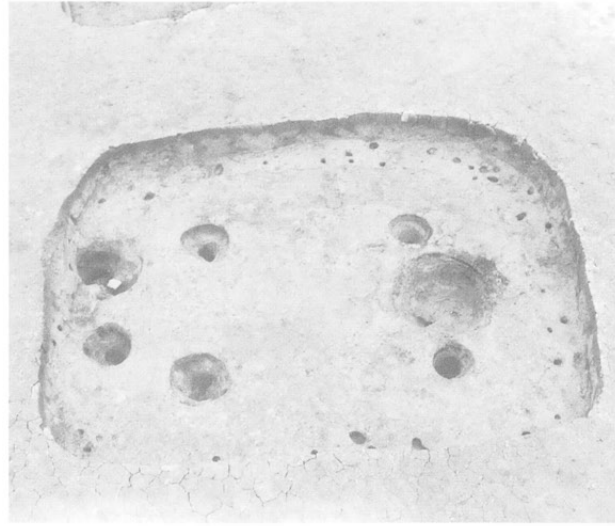


右 SB14遺物出土狀況

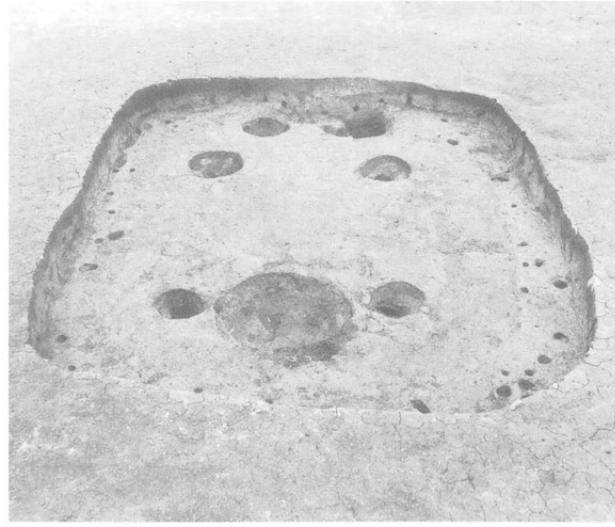
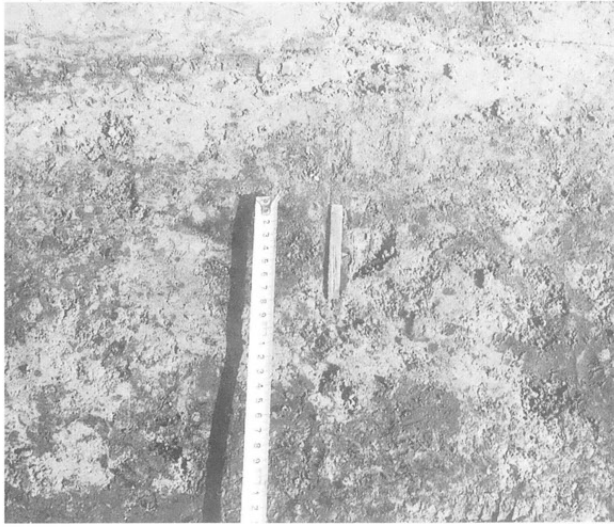
下 SB14完掘



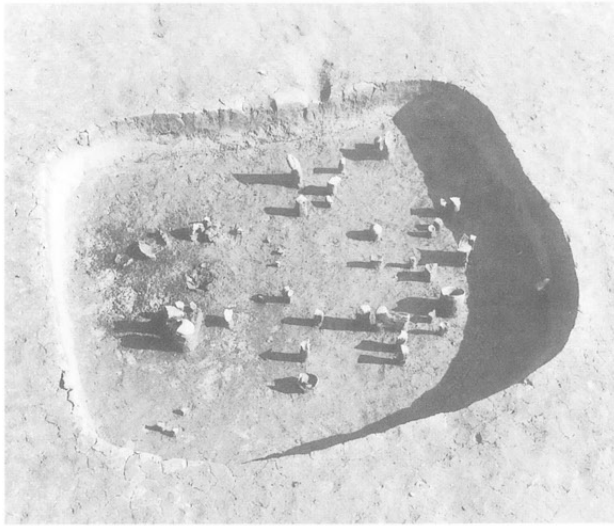
左 SB16遺物出土狀況
右 SB16完掘



左 SB16銅釧出土狀況
右 SB16完掘



左 SB15遺物出土狀況
右 SB15炉内遺物出土狀況
下 SB15完掘





左 SB17遺物出土状況
右 SB17完掘



左 SB17炉と柱穴
右 SB17完掘



左 SB17出入口ピット
右 SB18遺物出土状況

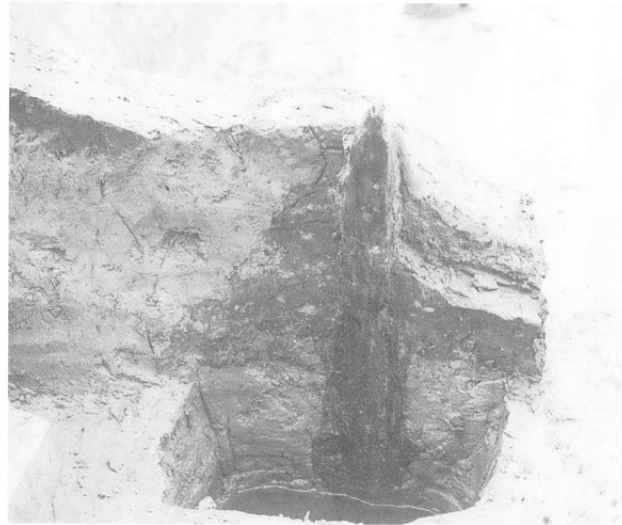


左 SB18完掘
右 SB18柱穴内礎石出土状況

左 SB20遺物出土状況
右 SB20完掘



左 SB20遺物出土状況
右 SB20壁際の杭断面



左 SB21遺物出土状況
右 SB21完掘
下 SB23遺物出土状況

